
小細工魔法士 ～ トリックス☆スターズ

えりまき ねう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小細工魔法士 Ⅱ トリックス☆スターズ

【Nコード】

N5300K

【作者名】

えりまき ねう

【あらすじ】

自称万能魔法Ⅱ小細工魔法を使う少女の冒険とカミングアウトのストーリー。

魔戦士組合員となった少女は、科学魔導士リーダーと共に組合に依頼された無茶な仕事をこなして行く。

派手な魔法がマトラの華、シリーズの歴史上では初となる、核融合で大爆発さ！の魔法が飛び立ったりします。

うざい脇役に色んな意味で揉まれ、小細工魔法士ルビー・サファイヤが誕生するまでを書いています。

※途中少し鬱になる内容がありますが、どうか最後までご覧下さい。

【1】最初の出会い

その日、あたしはマトラ王国の魔戦士組合に来ていたんだ。

この組合には魔法使いや剣士などが登録してて、登録した人達は国が対応しないとくってもやっかいな仕事をするらしい。

その仕事の報酬はかなり高額なんだけど、完全成功報酬制だから成功しないとお金はもらえない。

それにしても、うーん……結構人がいっぱいいるもんなんだなあ。

見渡す限り強そうな人がいっぱいよ、何だかあたしって場違いって感じじゃない？

たっかつそーな剣を不必要に出してまたしまっ、いかにも「オレ様別格キミらは三角」って感じで腕組んで通る人の装備見て鼻で笑ってる様なイヤ〜な感じのまでいる。

げっ、目が合っちゃった……こういうのに関わると大体ロクな事ないんだよナア。

「ふふん？ お嬢ちゃんがここに何しに来たのかなあ？」

ほらね、大体こういう奴らなんだよ。

『と……とととッ』

「とととお？」

『と……登録にッ！』

「はあ〜？ よく聞こえなかったんだけど

まさか組合に入ろうってんじゃないやねーよなあ？」

そのまさかの組合に入ってやろうってんだよッ！ 文句あるのかッ！！！

『え……えーと』

「組合に入るのは勝手だけだよ、
少なくともオレ様ならお前なんかとパーティーなんて絶対組みたくねーわ」

男は凄く嫌そうな顔をして言った。

『なッ！？』

「どうせ何の役にも立てやしねーで寄生だけするのがオチだろう？
いるんだよなー、しかもドン臭いからどうでもいいトコで死んだ
りして、パーティーの士気下げちゃう様な奴ってよおー！
そもそもそんな小さくて戦えるのかあ？」

『あ……あの』

うわあ、もうダメだーッ涙があふれてくる！！

「おいおいーッ、このお譲ちゃん泣いちゃったよー！」

コイツ……ッ！ 笑いやがって。

悔しい、こんな奴に……こんな奴なんかに。

「あなたも登録に来たのですね？」

わたしも今日が初めてなのですが、良かったら一緒に登録しませんか？」

『あ……』

その声がした方向には、長く美しい黒髪に一風変わった色のローブを着た綺麗な女の人が立っていた。

「おいおいーッ！ あんたも新人かあ？

キレイな顔していかにも寄生してるって匂いがプンプンするわあ」

その女の人、あの男が言い終わるかの辺りで、床が抜ける程の音を立てて地面を踏んだよ。

その音にその男だけじゃなく、周囲の連中も言葉を失ってしまったんだ。

「わたしはまだ新人ですらない初心者なので、

うっかりすると魔法を暴走させて二億度の熱で、

色んなものを蒸発させてしまうかもしれないので気をつけて下さいね」

うはあ……美しい顔でニコっと笑った。

あれは本当に痛快だったなあ。

あの男、何も言わずに壁に戻って下向いてずっと剣をいじってたよ。

その後、あたし達は組合に登録したんだ。

最初の仕事もキツチリもらえちゃった、もちろんあたしとあの人の2人でパーティー組む事になったんだ。

『あ……あの……』

「何ですか？」

そう言ってあの人は首を少しかしげて微笑んだよ。

うう、事ある毎に美しいナア。

『あ……あたしと一緒になんか良かったんですか?』

「と、言いますと?」

『も……もつと凄い人が他にイッパイいるじゃないですか』

「それは新人同士お互い様ですよ

それにわたしはあなたと、あなたの小細工魔法士というクラスが
とても気に入りました

なのでお願いしてるのはわたしの方です」

『あ……本当ですか!?!』

本当にうれしかったなあ、あたしはその時この人と一緒に仕事
がしたいって思ったよ。

そうさ、思ったんだよ本当に。

そうしたら、あたし達が組合を出て少し歩いた所にあの嫌な奴が
待ってたんだ。

こっちは二度と会いたくなかったのに。

「よお、待ってたぜ? お嬢ちゃんと綺麗なお姉さん」

大体こういう奴ってこうなんだよ、救いようもない程にやる事な
すこと全てベタなんだよ。

それで仲間とか大勢集めちゃってて、そいつらは意味もなく「う
へへ」とか言って笑ってるんだよ。

しかもさ、決まって「なかなかの上玉」とか言うんだよ。

「いいぞ、お前らも出て来いよ」

ほらね、早速仲間を呼んだよ。

「うへへ……」

「おお？ なかなかの上玉じゃねーか」

そんなのが10人位出てきたんだ、あたしはもうこれ以上は許して下さいって思ったよ。

「さて、どちら様でしたっけ？」

「いいか新人ども、先輩の顔はよく覚えておくもんだ」

「うへへ……」

「マジでなかなかの上玉じゃねーか」

「お……おでにっ……おでにやらせてくれよ！」

ベタすぎる、仲間なんて同じセリフの繰り返しだよ。

何かそれに加えてまた変なのが混ざって来たみたいだけどさ。

「その先輩がわたし達に何かご用ですか？」

「てんめえ……さっきは偉そうな事言っただけが
お前らの登録ランクは最低じゃねーか」

「それが何か」

「しかも聞いたこともねえクラスと来たあ」

「うへへ……」

「上玉じゃねーか！」

「お……おで……」

どうでもいいけどさ、ヤツの仲間ってセリフが1つしかないのか？

「さっきの話ですが、多分顔を覚える必要はなさそうです」

「なんだとお？」

ケッ、何が二億度だ！ マジで笑かせてくれるぜ
だかな嫌でも忘れられない様にしてやる」

お約束どおり、嫌な男は下品な顔でニヤリと笑った。
それでもって最初に仲間にやらせるんだよな。

「お前達！ やっちまいなッ！」

嫌な男が手で合図すると仲間がぞろっと前に出て来たよ。
セリフすらないヤツも出てきたんだ。

1人は武器すら持たず、両手でただ掴みかかろうと構えてる上半
身裸の太ったヤツ。

何かわからないけど、鎖を持って頭の上でブンブンまわしてるヤ
ツ。

一丁前に剣と盾を持っで、頭に載せたカブトに二本のツノが生
えてるヤツ。

そしてその他は、ただ居るだけで構えもしないヤツ。

こういう奴らってほぼ100%一瞬でやられるんだよな。

「やれっ！」

嫌な男から号令が出ると、そいつ等は「わーっ」という声を上げ
て飛びかかって来たよ。

黒髪の女の人が片手で「あっちいけ」って振りしたら一瞬でどっ
かに吹っ飛んでったけど。

「なにぃ！？ て……てめえ……よくも中間達をやってくれたな」
「さあ、あなたの小細工魔法の出番です」

黒髪の女の人はあたしに振り返ってそう言ったんだ。

「ウハハーーッ！ バアカメッ！ 隙を見せやがったな！？」

嫌な男はそのセリフを最後に、どこか遠くに飛んでったよ。

「やっぱり思った通りです

あなたの小細工魔法、とても素敵ですよ」

わたしの使った小細工魔法、それは周りの木の1本に小細工をかけ、嫌な男をつまんで遠くに放り投げるものだった。

『あの……』

あなたの名前を覚えてくれませんか？』

「わたしはクリーダ、クリーダ・ヴァナディンです
これからよろしくお願いします」

そう言ってクリーダは微笑んだんだ。

今日のこの日、あたしとクリーダは初めて出会ったんだ。

【1】最初の出会い（後書き）

科学魔導士のクリーダ・ヴァナデインと、小細工魔法士はこうして
出合いました。

これからヨロシクお願いします ^^

【2】初仕事への出発（前書き）

最初の仕事の出発に向けて、あたしは1つ大事な事を決めなければならなかったんだ。

【2】初仕事への出発

あたしはついに魔戦士組合に入った。

正直言うところちょっと信じられないんだ、まさかこのあたしが魔戦士組合に入ってるなんて。と思いつつ、組合員の印を見つめニンマリとするあたしがいる。

組合員の印は、剣と盾を合わせたシルエットの上に、魔法を現す6角の星をそえた形をしている。

魔法の6角はトゲトゲの部分が精霊の火土雷氷水風に相当したそれぞれの色になっていて、その中央は6精霊の根本属性である光と闇という対極な属性が色でちゃんと表現されている。

簡単に言くと6種類いる精霊は、光か闇のどっちかに分けられるって事。

ここまで来たらついでなので説明しておこう、光属性なのが火と風と雷の精霊で、闇属性なのが氷・水・土の精霊なのだ。

もし、将来魔法を扱おうと思っっているなら暗記してしまった方がいい、魔法学校の入学テストに絶対出るからな。

本当はもっといっぱい属性はあるんだけど、それは教科書を見て学んでくれたまえ。

さて、あたしとクリーダの初仕事の出発まで後二日ある。

その間に出発の準備を整えなきゃいけないんだけど、あたしにはその他にもしなきゃいけない事があるんだ。

それは何かと言うとだな。

この仕事を始めるにあたり、あたしは今後新しい自分になるう

と思ってる。

何とかデビューみたいだけど、そうでもしないとやってけないと思うんだ。

まずは話し方を変えてみよう、それに服装も髪型も変えないといけない。

小細工魔法のモーションにも工夫が必要かな、ホントはモーションなんか全く必要ないんだけど。

ただ、エイヤッ！ とやるだけじゃ華がない。

~~~~~

ああもお、二日なんてアツという間だったよッ！

出発の日になってしまった。

とにかく髪もナチュラルカールにしたし、凛々しさと優しさを兼ね備える感じのローブも新調して、早速組合員の印も付けた。

思った通り、新しいローブに輝く組合員の印はとってもいい感じだ。

でも話し方だけがまだ決まってないんだよ。

『さーて、どんなもんしょおー』

考えあぐねていると、仰向けに寝転んでいるあたしに飼いネコのダイヤが乗って嬉しそうに足踏みをした。

『いだッ……いだだだッ！』

ピンポイントに加重のかかるネコの足踏み、これが実はちよつと

痛いのだ。

『暫くあんたともお別れだねえ  
ちゃーんとゴハン食べるんだぞ?』

ダイヤはゴロゴロのどをならして「にゃーん」と鳴いた。

クリーダと約束した時間が近づいたので、あたしは待ち合わせの場所へ向かった。

待ち合わせの場所は街からすぐの丘を上ったところ。  
走っていくとクリーダはもう来てたよ、時間に正確な人だね。

『お待たせー！ 待たせちゃったかんにゃん』

「……? 今さっき来たところです」

『そかー、じゃあはりきって試してみるんにゃん』

「え……ええ」

なんかクリーダは引いそうだなあ、「んにゃん」はマズったかー?

『どうかしたのかんにゃん?』

「何か雰囲気変わりましたね」

『あたし、毎回キャラ作る事にしてるんにゃん』

「そうだったんですか、面白い試みですね」

あたしはこの間も「そういう設定だった」と言う事にしたかった  
んだけど、クリーダはどう思っているだろう。

『そうそう、目的地までは結構あるんにゃん?』

「そうですね、今日中にはたどり着けそうもない位の距離がありま

すね」

『まかせるのだんにゃん』

あたしは自己流「華麗の舞」を踊りつつ、ホイっと小細工魔法を使った。

辺りからは色んな素材が飛んできて、農家で使う様な荷馬車を作ってみた。

荷馬車に干草が積まれている、ごくスタンダードのタイプだ。

引っぱるのは生きた馬じゃなく木馬なんだけどね。

「!? ……少し驚きました

小細工魔法ってこんな事も出来るのですね!？」

『小細工魔法士は、小細工を駆使する事でほぼどんな事も出来る「万能魔法使い」なのだんにゃん』

クリーダったら本当に驚いていたよ、でもビックリした顔も美しいんだ、美しいんだよ。

「この荷馬車に乗って行くのですか？」

『その昔、人は荷馬車の干草を見ると寝そべりたくなったと言うそうだんにゃん』

「なるほど……」

『干草に寝そべってこそ旅って感じがするもんだんにゃん』

あたしは荷台の干草にゴロンと寝そべって見せた。

「せっかくの新しいローブに干草がずいぶんと付いちやってますけど」

『それが荷馬車の醍醐味ってヤツだんにゃん

さあ、クリーダも乗った乗った!』



クリーダを無理やり荷馬車に乗せると、目的地へと出発した。

『よいではないか！ よいではないか！』

「……あの……」

『よいではないか！ よいではないか！ ……んむ？  
どうしたんにゃん？』

「何ですか？ その『よいではないか』って言うのは」

『クリーダは知らないのかんにゃん？』

荷馬車の上では言うものらしいんにゃん！』

「知りませんでした、そうなのですね勉強になります」

『クリーダも一緒に言うんにゃん！』

さあ、よいではないか！ よいではないか！』

「あ、はい

よいではないか！ よいではないか！』

それから10分程して、あたしは旅に出るのは荷馬車じゃなくて  
幌馬車だったと言う事に気が付いたとき。

### 【3】**辺境の村ドラド（前書き）**

クリーダとあたしは初仕事へと旅立った。

### 【3】辺境の村ドラド

あたし達の初仕事で向かっているのは、マトラ王国の辺境にあるドラド村という小さな村である。

そのドラド村は、一度も行ったことないからどんな村かは全く分かんない。後でのお楽しみだ。

それで今回の仕事の内容だけど、これがなんだか凄いんだよ。

ドラド村にたまーにやって来ては大暴れする鬼がいて、その鬼を退治して欲しいっていう何とも楽しそうなものだ。

なんたって今どき鬼退治ですよ？ 鬼ッ！ 魔物じゃなくて鬼なんですッ！

鬼と言えば有名な童話があったっけね、マモッタロウっていう大昔の童話が。

マモッタロウっていう子が主人公で、大好物が桃って言う初期設定があるんだけど、それは最初だけで後に桃は一回も話題にされない不思議な物語だったなあ。

桃を食べて成長したマモッタロウはある日、ザルと絹と石を持ってお団子食べながら優雅に鬼退治に行くんだよ。

普通そこは桃だろう？ って思うんだけどさ、まあとにかくお団子な訳。

そこでイザ鬼のいる島にたどり着くんだけど、そこまでナント手に持っていたザルと絹で作った船で渡ると言う素晴らしさなのさ。人が乗れる程大きいザルなんて手軽に手に入るものなのか？ それの入手に全く困難がなかったってどう言う事なんだい？

しかも絹で小細工してないで、ちゃんと船用意しとけよってツツ

コミ所もあつたりするが、とにかくこれは有名な童話なんだ。

でもって退治に使ったのが残った石、これに対しては何も言うまい。

そうやって一方的に鬼を成敗したマモツタロウは、鬼から金銀財宝をもらって家に帰ってくるんだ。

この話は、「鬼Ⅱ悪」という設定が暗黙となっているから成り立ってる訳、なんたってここで退治された鬼は、ただ島に住んでただけで別に村に悪さをしていた訳じゃないからね。

って昔の童話にも出てくる位で、常識的には鬼っていうのは架空の存在なんだ。

それに比べると魔物はよくいる存在で、よく討伐の対象にもなってるみたいだけど。

今回この仕事を選んだのは「鬼」っていうワードにピンと来たからだったんだ。

本当は「伝説の鬼というのをぜひ見てみたい！」っていう興味心が大きいかな？

それに、魔戦士組合の難易度評価も低めだったし、最初の仕事としてはいいんじゃないかって。

おっと、お喋りしてたらどうやら目的地が見えてきたぞ。

予定通り、日が傾く前にドラド村へ到着しそうだよ。

『あれがドラド村かんにゃん？』

「多分そうですね

荷馬車のお陰で早く到着する事が出来ました、ありがとうございます  
ます」

『なんの、役に立てて良かったんにゃん』

クリーダは礼儀正しいナア。

あたしはふと、クリーダに最初に出合った時の事を思い出した。そういえば、クリーダって凄いい音出して床踏んでた時も口調変わらなかったんだよね。

この人は取り乱して怒ったりする事もあるのかな？人間だし、そりゃあるんだろうけどさ。

あたし達はここまで何事もなく村に到着した。

村に着いたらまず、組合からの書類を依頼者に見せ、開始承諾のサインをもらわないといけないらしい。

前にそれをせず事後に書類を出した人がいて、「勝手にやったんならサインしないよ、組合の依頼も取り下げるから」とか言われてゴタゴタした事があってかららしいけど。

『依頼主はやっぱり村長さんにゃん？』

「みたいですな」

あたしはこの荷馬車を引く木馬に興味を引いて、周りに集まっている子供達に聞く事にした。

『村長さんはどこにゃん？』

「なんだコイツ！？ 変な喋り方してっぞー？」

「何て言った？」

「村長んにゃんだってさ」

『えとね、村長さんはどこにいるんにゃん？』

「ギャハハハハーッ！ なんだコイツーッ！」

「おもしろえーッ！ ネコみたいな喋り方してやんのーッ！」

「バアカ！ ネコは喋らないんだぞ！」

「わかった！ ほらゲジゲジのゲジローに出てくる娘ネコだろッ！ おまえッ！！」

「それだッ！ じゃあコツチのはナニよ！？」

『ウギヤアアアアー……ッ！！！！』

あたしが両手を頭の上に目一杯上げて、引っかく仕草をしながら威嚇してやると子供達は驚いて逃げて行った。

因みに子供たちの言っていた「ゲジゲジのゲジロー」とは少し前人気のあった漫画のタイトルだ。

悪い大鬼をやっつける、正義の小鬼とその仲間達のお話である。

こんな辺境の村にも知れてる程なのかあ。

『ああ、そうか！ それで鬼なのだんにゃん』

「鬼とかゲジゲジって何ですか？」

『そうだっんにゃんッ！』

クリーダは今から氷女になるのだんにゃん』

「わたしが氷女……ですか……？」

『そんでーッ！ あたしが娘ネコになるんにゃん！』

あたし達はゲジゲジのゲジローに派遣されて来た、

正義のヒロインになるのだんにゃんッ！』

「よく分かりませんが、さっきの子供達に関係あるのですね……わかりました」

『くるりんっとホイッ！』

あたしは軽快に1回転し、小細工魔法で衣装を変化させた。

あたしにはつけ耳とつけしっぽを、クリーダには何だかわかんないけど氷女っぽい物をチョイスしてあげた。

「あ、これは雪の結晶ですね」

勝手に持たせた氷の杖の、先っぽのアクセントを見てクリーダが驚いていた。

靴は白のロングブーツに変え、ピアスは雪の結晶の形をモチーフに特大にアレンジ。

ローブはモノトーンにして、ジグザグにカットを入れてあげた。もちろんその他もらしくなる様にね。

『うーん、我ながらいい出来だんにゃん』

「すごいッ！ 小細工魔法はこんな事も出来るんですね！」

『あたしがいれば服には困る事はないんにゃん』

どうやらクリーダは氷女の衣装が気に入ったみたいだ。

あたし達がぼっちりコスを決めた頃、逃げた子供達が大人を連れてやって来た。

「あ……あんた達は何者だ？」

一定距離以上は近寄ってこない所を見るとかなり怪しんでいるな、まあ辺境の村じゃよそ者なんてそんな扱いだろうけど。

『あたし達は魔戦士組合から派遣された娘ネコと』

目でクリーダに続きを言えと訴える。

「氷女です」

クリーダったら迷う事なく氷女って自己紹介しちゃったよ、しかも少しも恥ずかしがるどころか微笑んじやってるよ。

「えっと……それは遠いところご苦労様です

この村の村長はこの先の大きな家に住んでいますだ」

あれ？ 村人達には派手過ぎたのか反応がイマイチ？

あたし達が村長の家に向かっていると、さっきの子供達もゾロゾロと後ろに付いてくる。

しっぽをつかもうとした子には、そのしっぽでビンタをお見舞いしてやろう。

何事も最初が肝心なのだ、特に子供達にはね。

ドラド村に到着したあたしとクリーダは、村長に会いへと向かった。



#### 【4】ドラド村の村長（前書き）

ドラド村に到着し、村長の家に向かうあたし達。

#### 【4】ドラド村の村長

ドラド村は鬼が暴れて困っている村だった。

ドラド村の村長の家は、この村で一番大きい家だそうだ。

そう言われて辺りを見渡せば、すぐに見つかる程この村は小さかった。

「とったどおおーっ！っ！」

後ろにくっついて来ていた子供達の一人が大きな声を上げた。

何かと思えばその子、あたしのつけしっぽを掴んでいるではないか。

「娘ネコは多分しっぽが弱点だから、掴まされると力が抜けるんだぜ」  
「おおーっ！ スッゲーッ！」

娘ネコにそんな設定なんてなかったと思うぞ、それは確か「ドラと碁とボール」って言う別の漫画の設定だ。

主人公のサルが、その3つを手に入れる為に世界を冒険する話で、まあその説明はまた今度にしよう。

あたしはもう1本しっぽを生やし、しっぽを掴んだ子供の手をバシッと叩いた。

『しっぽが1本だけだと思っなんにゃん』

と、言ってニヤリとしてやったら「ぽかーん」とした顔してたよ、所詮子供なんてこの程度なのさ。

さて、村長の家の前にやって来たんだけど、その家はこの村にしてはやけに立派な家だったよ。

この村で、ここまで大きく建てる必要があるのかって位に不釣り合いな大きさの家なのだ。

ともかく中に入って書類にサインを貰わなければなるまい。

『あのさ、説明とかはクリーダに任せるんにゃん』

「わかりました」

クリーダが村長の家のドアをノックして入ると、あたしもその後を追って入った。

入る時に後ろを振り返ると、子供達がまだ近くをウロチョロしていた。全く懲りない子供達だ。

「こんにちわ

魔戦士組合の者ですが、村長さんはご在宅でしょうか？」

村長の呼び出し係をクリーダに任せ、あたしは周りをキョロキョロ見渡した。

『ふわぁー、この家の不思議さと来たら更に驚くんにゃん』

刺しゅうの凝ったカーペット、威嚇する様に吼えているかに見える虎の毛皮、熊が魚をくわえてる木彫りの何か。

壁には三角の布に謎な文字が書かれたものがいくつも貼ってあって、同じ様に謎な字が書かれた木刀まで飾ってある。

その調子で、この部屋いっぱいに見たこともないものが、すっごくたくさん並べられているではないかー！

この家は面白いッ！ 面白いぞおーッ！

「(そんなにジロジロ見ては失礼ですよ)」

小声でクリーダに注意されたすぐ後、村長らしき老人が出てきたよ。

「むッ……！ おった！」

何故か老人はあたし達を見るなりそう言ったんだ。「おった」って方言か何かかな？

『んにゃん？』

「……？ あの」

「わかつとる、わかつとる！ お前たちはゲジローから派遣されて来たのだろう？」

「魔戦士組合です」

「ああ、そうも言ったかもしれないな！

ともかくよく来た！ よく来た！」

「依頼主様で間違いなければ、開始承諾のサインを頂けますでしょうか？」

老人は何故かうむうむと感極まった表情で頷くと、書類にサインをしてくれた。

「この村に鬼が出没して暴れると言う事ですが、それはどんな鬼で、どんな状況なのか説明して頂けませんでしょうか？」

「鬼かッ！ 鬼はのう……それはそれは恐ろしくでっかい鬼だったぞい

30メートルはあったかのお」

「30メートルですか……」

『そんな鬼が暴れたら村がなくなっちゃうんにゃん』

「いや、もしかしたら20、10メートル位だったかもしれない」

村長の証言はとんだアバウトだったよ。

しかも、暴れたって言う村に破壊の痕跡は見当たらなかったし、  
一体どういう事なんだろう？

「その鬼は村に現れるのですね？」

「いやいや、村には入ってはこんのだが、村の周辺までは来てるらしい」

「らしい……と言いますと、村長さん自身はご覧になったことはないのでですか？」

「わしは遠くに見かけただけでな、だから大体でしか大きさがわからなかったのだ」

「そうですか、その鬼の目的は一体何ですか？」

「さあ、ただたまに出てきては暴れるのでうるさくて困っておる」

「その鬼はいつ頃に現れるかわかりますか？」

「まあ夜だな、今夜は間違いなく出るだろうな」

「わかりました、では今夜は村周辺を探してみる事にします」

「ところで、あんたら何て言うの？」

「わたしは氷女で」

『あたしが娘ネコだんにゃん』

クリーダはパフォーマンスで部屋にさらっと雪を降らし、あたしはしっぽをネジネジしてみせた。

「おお、やっぱり思った通りだったわい  
やっぱりおったおった！」

あたし達は、全くあてにならなそうな村長の話が、今度は横道にそれ出したので早々に切り上げて外に逃げた。

「……どう思いますか？」

『どうもこうもないんにゃん』

だって、10〜30メートルの曖昧な大きさに村には入ってこなくて、目的がはっきりしないがとにかく暴れる鬼だよ？

これってどういう事？ その暴れるってどんな感じなんだろう。村の外で大暴れしてるって事だよ、村人はその行動に困ってるって訳か、鬼は一体何が目的で暴れてるんだかね。

「さて、夜までまだありますがどうしましょう」

『あたしはおなかが空いたんにゃん』

「なんだお前ら、腹が減ってたのか？」

声の方向を見ると、さつきしっぽを掴んだ子供がいた。

『おや、さつきのワンパク坊主かんにゃん』

「ふん、しょうがねえなあー」

母ちゃんにはオレから言ってやるから、ウチでメシ食わせてやつてもいいぞ」

その子は10歳位の男の子で、布をマントの様にしていて拾った様な棒を手にとってる「典型的な田舎の子供」という感じだ。

さつきの子供達の中ではリーダー核なのだろうな、ちょっとツンが入ってる辺りとか。

「ちょっと待ってろよ、今母ちゃんに聞いてくるからさ」

そう言うと、男の子はどっかへ走って行った。

『ほえ、あの子は何なんだんにゃん？』

「わたし達にご馳走してくれる氣でいるようですね」

『おおーッ！ 田舎の子供にしては氣がきくんだんにゃん』

少しするとさっきの子が走って戻ってきた。

「母ちゃんがいいってさ！ 付いて来いよ」

『およ？ いいのかんにゃん？』

「ああ、母ちゃんがいっぱいご馳走してくれるってさ

お前らホントにラッキーだったな」

「ありがとうございます」

へえー、クリーダってこんな小さな子供にも礼儀正しいんだね。

あたし達はドラド村で、親切なワンパク坊主に出会った。

## 【5】ドラド村の夕刻

あたし達はワンパク坊主の家でたんまりとご馳走になった。  
ここの郷土料理なのかな？ 出された料理はとっても美味しかったよ。

『ふうー、おいしかったんにゃん』

「とてもおいしかったです、ご馳走さまでした」

「はいはい、お粗末さま」

ワンパク坊主のお母さんが、ニコニコして言った。

最初はずいぶんとビックリしてたけどね、そこはこのワンパク坊主がちゃんと説明してくれたさ。さすが子供リーダーだー。

「へへーッ！ なんとってうちの母ちゃんの料理は村一番だからなッ！」

ワンパク坊主は人差し指を鼻の下でゴシゴシして得意そうだった。  
因みにゴシゴシってやる仕草をする子供を今日初めて見たよ。

『よしッ！ お返しとしては足りないけど、いいものをあげるんにゃん』

あたしは荷物袋からとっておきのものを出し、テーブルの上に並べた。

「お？ なんだこれは？」

『あたしのとっておきのお菓子なのだんにゃん  
みんなで食べるのだんにゃん』



「これって食べれるのかー？」

事もあるうか、ワンパク坊主はあたしの出したお菓子を不信の目で見ている。

ゲジゲジの主人公達は食べるものが基本的に違うからなー。  
トカゲとか虫の幼虫とか食べるからなー。

『まあまあ、すごくおいしいから食べてみるのだんにゃん』

「虫とか入ってないだろうな」

『入ってないんにゃん！ ほれほれっ！』

あたしはお菓子をワンパク坊主の口に無理やり入れてやった。

「うぐう……！？」

しかめっ面をする子、まだ信用してないな。

『どうだんにゃん？』

少ししてハッと言う表情をする子供、スイーツ大好きなあたしにとっておきが不味い訳がなからう。

無我夢中で食べつくすワンパク坊主は、素直な田舎の子供らしさが満点だった。

具体的には両手にお菓子を持って、互い違いに食べる仕草なのだ。これも今日初めて見たよ。

「もぐもぐ、んぐ、これってお前が作ったのか？」

『まさかー！ あたしに作れる訳ないんにゃん！』

お店で買って来たんだんにゃん』

「そっかー、虫とか食べてる位だし料理とか作れないよな」

虫はともかく、作れないについては余り反論は出来ないな。

料理は一応するけど、本の通りやってるのに何故か同じにならないんだ。

トマトを入れて、水っぽさがなくなるまで煮込むって書いてあったとして、まず最初から汁気がない。全くない。

素材のチョイスのせいなのか、どこかで間違っているのかはわからないけど、説明書き通りにやってるのに全然同じにならないんだ。しょうがないから、わざわざ水を足して水っぽさがなくなるまで煮込むんだな！。

出来栄えはイマイチ、それでも味はまあまあんだけど、出来たものが果たして説明通りの産物なのかはちょっとあやしい。

『そういえばボクの名前、まだ聞いてなかったんにゃん』

「ベニト」

『ふんふん、ベニトって言うんだんにゃん』

あたしはねー』

「知ってるよッ！ 娘ネコだろう？」

『あうん』

「それでそっちが氷女」

「はい、氷女です」

ベニトにクリーダがニコッと微笑んだら、ベニトったらちよつとモジモジしてやがったよ。

クリーダはこんな年端も行かない子供すらドキッとさせちゃうんだな、きつとあたしが同じことやってダメなんだろうけど。

「お前たちってさ、ゲジゲジのゲジローの手下なんだろ？」

『仲間って言えばだんにゃん！』

「でもさー、氷女は氷使うから強いけど娘ネコって弱いよな？ 活

躍した事なんてないし」

確かに……、娘ネコは喧嘩っ早いから真っ先にかかって行くんだけど、いつもすぐにやられて逃げてる気がする。

男ネズミと同じくゲジローの引き立て役って位置付けだろうね。

『そ、そんな事はないハズだんにゃん』

「鬼は大きいからすっごい強いんだぞ、ゲジローは来てないのか？ オレはきつとまたすぐ負けちゃうと思うんだけど……」

あッ！！　そうか！　最初にお前達がやられて、後でゲジローが敵討ちするんだろ！！」

ゲジロー役が居ないんでね、それより勝手に盛り上がりそうなストーリーを創作するなよ。

「ベニトさんは鬼を見たことがあるんですね」

クリーダは村長から聞いた適当な鬼情報を補填しようとしているのかな？

それにしても、子供に対して「〴〵さん」って言うのはどうなんだろ。

「当ったり前じゃん！　見たことあるよ！！」

すっごい強くて大きいんだぜーッ！　鬼！！」

「それはどの位の大きさですか？」

「街の入り口に2本木があるだろ？　その倍位はあったな」

村の入り口の木ねえ……どんなだったかな、全然気にしてなかったよ……木だけに。

「それは大きいですね

鬼が暴れている所も見たのですか？」

「ああ、見たさ」

「その鬼はどうして暴れていたのですか？」

「そんなの知らねーよ！ 鬼に聞けばいいじゃん」

「そうですね、直接聞いてみる事にします」

そう言ってクリーダがまた微笑むと、ベニトはまた頬を染めた。

『おんやー？ 顔が赤いって事は、もしかしてベニトはク……じやなくて、氷女が好きなのかんにゃん？』

「うッ、うるさいッ！ そんなじゃねーよッッ！！！」

何かうつむき加減になっちゃって、やっぱり子供って素直だねー！

この子の初恋の相手はクリーダだったりして、ベニト本人はゲジゲジの仲間の氷女って思っているから残念だけどさ。

『じゃあ、ベニトは誰が好きなのか言ってみるのだんにゃん

やっぱりあたしかんにゃん？』

「バアーカッ！ お前みたいなチビな訳ねーだろッ！」

『なあゝにいゝッ！？ あんたの方がもっとチビだんにゃん！』

「バアーカッ！ バアーカッ！ へっへーッ！」

『こら待つのだんにゃん！』

あたしはとんだ失礼な事を言う、ワンパク坊主のベニトを追いかけて回してやった。

小さい子に言われても「な訳ねー」って辺りはちよっとキズ付くんだよ。

「結構お似合いですよ、娘ネコさん」

って言うクリーダって、ちょっと本気で言ってそうな気もするナ  
ア。

あたしとクリーダと出会ってまだ日が浅い訳けど、まだ彼女が何  
を考えてるかよく分からないんだよ。

穏やかな口調の奥で、すごい闘志が燃えてる時があるのは分っ  
ただけだね。

思えばクリーダって結構近くに住んでたみたいなのに、なんであ  
たしは彼女の事を知らなかったんだろ？

ドラド村の夕刻は少し騒がしかった。

## 【6】ツリーハウスでの不思議な体験

子供リーダーのベニトのお陰でお腹を満たせたあたし達は、村の周辺を一回りして来る事にした。

もう少し暗くなってるけど、見ておいた方がいいからね。

村の入り口でベニトの言っていた2本の本を見つけた。

『ふむー、これかんにゃん』

「ええ、結構ありますね」

二本の木は幹の太さはそんなにはないから多分若い木だね。高さも5メートル位かな？

と、いう事は鬼の大きさはやっぱり10メートル位はあるって事か、30が10になってもデカイ事には変わらないな。

問題はその鬼がどんな戦法を取るかだね、あたしの想像だとイボイボの付いた大きな棍棒を持っていて、それを力任せにただ振るうだけなんだけど。

これはどうでもいい事だけど、鬼はトラの皮で作ったパンツを履いているって言われている。

もちろん物語での話しだけど、そんな大きい体だと何匹分必要になるのやら。

今回の仕事、鬼が何を目的として暴れているのか分らないけど、討伐が依頼だから分ろうが分るまいがただ鬼を倒せばいいんだだけさ。

だからと言って、1匹倒してゾロゾロと他の鬼が現れたらちょっと困るな。

暴れてる鬼を倒しました、そうしたら大勢鬼がやって来て村がやられました、じゃあやっぱ完了のサインはもらえないだろうし。  
なら最初は鬼に暴れている目的を聞くべきなんだろうね、鬼に言葉が通じればいいけどさ。

『それじゃ外を見回って来ようかんにゃん』

「ええ、ちよつと暗くなって来ましたし急ぎましょう」

あたし達は村の外に出ると周辺探索兼、見回りを開始した。  
村の周りは森になっていて、その後ろはいくつもの小さな山になっている。

森は木の密度も高さもそれ程ではなく、山道も整備されて歩きやすい。

森を歩いていると小動物がちよろちよろに走るのが見え、鳥達が日暮れの為巢へと帰る様子が見れた。本当にごく普通のきれいな森だ。

『ごく普通の森だんにゃん』

「そうですね、わたしは靴のせいで少し歩きにくいですけど」

足音をトントンと鳴らしながらクリーダが言った。

クリーダの靴は、あたしが小細工魔法でロングブーツにしちゃったからね。

山には向いてない靴だけど、この仕事が終わるまではそれでガンしてくれ。

村の周りを軽く一周して村の入り口に入った頃、すっかり辺りは暗くなっていたさ。

あたし達がこの村に乗ってきた木馬の荷馬車の前に戻って来た。

「ここで待機するのも何ですし、小屋か何か作れますか？」  
『よし来たんにゃん』

あたしは大きさにピアノを弾く仕草をして、最後によつと言う感じに小細工魔法を使った。

荷馬車の材料といらなそうな廃材が丁度側にあったので、それも有効利用させてもらった。結構いいものが作れたと思う。

あたしが作ったのは、木の上に家があるツリーハウスだ。  
屋根に荷馬車に積んでた干草を使ったからかそれっぽく見えるじゃないか。

実は、こういうのってずっと憧れてたんだよ。

だけどさー。

『うへ……真っ暗だんにゃん』

「暗過ぎて木に登るのは難しそうですね」

辺りはホントに真っ暗なんだよね。

ランプを作れそうな素材があればいいんだけど、作っても肝心の油がないナァ。

松明とかじゃうっかり全部燃えそうだし……。

あたしとした事がぬかった、昼のうちに何とかするべきだったよ。  
村長に言ってもらおうかな。あんまり会いたくないけど。

「お前たちここにいたのかー！」

声のする方向に振り向くと、ベニトが灯りを持って立っていたよ。



『どうしたんにゃん？』

「母ちゃんがどうしてるか見てこいってさ」

『ふーん、そんなウソついてー』

そんなにあたし達が気になるんだんにゃん？』

「バアカ！ お前達なんか気になる訳ないだろッ！

でも真っ暗だなー！ このランプ使うか？」

『おーッ！ ベニトはナカナカ気がきくんにゃん』

丁度今そんなランプが欲しかった所なのだんにゃん』

あたしはベニトの頭をぐりぐりしてやった、まさかこんなに役に立つとは思わなんだ。

「イテテ！ やめろよおー！

ん？ そこに何か作ったのか？ おお！？」

ベニトは木の上のツリーハウスを発見して、そりゃあ大興奮だったよ。

そう言えば、あたしも夢見た頃はベニト位の年の頃だったっけね。

クリーダがベニトが持ってきてくれたランプを、ツリーハウスの入り口側の天井に吊るしてくれた。

身長的に屋根に手が届くのはクリーダだけだったんだけど、それはしょうがない事って事さ。

入り口に吊るす事で、木に付けたハシゴが見えるのでここへの上り下りが可能になるのだ。

「こんな感じでしょうか？」

『いい感じだんにゃん』

ランプの灯りは暗闇に慣れた目には十分明るかったよ。

所でこのツリーハウスは床面積は荷馬車ベースって事もあり、せいぜい3人が寝そべられる程度の大きさしかない。

はじっこに荷物を置くとかなり狭くなる、もしベニトが大人だったらかなり窮屈だったろうね。ホント、子供でよかった。

ベニトが少し眠そうにしていたので、あたしは荷物袋から毛布を出してかけてやった。

『ねーんねーん、とーんとーん』

「うーん、子供扱いするなあ……」

せっかくだし添い寝してトントンしてあげたら、ベニトは寝言の様にそう言うтусうっと寝てしまったよ。

やっぱ小さい子ってかわいいねー、その寝顔を見てギュツとしてあげたいって思ったさ。

「何してるんですか？」

『ギクリ』

クリーダにベニトをギュってしてるのを見られてしまった。向こう向いてるのを確認したのにここぞと言う時にやたらと目ざとい奴だ。

『べ、ベニトが寒そうだったからんにゃん』

「へえ」

その「へえ」って言うその表情、ちょっとにやりしてるじゃないか。

クリーダって鈍感そうに見えるのに、洞察力センサーはやたら高性能なのかもしれないな。

「それじゃ……」

はてな？ 何故かクリーダも混ざってきたよ。クリーダって少年スキーだったのか？

あたしとクリーダはベニトを挟んで向き合った。何だろねー、この図って。

だけど、クリーダの目はベニトじゃなく真っ直ぐあたしを見つめてたんだ。

美しい顔で見つめられたら見つめ返したくなるからね、あたしもクリーダをずっと見つめてた。

クリーダが微笑めば、わたしも微笑み返すと言う。何か不思議な感じがするなー。

——ハッ……！？

＜それにわたしはあなたと、あなたの小細工魔法士というクラスがとても気に入りました＞

最初に出合った時、確か「あなたと」ってクリーダは言った。ってまさかね……。

でも、毛布の内側からすすすつとクリーダの手が伸びて来て、あたしの髪を撫でたんだ。なんにも言わずにずっとね。

不思議な事にあたしも全然嫌って思わなかった。ごく自然に感じられたよ。

何なんだろうこの状況……って不思議に思っていたら。

「欲しいものは手に入れたくなるものです」

一言だけクリーダが言ったんだ。

その欲しいものって、あたしの事なのかな？

ツリーハウスの薄暗いランプの下、あたしはそんな不思議な体験をしたんだ。

## 【7】目的

ベニトはあたしとクリーダに挟まれた形の中、すっかり眠ってしまっている。

——そして

はてな？ はてなはてな？

あたしは今起こっている出来事が何なのかよく分からないんだ、クリーダは一体何をやってるんだろう？ って見てる感じなの。小さい子にいい子いい子ってする様に優しく撫でてるんだ、その表情はとても優しい顔をしていたよ。

でも、どうしてこうなった？ 暫くしてやっと思考が動く様になり、あたしは口を開く事が出来た。

『どういう事？』

「見ての通りそのままです」

見ての通りってどういう事？

クリーダは髪を撫でるのが好きなの？ それともあたしの事が好きなの？ はては女の子全般に好きって事？

どれだとしても、クリーダの目は少しも隠すことないって目をしている。

『分かった様な分からない様な感じ……』

「偶然なのです」

『うむ？』

「あの街で偶然あなたを見かけたのですよ」

『ほほお、それは偶然そうだ、してどこで見かけたのかな？』

「あれは、教会の建てかえでしょうか？　その建築現場です」

『おーッ！　懐かしい！』

そんな事もしたもんだ、もう一年近く前になるっけね』

「その前を通り過ぎようとした時、目に止まったのがあなたでした  
あの教会はあなたの魔法で作ったのですよね」

『そうそう！　へえーッ！』

でも通り過ぎただけなのに、よく覚えてたねえ』

「ええ、その向かいの宿屋に泊まって毎日様子を見てましたから」

『おおーッ！？　なんて暇人！　でも何でまた？』

「わたしは魔戦士組合の帰り、あなたを気に入ったって言いました  
よね」

『うんうん、言ってた言ってた』

「なので、どうすればあなたと仲良しになれるか考えてたのです  
まず、あの街に引越して、次にあなたの家の前を散歩コースに  
しました」

『ほえー、そんな事まで、それからどうしたの？』

「いつその事手紙を書こうとも思ったのですが、それも不自然です  
し……」

『そんな事ないと思うよ、手紙書いてくれれば良かったのに』

「考え抜いた末、魔戦士組合のチラシをポストに入れてみました」

『ああッ！　入ってたーッ！　それで魔戦士組合に入ったの  
でもそれって結構最近だね？』

「そうですね、ずいぶん時間がかかりました、話しかけるきっかけ  
が出来るまで

そして今やっと触れる事が出来ました」

『ふむー、一年近くも見られてたとは知らなんだあ』

へえー、クリーダはこの一年あたしをずっと見ていたのか、常識

で考えれば気持ち悪い事だけどクリアダなら全然そう思わなかった。  
こんなに美しい人でもそんな事するんだ、見た目からは想像がつかないなー。

「正直に話しました、気分を害しました？」

『いんやー、よくもまああたしなんかをとば思っけどさ』

「わたしはあなたと仲良くなりたかった、ただそれだけなのです  
無理に理解してくれなくてもいいですよ」

あたしはクリアダの長く綺麗な黒髪を指で梳かしてあげたら、彼女はとっても嬉しそうな顔をしたよ。

ちよっと冷たい手触りのツヤのある髪、あんまり人にこういう事  
ってする事ないからまたちよっと不思議な感じがする。

クリアダの雪の結晶のピアスがランプの光を反射して綺麗に光つてゆれた。

「あんまりドキドキしてないんですね」

クリアダがあたしの胸の鼓動に触れて言った。

『うん、結構何ともないみたい』

あたしは少し起き上がってクリアダの胸の鼓動を確かめてみた、彼女のやわらかい肌の感触と体温が手に伝わって来る。

そして、心臓の鼓動が脈打っているのがわかる。その鼓動はトクトクと早くなっていたよ。

「わたしなんて目が回りそうな位ドキドキしてるのですよ、ちよつと……ズルイですね」

悲しそうな嬉しそうな、何とも言えない表情をするクリーダ。

その時、クリーダの顔が不意に近づいて来て、いきなり目の前が真っ暗になったんだ。

ああそうか、あたしが無意識に目を閉じたんだね。

そしたら、唇にやわらかな感触と暖かさが伝わってきたよ、耳を澄ますと凄く近くにクリーダの息遣いが聞こえた。

そして、クリーダはあたしを確かめるように手を這わせ、背中に手を回したらギュっとしてくれたんだ。

ギュっていいなあ、これってするのもされるのも大好きなんだ。心地よい安心感がするんだよ。

あたしもクリーダの背中に手を回してみた、彼女の背中思ったよりずっと小さくて華奢だった。

指で背中の中の薄い肉の下にある骨の感触や、肩の骨格を確かめる。それは雑に扱ったら壊れてしまいそうな繊細さなんだ。

身長はあたしより10cmは高いのに、こんなにも弱弱しかったんだ。

世間で言う所の「守ってあげたい」って思わせるタイプには間違いないんだろうな。

でも、クリーダはあたしと仲良くなりたいてって思って、一年近くかけてそれを実現させようとしている。

欲しいものは手に入れたくなるなんて弱い人間なら言いそうもないし、本当のクリーダってやっぱり強いんだろうか。

思った事を実現させられるなんて凄いなあ、偉いなあ。

そこへ行くとあたしはどうだろう、何を目的に魔戦士組合に入たのかすらハッキリ言えるものがないんだ。



ただ、入ったら何かが変わりそうな気がしたんだよ。何か見つかるんじゃないかって思ったんだよ。

クリーダが魔戦士組合に入ったのって、やっぱりあたしが入ろうとしたからなんだろうか。それともあたしと一緒に行動したくてチラシを入れたのかな？

もし、クリーダが目的を完全に果たした後どうするのか？ 目的を達成したら「ハイ次」ってなっちゃうのかな？ それとも、ずっとあたしと一緒に居たいと思うのかな？

あたしから興味を失ったりしたらちよつとイヤかもしれない。

「ふふっ、やっどドキドキしてくれましたね」

少し不安を感じたからかな、何だか急にドキドキして来たみたいだ。

『あ……』

「不安を感じてくれたんですね？ ……うれしい」

そっか、クリーダも少しは不安に思っていたんだらうね。

それってどんな不安だったのかな？ あたしに拒否される事への不安だったのかな？

そう思われてたならちよつと嬉しい、あたしは何だかクリーダがだんだん愛おしく思えて来たんだ。

きっと今までは見た目だけで見ていたんだね、感情に届くものが出来ると全く感覚が変わってくるって今知ったよ。

あたしはこれからどうして行ったらいいのかな？

漠然と仕事をうまくこなせる様になればいいとか、楽しく出来れ

ばいいなんてものじゃ足りない気がする。

出来ればクリーダにとって、真になくてはならないものになれたらいいなあ。

そうだ、あたしはこれからそれを見つける為の旅をする事にしよう。

夜行性の動物の声を遠くに聞きながら、闇夜のツリーハウスを照らすランプの下で寝息を立てるベニトを挟み寄り添うあたし達二人の影が小屋の壁に映っていた。

「ありがとう、んにゃんを付け忘れてくれて」

クリーダに言われて初めて、あたしは口調を変える事を忘れていた事に気がついた。

## 【7】目的（後書き）

設定上はずせない為、少しGLを挟ませてもらいました。  
これからもよろしく願います m（  
|  
|  
） m

## 【8】西の空

まどろむ様な時間は儚くも終焉を迎えることになった。

それは、西の空が赤く燃え、空気に緊張が走ったからだ。

少しして遠くに聞く雷の様な低く重い音と、地表を伝って来た振動が山を……そして森を越えて届いて来た。

「これは……」

『うむ、ついに来たかんにゃん』

鬼かーッ！？ 鬼なのかーッ！？

あたしが想像していた鬼の騒ぎと全然違うじゃないか。

てつきり酔っ払った鬼が陽気にヨイヨイと踊って騒いでいるのを想定していたよ。

だが、今の振動と音は何だ？ 戦争でも始まったんじゃないか？  
って位のスケールだったぞ。

あたし達はベニトを起こし家に戻る様に言うと、原因を突き止めるべく西の空を目指した。

『どうやら山を越えた先だんにゃん』

「急ぎましょう」

村は小さな山に囲まれた盆地になっている。

そして、鬼が起こしていると思われるその音は、その山を越えた先から聞こえて来ている。

しかし、小さな山と言っても実際には相当な距離があり、山頂にたどり着くのに一時間位かかってしまうかもしれない上に、道中に

は灯りがない。

『待った！

この夜道を走るのは無茶というものの、なので乗り物を作るんにゃん』

「そうですね、真っ暗ですから」

あたしは両手を「パン」と合わせ、辺りに小気味よい音を響かせると地面に手を付けて小細工魔法を使った。

手をついた地面から光の円形の図形が現れ、そのお陰でつかの間だが闇を照らす事が出来る。

辺りにはブンブンと言う物の飛び交う音や、その物が削れる様な音が響き、少ししてその音は治まった。

円形の図形もそれと同時に消えて行き、また周囲は暗闇に戻った。

「今のアクション、今までの中では一番良かったですね」

『ふっふーん、やっぱりそう思うかんにゃん？

人気漫画「赤毛のレンコン地主」から頂いたんにゃん』

この「赤毛のレンコン地主」の物語は、主人公がレンコン地主だけにレンコンネタだけで構成されている。

レンコンをいかに短時間に多く刈取るかを、何故か次々現れるライバルと勝負し、毎回苦戦の末勝利するというのが大体の大筋だ。

また、レンコン界には10日交換という絶対的なルールがあり、一つの畑は10日刈取ったら次は別の畑で刈取らないといけないというものらしい。

そうしないと畑のレンコンが育たないかららしいんだけど、いいレンコンを作る為には絶対守らないといけないんだとか。

途中で10日交換のルールを守らない「悪いレンコン地主」が登

場し出して、物語は以外な方向へと進んでいくのだが……その話はまたの機会があったらするとしよう。

ともかく、読むと必ずレンコンに詳しくなるといいう今どき珍しいタメになる農作漫画なのだ。

あたしがしたアクションは、主人公が刈取る時のモーションそのままである。

主人公とごく一部の登場人物は刈取りが熟練しているので、パンと手を合わせて水に波紋を与えるだけで、どこにレンコンの根が這っているかを知ることが出来るんだ。その後はうまく引っこ抜くだけ。

円形の図形は、主人公やライバル達が刈取る時に現れるものなんだけど、多分圧倒的な熟練度を読者に分りやすく表現する為に付加された効果なのだろう。

コマの背景によく「ゴゴゴゴ……」とか「ザワザワ」とか書かれてるのと同じ様に、場の雰囲気を出しているだけで実際に図形が現れてる訳じゃないんだろうけど、それを付けると付けないとじゃ重さが全然違うのが不思議な所だね。

「えっと……それでこれは一体何なのですか？」

『山道がダメなら空を飛べばいいじゃないのかんにゃんッ!？』

って事で、羽ばたき機を作ってみたのだんにゃんッ!』

あたし達の横には、細長細い胴体に4枚の大きな羽を持つ羽ばたき機が出来上がっていた。

「羽ばたき機? 鳥みたいなものでしょうか？」

『ビンゴだんにゃん!』

さあさ乗った乗ったーッ!』

羽ばたき機にまたがると、あたしは羽ばたき始動の魔法をかけた。4枚の羽が交互に羽ばたき始める、それは鳥じゃなくてトンボに近かった……想像とちよつと違ったけどまあいいや。

羽ばたきは段々と速くなって行き、胴体はあっけなく地面から離れた。

『ヨッシャーッ！ 大成功なのだんにゃん！』

「すごいすごいッ！ やりましたね！」

『フッフッフッ、あたしが居れば乗り物には困らないんだんにゃん』

これで少しは点数が稼げたかな？

少なくとも移動する事が多い旅に、乗り物が提供出来るっていうのは絶対便利だと思ったはずだ。

西の空は尚も真っ赤に燃え、雷の様な低い音が不定期に響き渡っていた。

森の上をワサワサと言う音を撒き散らして飛行する巨大な羽ばたき機、うーん……辺りが真っ暗過ぎて木に当たらないか心配だなあ。あたしはもう少し高度を取る事にした。

――すると

後ろに乗ってるクリーダの、あたしにしがみ付く強さが一気に強くなったよ。

「高いところは少し……怖いです」

『落ちないようにしっかりとつかまってるんにゃん』

そう言ったのは間違いだったかもと少しだけ思った。

そもそもつかまるハンドルはちゃんと作ったのにそれを利用しないで、ニッコリしてあたしにしがみ付いた時から分っちゃいたんだけどさ。

だってね、クリーダはあたしの首の横に顔を出してはいるんだけど、前なんか見てやしないんだよ。

ギュツとして首の辺りにすりすりしてるんだ。

「首……いい匂いがします」

『うむ、それは良かったんにゃん』

分るかな？ 匂いって重要なんだ、大体高感度を感じる相手からって好きな匂いがしてるもんなんだよね。

どんなに見た目で気に入っても、匂いが好みじゃないと全部ダメになっちゃいかねない。

人間は人それぞれ違う体臭を持っているけど、それが重要とされるのは動物的な感じがして不思議だな。

クリーダはよっぽどあたしの匂いが気に入ったのか、執拗にクンクン嗅いでるよ。

『うぎゃーッ！ くすぐったあいッ！！』

うひーッ！ 場所を考えないと落ちますぞーッ！

多分、今は地面から50メートル近くの高さで飛んでるはずだ、落ちたら多分……ちんじやう。

もちろん落ちる訳にはいかないから何とか踏ん張ったさ。

こんな所じゃなければ嫌じゃないんだけど、前に乗ってもらえば良かったかなあ。

ああ、現場に到着する前に随分と体力が……タヒ。



炎の灯りに照らされた山の頂上を、あたし達は足元に見下ろして通過した。

そして、山を越えた先に見えたものは……更にあたし達の想像を絶する状況だった。

## 【9】ルクトイ（前書き）

やっところ本題に入っ様なない様な。

## 【9】ルクトイ

山を越えると、そこにはあたし達の想像を超えた光景が広がっていた。

落ち着け……まずは見たままを言おう。

山を越えた先には、見渡す限り何もない砂地が地平線が見える程広がっていた。

あたし達の真っ直ぐ前が西だから、見てる方向の左が南で、右が北なんだけど、その北と南には巨大な化け物がそれぞれいっぱい居て、双方で激しく攻撃しあっているんだ。

巨大な化け物達はチカチカと光り、その後敵対する相手に激しい爆発が起こる。

その度に雷を近くで聞く様な、痛々しい音が響き大地が震撼した。

『これは一体……何なんだんにゃん？』

「あれは光線ですね」

『もしかして、光線と交戦をかけたのかんにゃん』

「……え？」

何だ偶然か、駄洒落を言ったのかと思った。

『そか、ドラド村の人はあれを鬼って思ったんだんにゃん』

「ええ、そうみたいですな」

巨大生物は確かに村長が言う様に、体長10メートルは超える巨体をしているよ。

下半身の割に上半身が異常に発達した様なその巨大生物、たまに

光るのは光線の様なものを放っている為だった。

でもさ……

「残念ながら、あれは鬼じゃありませんね」

『そうだんにゃん』

鬼ではない巨大生物、それは「ルクトイ」と言う人工生命体だ。人工という事はもちろん自然に存在する生物ではなく、人間によって作られた合成獣なのだ。

ルクトイは人型で、体は青黒い色をしている。

頭には大きな目の様なものが1つと、小さな目が複数おでこの位置に配置されている。

大きな目は遠距離までに届くルクトイの主砲で、その破壊力と来たら壮絶だ。

今撃ちまくってるのがそうなんだけど、あの一撃でドラド村などは跡形もなく吹き飛んじやうだろうな。

あたしがこんなものを何故知ってるかって理由？ それは魔法学

校の歴史で習うからなんだよ。

ルクトイは100年近く昔の世界大戦の時、マトラが使った対城攻略用の兵器なんだ。

100人の魔戦士組合員にアンケートを取ったとしても、まずガチでは戦いたくない相手と言うんじゃないかな？

それがざっくり換算で30体程見えるんだ。これだけでちよつとした戦争が起こせるよ。

「これ程の数のルクトイが居るとすると……これはどう考えても」  
『お国が絡んでるとしか思えないんにゃん』

このマトラ王国は世界大戦以前は侵略国家だった、盛んに周辺の国々を次々と攻めその領地を広げていたんだよ。

そして、世界大戦後は見かけ上は大人しくなったんだけど、兵器の生産や開発は継続されているのは知っていた。

今は時代に合った小さい規模のものを扱い、それを商品として輸出するのが主だと思っていたけど、ルクトイがまだ存在していたとはね。

そうなるこのルクトイ達は、ここで演習か何かをしてるんだろうな。

ルクトイ達の主砲は互いに相手に当たってはいない、多分わざと外しているな。

「どうします？ やっぱり倒しますか？」

『まさか……国の兵器とやり合うつもりかんにゃん？』

そしたらさ、クリアダはクスリと笑ったよ。

しかも冗談で笑う感じじゃなかったんだ、これはヘタしたら本当に戦いかねない気がしたよ。

『コイツ等を動かしてるのがどっかにいるはずだんにゃん』

「ええ、本当に戦ってる訳じゃないみたいですし、恐らく両方が見える所にいるでしょうね」

『んー、こっちにはいないみたいだし反対側かんにゃん』

「今回のお仕事のクリア条件は、騒々しい鬼を何とかして欲しいという事でしたね」

『そうだんにゃん』

だから静かになればクリアなのだんにゃん』

あたし達はルクトイのいる地帯を、羽ばたき機で迂回して反対側に出る事にした。

ルクトイの主砲の音が耳に痛い、爆発の音の前に鳴る雷の様な音がとても嫌な感じなんだ。

「あれは一般的な精霊魔法と同じ方法で放たれています  
威力は相当違います但基本は同じです」

『ほほおー、さすが科学魔導士だんにゃん』

思った通り、さっきの場所の正反対に大きなテントがいくつか見えた。

テントにはマトラ王国の旗が掲げてある、するとこれはやっぱり軍なのか？

真ん中の一番大きなテントの脇へ、あたし達の乗った羽ばたき機を着陸させた。

ともかくルクトイを移動するなり撤退するなりしてもらわないと、あたし達は報酬がもらえないからしょうがない。

着陸する前からテントから出てきた10人程の兵士に囲まれている、何だかちよつと悪い予感がするなあ。

兵士達は剣を抜き、あたし達を警戒して取り囲んだ。

そりゃあ、演習中にいきなり羽ばたき機で降りてくる者がいたら、不審に思うのは普通だろうけど。

「何者だ？」

その中の隊長っぽい男が、こういう場面でありきたり過ぎる言葉を投げかけてきた。

「わたし達はマトラ王国の魔戦士組合の者です」  
クリーダが名乗ってバッヂを見せた。

「ふむ、ふざけた格好だがそのバッヂは本物だな」

確かに……、あたし達って思いつきりコスプレしてますからね。

「それで、組合が軍に何の用だ？」

やっぱり軍か、軍ってこんな所で演習していたのかーッ！

「わたし達は組合の業務を現在遂行中なのですが、

ここの責任者の方と少々面談させて頂けますでしょうか？」

「今は演習中だ、用事があるなら終わってからにしてもらいたい」

「そうはいきません、わたし達はこの演習の騒音被害を解決するのが今回の仕事ですから」

クリーダは妥協せず、組合の依頼書を男に見せて言った。

何者にも臆することないその度胸、コスも相まって美しすぎるぞ  
ー。

ところで、この組合の依頼書には実はちょっとした権限があるのだ、組織図では組合はマトラ王国の直下だから軍とは同じ位置にある。

簡単に言えば軍が王国のものならば、組合は民間のものという違いだね。

でもって、依頼書には王国の印も押しており、任務遂行の為の権限を行使出来るんだ。

「そうか、ドラド村は確かにあの山の向こうだな……少し待っている」

今までとは一転したその男は大きなテントへ走って行った。

こういうものって軍人には特に効果があるもんじゃない。ふう、どうやら無事解決しそうかな？

気が緩んだ所であたしは取り囲む兵隊達を横目に大きく伸びをして、しっぽをねじねじしてポーズをとって「んにゃん」と鳴いて見

せた。

兵士達は決して顔は動かさず、目だけを動かしてあたしのしつぽを見つめていたよ。



## 【10】最高機密

あたし達は軍のテントの前で兵士たちに包囲されたまま、さっきの隊長らしき男の帰りを待っていた。

包囲している兵隊達、剣は鞘に収めたんだけど、無言のままあたし達を取り囲んでいるよ。

うっはー！ 何かイヤな感じだなあー！

場の緊張を解そうと思って、せっかく渾身のアクションを放ったのにコイツらと来たら一言も喋らないんだよ。

ノーリアクションってどんだけ恥かかせてくれるんだーッ！？

あ、もしかして軍の兵隊ってすごく不自由なのかな？ そうならしょうがないかー。

任務中の勝手な行動は怒られちゃうんだろうね。うん、きっとそうに違いなさ。

後で「あの娘ネコかわいかったな〜！ また見たいなあ〜！」とか、「じゃあオレは氷女がいいな」とか言って盛り上がるんだろうな、文字通り盛り上がるんだろうな。

……うげ。

そんな冗談は置いといて、こうしてる間もルクトイ達の演習は続いていて、何もない砂地には轟音が響き渡ったままだし。

あー、早く終わらして帰りたい。

そう思ってちらりとクリーダを見たら、彼女は羽ばたき機に腰掛けて頬杖をついてぼーっとあたしを見ていたよ。まあ……考えてる事は大体同じだろうな。

辺りの他の様子と言えば、テントの入り口に灯りが2つ、その

入り口の両脇に兵隊が1人つつ。そのテントの中は全く見えない。他のテントも大体そんな感じだけど、人が余り外にいないって事はテントの中にでもいるんだろうか？

それにしても、あのたくさん居るルクトイってどうやって動かしてるんだろう？

専門の魔法使いがいるのか、それとも何か道具を使っているのか。教科書にはそこまで載ってなかったからねー、そこが一番知りたいの。

兵器としてなら魔法使いがいらない方が便利なんだろうけど、いくら何でもそこまで便利なのかどうか。

あたしがルクトイが気になる理由、小細工魔法は召喚魔法に似ている所があるんだけど、あのルクトイは召喚は必要ないけど召喚士が召喚した魔獣とほぼ同じだからなんだ。

召喚魔法は操るものを召喚して、小細工魔法はこの羽ばたき機や荷馬車の様にその場で作り出すって違いはあるけどね。

因みに小細工魔法は何かを作り出す為に特に材料は選ばない、地面の土だろうと井戸の水だろうとゴミの様であつても実は何でもいんだ。

あらゆるものに小細工を施す事が出来、しかも維持する為の魔力が必要ない。

そのお陰でかなり大きなものも操る事が出来たりするのだ。

例えばルクトイクラスの質量だつて扱えるんだけど、それは召喚魔法でも上級者ならもちろん扱う事が出来る。

ただし、召喚士は召喚中は常に魔力を消費し続ける為、比較的短期決戦で決めたがるんだけど。

とりあえずは、ここに来てやっとルクトイのいる空だけが、変な感じで明るい理由だけは分ったよ。

ルクトイの主砲がいかに強力とは言え、あの爆発だけじゃこんな

に明るいはずないからね。

今は真夜中のはずなのに、辺りは薄暗い夕方程度の明るさがあるんだ。

その理由は、ルクトイがたまに空に向かって何か打ち上げているんだけど、その打ち上げたものが雲を発光させているらしい。

空が燃える様に見えるのは、ぼんやり光る雲に爆発の炎の赤が映ってるからみたいだ。

『さっきの人はまだかんにゃん？』

いい加減暇なので、兵士の1人に声をかけてみたけど、やっぱり目だけ動かすだけで無言だった。

羽ばたき機の羽をいきなりわさわささせて脅かしてやろうか、と目論んだ時にさっきの男が戻って来た。

「お前達は魔法使いか？」

『うむ、魔法使いだんにゃん』

「そうか、ならばあの中では特に気をつける事だ

不用意に魔法を使った場合、適切な処置をとらねばならぬからな」

『ふむり』

「ついて来い、將軍に合わせてやる」

散々待たされたけど、やっとここの責任者に会えるらしい。

あたしとクリーダは軍のテントの中に案内された。

大きなテントだけど、何故かあまり人がいないんだなあ。

警備兵らしいのが10人位と、偉そうな男が1人と、その男に話してるのが2人か。

でもって、この偉そうな男が將軍なのかな？

「私はここの責任者のサルファーだ

魔戦士組合と言うのはキミ達か」

『そうだんにゃん』

そう答えたら、偉そうな男の横の2人がビクリした顔をしてたんだけど、何か変な事したかな？

「はい、魔戦士組合です」

クリーダがあたしの口を押さえて勝手に喋り始めたよ、やっぱり何か変な事したのか？ 心当たりがさっぱりなんだけど。

一通り依頼の内容をクリーダが説明すると、サルファーって人は「ううむ」と唸っていたよ。

「演習場所は移動しよう」

それが、考えた末にやっと出た答えか。そんなの即答でいいだろう。

「サルファー將軍、ありがとうございます！

では私達はドラド村に戻ってその旨を伝えたいと思います」

あたし達が帰ろうとして振り返ったら、いつの間にか大勢の兵隊が道を塞いでいたんだ。

そればかりか、あたし達は両腕を掴まれて動けなくされちゃったよ。

「將軍……これはどういう事ですか？」

「キミ達はルクトイを見ただろう？」

あれは軍の最高機密なのだよ、よって帰す訳にはいかんだ」

『軍の最高機密ならもっと密かにやるもんだんにゃん！』

「ドラド村はうつかりしていたよ、まさかそこまで音が届くとは思わなかった」

『大音量で届きまくりだったんにゃん！』

とんだ安眠妨害だんにゃん！』

「「きさま、その変な口を慎め！」」

將軍の横に居る2人が今になってズカズカと出て来たと思うと、木琴のバチみたいなのであたしの頭をペチペチっと叩いた。

1人1発で、2人で2発叩いたよ。

『いったぁーッ！！』

なんだコイツ等は！

あたし達が動けなくなったとたん強気になったぞ！？

更にこの2人、動きも台詞も完全にシンクロしてるじゃないか。

「「そもそもそのおかしな耳としっぽは何だ！？」」

腰ぎんちゃくが耳を触ろうとしたから、耳をバサバサっと動かしてやったら超ビビってんの。

でもまたバチでペチペチって殴られた……！ それ、超痛いんですけどー？

「「將軍、この者たちは魔法使いらしいので我々に任せ下さい」」

「うむ、キミ達に任そう」

そしたらまた振り返ってペチペチっと殴られた……なんであたしばかり！？

それにしても想定外な事になってしまったな。

これからどうなるんだろう、まさかの軍法会議にでもかけられるのか？

ルクトイが軍の最高機密って、そりゃーね。

ずっと存在してないと思ってた位だから、すごい秘密にしてたんだろうさ。

だったらもっと周囲の地形を考えてやればいいのに、近くにドラド村があるの分ってたんだしさ。

それから最悪な事に変な注射打たれちゃったんだ。多分麻酔だと思う。

おかげで首から下がすっかり動けなくなってるの。

ふーん、魔法使い対策にはいいかもね。

でもねー。

一番最悪なのは、あたし達がさっきの2人の腰ぎんちゃく達に抱えられてどっかに運ばれてるって事。

げえー！ まさかこのまま汚されてしまうのかー！？

とんだ大ピンチだ！

おや、クリーダはあたしの方を見て微笑んでるよ。いつもながら余裕だよねー。

流石の科学魔導士もこうなってはどうしようもないだろうに。

さあ、どうなる大ピンチ！ セカンド！

やっとヒロインの役どころって感じがしてきたなあ、オラ何だかワクワクしてきたぞー！

軍の明け透けな最高機密を見せられてしまったあたし達は囚われてしまった。

## 【11】口封じ

軍の最高機密であるルクトイを見てしまったあたし達は、あろう事か軍に捕まってしまった。

兵隊達に捕まる前に反撃しても良かったんだけど、何たって相手が軍だからねえ。

將軍を人質にするとかして逃げられたとしても、それじゃこの国には住めなくなっちゃうし、初仕事は絶対やり遂げたかったから大人しくしてたんだ。

それで、相手の様子を見ようと思ってたんだけど、取り押さえられたのは麻酔を打つ為だったらしい。

さて困ったぞー、体は麻酔で全く動かないし、あの変な2人にどっか連れて行かれてるし。

どこに連れて行くつもりだにゃん？　って言ったつもりが、

『ろこりるれるくるもりらなん』

うぐう……うまく喋れないじゃないか。

あたしを抱えてる変な男が「ふん」と言っただけにやりとした。

ひいひいひい……ッ！！　こえええええよおお……ッ！！

『ろら……あ……あらへえー（コラー！　離せーッ！）』

「クククク……」

見た感じも動きも全てがキモいけど、笑い方も極めてキモいなあ。



クククなんて笑う奴もマンガ以外で初めて見たよ。

それから、あたし達はテントの奥のどこかの部屋に運ばれた。  
テーブルの上らしき所にクリーダと並べられて仰向けに寝かされたんだ。

それを変な2人が両脇から腕を組んでニヤニヤして眺めてる。

変な男は軍服をすごい几帳面に着ててね、すごい真面目そう  
なんだけど、何がおかしいって表情が不味くて顔がやけにデカイ。  
それで、たまにちよつと頭イッちゃった様な表情をするんだ。コ  
イツ等絶対まともじゃないよ！

こんなのが……しかも2人も軍にいる事が一番の問題じゃないの  
か？

「「あんた達ってアレでしょ？」」

んむ？ 何だあ？ コイツ等さっきと口調が変わったぞ？

『あれれにゃんら（アレってナンダ）？』

「「隠したってムダよッ！ 分かっちゃうんだからッ！ ねーッ！」」

ねーッって……見事なシンクロぶりだけど、何が分かるっていう  
んだ。

「「ウフフ……好き同士なんでしょー？」」

うっわー、口調変わったら更にキモさがパワーアップしたよ。岩  
みたいな顔でその口調か！

しかし何でわかるんだろうなー、別にわかってでもいいんだけど何

でかは気になる。

「何で分かるんだろうって思った？ 思ったんでしょおーッ！」

ちょ、あたしがよく使う繰り返し使うな。

「それはね、あたし達も同じだからよ」

キモい2人は岩みたいな顔をくしゃつとさせて、2人でハイタツチしてたよ。

つーか、どこが同じなんだーッ？ あたしが許せるのはイケメンのカップリングのみだぞッ！

もし1つ条例を作る事が出来るなら、岩同士のカップリングは永遠に禁止にしたい。

「それじゃーねえ、いい事してあげる」

そう言つてキモい2人は麻酔で動かない、あたしとクリーダの手を繋げたんだ。

麻酔してて手は動かないけど、感触は分かるんだね。クリーダの手はやわらかくてとってもあったかい。

「ウフツ、あなた達は幸せよー？」

大好きな相手と手を繋いだまま死ねるんだから」

ん……？ えええッ？ 今コイツ等って「死ねる」って言った気がしたんだけど、それってどういう事なんだ！？

更によく見るとキモい2人があたし達の足元で何かやってる、足に少し感覚がするんだけど一体何してるんだろう。

そして何かをキュツと縛る様な音がした、そうかテーブルに縛り付けてるんだな。

次に膝の辺りを縛ると、徐々に上半身に上がって来た。

感覚が鈍いからよく分からないけど、かなりギュツと縛られている感じだ。どっちみち動けないんだけどね。

『まっら、まれんりふみあいりれんらるしる（待った、魔戦士組合に連絡しろ）』

「「ふーん、死ぬと分かったらとたんに必死ね

魔戦士組合って言ったの？ それなら大丈夫よ、あそこは出入りが激しいんだから

出先で行方不明になる組合員なんて珍しくはないのよ」

そう、魔戦士組合の報酬は高額だけど、命の保障は全くない。全て自己管理、そして自己責任なんだ。

これは最高機密であるルクトイの口封じって訳か、軍事裁判なんてせずに始末するって事だね。

冗談じゃないぞー！ーッ！ あたしはこんな所で人生終える気なんて全くないんだッ！

『うあー！ー……いやらー！ー……（うわーッ！ イヤだーッ！）』

「「さあ、おチビのネコさんもう諦めなさい

もう1人の娘はとっくに諦めてるわよ？」」

あたしはずっとクリーダが黙ってるのが不思議だった。

まさか諦めたとも思えないんだけど、何でずっと黙ってるんだろう？

クリーダは目だけこっちに向けて、ただずっと黙っていた。

「「よしコイツ等を運び出せ」」

キモい2人の口調は元に戻っている、兵士を使ってあたし達を外に運び出す様だ。

呼ばれて入ってきた兵士は、さっき將軍の元に案内してくれた隊長とその部下だったよ。

あたしはもう後がないと思い、隊長達に一生懸命訴えていた。

「「りりたくらいおーらるれれおー（死にたくないよーッ！ 助けてよーッ！）」」

あたしは完全に素に戻ってる、でもどうしようもないんだから。隊長達は一度もあたしと目を合わさなかった、でも隊長が一言小さな声でこう言ったんだ。

「……すまない」

うん、それは分かってるよ。

それからのあたしは、運ばれてる間ずっと泣いてたんだ。

そして兵隊達の横を通り過ぎる度に必死に訴えかけた、無駄だと分かってたけどそうするしかなかった。

彼等は首を動かさずともその目は悲痛をあらわにしていた、この状況って本当にどうしようもないんだな。

さすがのあたしも段々諦めを感じて来た頃、クリーダがあたしの手をキュッと握ってくれた。

そっか、あたしは一人じゃないんだ、クリーダと一緒にならまあいいかな。

あたし達はルクトイのまん前に板ごと設置された。

最後はルクトイの主砲か、それなら一瞬だからきつと苦しむ事はないだろうな。

そう思っただけになった目でルクトイの主砲を見つめた。

遠く離れたテントの前に、サルファー將軍とあのキモい2人、そして多くの兵士が並んでこちらを見ているのが見える。

なんだ、結構人がいたんじゃないか、今までどこに隠れていたんだか。

もうクリーダだけを見ていよう、一番最後までずっと見ていよう。

『ふいーら……るっろいっほらお（クリーダ、ずっと一緒だよ）』

その言葉に、クリーダは微笑んでくれたんだ。

## 【12】最高の玩具

あたし達は軍にあっけなく捕まり、そして処刑されようとしていた。

魔戦士組合に入って最初の仕事すらこなせないのか、あたしの人生はこれから始まるはずだったのにな。

クリーダはずっと黙ったままあたしを見つめてくれてる、ゴメンねあたしと組んだばかりにこんな目に合わせちゃって。

また涙が頬をつたって流れ落ちた時、クリーダが声を出さずに唇だけでこう言ったんだ。

「うれしい」

って。

兵士がルクトイに指示をしたら、目の前でずっと止まっていたルクトイが動き始めたよ。

そっか、ルクトイは魔法で動かされてるんじゃないくて、軍の人間という事を聞く様に出来てるんだね。

ルクトイが止まり姿勢を整えた、いよいよ最後の時が来たのだな。それからあたしはクリーダの顔を見ていたんだ。ずっとずっと見ていたんだ。

ずっとずっと……？

あれから3分位は経ったんじゃないだろうか。  
腹をくくったから時間が長く感じるんだ、ってもんじゃない時間

が経過している様な。

「クス……」

あれ？ クリーダが笑った！？

あたしはクリーダが見つめている方向へと目をやったよ。

そうしたらさ

目の前のルクトイの目が何度もピカピカ光ってるんだ。

『にゃんらー（ナンダーツ）！？』

ルクトイは主砲を撃つときに大きな目が光ってたんだけど。  
目をピカピカ光らせてるだけで全然何も起こらないぞ！？

「それじゃ……」

クリーダがそう言うのと、あたし達を板に縛り付けていた紐が一斉にブチっと切れたんだ。

体に力が入らないあたし達はそのまま地面に向かって崩れ落ちてゆく。

……と思ったら、クリーダは姿勢を崩すどころかしっかりとあたしを支えたんだよ。

『にゃんれー（何でーツ）！？』

まさか！ クリーダは麻酔にかかっていなかったのかーツ！？

「はぁ……、あなたを見ていてわたしはととてもとてもたまらなくて

……」

クリーダはあたしを抱き上げると、顔を近づけてのぼせた様な目でそう言ったのさ。

なんと言ふ事か！ あたしが取り乱してるのを見て、ひたすらハアハアしてたつて言うのかーッ！

これ程あつけにとられたのは生まれて初めてだ。

そして、今の軍の様子はといえば。

必死に目を光らせている目の前のルクトイと、様子がおかしい事に気が付いた兵士達が遠くで右往左往している。

驚く事に、他のルクトイも周囲を囲むようにしてただけど、やっぱり目を光らせてるだけで何も起こらないんだよ。

「では、はじめますよー！」

クリーダがそう言った直後、あの雷の様な音が全ての方向から聞こえ、全てのルクトイが爆発してしまった。

その光景にあたしは何が起こったのかすら分からず、ただ目が点の様になっていたよ。

「お粗末な最高機密さんですね」

えー！ー！ーッ！？

ルクトイって軍の兵器で、しかも最高機密のはずだったよね！？それが完全に無力化されるわ、いとも簡単にやられちゃうわって……科学魔導士ってそんなに強かったのか！！

ともかく、クリーダが1つの軍の戦闘力を完全に奪った事だけは確かだ。



そして、クリーダはあたしを抱きかかえたまま、サルファール將軍に向かつて歩き出した。

周りの熱風から守る為に周囲に雪を降らせてくれている、その様はまるっきり氷女そのものだ。全く終始美しい人だよ。

かすかに風に乗って香るクリーダの香りが心地良い、やっぱりいい匂いだ。

サルファール將軍も兵士達も、余りの出来事を目の当たりにして動く事すら出来ず呆然と立ち尽くしていた。

「サルファール將軍、こんな欠陥品は最高機密にはなりませんよね」

「あ……ああ」

そう答えたサルファールは、口を閉め忘れていた様だった。開いた口が塞がらないと言うのはこう言う事なのかな。

「「すごい……これが愛の力なのね……超感動したわ」」

岩2人の口調がまた変わってる、もしかしてこっちが本当だったのか？

その後、あたし達は軍にとがめられる事もなく、乗り物まで用意してもらえちゃった。

帰り際にあの隊長と部下達が敬礼しているのを見て、あたしは笑顔を返してあげたよ。

『ひろいめにあっらもんらー（酷い目にあったもんだー）』

「ええ、やり甲斐がありましたね」

クリーダはあたしを膝の上に座らせて、揺れて落ちないようにしっかりと支えてくれている。

その様子は大きなお人形を抱っこしてる少女の様にとてもうれしそうだ。

今日は不思議な事ばかり起こったな。

クリーダとの事もだけど、何故クリーダには麻酔が効いてなかったのか、何故ルクトイが無力化されてしまったのか。

まだまだ知らない事がたくさんあるんだね、あたしはクリーダの事がもっともっと知りたいな。

「フフツ」

クリーダはまだ殆ど動かす事が出来ない、あたしの手や足で遊んでいてとても楽しそうだ。

「こんなチャンスは滅多にないですよものね」

そう言ってクリーダはあたしの首筋に唇を這わし、あたしはそれを喜びで受け入れた。

### 【13】夜明け（前書き）

少々毒入りですがついてきてもらえます様に・・・。

### 【13】夜明け

危機一髪！……だったのか、実はそうじゃなかったのかわからんちんだったけど、あたし達は無事に目的を達成しドラド村へと向かっていた。

『ほらッーッ！ 見てみるんにゃん！ 手がーッ手がーッ！』

寝てる時に手が痺れた時ってうまく動かせないでしょ？ 今まさにそんな感じ、それが面白くて遊んでるんだ。

ご覧の通りやっと思える様になったんだけど、ちゃんと喋れないのってホントに辛いもんなだね。

「キスマーク……いっぱい付けちゃいました  
後でいくつあるか数えてみてくださいね」

『んなッ！？ キツキツ……ッス！？』

「わたしのっていう印です  
心配しなくても服の外から見える所には付けてませんから」

クリーダの顔は髪で目が見えない程うつむいていた、でもその口元はくつと上がっている。

多分すっごいニヤッとしてやがるんだろう。してやったり感を味わってるのだろう。

さっきから何かしてるとは思ってたけど、そんな事してたのかーッ！

もちろんとってもうれしいさ、その印とやらを早く見てみたいさ。あたしが仰向けのまま首だけを動かして「ウーウー」してたらクリーダが起こしてくれて、さっきみたいにお人形を抱く様に膝の上

に抱え込でギュツとしてくれた。

そして、あたしの手をとると指を絡ませ、

「ほら、ここに1つと、ここに1つ……」

クリーダはあたしの手を持ち、1つ1つあたしの人差し指でマーカーの場所を教えてくれた。

『ぎぎよッ！ また随分と付けてくれたもんだんにゃん』  
「フフっ、まだ他にもあるんですけどね」

クリーダは少し得意そうに全ては自分のものと言うかの如く、あたしの全身くまなく手を滑らした。

『自分だけズルいんにゃん！ あたしも付けたぁーい！』  
「付けてくれるのですか？」

喜んだのかな？ なんかクリーダの声のトーンが少し上がったよ。クリーダはあたしの背中を浮かし手で膝を持ち上げると、膝の上であたしの体をクルリと回転させそっと抱え込んだ。

うーん、面と向かってみると結構ドキドキするもんなんだなあ。

言ったものの自由に動けないあたしに、クリーダが白くやわらかい部分の肌を唇に寄せてくれた。

その白い肌はクリーダの匂いが凄くした、ウツハァーいい匂いだぁー。すっごく幸福な気分を満たされてるよー。

クリーダはゆっくりと、そしてやさしくあたしの髪をなでてくれた。

白い肌から唇が離れると、そこにあたしの印がついていた。これ

でもうあたしのもの？　だよね。  
クリーダは、あたしの印が付いたのを見て満足そうな顔をして  
いた。

「またつけてくださいね」

にっこり微笑むクリーダに

『うむ、まかせておくのだんにゃん』

と答えるあたし。

あたし達の乗った乗り物は朝焼けの空の下で、ドラド村が遠く  
かすかに見える辺りで止められた。

きっと昇り始めた太陽の光が、この乗り物に長い影を作らせて  
いる事だろう。

何故止められたかって、そりゃあ村に入るなら身支度はちゃんと  
しておかないとだからね。

あたしはまだ自分で出来ないから、クリーダがやってくれてる訳  
なんだけど。

『ねえ、ずっと気になってたんだけど、

なんでクリーダには麻酔が効かなかったのかんにゃん？』

「いえ、ちゃんと効いてましたよ」

『へ？　そうなのかー！　でも随分早く回復したもんだんにゃん』

「麻酔の成分はわかってますからね、急いで解毒していたんです」

『おおッ！　そんな事が出来たのかー！』

んで、いつ頃動ける様になったんにゃん？』

「ルクトイの前に運ばれた頃です」

あなたが周囲の気を引きつけてくれていたので、ずっと解毒に集

中する事が出来ましたよ

何とか間に合ったみたいで良かったです」

そっか、それでずっと喋らなかったんだ。

でもまだ肝心な事がもう1つ気になってる。

それはもちろん、ルクトイ達を無力化してしまった事だ。

『ルクトイ達をどうやって無力化したんにゃん？』

「魔法には科学的な原理があります

例えるなら時計の歯車の様なものなのですが、その歯車を1つでも抜いてあげると魔法は失敗してしまいます

わたしはただ1つの歯車を抜いてやっただけです」

そう簡単に言うけど、相当な知識と魔法の能力が必要とされるはず、少なくともあたしにはチンプンカンプンさ。

だってそもそも「科学」という単語がどういうものか知らないからね。

そう言えば、最初にルクトイの主砲について「一般的な精霊魔法と同じ方法で放たれている」って解説してたけど、あの時の自信満々さはそれへの対策が出来るからこそだったのか。

乗り物がドラド村に到着し、クリーダはあたしを背負って乗り物から降りた。

そしたらベニトが凄い勢いで家から出てきたよ、さっすが子供って早寝早起きだね。

「やっぱりなあー」

『なんだんにゃん』

第一声に込められた意味は大体分かるけどね。

「娘ネコっていつも真っ先にやられるんだもんな」

『うぐう……』

今回は全く反論出来ないね、行きの移動には貢献出来たけどその後は散々だったから。

「ベニトさん、この娘をツリーハウスまで運ぶのを手伝ってもらえますか？」

「しょうがねーなあ」

ベニトはハリキってあたしをツリーハウスに運ぶのを手伝ってくれた。

運び終わった後のベニトの一言は。

「お前ってさ、子供じゃなかったんだな？ 少し母ちゃんみたいだ」  
『うむ？』

なんだってーッ！？ って事は今まで子供だと思われていたのかッ！！

きっとベニトが後何年かして、大人の女の魅力が理解出来る様になった頃、あたしを思い出すのだろうな。思い出しちゃうんだろうな。

ならば、心に残る程の思い出を作ってあげねばなるまい。



## 【14】少年の心に刻まれた思い出

ベニトに素敵な初恋の思い出を作ってやろうじゃないか！

さてー、どんなもんでしょー？ 思うのは簡単だけど何をしたらしいのやら。

アレコレ考えていると、ベニトが大あくびをしている。それを見てあたしもあくびが出してしまった。

『んむー？ ベニトは夜ちゃんと眠れなかったのかんにゃん？』

「だってさー、鬼が煩い夜って寝られないんだよなあ  
だから今日は村のみんなもきつと寝坊だよ」

『そっかッ！ でもこれからはよく寝られる様になるんにゃん』

「え！？ おまえら本当に鬼退治したのか！？」

『あったり前だんにゃん！』

すツツごおー……い！ おっきな鬼が30匹いたんだぞー！

それを全部やつつけたのだ！』

「ホントか！？ おまえらってすっげえなッ！！

でもさ？ 鬼をやっつけたのは氷女だろ？ 娘ネコはすぐにやられちゃったんだよな？ 今だってあんまり動けないし」

『あうん……そうだったかも』

うう、子供ってホントに容赦ないなあ。だがそのピュアーさがいい所なのだよ。

『んじゃー、ベニトもここに横になるのだんにゃん！』

「えー……やだよ」

こういうと大体反射的に言うんだよね。

でも、イヤだと言う割にちゃんと横になるかわいさだ、クリーダとあたしに挟まれて複雑そうな顔をしているよ。これが後数年もしたら意識しだしたりするんだろうねえー。

『ベニトは好きな人はいるのかんにゃん？』

「そ、そんなのいないよ」

『そなんだ、ベニトはあたし達の事も嫌いだもんね』

って言ったら、ベニトは「えっ？」って感じの表情に変わった。

「嫌いじゃねーよ……」

逆に言ってみると本当の事を言うんだってさ。

それからいつの間にか眠ってしまい、あたし達が目を覚ました頃にはすっかりお昼をまわっていた。

よく寝たらすっかり体が元通りに動く様になったみたいだ。クリーダはちよつと残念そうな顔してたけどね。

元気になったら急にお腹がすいて来た、そしたらベニトのお母さんがお昼ご飯をご馳走してくれたんだ。

何だかベニトのお母さんにはお世話になってばっかだなあ。

ベニトのお母さんはアンドラって言う名で、今はベニトと二人暮らしらしいんだ。

でもね、お父さんの事を聞いたらちよつと困ったような顔してた。何か言いたくない事情があるんだろうね、だからそれ以上は聞かなかったよ。

ご飯のお礼にあたしは家の補修と、ベニトには勉強机と椅子を作ったあげたんだ。まあ、ベニトはツリーハウスの方がお気に入りなんだろうけど。

その後、あたし達は村長に今回の仕事の完了のサインをもらいに

行った。

「うーむ、しかし本当におったとはのおー」

『そのおったって一体ナンダんにゃん?』

「こっちの話だ、気にするでない」

「それではここにサインをお願いします」

クリーダはあえて流れを無視して進行してくれたよ。下手に話を合わせるとまた話が横道にそれまくるからね。

この村長、何故か鬼を退治した事には感心がないのか、特にどうのこの言われなかった。

証拠の鬼の首を持って来たか? とか言われなかったのは幸いなんだけど。

村長がサインをしてくれたのを確認すると、あたし達はさっさと切上げようと外に出ようとした。

そしたら村長が、

「ゲジローにもたまには来いって言つといてくれ」

とか、意味不明な事言ってたよ。

まさかの長老は、あたし達が本当にゲジロー一味とでも思ってるんじゃないだろうか?

そもそもこの村長、子供向けの漫画のキャラクターなんてよく知ってたもんだ。

~~~~~

さあーッ! 仕事もバッチリこなしたし、胸を張ってあたし達の

街に帰ろう！

アンドラに帰ることを告げると、帰りに食べるようにってドーナツをくれたんだ。

ベニトはと言えば、ずっと下を向いていたよ。短い間だったけどやっぱり別れが辛いんだろうね。しょうがないから最後にギュウツってしてあげたら泣いちゃった。

あたし達はベニトにとって、いい思い出を刻む事が出来たのかな？

帰りは軍にもらった乗り物に乗って帰るんだけど、軍の乗り物って黒くてつまらないデザインだからちょこっと変えさせてもらったよ。

白い花をモチーフにね、なんとって可憐なあたし達が乗るのには相応しいでしょ？

『ドラド村を出発した白く優雅な乗り物は地平線の彼方へと消えてゆく

じっと見つめるベニトは何を思い、今後どの様な成長をして行くのだろうか

そのお話はまた今度なのだんにゃん』

「何ですか？ それは」

『そういうナレーションがどこからともなく聞こえて来そうな名場面だんにゃん』

「フフ、まさかこういう事をしてとは思わないでしょうね」

その「こういう事」とは、あたしが今クリーダに「あたしの印」を付けている事を言うのかな？

『イヒ、少年の心は時としてガラスの様に繊細なのだんにゃん』

「そうですね、では何年か後にベニトさんにわたし達の事を全部話

してみましようか？

『どういう反応をするか興味があります』

『きっとグレると思うんにゃん』

そして、あたしは今後ずっとクリーダと共に行動する事になった。
様々な困難に出会おうが、周りの目が厳しかろうが。

＜ずっと一緒だよ＞

あの時あたしがクリーダに言った言葉の通りに。

【14】少年の心に刻まれた思い出（後書き）

まとめておいてすみません、実はまだ少し続きます。
あなたの心にも何かしらを刻めます様に。

【15】悪寒

あたし達はドラド村の仕事を無事終えて、あたし達の暮らす街に戻って来た。

辺りはすっかり暗くなっていたけどそのまま魔戦士組合へ向かい、書類を提出して報酬を受け取った。

『やっぱり難易度低いと報酬も少な目だんにゃん死ぬ思いまでしたのに……』

「そうですね……」

でもドラド村の方達にとっていい事したと思って次もガンバリましょう」

『そうだんにゃん！』

んじゃー、次の仕事でも見ておくかんにゃん！』

クリーダがパートナーじゃなかったら多分死んでいたであろう、

あの「鬼退治」の報酬はビックリする程安かった。

いや、ホントは報酬は最初から書いてあったんだけど、あたし達がちゃんと見てなかったんだよね。

「鬼退治」っていう単語にばっか目がいつちゃってたよ、とんだおっこちょこいさ。

しかも難易度が低い設定なのに、結果として軍の最高機密と戦う事になった訳じゃない？

そりゃね、当然組合に文句は言ったださ、だって報酬は組合が見積もりを出してるはずだから。

でも受けた時点で全てを了承した事になるからって追加の報酬は出すことは出来ないって言われたさ。

その代わり、近いうちのランクアップは期待していいって言われ

だから、今回は特別に許してあげることにしたんだ。

え？ ルクトイの事を組合いに言ったかって？ そんなの言える訳ないじゃん！

仮にも軍の最高機密だったんだからさ、そういう情報を漏らしたら安心して眠れなくなっちゃうよ。

後注意する事はね、依頼の内容は秘守義務があるから依頼を受けた人以外には喋れないんだ。ここの職員となら相談窓口で話せるけど、それが軍の最高機密ともなるとまず話せない訳。

とにかく守らないといけない決まり事は絶対守る事、もし魔戦士組合に入る事があるなら気を付けた方がいいよ。破ったらペナルティーが重いからね。

あたし達は依頼の仕事が貼られている掲示板前へと移動した。

『なにになに？ 難易度Aで報酬250万丸、難易度Sナント報酬1000万丸だんにゃん！』

さすが難易度の高い仕事は報酬も高いんだんにゃん』

因みに鬼退治の難易度はD、報酬は5万丸ですよ！ それを二人で分けるんですよ！

ルクトイ30匹倒して5万丸かー、最高機密ってずいぶんやつすいもんなんだねえ。

あのサルファー將軍が聞いたら、きっと地べたに両膝と両手を落とす事だろうな。

「あらー？」

唐突に聞き覚えのある声が背後から聞こえた。

聞き覚えのある声なんだけど、あたしはその声にただ悪寒しか感じなかったんだ。

「久しぶりー!」

『や……やあ……久しぶりだんにゃん』

あたしは引きつった顔で挨拶をした。

「ぷーっ! なにその語尾ーっ!」

あんたいつからそんな面白くなつたのーっ!？」

『ええ……っ』

「でもあんたって、ここに居るって事は魔戦士組合に入ったって事?」

『う……ん、入ったんだんにゃん』

「へえー、でもよく入れたよねえ」

魔法学校時代からは考えられないわ」

「スフエーン!」

更に別の声がして、あたしは更に悪寒が増した。

「シンナバーこっちこっち! ビックリするのがいるよ!」

「なあになあに? どーしたの!？」

「ほらーっ! このおチビたんをごらんよ」

「ありゃ? このチビっことはどっかで見た事ある気がするなあー?

どーこだったかなあ……あれえ? 小さ過ぎて見えないや」

シンナバーは手のひらを目の上に置いて遠くを見渡すポーズをした。このポーズを過去に何百回も見たことか。

「おおー懐かしいー! こんな表情って昔よく見たよねえ」

「うんだ、感動の再会って奴だ！ 呪おう！」

「アハハハハッ！ 祝えよ！」

「そうだ、せっかく久々に会ったんだし

次の仕事ウチらと一緒にやってみない？ ……やるよね」

「何言ってるのー！？ おチビには無理に決まってるっしょー！
超ウケる！」

「だって久しぶりだしー！

積もる話や積もるごによごによとかだってイッパイあるのよ」

「ふーん、ごによごによとかいいけどさあ？ でも仕事以前に死ん
じやったりして」

「アハハハハハ！ 縁起いい事いうなよ！」

「ギャハハハハハ！！」

最悪だ……まさかこの街でこの二人に出会うなんて思わなかった
よ。

「ところでそっちのは誰？」

スフェーンがクリーダにやっと気が付いた。

「はじめまして、彼女とペアを組ませてもらってるクリーダ・ヴァ
ナディンです」

「ええー！ーッ！？」

悪いことは言わないからあんた絶対この娘とペア組むのやめた方
がいいよーッ！」

「彼女にはわたしからお願いしたんです

今も仕事を済ましましたし、全く問題ありません」

「へえー、世の中には変わった人もいるんだねえ？

クリーダってクラスは何？」

「科学魔導士です」

「カガク？ シンナバー知ってる？」

「初耳ーッ！」

「悪いんだけど今回の仕事は人数いっぱいだから、あんたはお留守番してくれない？」

明日出発で2〜3日もあれば終わるからさー！」

「2〜3日後に燃えカスたんになってるかもしれないけど？」

「ぷーッ！ それはありえる！」

「ギャハハハハハーッ！」

「でさー、おチビ達がやったって仕事ってなによ？」

『……お……鬼退治……』

「ブッ！ ……アハハハハーッ！！ お……鬼ってッ！」

「ギャハハハハハーッ！ もうだめーッ！ 笑い死にそうーッ！」

それから2人は暫く笑い転げてたよ、その大笑いしてる仕事で死にかけてたんですけど？

「それじゃ、おチビたん？ 明日の朝ココ集合ね？ 来なかったら

……わかってるよね」

あたしはスフェーンの最後にトーンを落とす、その強制的口調が大嫌いだった。

『え……う』

「そんな嫌そうな顔しないでよ、あたし達の仲でしょ？」

スフェーンはあたしの髪をスルっと手串でとかし、にっこりして言った。

『う……うん』

そして、スフェーンとシンナバーは、魔戦士組合をゲラゲラ笑い

ながら出てったんだ。

それからしばらくクリーダとあたしは掲示板の前で黙って立っていた。

「気分が悪いので先に帰りますね」

『あッ!』

クリーダは怒っているのかな？ さっさと帰っちゃったよ。

あたしだってあの2人なんかと一緒に行きたくないのに、でも断れないんだよ。

……今日はずっと一緒に居てほしかったなあ

あたしはがつくり肩を落とし、重い足どりで魔戦士組合を出て家へ帰った。

【16】クラスメイト

あたしは二度と会いたくないと思っていた2人に、魔戦士組合で出会ってしまった。

魔戦士組合で会ったスフェーンとシンナバーは、魔法学校のクラスメイトなんだ。

あたしはあの頃の事は何も思い出したくない、わざわざこの街に引っ越して来たのもあの二人に会いたくなかったからなのに。

もう少し遅く来ればと思って仕方がないや、明日なんて来なければいいのにな。

時間と言うものは無情なもの、明日は必ず来るものなんだ。

すっごく気が向かないけど、先にいないと機嫌が悪くなる二人だからあたしは早めに行って魔戦士組合で待っていた。

「おー！ いたいた！ エライぞーッ！」

「おチビは朝からヤラれる気満々じゃないか！」

「ぷっ！ シンナバーはうまい事言うなーッ！」

人をネタに勝手に盛り上がって爆笑するうるさい二人、ホント昔と全く変わってないや。

「それにしても、おチビたんって随分オシャレになったよね」

「ねーッ！ 何か女子供って感じるわー！」

「それもらった！ 女子供だッ！ アハハハーッ！」

「あ、そうだ！ おチビたんがただだけ成長したかチェックしてやろうよ」

「あー、そりゃ重要事項だあ」

『えっ？　ちよつと！』

二人があたしをペタペタ触りはじめた。

「へえ、ちゃんと育ってるんじゃない？」

「ますますスフェーン好みになったんじゃないのー？　こりゃー楽しみだ」

二人はニヤリとしてあたしを見ていた、今あたしの顔には不安がにじみ出ている事だろう。

「そんなじゃ、盛り上がった所で出かけようかあ？」

「ぷぷーッ！　おチビも昔に比べて大分盛り上がったたしね！　背は変わんないみたいだけど？」

そうやってすぐ人をネタにして！　騒々しいこの二人があたしは大嫌いだ。

「でもさー、場所ってどこだっけ？」

「何忘れちゃってんのーッ！　ナボラ湖だってば！　そこで鬼退治するのッ！」

「おッ！　鬼ッ！！　アハハハハッ！！　鬼は違うだろォー！」

「あれえ？　鬼じゃなかったっけ？　確かそう聞いてたんだけどお？」

あたしはこのしょうもない盛り上がりで心底うんざりだ、はたから見ると面白そうな二人に見えるらしい。

魔法学校であたし達3人って周りからは仲良しだと思われていたからね。

他のクラスメイトに会ったりすると、「スフェーンは元気？」と

か「シンナバーは？」とか聞かれたよ。あたしはその名前のかけらすら聞きたくない位に二人が嫌いなんだ。

しょうがないから一応二人のクラスを説明するとね、スフェーンが攻撃型の魔法を使うソーサラー、シンナバーが回復系の魔法を使うプリースト。

シンナバーみたいな毒舌がよく聖職者になれたもんだと思うけど、一応これでいて教会の娘なんだ。信じられないけどそうなんだ。そして、諸悪の根源はスフェーンだ。

「ほらッ！ おチビたんはボーっとしてないで乗り物出す！」

『でも材料がないよ』

「だったら探して来ればいいじゃない？ ほら……さっさと行く」

「そして二度と生きて帰って来る事はなかった……スフェーンは冷たくなったおチビを見つけて踏み潰しましたとさ」

「なにそのバッドエンド！ 面白いじゃない！」

「でしょー！？」

ああもお嫌だ。

スフェーンに言われ、あたしは乗り物の材料を探しに行った。

乗り物と言ってもあの軍の乗り物は使いたくなかった、あれはクリーダとの思い出がありすぎるからね。

今頃クリーダはどうしてるのかなあ……ずっと怒ったままだったらいやだなあ……クリーダの事を考えるとため息が出てしまう。

少し探して何とか材料になりそうなものを見つけると、小細工魔法で乗り物を作って魔戦士組合に戻った。

「即興にしてはまあまあかー」

「そんな事言っちゃダメよ！ おチビは乗り物作る位しか能がない

んだからもっとホメ殺ししなきゃ!」

このやり取りがいちいち疲れる、だけどこんな程度はどうって事ないんだ。もっともっと嫌な事があるんだよ。

「席はおチビたんがここで、あたしがここねーッ!

そんでシンナバーがここーッ!」

「ひどーい! それじゃあたしがおチビに届かないじゃん!」

「だっておチビたんはあたしのだしー!」

「こらッ! おチビはみんなのおチビなんだよ! だからおチビには人権はないんだよ!」

「シンナバーって言う事がホント冴えてるねー!

その冴えに免じておチビたんを半分与えよう」

「わあい! 今晚のご飯にするよッ! 煮て焼いて食ったら木の葉で隠すよッ!」

シンナバーはこんな風に一見意味がわからない事言う様で、的確な精神的ダメージを与えて来るんだ。

結局あたしが真ん中で、右にスフェーン、左にシンナバーと左右とも挟まれる事になってしまったよ。

とっても気が重いけど、あたし達の乗った乗り物はナボラ湖方面へ向かって進みだした。

「そういえばさ、昨日魔戦士組合にいたクリ何とかっての何なの?」

『クリーダの事? お仕事のパートナーだよ?』

「そのクリーダって人が、おチビたん組もうって言ったんだって?」

『う、うん……』

「しかし、物好きよねーッ?

乗り物以外に取り柄のないあんたと組もうなんて」

「まさかいやらしい関係？」

「でたね！ ライバル意識！」

次回スフェーン大ピンチ！ 乞うご期待！」

『そんなじゃない！』

「いやー、だっておかしよおー？」

絶対おチビたんとかペア組んでも得しそもないのに頼んでくるのかって」

「つまり、あたし達も今損してるって事だねーッ！」

なんなら迷惑料は体で払ってくれてもいいんですよ？ だがスマイルは0丸だったッ！」

「ぷッ！ シンナバーあんた最高ッ！」

「はぁー、今日はなんだか朝からお腹すいちゃった！ おチビ！ お前を食べるッ！」

「あたしもおチビたん食べるーッ！」

あたしは左右からガジガジかじられた。

憂鬱なあたしと悪魔の様な二人を乗せたこの乗り物は、ナボラ湖に向かって進んで行った。

【17】聖職者の街ナボラ

お昼を少し回った頃、あたし達はナボラ湖に到着した。

ナボラ湖は美しい水を湛え、全ての物音を吸い込んでるかの様にとても静かだ。

スフエーンとシンナバーは途中からずっと寝てくれてたよ、そのお陰で少しの間だけど平和でいられた。

「んー！ やっぱり湖の辺りは空気がおいしいねーッ！」

「それよりお腹すいたーッ！」

「シンナバーっていつでも腹ペコだよねえ

しょうがないなあー、確かここにはあの街があったよね、行ってみるかーッ！」

あの街はナボラ湖に面し、名をそのままナボラと言う。

ナボラには街の中央に大きくてすっごく奇麗な教会があるんだ。

ナントその教会を中心として十字に道が伸びてるの、つまり街全体が十字架になっててそれが結界になってるって話。

そんな街だから街の住民の多くは聖職者、正確には聖職者が集まってくるのかな？

シンナバーみたいなのはまずいないと思うよ、みんな殺生は絶対しませんって感じでつつましやかに歩いてるからね。

「あらー？ こんな街にもダック・ドナルドとかあるんだ」

「うそーッ！ まさかまさかだねッ！ あっちになんてセンタツキーもあるじゃない！」

「他にどんなのがあるのかしら、ちょっと見て歩こうよ」

「あッーッーッ！ みてみてーッ！？ シスタードーナツの本店だっつてーッ！」

「決めた、シスドにしよう！」

シスタードーナツは、この街のシスター達が巡業する聖職者の為にお店を作ったのがはじまりらしい。

聖職者は基本的にお肉は食べないから、普通のお店には入りにくいかららしいよ。

それが大ヒットしてチェーン店が今やどの街にもある位になっているんだ。スイーツ大好きなあたしはもちろんシスドは常連だよ。因みに、シンナバーはいつもモリモリお肉食べてたけど、菜食主義になれば毒気も薄れるんじゃないかとあたしは思ってる。

そして、あたし達はいっぱいドーナツを買い込んだ、丁度モキナワドーナツっていうのも売ってたからそれも買い込んだよ。

「ちょっとー！ これって買いすぎたんじゃないのー？」

「やっぱお腹すいてる時に買うもんじゃないよねえ

残ったらおチビのエサにでもするしかないかあ」

大きな袋いっぱいに入ったドーナツを見て二人が言った。

望むところだ、正直言ってこの程度のドーナツなんてあたしは何ともないからね。ホントにドーナツで良かったよ。

教会の周りは綺麗な広場になっていて、広場には噴水まである。

その噴水の近くのベンチに腰掛け、あたし達はドーナツを食べたんだ。

「おチビたん、おチビたん」

『なあに？ スフエーン』

スフエーンがあごでクイツと示した方向に、ちょっとしたイケメン男子がベンチに座っていた。

「このドーナツあの人にもあげてきなよ」

『えーッ！　なんで？』

「プッ、そしてこう言うんだよ『あたしとドーナツ食べませんか？』
って

両方食べるかって意味が含まれているんだけどねッ！」

「アハハハハッ！　あたしの思ってた事よくわかったねーッ！」

「そりゃー、スフエーンとはながーいお付き合いですもの
当然カップルって言う意味は含まれてないけど？」

『やだよー、知らない人じゃない』

「おチビたんもう年頃なんだし、ああいう人ともお付き合いした
方がいいんじゃないの？」

「あたし達はいつでもおチビの味方なんだからね！

べ、別に面白がってなんかいないんだから！」

「なにその変なツンデレ！」

あたしの方を見てスフエーンの目つきが変わった。

「おチビたん？　……さっさといってこい」

『うう……』

ああついに始まったか……。

スフエーンはいつもこうなんだ、あたしの嫌がる事を無理やりさ
せてその反応を見て笑うんだよ。

あたしはしうがなく、ベンチに座ってるイケメン男子の前に立
った。

イケメン男子は既にビックリした様な顔してるよ、うう……：帰
りたい。

『あの……、あ、あたしとドーナツ……食べませんか？』

「楽しみーッ！」

明日の朝ナボラ湖におチビが浮かんでたら犯人はお前だッ！
つ
てスフエーンを指差してキメ台詞を言うからね！」

「ぶッ！　なにその簡単すぎるサスペンス！」

この二人のネタ会話では、昔からあたしはバッドエンドを迎える。
今回の仕事がとにかく無事に終わる事だけを願って止まない。

【18】意外な言葉

段々と本性を現してきたスフェーンに、あたしは夜になるのが今から恐ろしかった。

今になっても彼女があたしに執着する理由がわからない。

明らかに元クラスメートに対してって感じじゃないし、ただのいじめの対象って訳でもない。

スフェーンがあたしに興味ある様な事をよく言ってるけど、それは話のネタなんだろうし、もし本当にそうならもっと大事にしてくれるはずなんだ。さっきみたいな事なんてするはずないんだ。

スフェーンは魔法学校の時だって、いつだってあたしが嫌がる事としてはシンナバーと笑ってた。それをあたしはずっと我慢してたんだ。

彼女の事は今もやっぱり大嫌いだけど、それはそれで気になる所でもある。

それでさっき言ってた様に、あたし達は今夜の宿探しをしてたんだけど、今あたし達はナボラで一番大きなホテルの前に立っている。こんな豪華なホテルは魔戦士組合の仕事で絶対泊まる必要性はないだろう。スフェーンは一体どういうつもりなんだろうか？

「スフェーン！？まさかこんな高そうな所にするの？」

この清楚な街にはちょっと似合わない感じのホテルだけど、大きな街から偉い人が来た時の為なのかな？

「今回は特別にね」

「ふうん、いつもすっごい安い所しか泊まらないのにねー？」

そして、シンナバーはニヤリつとあたしを見た。別にあたしは何の期待もしてないよ、どうせあたしだけが待遇悪い事位は分ってるさ。

「ひっどおーいッ！」

でもそう叫んだのはシンナバーだった。

「スフエーンとおチビがロイヤルで、なんであたしがフツーな訳！？ ひいきだひいきだーッ！ 格差社会だッ！ 訴えてやるッ！！」
「しょうがないでしょー？ 2人部屋がロイヤルしかなかったんだから

料金も少し安くしてくれるって言うし、シングル3つと料金も変わらないんだから」

「なんちゃってねッ！ 後で遊びに行くから入れてよー？
じゃないとピンチになってもギリギリまで回復してあげないからッ！」

ふむ、あたしがまさかロイヤルに入れるなんて思わなかったな。
こういう場合、絶対逆になるもんなんだけどね。

「それじゃあーねッ！ 夕飯の時間になったら行くからねッ！ モ
タモタしてるんじゃないよッ！？」

シンナバーだけシングルの部屋へ向かい、あたしとスフエーンは
1つ上の階のロイヤルに上がって行った。

何か、二人きりになったら急にスフエーンの様子が優しくなった
気がしたんだけど気のせいかな？

「さっすがロイヤル……大きなドアだー、入ろーッ！」
『う、うん』

スフエーンはあたしの手をとると引っ張るように、ロイヤルらしさ満点の立派なドアの先へと進んだ。

ロイヤルはいきなりベッドルームがある普通の部屋と違って、シヤンデリアのある応接間や、更に個室まであって室内の装飾も流石ロイヤルと言える妥協のない豪華さだ。

「ほらーッ！ おチビたん見てごらんよッ！」

スフエーンが奥で大きな声を出してあたしを呼んだので行っくと、そこには大理石で作られた泳げる程大きなお風呂があった。なんとお湯が何かの動物みたいな彫刻の口から注がれていて、いつでも入れる様に浴槽にお湯が満たされているじゃないか。

『うっわあーッ！ お風呂が大きいッ！』

「でしょー？ やっぱりロイヤルでよかったよねー」

そう言いながら、スフエーンはあたしのローブをほどき始めた。

『え……？ ちょっと……もう？』

「モタモタしてたらシンナバーが来ちゃうよ？ その前にお風呂に入っちゃおうよ」

『あうん、でも自分でやるから』

「いいの、あたしがしたいんだから」

その時あたしはハッとした、ある事を思い出したんだ。

あたしの体にはクリーダが付けた印がいくつもついている、この

ままだとそれらをスフェーンに見られてしまう。

もし見られたりでもしたらきつと永遠にネタにされる事だろう、クリーダとの事を馬鹿にされたりネタにされる事だけは絶対に嫌だ。

『あ、あの……お願いが』

「うん、なーに？」

『灯り、もっと暗くしていいかな？』

「えーッ？　なんでよ」

『何か恥ずかしくて』

「おかしい事言うのね、まあいいけど」

あたしは灯りの数を減らして暗くした、歩ける程度の灯りだけを残してね。

ゆらゆらと心細い灯りがあたし達を照らしている、辺りにはお湯の流れ出る音だけがしていた。

「暗いなあー、でもちよつといい雰囲気よね」

スフェーンはバサツと一気にあたしのローブを剥ぎ取った。

「なんだ、綺麗じゃない？　別に隠す必要なんてないのに変な子だよね」

スフェーンはゆっくり両手であたしの髪と、そして両肩を撫でた。ホッ、気がついてないみたいだ。

「今度はあたしのもお願いね」

そう言われても全く気はすすまないけど、仕方ないからスフェーンの服をほどいてあげた。

全てほどこいてあげるとスフェーンは、嬉しそうな顔をしてあたしの肩を押して奥へと誘ったんだ。

「ほら、おチビたんも入りなよ」

先に浴槽に入ったスフェーンは、傍らに立つあたしに入るように手招きした。

それであたしが入ったら、

「おチビたんッ！」

『うひゃッ！？』

スフェーンはあたしの両手を掴んで引き寄せると自分の膝の上に座らせた。

『スフェーン？』

「ああもお、おチビたん大好きッ！」

スフェーンはあたしを思い切りギュッとし、こんな思いも寄らない事を言ったんだ。

【19】屈折した想い

あたしはスフェーンから思いもよらない言葉を聞いた。

動物の様な彫刻の口から流れ出るお湯の音と、耳元で聞こえるスフェーンの吐息だけが聞こえている。

あたしは灯りのゆらめきが、湯面にゆらゆらと映り込んでいるのをじっと見つめていた。

「おチビたん……好き好き」

スフェーンは両手でしっかりとあたしを抱きしめ、交差した腕はあたしの両腕を掴んでいた。

『スフェーン？ 一体どうしたの？』

「あたしがどれだけ探していたかなんて、おチビたんにはわかんないよね

あれから3年、3年もだよ」

スフェーンは一体何を言ってるんだろう？

「あなたはあたしがあの街に、ただ偶然立ち寄っていたと思ったかもしれないけど」

『え？』

「偶然なんかじゃないの」

まさか、スフェーンはあたしの事を3年間もずっと探してたって事？

「魔戦士組合の登録に小細工魔法士で登録したでしょ？
名前は変えてたみたいだけどそれで分かったんだよ
一昨日知って昨日急いで来たんだから」

それを聞いても、あたしは「しまった」としか思わなかった。

スフェーンがあたしに好意を寄せるのは勝手だけど、あたしが誰を嫌うかも勝手だからね。

今更「好き」と言われても、はいそうですかと受け入れる事なんてありえないんだ。

得てしてやんちゃな男の子が、ありがちに好きな女の子にちょっかいを出すパターンでは、ほぼ確実に受け入れられる事がないのと同じなんだ。

これはよく物語りの設定では定番になってたりするけど、あたしに言わせれば実際にそういう目にあつた事がない人が安易に考え付いた無責任な味付けなんだ。

『……そうだったんだ……』

「魔戦士組合の人に丁度仕事に出かけてるって聞いたから、あそこで待ってればいつかは来ると思ってたの

あんなにすぐ来るとは思わなかったよ」

『あたしはスフェーンがよく分からない

いつもあたしが困る事ばかりしてだし、今だって何が何だか全然分かんないんだよ』

「だって……おチビたん見てるとあたし

もうたまらなくなっちゃって」

『そんな……、あたしは物じゃないんだよ？

イヤな事されたらちゃんとイヤって思うんだよ？』

「そうだよ、ごめんなさい」

どんな言葉を今後言われても、あたしはスフェーンに対する気持

ちの変化はないと思った。

『スフェーンの気持ちは分かったよ、でもあたしは』
「待って！」

言いかけた所で止められた。

「あなたがあたしの事どう思ってるか位はわかるから……」
『だったら何でもあたしが困ることばっか言ってたの？』
「だって、そうでもない」と振り向いてさえくれなかったじゃない
振り向いてもらう為に、そして他に目が行かない様に色々考えた
んだよ」

——そうか、分かったよ

あたしを困らせれば、あたしの頭の中はスフェーンの事だらけになる
なと思う。

何でも言う事を聞かせる為に、あたしに恐怖心を植え付けたって
事なのか。

そして、あたしを孤立させれば全てが手に入れたのだらう。

そんな自分勝手な事で相手の心なんて得られるとも思うのかッ！
スフェーンの心の内を聞いても、あたしはただ彼女が哀れとしか
思えなかった。

「お願い……今回の仕事の間だけ」

あたしの背中でスフェーンはしくしく泣き出してしまった。
スフェーンが泣くのを見るのはこれが初めてだ、彼女なりに相当
な想いはあるんだろうね。

スフェーンがかつてない程に弱々しく見えた、こういうのってあたしは苦手だな。

浴室から出たあたし達に会話はなかった。

スフェーンもうつむき加減になってしまっている。空気が重いナア……、シングルにいるシンナバーが羨ましい。

その後、シンナバーが来て食事に出た時も、彼女は殆ど言葉を発する事がなかったよ。

シンナバーはスフェーンの様子にすぐ気がついて声をかけてあげてたけど、スフェーンは少しだけ笑顔を作る程度だった。

唐突に慎ましやかに豹変したスフェーンとあたしは、食事を終えて部屋に戻って来た。

こうなった理由は、全てをあたしに洗いざらい話したからなんだろう。

もう今までの様な事をする必要がなくなったって事だろうね。

これはこれで気まずくなったし、明日に備えてあたし達は眠ることにした。

ロイヤルのベッドは天がいが付いて、煌びやかな装飾まで施された王族が使う様なベッドだ。

布団もふっかふかのやわらかい羽毛が使われていて、これ以上は想像出来ない程ゴージャス極まりない。

こんなベッドに寝られるのは一生の内にそうそうはないだろうな。

これならきつと素晴らしい夢が見れるぞーッって思ったんだけど

……

『スフェーン？』

スフェーンがあたしのベッドの脇に立ち、顔は真っ直ぐ前を見たまま目だけが見下ろしている。何かすつごく嫌な予感がするなあ。

「いいよね……」

『へ？』

スフェーンは小さな声で言うと、雪崩の様にあたしに覆いかぶさってすごい勢いでガウンのヒモを解こうとした。

『うぎゃ……イヤだーッ！』

反射的にあたしは抵抗していた、だって本当にイヤだったからだ。

「なんでよ、これが初めてって訳じゃないじゃ……！？」

唐突にスフェーンの言葉と動きが止まった。まるでいきなり凍ってしまったかの様に。

「な、何なの？　これって……」

『あ……』

ガウンのヒモが解かれ、灯りの元にあたしの全てが露になっていた。

スフェーンが見たもの、それはクリーダがあたしに付けた印達だった。

【20】印

クリーダの付けた印をスフェーンに見られてしまった。

スフェーンは目を見開き呆然とした顔でそれらを見つめ、震える手で印の正体を確かめる様に触れている。

「いやらしい、信じられない」

どんなあたしを望んでいたのか知らないけど、スフェーン理想である必要なんて全くないじゃないか。

何も知らないくせに勝手な評価をされて、あたしはちょっと腹が立った。

『信じてなんてくれなくていいよ、

あたしはスフェーンがどう思おうと自分で考えて自分で行動するんだから』

そう言ったとたん、スフェーンがギュッとつねった。

『イタッ！ 何すんのよッ！』

「これ付けたのってあのクリーダって人なんでしょう？」

スフェーンは凄く落ち着いた声で聞いたよ。

その返事をあたしは少し考えていた、クリーダを巻き込みたくなかったからね。

でも、この際だからハッキリとさせようと思って言ったんだ。

『うん』

「いつからなの？」

そう聞かれてあたしはビックリした、一昨日からだって事にね。だってすっごく前な様な気がしてたから。

一昨日までそういう対象と思ってなかったクリーダを、今は大事にしたいと思ってる事にも驚けた。

『一昨日から』

「そんな……たったそれだけで」

スフェーンはガクツとあたしの上にうな垂れ、その拍子に結んでいた長い髪がほどけてパサツと落ちた。
やわらかい髪があたしの体に広がり、少しくすぐったい。

「全部食いちぎってやる」

そう聞こえた次の瞬間、胸に激痛が走った。

『うぎゃー……ッ！！！！』

スフェーンがあたしに噛み付いたんだ。

たまらずあたしは逃げようとしたけど、強い力で押さえ込まれて動けなかった。

『やめてッ！ イタイッ！！！！』

余りの痛みにスフェーンをバシッと殴ったらやっと離してくれた。

「ほら、あたしも付けられたよ」

スフェーンが噛み付いた所が真っ赤になって、点々と血が出て来ているのが見えた。

押さえ込まれたまま、あたしは魔法学校の頃を思い出していた。

<一緒に帰ろう>

スフェーンはいつもあたしを誘い、そしていつもスフェーンの家
に寄る様に言ったんだ。

それがあたしはたまらなく嫌だった。だからなるべく理由を付けて断ったり、言われる前に走って帰ったりしてたよ。

でも、そうすると後ですごく機嫌が悪かったなあ。

ある日どうしても逃げられない状況になって、仕方なくスフェーン
の家に寄った時、あたしは彼女と関係を持ってしまった。

その時あたしは、そういう行為に対するただの興味なんだろうって
思ってた。まさか彼女が本気だったとは全く思ってたんだ。
でもね、スフェーンは自慢げにクラス中に話して回ったんだ、そ
れはとてもシヨックだったよ。

それからみんなから特別な目で見られる様になっちゃった。

それまで仲の良かった友達もあたしを避ける様になったし、黒板
にはスフェーンとあたしが抱き合う落書きまでされてた。本当に苦
痛だったなあ。

あ、スフェーンと幼馴染のシンナバーだけはずっと変わらなかつ
たかな。その前からずっと毒舌のバッドエンドメーカーな訳だけど。
半ば諦めたあたしは、毎日スフェーンの家にする事になったんだ。
心は閉ざしていたけどね。

魔法学校を卒業して、ついにスフェーン達に会わなくて良いって
開放感から、あたしはあの街に引っ越したんだ。

それからは、たった1つの取り得である「小細工魔法」を使って何でも屋みたいな事してたのさ。

教会だって作ったし、ナベだって直した。今やあの街のあちこちにあたしの手がかかっている位に何でもやったさ。

——自由な3年間だったなあ

覆いかぶさったままのスフェーンを見ると、スフェーンは少し心配そうな顔をしてじっとあたしを見ていたよ。

「もしさ」

落ち着いた声を取り戻したスフェーンが口を開いた。

「最初から優しくしてたら、あたしの事好きになってくれたのかな？」

『……わかんない』

その問いかけに正確には答えられない、そういう事は論理的に考えられるものじゃないんだ。

『でも』

「でも？」

『嫌いにはならなかったと思う』

あたしはあえて嫌いと言ってあげた、この状況で中途半端な事を言う事はお互いの為にならないから。

「やっぱり、嫌いなよね

あたしはあなたが昔も今も大好きなのに」

『ごめん、でもそう思うんだからしょうがないんだ』

「わかったよ、すっごく嫌かもしれないけど

後1度だけいい思い出を見させて……最後のわがままだと思って」

スフェーンはさつき噛み付いた所に点々と出て玉になっている血をやさしく舐めた。

あたしはその様子を見て、スフェーンに対する気持ちは変わらな
いけれど、やさしく髪を撫でてあげた。

【20】印（後書き）

時に、人は非情でなければならない場合もあるんじゃないかと思うのですが、いかがでしょう。

【21】ラボナ湖の怪物

次の日の朝、あたし達は仕事をすべく依頼人にサインを貰いに行った。

依頼者はナボラの市長、オーピメント・テンという人物で、この街の司祭でもある。

ナボラは街なのに、なぜか一番偉い人は市長なんだよね。

テン市長とでも言われたいんだろうか？ 見栄っ張りでしかも駄洒落が好きそうだ。

「やあ、シンナバー

随分と久しぶりじゃないか、元気だったかね？」

「は……はい、大変ご無沙汰しておりおり元気です」

なんだーッ！？ あのシンナバーがタジタジじゃないか。

「まさか名づけ親の私がキミに助けてもらう日が来るとはな、まあ今回はよろしく頼むよ」

「はい！ 精一杯頑張らせて頂きます！」

シンナバーって、テン市長が付けた名前だったのか。祝福を与えたはずの子がとんだ毒舌だとはきっと知らないだろうな。

依頼書の開始許可のサインを貰い、あたし達はあの噴水前のベンチに腰掛た。

一休みせずに出かけた所だったんだけど、どうもスフェーンが全くダメになっている様だ。

「スフェーン？ あんた大丈夫？」

「ん……なあに？ あたしは大丈夫よ」

そう言ってるけど、何だか上の空の様にぼーっとしてる。

「ダメだこりゃッ！ 肝心のアタッカーがコレじゃあねー

今回の仕事失敗するかも」

『スフェーン？ 今日は辞めとく？』

「おチビたん、ちゅきちゅき大ちゅきー」

スフェーンはあたしにっこりしながら、その目は涙を流していた。あたしは彼女がとても哀れに思った。

「ふう……、荒治療になるけど連れてけば何とかなると信じよつかー
もしダメそうならおチビがスフェーンを回収して撤収ね」

『……うん、わかった』

「とりあえず、あたしが今回の依頼の内容を説明させてもらおうよ」

魔戦士組合では仕事を始める前に、確認の意味を込めて依頼内容を説明する。

それを説明する者はパーティーのリーダーだ、誰がリーダーになるかは臨機応変だけど、高ランクの者がなるのが普通だ。

だから、このパーティーでは一番ランクの高いスフェーンがリーダーのはずだったんだけど、今の彼女にはそれは無理そうなのでシンナバーが代役を務める事になったんだ。

「今回の依頼のクリア条件は、ラボナの結界を破って入って来る怪物を確実に抹殺する事、つまり逃がしても結界を破られてもダメね
因みに普段は怪物を聖職者の魔法で防いでるけど、聖職者は殺生

はご法度だから組合に依頼された訳

その場合、怪物を押し返すのにここの聖職者総動員してやっとして話だからそのつもりでいてね」

はっ？ 総動員？ 何か思ってた内容とちよつと違うなあ。

『えう……、ちょっと聞くけど』

「なに？ そこのおチビ」

『この仕事って』

「難易度？ それならAで報酬は100万丸だけど？」

『エー……ッ！？ ウッソォー……ッ！』

「そんな事ウソついてどうすんのッ！ 街の聖職者総動員ってスケールからしてもAでしょ？」

いつものスフェーンの火力があればやれる仕事なんだよ！

スフェーンはやれば出来る子なんだッ！ 今は出来ない子だけだねッ！

『違うんだ、あたしが驚いたのは報酬の方』

「へえ、おチビって意外としたたかなんだ

でもねえ、スフェーンがこんなんじゃー」

『うむー』

あたしはふにゃつと寄りかかっているスフェーンを横目で見てうなった。

「とりあえず、怪物は毎日湖側から上がってくるらしいから待機してましょ」

乗り物にスフェーンを引きずる様に乗せ、あたし達は湖の岸に移動して待機する事にした。

岸边に着くとスフェーンだけを乗り物の中に残し、あたしとシン

ナバーは辺りの監視を始めた。

「綺麗な湖なのに出てくるってどんだけ無粋な怪物なんだろうね、自分が怪物だって事分かってるのかッ！ 自重しろよッ！」

『怪物にそんな期待する人見たの初めて』

「おチビは古いッ！ 時代の流れについてけない怪物はあたし達に淘汰される運命なのだよッ！ ザマーみろッ！」

『ブッ！ 淘汰する側が限定されてるのかッ！』

シンナバーっていつもこんな面白い事言ってたんだ。

バッドエンドの対象が、あたしじゃなくなっただけで面白くなった無責任さに気が付いた。

もしかすると他の人にはこんな風に聞こえていたのかもね、きっと別の誰かが対象だったらあたしも一緒に笑っていたのかな？

そうだとしたら、あたしも他の人の事は言えないな。

『ん……？』

「どうしたの？」

『何か辺りの雰囲気が変わった気がしたんだけど』

「そう？ 注意して見てて、あたしはスフエーンを起こしてくるから」

シンナバーはそう言って乗り物に向かった。

辺りにイヤな雰囲気をを感じる空気が集まっている。これが怪物が出る予兆なのかな？

嫌な雰囲気が感じられる方向を見ていたら水面から50cm程、霧とは違うもやもやした異物が現れ始め。それは次第に集まりやがて大きな塊に変わって行った。

『でたぁー！ー！ー！』

「ええー！ー！ー！？ スフェーンは全然ダメだよッ！ 起動しませんッ！

おチビッ！ 何とかしてて！！」

『何とかって……どうすれば』

目の前の塊はどんどん寄り固まって大きくなっていく、何だかわからない物が寄せ集められた様な作りのその黒っぽい塊は、一見してまともな生物の類ではなかった。

それは魔物とも違うただ汚いだけの塊だ、それに一番近いものと言えは腐った生ゴミだろうな。

その生ゴミの様な黒い物体からだろう、すっごい嫌な臭いがしてゐる。これは……雨風に晒されて放置された泥と生ゴミの混ざった様な臭いだ。

『うげ……コイツすっごい臭いよッ！』

「こっちにも臭ってるよ、見た目通りの吐きそうな臭いだー！ー！ー！」

こんなとんでもなく臭い奴が湖に潜んでいたのかー！ー！？
とてもじゃないけど、もう二度と湖の水は飲みたくないよ。ナボラの飲み水はこの湖から引いてるから、既に大分飲んだ事になっちゃうけど。

怪物はゆっくりと岸へと上がってきた。その身の丈はナボラの立派な塀を軽く越えられる程で、15メートル位あるんじゃないだろうか。

その怪物の表面からプツプツと言う音が聞こえる、何かが発酵してる様なそんな音だ。

そして怪物を構成しているものも、やっぱり訳分からない物の寄せ集めにしか見えない。

陸には上げないといけないから放っておいたけど、これ以上は進ませる訳にはいかないか。

あたしは両手で親指と人差し指を立てたものを作り、斜めに構えてポーズを作ると小細工魔法を発動させて怪物を取り押さえてみた。怪物の足元の土などを使い、怪物がこれ以上前進出来ないように様にしっかりと結合させて固めてやったんだ。

とりあえずな感じで怪物の進行を止めれたみたいだけど、ずっとこうしてても退治は出来ない。次の手を考えないと。

困ったぞお、こんなのコレが効くかどうかわからないけどやってみるか。

地面からタケノコのように尖ったものを勢いよく伸ばし、怪物を串刺しにしてみた。

タケノコは怪物に「ぐにゃ」って感じで突き刺さったよ。
やっぱりなー、全く手応えがないや。流石生ゴミだ。

「おチビーッ！ スフェーン無理やり連れて来たよッ！」

連れて来られたスフェーンは、足が地面に付いていない様にフワフワしていた。

「さあスフェーンッ！ 本気出してゴッッ！」

スフェーンが両手を前にかざすと、その両手が赤く輝いた。その次の瞬間、怪物の上半身が激しい光を放って燃え出した。

『どう？ やれるかな？』

「ダメ……、全然威力が出てないよ」

スフェーンがどれ程の魔法が使えるか正直あたしは知らない、だけどシンナバーの話では今は全然ダメみたいだ。

「スフェーンッ！　しっかりしてよッ！」

「もうあたしはダメなんら、いつその事死にたい……おチビたんに殺されて死にたい」

スフェーンは涙を流し、膝からガクツと崩れ落ちてしまった。

『スフェーン……』

その時、あたし達の後ろから聞いた事のある声がした。

「それじゃ、わたしがお手伝いしましょうか？」

あたし達の後ろから聞こえたその声の主は、あたしを見てほっぺを膨らませたんだ。

【21】ラボナ湖の怪物（後書き）

どんなものでしょう？ 一番いい方向に持って行きたいです。

【22】恋は盲目

あたし達の後ろから現れたのは、ここには居ないはずのクリーダだった。

『クリーダ！？ どうしてここに！？』

「ただの観光ですよ、せっかくのオフですから」

『へえー、観光ねえー』

「ええ、ここの湖がきれいらしいので来て見たのです」

『そりゃ奇遇でしたね』

「奇遇ですよ」

明らかなウソに微笑むあたしとクリーダ。

「ところで、この悪臭の元が今回の獲物なのですか？」

獲物か……、明らかに力関係で上位にある者の発言だね。

その悪臭の元は、あたしが固めた下半身の異常に全く気が付かないかの様に、尚も前進しようとしている。

「あら、あなたってこないだのおチビのツレ？」

「挨拶が遅れました、いつもこの子がお世話になっています」

クリーダがペコっとお辞儀をしたら、シンナバーも反射的にお辞儀をした。

「ところで……、

わたしの見たところ、このパーティーの火力さんは絶不調な様ですね

この汚物は全てを消滅してあげないと、倒すことは出来ない思念体です

『思念体？　という事は蓄積された思念のままに行動するだけって事？』

「そうです、1つの個体ではないので物理攻撃は効果がありません
それに対して精霊魔法は1つの有効手段ですが
消滅させる為には相当な火力が必要です」

『相当ってどんくらい？』

「そうですね、少なくとも7〜8千度は必要でしょうか
ただ、並の精霊魔法ではそこまでの高温を出すのは難しいでしょう
わたしのプラズマは二億度ありますので、きっとお手伝いが出来
ると思いますけどどうしますか？」

「せっかくだけど……」

シンナバーはそう言うと、スフェーンの前に立ってその頬を思い
切り叩いたんだ。ビックリする程の音がしたよ。

スフェーンはそのまま倒れ、更に1回転して転がってた。手加減
なしで本気で殴ったんだね。

「スフェーン！！　ずっと我慢してたけど今日は言わせてもらおうか
らッ！

今回の仕事を最後にペアを解消させてもらおうよ」

「んなッ!？」

シンナバーは唐突に叩かれた事より、衝撃的な事を言われた事で
どうしていいか分からない様子だ。

その頬には見事な手形が付いてた、こんな見事な手形が付いたの
をあたしは見た事ない。それをスフェーンは手で押さえる事すらし
なかった。

「いきなり何って顔ね？ それじゃ説明してあげる」

スフェーンは呆然とした表情で、ぺたんと座ったままシンナバーを見つめていた。

「あたしは昔から強いスフェーンに憧れてたの、ずっと小さな頃からね

今だから言うけど、本当はあたし、魔法学校じゃなくこの町の教会に入るはずだったのよ、

スフェーンと同じ学校に入る為に父を半年間毎日説得して、やっと魔法学校に入る事を許された時はそれはそれは嬉しかったわあ」

そっか、シンナバーって何で魔法学校に入ってたんだろ？ って思ってたけど、スフェーンと離れたくなかったからなんだ。

ナボラの教会に入ったら、滅多に会う事も出来なくなるからね。

「晴れて魔法学校へ入学して、さあこれからって思ってたらいきなりスフェーンはおチビに夢中になってるし……

でもスフェーンが望むことならって思ってた我慢したんだッ！

スフェーンがおチビを抱いたって聞いた時だって卒倒したけど我慢したんだよッ！」

『あわッ！』

こらー！ーッ！ クリーダの前で何言っちゃっててくの！？
あたしはゆっくりと視線をクリーダに向けてみた、クリーダは腕組みしてすごい不満げな顔であたしを見ていたよ。

「聞いてよッ！ あたしはスフェーンが学校一の実力を認められた時なんてこう思ったんだよッ！

ああ、あたしのスフェーンが遂にやってくれたッ！ ってね！！

じゃああんたの大好きなおチビはその時どう思ってくれたのッ！
？ 喜んでくれたっていうの！？」

シンナバーはあたしの方に振り返り、ビシッと真っ直ぐあたしを指差した。

『あ、あたしは……』

「ほうらね？ 喜んじやいないんだよッ！ だっておチビはスフェーンの事が大嫌いだからッ！

あたしはあたしの事より、ずっと嬉しかったのにッ！」

スフェーンが魔法学校で一番になった事は知ってた、でもその時全然嬉しいとは思わなかった。

余計に力が付いちちゃったって困ったとしか思わなかったよ。

シンナバーはスフェーンの方へまた振り返り、尚も話を続けた。

「昨日様子が変わったスフェーンを見て、おチビと何かあったのはすぐわかった

正直言っただけは今までが一番うれしかったよ、だってこれでスフェーンがおチビを追いかけるのをやめるんだって思ったからね」

シンナバーは両手をスフェーンの両肩に置いて悲しそうな顔をした。

「それなのにスフェーンはそれでも、おチビたんおチビたん言っただけッ！

あんたがいくら好きでも、おチビには大迷惑だって事がまだ分かんないの！？」

「わかってる……わかってるんだけど……あたし」

「わかってないッ！ 今日までずっとスフェーンに憧れて来たけど、余りの情けなさに心底呆れた

フラれただけで死にたいって？ バッカじゃないのッ！？

そんなに死にたいって言うんなら、あたしが一緒に死んであげる」

「シンナバー……？ あなた」

「だってスフェーンがいない世界で生きていてもしょうがないから……

ずっとあなたが好きでした、今までもこれから」

うつわぁー……ッ！ このタイミングで告ったのかーッ！？

告ったと言うのかー……ッ！？

背景に汚物が映りこんで、花補正も効果がなさそうですけどー
ーッ！？

スフェーンはビククリした様な顔でシンナバーを見つめた、シンナバーは涙を目にいっぱい貯めてウンウンと頷いている。

シンナバーはゆっくり目を閉じ、スフェーンに何かを期待している様だ。

背景に汚物が映り込み、辺りには汚物からの悪臭が漂っていても、恋と言うのはかくも盲目なものなんだね。

だけどね。

「……ごめん」

「うはぁうッ！」

スフェーンのその言葉にシンナバーは足をくじいた様に崩れ落ちたんだ、その見事な倒れっぷりに思わず拍手しちやいそうだったよ。

「あいや、今まで気がつかなくてごめんって意味のね……でも今は

まだ返事は出来ないや」

「そ……そかそか」

シンナバーはヨロっと起き上がった。

「あたしがまず、ちゃんとケジメを付けなきゃね

それに最後位はおチビたんにあたしのカッコイイ所を見せておきたいし」

すつくと立ち上がったスフェーンの表情は変わっていた、そこには凛々しく強い目力が復活していたよ。

そう言えば初めて会った頃はよく見たつけ、スフェーンがこういう目をしてるのを。

「クリアダって言ったつけね、せっかくだけどあなたの出番はなさそうだよ」

「その様ですね、復活された様で安心しました」

「あたしをただの精霊魔法使いだと思わないでね、これでも魔法学校時代は常に最強だったんだから」

スフェーンが迷う事無くスツと天を指差すと、あたし達の目の前に巨大な稲妻が落ちたんだ。

【23】誓いの言葉

スフェーンが天を指差すと怪物全体を包む程の紫色に輝く巨大な光の柱が発生し、少し遅れて音速を超えた印である衝撃波による轟きが鳴り響いた。

『ぎえッ！？』

目の前に落ちた光の柱を中心に、激しい衝撃波があたし達にも直撃した。あたしはまんまと吹っ飛ばされて一回転してしまったよ。

「プラズマはあなただけの芸当だとも思ってた？」

「お、驚きました！」

まさか天然の精霊魔法から、完全電離プラズマを高密度で作り出せる精霊魔法使いがいるなんて……

これ程ならば2億度は確実でしょう」

「あはッ！ あたしだって苦労したんだよー？ 炎系の魔法だけじゃ限界があるって知ってからはね

それから色々と研究してたどり着いた結果がコレって訳

あたしが本気を出したら、まだまだこんなもんじゃないんだからッ！」

「ええ、その様ですね

今は水と雷と風の魔法を同時に使っているのでしょうか？」

「へえー、クリーダはさすがに詳しいなあ

その通りッ！ 風単体と水雷のセットね」

「水を電気分解などの工程を得て、重水素等と酸素を抽出して……」

さっぱり分からないので、あたしはこれ以上二人の会話を聞くのを辞めた。

1つだけ分かる事と言えば、クリーダが驚いたって事は、スフェーンって本当は凄い精霊魔法使いなんだって事。

それにしても、クリーダにしてもスフェーンにしても、魔法のスケールがあたしの常識とかけ離れ過ぎてる。

おかげで、こういうの見た後で小細工魔法使うと、あれ？ って、その地味さに落ち込むんだよね。

だからあたしは魔法を使う前にモーションを作ってるんだけどさ。

あたしももっと自分の魔法を研究しないといけないな。どう研究したらいいか分かんないけどしないといけないんだな。

「そこの暇そうなおチビッ！」

シンナバーがビシッと指さして言った。

『うん？』

「しっかりと見てあげてね」

『うん、スフェーンがこんなにカッコ良かったなんて知らなかったよ』

「ねーカッコイイよねー！ あ……だからっておチビは惚れたりしたらダメなんだからねッ！」

『あ、あはは……』

巨大な光の柱の落ちたその場所にあの怪物の姿は既になく、代わりにぽっかりと深い穴が開いていた。

クリーダの話だとこの穴は衝撃波で掘られた穴じゃなくて、超高温のプラズマによって地面が蒸発して出来た穴らしい。

というか、地面が蒸発するって一体どんな火力なんだーッ！？

今回圧倒的な火力のお陰でとっても簡単に終わった気がするけど、この仕事の難易度ってやっぱりAなんだよね。

きつとクリーダやスフェーンみたいにとんでもない火力を持たない、普通の精霊魔法使いには無理な仕事なんだろう。

――待てよ？

クリーダとならあたしも難易度Aの仕事が出来たって事だね？次はもつと難易度の高い仕事をやってみようかな。

何たって難易度Aの報酬は100万丸だ！あたしももつと役に立てる様に小細工魔法を磨こう。思ったより意外と早く目的が出来たじゃないか。

それからあたし達は湖から撤収し、テン市長に完了報告をもらいに行った。

「よくやってくれたね、既に報告はもらっているよ

何しろ今回のキミ達の勇士は、町中の者が見学してたらしいからね」

「そ、そうなんですかッ!？」

テン市長はサラリと完了のサインを書き終えると、その書類をシンナバーに手渡した。

うっへえー、ずっと見られてたのかーッ！どこまで知られているんだろうな。

「ああそうだ、シンナバー」

「はい？」

「キミ達は今日はまだ帰らないだろう？」

「ええ、そのつもりですが」

「なら、久しぶりな事だし皆さんを夕食に誘いたいんだがどうだね？
もちろん休む所もこちらで用意させてもらおう」

教会の食事と言えばアレだね、仕事の後だしあたしはコッテリ
したものが食べたいなあ。例えばウナみたいなのとか。

「あー……せっかくですが」

「そうかそうかッ！ では部屋を案内させよう

夕食まで時間があるしそれまで自由にしていってくれ
いやぁ楽しみだ!!」

どう聞いても断わりの出だしなのに、承諾したと思うなんてテン
市長もポジティブ思考だな。まるで選択肢は最初から1つだったみ
たいだ。

あたし達は教会の子達に部屋へと案内された。部屋はもの凄く
こちらの事情に詳しいかの様に2人部屋を2つだ。ただの偶然なん
だろうけどさ。

まー、ペアをどう分けるかなんてのは、今更説明の必要はないの
で割愛させてもらおう。

あたし達を通された部屋は、質素なベッドと机と椅子が2つずつ
ある、全く持ってシンプルな作りだった。

クリーダとあたしが部屋に入り、ドアをパタンと閉めた瞬間にク
リーダはあたしの手をグッと掴んでベッドに座らせた。

あたしの前に椅子を置いてクリーダが座り、真っ直ぐあたしの目
を見て言った。

「何か忘れてはいませんか？」

『えっ？ ……あ……』

あたしは一昨日魔戦士組合で、クリーダが先に帰ってしまった事を思い出した。やっぱりクリーダは怒ってたんだ。

『ご……ごめんなさい……』

「声が小さいです」

『ごめんなさいッ!』

あたしはクリーダに深く頭を下げて謝った。

「それじゃ、罰として神様に誓ってください」

『ええーッ!? でもあたし、信仰心って全くないよ?』

「そうなのですか? でしたら信頼している方に誓ってください」

『えーと……じゃあお婆ちゃんでもいいかな?』

「はい、ではわたしがこれから言う誓いの言葉を、お婆さまを思い浮かべながら復唱して下さいね」

『わかった』

クリーダは咳払いをすると、誓いの言葉を言い始めた。

「わたしは今後」

『あたしは今後』

「クリーダ・ヴァナデインと」

『クリーダ・ヴァナデインと』

「一生の人生全てを」

『一生の人生全てを』

「共有する事を誓います」

『共有する事を誓います』

「身も心も魂までの全てを」
『身も心も魂までの全てを』

「共有する事を誓います」
『共有する事を誓います』

「はい、誓いましたね？」
『はい、誓いましたね？』

「もう終わってますから……」
『もう……ああ』

「いいですか？」
わたしとあなたは今、その全てを共有する事を誓いました
お婆さまに誓って絶対に忘れないで下さい」

『うん、お婆ちゃんに誓って絶対に忘れないよ』

こうしてあたしはお婆ちゃんに誓った、クリーダも誓ってくれた
のかな？

クリーダはにっこり微笑んであたしの右に座り、そっとあたしの
手を取って彼女の膝の上に乗せて両手でしっかりと握った。

聖なる教会の一室で、あたしは誓いの言葉を言ったんだ。

【23】誓いの言葉（後書き）

思っていたより結構続いてる小細工魔法士のお話ですが、まだ先を続けるか続けないか少し悩んでいます。

【24】ナボラ教会の晩餐

あたしは教会の食事と言うものは、ひとかけらのパンとワインつてものを想像していたんだけど。

『うひょーッ!?　こ……これはーッ!?』

パンはパンでもこれは幻の名店ベローンのパンじゃないかアー
ーッ!!』

「べろーん?　何か変わった名前ね」

スフエーンはパンをクンクン匂いを嗅ぎ、大きな口ではぐつと頬張った。

「うわぁーッ!　コレっておいしいじゃないッ!　変な名前からは想像出来ない味だよな」

「アランスのお店ですよ、正確にはヴェーロンですが」

『そ、そうそうヴェーロンとも言おうよね』

へえー意外だなあ。クリーダはこのパンの事を知ってたんだ、しかも訂正までしてくれちゃう程に。

「ほお、キミ達よく分かったね

このパンは紛れもなくヴェーロンのパンだよ

ただし、作られたのはこの教会だがね」

『と、いう事はもしかして』

「今後シスタードーナツの各店舗でも販売される予定なんだよ」

『なんとッ!　発売されたら買います買いますッ!　楽しみにしますッ!』

晩餐に出されたのは、ベロ……ヴェーロンのパンと、ワインは新物のジョーボレー・ヌボー。

最近ナボラの教会は、アランスの教会同士親睦を深めているらしい。

アランスの名品をこちらで売り出すって事は、シスドのドーナツはあっちで売られる事になるのだろうか？

シスドをアランスの人達が食べるのかあ、国際交流って素敵だなあー。

「ホント、おチビはスイーツの類に目がないよねー

昨日のドーナツもおチビが全部食べてたし、そんなに食べるとおなかの方が胸より大きくなっちゃうよッ？ ハムって呼ばれちゃうんだよッ！」

「シンナバーも分かってないなあー！ おチビたんはそこがいいんじゃない……あっ、あはあはは」

口を尖がらしたシンナバーに気が付いたスフェーンは、苦笑いして誤魔化そうとしてた。

いやあ、まさかこの2人を目の前にして、こんな和んだ会話が出る日が訪れ様とは思わなかったよ。すっごく色々あったけど。

「ところでシンナバー

キミのお父さん、フェルドスパー司祭は元気かね？」

「あ、はいッ！ おかげさまで父は元気にやってます」

「フェルドスパー司祭は、かつてここで私と共に学んだ友人なのは知っての通りだろう

実はだね、私は近いうちに司祭長を任される事になるのだが……」

どうやらテン市長の話の目的は、シンナバーのお父さんであるフェルドスパー司祭への託だったみたいだね。

託の内容を簡単に言うと、今後の国際親睦の推進にあたり、テン市長の手伝いをしてくれないかと言う話。

あたしは親睦ってちょっとしたキャンペンみたいなものかと思っただけ、実際はもっと大きな目的があつて、それはマトラ王国そのものが進めている計画なのだから。

うーむー……マトラ王国って最近怪しい動きが多いけど、この国って大丈夫なのかな？

このマトラ王国の近年の主な輸出品は、王国で独自開発された魔法や兵器だ。

もし今後、国家間で直接魔法や兵器が取引される様になったとしたら、それはそれなりの大きな理由が存在するだろう。

今更国々が戦争したりなんて事はないと思うけど、マトラ王国の軍用兵器である「ルクトイ」をついこないだ見せられたばかりだしねえ。

まさか、あのルクトイまでが販売目的だったりする訳はないだろうけど、一応軍の最高機密って言ってた事だしさ。

「それともう1つ、これは私からのプレゼントだ
ちよつと合わせてみてくれないか？」

「これは……」

テン市長がシンナバーにあげたプレゼント、それはナントこの教会の修道服だった。

シンナバーまで引き入れる気なのかな？ あの強引さからすると
選択肢は1つしかなかったりして。

「ど、どうでしょうか……」

少ししてシンナバーが修道服に着替えて戻って来た。

薄青のワンピースに銀の十字架、それにウィンプルとベールを被ったシンナバーなんてもちろん初めて見たよ。

へえ、シンナバーって実はこういうの似合ったんだね。ずっと黙ってれば知らない人には清楚に見えるかもよ。

「うん、よく似合うじゃないか

誰が見てもこの教会のシスターに見えるよ」

「そうですか？ 慣れないのでちよつと恥ずかしいですけど」

スフェーンの様子を見たら、目を丸くしてポカンと口を開けていたよ。

心からおめでとうシンナバー！ これでスフェーンの心をバツチリ掴んだ事だろうよ。そしてさようならスフェーン！ そう思いながらあたしはにんまりとした。

「テン市長、せっかく頂いて言うのも何ですが……

あたしはこの教会に入るつもりは」

どうするかって思ってたら、シンナバーが先手を打ったよ。

確かにシンナバーって教会でじつとしてられるタイプじゃないからね。それに毒吐けないストレスでパンクしちやいそうだ。

「分かってるよ、それはとても残念だがね

まあ気が向いたらいつでも来なさい」

と言う割にテン市長は、シンナバーに修道服を10セット位渡していた。引き入れたさが丸出しじゃないかー！

食事を終えて、あたし達はそれぞれ部屋へと戻って行った。

あたしは部屋に入る時にドアを完全に閉めず少し開けたまま、奥の部屋に入ろうとしてるスフェーンとシンナバーの様子をじっと見てみた。

そしたらさ、彼女達が部屋に入る瞬間にスフェーンがシンナバーの肩に手を回すのが見えてすごいゾクゾクしちゃったッ！

『ああーッ！ ファンタジーが始まる予感ッ』

両手を胸の前で組み目を閉じると、祈るようなポーズで独り言をつぶやいた。

「そんなに待ち遠しかったのですね」

『あ……』

その言葉にクリーダが反応しちゃった。もちろん反応してくれていいんだけどさ。

少し頬を赤く染めたクリーダの顔があたしに近づくと、自然に目の前が真っ暗になった。

あたたかくやわらかい感触がして、ほんのりと甘い味がしたんだ。

【25】ストライカー 1／2（前書き）

今回の「ストライカー」の主人公は精霊魔法使いのスフェーンです。常に最強の名を欲しいままにして育った魔法使いが、実際はどう考えているかと言うのが今回の見所であるといいなと思います（；´・ω・｀）です

【25】ストライカー 1／2

あたしの名前は”スフェーン・アウイン”、今回はおチビたんに代わって特別に送らせてもらってますよーッ！

うーん？ もしかしてガツカリしたとかあ？ してない？
たまにはいいよねー？ ありがとう。

まずは自己紹介からしちやおうかしら。

おチビたんが説明したと思うから知ってると思うけどお、あたしのクラスはソーサラー。

ソーサラーは攻撃型の魔法を得意とする、パーティーの火力って言うのは知ってるよね？

ランクは8。魔戦士組合の定期刊行物だと2枚目に載ってるから、組合員にならそこそこ名前は知れてるはずなんだけどお、まだおチビたんは組合に入り立てでそういうのは見たことないだろうから今回が初耳かなあ？

今あたし達がいるのはナボラの教会、テン市長が泊まって行きなさいって言うから泊まらせてもらって今に至る様な。

んでもって今の時間は朝の5時半、窓から見える空は朝日の光が赤く染めていてとっても奇麗だー。

その朝日が目の前で無防備で寝むっちゃってるシンナバーを赤く染めててこれまた絶景。

やあ、実に清々しい朝だ、仕事も片付いちゃったしー後は帰るだけなのが少し残念っばい。

までもー、今日帰る前にもう1つだけやっておきたい事があるのよねえ。

シンナバーの髪をなでなでしてあげてたら、ううーんって目を覚ましましたよー。

『あらあ？ シンナバーお目覚めえ？』

「スフエーンおはよー……そしておやつみなさい……あと5分」

アハハッ！ 何か口元がくつと上がって来ちゃった。この状態でくすぐってあげるとすっごく面白いの。

眠気とくすぐったさのどっちを優先するか葛藤が見られるから。しかもおー！ これを暫く続けてあげると快感に変わるのが面白いのよねー。

つま先をくうつと伸ばして喜んでる姿見てると、最後まで続けてあげたくなるの。

「ムガアーーッ！ はあッはあッはあッ！」

ビックリしたあ！ いきなり凄い声を上げてシンナバーが起き上がったのー。

『あんたって……すっごーい声出すのね』

「もうッ！ スフエーンのせいで、すっごいくすぐられてる夢見てたんだよッ！ とんだ悪夢だったんだよッ！」

どうやら、あたしのモーニングコールはとても良かったらしい。

朝食に呼ばれて部屋を出たら、隣の部屋のおチビたんとクリーダも丁度出てきたとこだった。

でも、「やあっ」って感じでおチビたんになじぶこうしたら、ク

リーダーの奴がバツチリブロックして来やがる。

チィ、完全に目を光らされてるなあ。悔しいからリーダーのお尻を触ってやったら凄い顔で睨まれた、この女超こわあ……。

「うっはぁーうッ」

アハッ！ おチビたんはまだおネムだねえー、おっきなあくびしてるー。昨日は遅くまで起きてたのかなあ。

んむうー……。あたしがおチビたんを噛み付いたトコとかー見られたかなあ？ クリーダーのあたしに対してのマークっぷりが明らかに鉄壁なんですがあ。

朝食はヴェーロンのトーストとシスのドーナツ、それにサラダと豆の煮物かあ。

おいしいけどお、そろそろお肉とか食べたくなってきたよねー。今まで1日1回は何かしらお肉を食べてたからあ。

「スフエーン達は戻ってからどうするつもり？」

おチビたんがあたし達の先の事を聞いてきたよおー。少しでも気にしてくれてるのはうれしいねえ。

『うーん……そうねえ』

シンナバーと顔を見合わせてから、思いついた事を言ってみた。

『とりあえず、シンナバーは実家に戻らないといけないでしょー？だから地元の街にまず戻るけどー？』

「ごめんねーッ！ まあスフエーンの事はあたしに任せておけばいいよ

多少ヤンチャしてもあたしがいるから全く心配はないんだよ、あたしがいなかったら超心配だけどねッ！」

「なら心配ないね、二人とも元気でね」

やばっ、おチビたんの言葉に思わず涙が出そうになっちゃったあ。

帰りはクリーダが乗って来たって言う、真っ白で恥ずかしい位派手な乗り物に乗って帰るんだってー。

街の聖職者が道を挟んでズラーツと並んで、凄い拍手されながら街を出たよ。シンナバーとおチビたんはすっごくはしゃいでた。

テンションが戻ったおチビたんって、シンナバーと少し似た所があるのねえ、あたしっておチビたんにホントオに酷い事してたよねえ。

数時間で乗り物は中間地点辺りのザッサ平原と呼ばれてる、見渡す限り何にもない原っぱだけの所を走ってた。

『悪いんだけど、用があるからちよつと寄り道していい？』

「ええーッ！？」　　「こんな所でえ！？」

「スフエーン？　　こんなトコには何にもないんだよ？　　観光するならもつといい所でしてこうよ」

『あたしが用があるのはクリーダによ』

「へ？　　クリーダに何の用？」

『ケジメ、付けさせてくれないかしら』

あたしがキツとクリーダを睨んでやったら、クリーダも睨み返して来たよー。

クリーダって本当に恐ろしい女だ。睨まれて体に震えが起こるって事は本能的にコイツはヤバイって事なんだろうねえ。

「もういいじゃないッ！ 何でまだ拘ってるの!？」

止めてくれるかおチビたん、正直言うと本当に止めて欲しい気がする。あたしだって心底恐ろしくてたまらないのよ。

「わたしは構いませんよ？ それでケジメが付けられるのであれば」

受けてくれたかありがたい、これは絶対にやっておかないといけない事なんだよね。

シンナバーはあたし達を黙って見てた、流石あたしの気持ちを一番理解してくれてるなあ。

おチビたんとシンナバーは乗り物に残ってもらって、あたしとクリーダはそこに影響が出ない位離れる事にした。

『どの位離ればいいかしらね？』

「そうですね、あそこの木を超えた辺りにしましょうか？」

あそこの木？ もしかして遠くに点みたいに見える奴の事おーッ！？

木に辿り付いて乗り物の方向を振り返ったけど、乗り物は全く見えなかった。周辺にあった大きな岩らしきものが点として見える位。

『わがまま言ってごめんねー』

「礼には及びません、わたしにも関係ある事ですからそれじゃ、始めましょう」

あたしとクリーダは向かい合い、そしてニヤツと笑った。それが開始の合図なのは言うまでもない。

よし、手始めに炎の魔法を速攻で撃ち込んで……うん？

既に目の前に紫にきらめく光が迫っているじゃないか、しかも恐ろしく高速だ。これは今から横に跳ねただけじゃとても避けられそうもない。

『風よッ！』

間一髪！ 風の力を借りて回避する事が出来た。あぶなあー！

って、今の光ってプラズマじゃないッ！ 当たってたら跡形もなく消滅してたぞーッ！？

クリーダは本気であたしを消そうとしてるんじゃないの！？ むしろ願ったり！？ これがおチビたんに手を出した罰カアアーッ！

とにかく、風の力で高速移動しつつ機会を得るのが得策かもねー。

んう……次が来るッ！ 風を……あれ！？

ええッ！？ 風が出ない！？ ギャアアアアア……来たアア

ーッ！！

『ゼエゼエ……』

円形をしているプラズマを避ける最短距離は斜め下だ、そこに素早く移動すれば何とかなる。

チッ、髪がプラズマに少しかすった。左だけちょっと短くなっちゃったな。

クリーダは最初の位置から全く移動していない、もちろん無傷。それに対してあたしは既に死にそうな目に二回も遭っている。

最低ランクに高ランクが追い詰められてるのか、ランクなんて全然当てにならないね。

あたし……今日ここで死んじゃうかもしれない……。

「一応言っておきますが」

『なによッ!』

「わたしは精霊魔法を失敗させる事が出来ます

先ほどは炎と風の魔法をキャンセルさせてもらいました」

『ふーん、おかしいと思ったらそうだったんだ』

「精霊魔法使いのあなたにはとても不利だと思うのですが、このまま続けますか？」

『全く問題ないよ、続けてちょうだい』

あたしったら何言っちゃってんの!？ 問題ありありでしょー

ーッ! むしろ問題以外存在しないってばあッ!!

クリーダはプラズマを撃ちながら、同時に魔法がキャンセル出来るらしい。うあーーッ本気で困ったあ。

「わかりました、それじゃ」

クリーダが魔法を同時にキャンセル出来る数はいくつまでなのか、同時に使える魔法の数で勝負だーッ!

あたしはクリーダの周囲に風水水炎雷土の6大魔法を同時に展開してやった、しかし全て同時にキャンセルされてしまったよ。トホッ!

——やっぱ勝てない

あたしはクリーダに対戦を申し込んだ事に後悔を感じていた。

【25】ストライカー 1／2（後書き）

スフェーンは本人の頭の中で考えてる口調と、喋ってる口調がちよっと違います。

スフェーンが主人公のストライカーはもう少し続きます、引き続きスフェーンをよろしくお願いします。

【26】ストライカー 2／2（前書き）

「ストライカー」の主人公は精霊魔法使いのスフェーンです。

【26】ストライカー 2／2

あたしは戦いを挑んだクリーダに、手も足も出せずにいた。

6つの魔法を同時にキャンセルしてくるって一体何なのッ!?

そもそも、魔法をキャンセルされた事なんて今までなかったのに。くう……考えててもしょうがないかーッ! もう一度試してみよう。今度は位置を変えての連続展開……!

あたしはクリーダの周囲に魔法を展開し続けた、やっぱり次々とキャンセルされていく。

『やるねえー! これだけ高速に展開しても全部キャンセルされるって驚くよーッ!』

「……ありがとうございます」

あらあ? 憶測だけど結構必死だったりしてくれてるのかなあー?
? プラズマも全然撃たなくなちゃったし。

『クリーダ? 7x12っていくつ?』

「……84です」

ほらッ、少し遅れ出したんじゃない? つまりはあたしと魔法速度はほぼ同じって事ね。

んじゃあ、ちょっとアレを試してみようかしら。

『あたしの魔法の展開速度って実はこんなもんじゃないのよねえ

展開する魔法を同時に複数コピーして別のところにも作れるんだけど、試してもいいかしら？」

「……ッ！」

『展開させる魔法のコピーを2つ、位置はランダムにッ！』

そしたらねー、今までは視覚に現れる事のなかった魔法の断片が少しずつ現れ始めたの。

その数秒後、クリーダの周囲のいくつかの魔法が成功して発動していったわ。

たまらず後ろに飛んで回避するクリーダたん。

あらあ？　ちよつとさっきと表情変わったんじゃない？

「流石ですね」

『まー、これでやっと勝負になる様になったってところかもね』

今まで涼しかった表情に、少し人間らしさが現れたかなあ？
手を後ろに回して立っているクリーダの余裕さがちよつと気になる所だけど。

後ろに手を隠していたクリーダが、その手を前に指し出した。

『あら、あなたなに持ってるの？』

「精霊魔法を核とした、最終的に核融合に至る光の玉です」

『……かく？　ゆうごう？』

クリーダってたまに意味の分からない事を言うのよねえ。

「わたしのとおきです、スフェーンさんにプレゼントします」

『いらんわー！ッ！！』

クリーダがあたしに向かってふわりっと放り投げた光の玉が、空中で物凄い勢いで膨張し始めたよ。

あたしがいるとこが着地候補だから、少し距離とって避けたら地面に落ちたけど……これってきつとただ事じゃないよねえ。

見る見るうちに数十メートルの大きさに膨れ上がった。

『えっとークリーダは？』

あらら、遠くの方に点になって見えるのがそうかも。これはあたしも逃げないと……。

そう思ってる間に巨大な火の玉は真っ赤に変色し、殆ど大きさの変化が見られない状態になって行った。

『うひ……？』

その時、光の玉の天井が崩れ始めたのが見えた。

『こ……これは……ッ！ 巨大な爆弾なんじゃないかー！ッ！？』

だとしたら、絶望的な熱と衝撃波が発生するんだろうね、威力はあの乗り物との距離で大体分かるから。

あたしはこの状況を打開する方法を、頭の中をひっくり返す勢いで探してみた、そしたらたった1つだけ方法を見つけたの。

それは、土と水と氷の魔法を組み合わせ、特定の工程を得る事で引き起こせるあの現象……！

『さあッ！ どっちが強いかしっかり見てなさいッ！』

だけどそれがうまくいくかどうか分からなかった、何しろあたしの周囲全てを隙間無く覆う必要があるかなーり難易度が高い方法だから。

同時に最低でも4つ、つまり三角錐の形で展開させなければならぬ、少しでも隙間が空いていたらまず助からないだろうーねえ。

巨大な火の玉に閃光が走ったその瞬間、あたしは周囲全てにあの現象を発動させた。

あたしの足元の地面が蒸発する様に消えて行く……成功だ！ 後は風で姿勢を制御しつつ最後まで耐えるのみ。

4つも同時展開してるからかなりの魔力を消費するなあ、最後まで魔力はもってくれるかなあ。

展開した現象はギリギリの所でもっている様だ、周囲がゆがんでギシギシと音を立てている。

どれだけの時間が経過したろうか、あたしは何とか無事でいられている。

『んう……？ 雨が降ってきたのかしら』

辺りのゆがみから外の様子を伺うと、周りは真っ白でどうも大雨が降っている気配もする。

真っ白なのは凄い勢いで水蒸気が立ち上っているかららしい、今解いたら一気に蒸されておいしい料理になってしまいうだろうなあ。

大雨が辺りの大地を冷ましてくれて助かった、水蒸気が落ち着いたのを見計らってあたしは恐る恐る周囲に展開した現象を解除してみた。

あたしの使ったあの現象、土と水と氷の魔法を組み合わせ、いくつもの工程を得てやっと引き起こせる重力波を更に加速させ、別の次元の膜を開くというものの。

研究しておいて使い所に困ってたけど、こんな場合に役に立つものだとはね。

『生暖かい雨だねえ、シャワーにさせてもらおうかしら』

あたしは髪を解いて、気持ちいいシャワーを浴びた。

辺りは最初から何もない原っぱだったけど、更に何もない焼けた地面だけになっちゃった。目標物だったあの木もないよ。

「まさかとは思いますが……、そこに居るのはスフェーンさんですか？」

声がする方向を見ると、そこにクリーダが信じられないって顔して立っていたよ。

目を丸くして口を半開きにして、珍しいものでも見る様な顔ね。いいじゃない、そういう顔って見るの大好き。

『あらあ？ 戻って来たのお？』

「ずっとそこに居たのですか？」

『うん、そうだけど？』

「4億度です」

『はい？』

「あの爆発の中心温度は4億度もあるのですよ」

『ふうん、そうなの、為になる事いうのねえ』

「クッ……」

アハッ！ いいねーいいねー！ クリーダったらすっごい悔しそうだよ！

多分さっきのがクリーダの最強の魔法なんだろうね、それをあたしが耐えたもんだから精神的に相当なダメージ受けたんじゃない？

『まだ決着付いてないよね、さっ続きしましょ』

「……そうですね」

ふっ、クリーダの目つきがまた変わったよ。戦闘態勢に入った目だ。

といっても、あたしの魔力もあんまり残ってないから長期戦にならない様に決着を付けさせてもらわないと。

あたしは解いたりボンをまた結び直した。

お互いの目で合図をすると、あたしはまた魔法同時展開を……っ
て思ったけど3つしか出なくなってる。でもキャンセルされずに展開されてるじゃない！

あらあ？ たった3つの魔法をキャンセルしないんだ。それとも
もう出来ないのかしら？

それをクリーダは避けずにプラズマでなぎ払ってた、プラズマも
かなり小さくなってから、彼女の魔力ももう残り少ないみたいね。
あたしも後いくつも出せないみたいだから、もう今までの戦法は
使えないね。

しょうがないかー、最後はこれで決めさせてもらおうかな？

あたしを取り出したのは、昔シンナバーに貰った片手棍二刀流。魔法が使えなくなった時の為にくれたんだ。

『風よッ！』

あたしは風を纏い、一瞬でクリーダとの間を詰めた。クリーダはもちろんプラズマの構えをしている、それも予想通り。

だからあたしは軽くジャンプして上に交わすッ！ クリーダの目の前であたしは思い切り地面を蹴った……うッ！？ 今何かおかしな踏み応えがしたーッ！

うひあッ！？ 地面がぬかるんでるせいで滑ったんだアアーッ！？

急いで風で補正したけど角度が付かない……クリーダの手に紫色のきらめきが収縮しているのが見える！

『さっきのお返し、足はプレゼント』

そして、クリーダのプラズマが発動すると、一瞬で足の感覚が消えてしまった。

ああ……さらばあたしの美しい足。記憶ってものは美化されるものなんだ。

あたしは風を棍棒に纏わせ、片手棍二刀流による連続コンボを思いつき叩き込んでやった。

この連続コンボもシンナバーから教わったんだっけね。シンナバーって最後の最後で一番頼りになる奴だよ。

しかし誤算、クリーダは吹っ飛びながらもプラズマを撃ち続けて

いたの。

徐々に落下するあたしは、プラズマによってどんどん削られちゃった。

『き……消えるうーーッ！』

その時やっと、プラズマの放射が止まりあたしは地面に転がり、仰向けに倒れたクリーダの上に乗った。

どうやらクリーダは気絶したみたいね、もう起き上がる事はなかったよ。

辺りはすっかり静まり返っていた、もう雨は止んだみたいだね。

『ふう……終わったー』

立ち上がろうとして、そうだった足は無かったんだって事を思い出したけど、やけに地面との距離が近いなと思っておなかの辺りを覗き込んだら、信じられないものを見てしまった……。

それはとても表現出来るものじゃなかったから、あえて言わないでおくね。

【26】ストライカー 2／2（後書き）

※くれぐれも放射能はナシと言うご都合主義な方向でお願いします。
次回の視点はルビーさんに戻ります。

【27】二人残されて（前書き）

今回からまたルビーさんが視点です。

【27】二人残されて

スフェーンはケジメを付けると言って、クリーダと戦う事になったんだ。

二人はあたしとシンナバーを乗り物に残して、何もない平原のはるかへ消えて行ったよ。

一体何がどうなってるのかさっぱりだ、ケジメってどういう事なんだ。

あたしが関係してるのは分かってるけど、スフェーンはクリーダと戦って何が得られると言うんだろ。

それでケジメを付けられたとしたら、大手を振ってシンナバーと仲良くするって事？

全く……どっちがいやらしいんだか。

スフェーンの事はやっぱり今も嫌いだし、それは今後も変わる事はないと思う。

別に誰と何しようが全然かまわないけど、それに巻き込まれてるシンナバーはどう思ってるんだろう。

『シンナバーってスフェーンの事好き？』

シスのドーナツをはむはむしてるシンナバーにそう問いかけたら、凄い慌てて食べてたドーナツを落としちゃった。

ドアを開けて横向いて腰掛けてるシンナバーの足元に、食べかけのドーナツがコロッと転がった。

「な……ッ！ いきなりビックリさせないでよッ！」

『あ、ごめ……』

うわぁ……顔真っ赤だ。そんなに好きなんだー。

「あたしが勇気を出して告白したの見てたでしょ!?!? ここまで来るのにどれだけあたしが苦しんだか…… おチビみたいに何もしくなくても向こうから寄って来る人にはわかんないんだよッ!」

シンナバーは転がったドーナツをポンと蹴って飛ばしてた。

『……………』

やっぱり複雑な心境なんだね。納得なんか出来てる訳ないよね。バカにされてる様に思えるよね。あたしシンナバーを傷付けちゃったかな。

「おチビ覚悟ッ!」

『あぎゃ!?!?』

突然シンナバーがあたしに覆いかぶさって来た。

『ナナナナナッ!?!?』

「ふふーん? 奇跡のパーティー編成みたいな事言わないの あんた今あたしに悪いって思ったでしょ?」

『え……別に』

「ホントは思っても思わなくてもいいんだけどねッ!」

シンナバーはあたしをガシッと捕まえたまま、何故かスリスリしはじめたんだ。

『うひゃ！？　ちょっと！　何してるの！』

「そんなの決まってるじゃないッ！」

スフェーンがした事と同じことをしたいんだよッ！」

『ええー！ッ！？　別にあたしは何もしてないよッ！』

「そんなの分かってるよ、あたしはスフェーンが夢中になってたものを知っておきたいだけなんだ」

シンナバーはスフェーンと全てを共有して、少しでも近づきたい
って思ってるのかな？

クリーダがあたしに誓わせたあの言葉を急に思い出した。

『あたしは今後、クリーダ・ヴァナデインと、一生の人生全てを共有する事を誓います』

身も心も魂までの全てを共有する事を誓います』

「なにそれ？」

『誓いの言葉だよ』

「へえーいいなあ」

あたしも誓いたい……そして誓わせたい」

『うん、誓うといいよ』

あたしは無信仰だからお婆ちゃんに誓ったんだけどね』

「そうなんだ、あたしも神様にはちよつと誓いたくないナア」

『えー！ッ！？　一番信頼してる人と誓うんじゃない？』

「うーん……なら尚更かも」

聖職者のくせに神様を一番に信頼してないってどうなんだろうね。

「何かおチビっていい匂いするよね」

『へ？　何もつけてないよ？』

「うん体臭」

『体臭って……どんな……?』

「なんだろう、例えるなら食欲をそえられるおいしい料理みたいな感じだからってカレーの匂いがするとか、加齢臭がするとかって意味じゃないよ?」

『加齢……』

シンナバーがあたしのおいをスーハースーハー嗅いでる。なんかヤバイものでも発してる様な気がしてしまうな。

「知ってる? 食欲と性欲って反比例するものだって」

『性ッ! いえ、知りません……たとえ知ってたとしてもそんな恥ずかしい事口に出してなんて言えませんか』

「女って性欲を満たせない場合、食欲でそれを補うんだよ

例えばドーナツを大量に食べるとかねッ!」

『それは誰の事だぁーッ!』

「おチビって性欲あんまりないじゃない?」

多分ドーナツとかいっぱい食べてるせいだと思う」

『それを言ったらシンナバーだっていつも腹ペコだったじゃ……』

「だから食べて補うんだよ」

シンナバーとこんな話をするとは思ってもよらなかった。

【28】神の制裁

あたしはシンナバーと、今日初めてちゃんと話をしたかもしれない。

シンナバーは相変わらずスーハースーハーしておりますが。

『もういいでしょ？』

「いやいやあ、これはヤバイかも

何かずつと嗅いでたい気がして来るよ」

『一体あたしの体から何が出てんだ……』

「ヘッヘッヘッーッ！ さあ鬼が出るか蛇が出るか」

シンナバーがあたしの服をめくりはじめたよ。

どっちが出ててもダメだろうと思いつつ、あたしはそれを拒んだ。

『あ、やめッ！』

だって、アレだけは見せたくないからね、本気で抵抗させてもらうよ。

「おチビはバカだなあー、そんな事したら絶対何かあるって事が確定されるじゃない

あたしは鬼と蛇のセットだとおもうんだけど

次回おチビの秘密！ 見てくれよなッ！」

『ダメダメダメダメッ！！』

「ああーッ！ もうそんな暴れないッ！ しょうがないなあ無駄なの」

『あれ？』

突然手足の力が抜けた。

シンナバーの顔や手をぐーっと押し返してた手がパタンと床に落ちたんだ。

「麻痺の魔法かけた

おチビがわからず屋だから悪いんだよ!？」

『うぬーッ!』

シンナバーって弱体魔法も使えるんだった、麻痺させたり、動きを遅くしたり、眠らせたり、沈黙させたり。

神は凶悪な魔法を絶対与えてはいけない人物に与えてしまったのかッ! と、あたしは神を初めて恨んだ。

「これってさー、戦闘以外の方が使えるような魔法だよね」

『ねえ、どうしても?』

「さっき言ったでしょ? あたしはスフェーンが興味を持ったものが知りたいって

探究心なんだよッ!? 探究心を持っていたからこそ人は成長出

来たんだよ!？」

バサーッ! と言う音と共に、まくり上げた服は関連製品と共に剥ぎ取られてしまった。

『うひぁーッ!』

「な……なんじゃこりゃアアアアッ!」

抱え起こされ強制的にバンザイの形をしていたあたしは、そのまま乗り物の床に自由落下して頭をゴチンと打ち付けた。

『痛ッ!! 頭ッ! 打ったッ!』

追加更新されたクリーダの印と……、スフェーンに噛み付かれた痕。それらを見てシンナバーが驚いた。

「ええー！ーッ!? 何よこれー！ーッ！」

『うわあああッ！ 見るなアアアー！ーッ!!』

とんでもないものを見られてしまったよ、まさか全員でこの情報を共有する事になるとは。

「……ごい……すごいよおチビッ！」

だけどシンナバーの反応は想像と違ったんだ。印の数々を見てフムフムと言うような、教科書を見ている様な真面目な顔をしていた。

「あの二人にここまでさせたって事に心底感心するよッ！ 全く羨ましいッ！」

『え……?』

「これがどういうものか分かってる？」

ついに制覇したぞーッ！ って言う記念の証なんだよッ！

しかも他人が見た時にも効果を発揮するものなんだよッ!？」

『そんなご大層な意味があるものなの?』

「あるある！ おおアリクイだよッ！ 実際にはアリクイは関係ないけどねッ！」

だって、こういう印を付けないと不安って心理があったって事だから、すごい真剣に思われてたって事なんだよッ!？」

「ところで一番重要な事を聞きたいんだけど……」
『重要って? なに?』

「……………えっと」

『……………？ だからなに？』

ためらいつつ、あたしのおなかに丸をいくつか書いた後で言った。

「こ、これ……スフェーンにも付けちゃった？」

『だからあたしはしてないって言ったじゃない』

「そっかぁーッ！ それならスフェーンはまだ新品だねッ！ おチビは中古だけどねッ！」

何もしない事を言ったら、シンナバーの顔が一気に明るくなつたよ。それにしても、とんだ毒を吐きやがったもんだ。

『失礼な事言うな！』

「だって本当じゃない、それについての異論ありますか？ 数秒間だけ募集中です！」

『あのね……』

「ブブウーッ！ ただ今を持って受付は終了しました！」

『ふう……もう何でもいいや』

「それにしてもすっごい事したよねー……」

何この噛み付かれたみたいな痕ッ！」

『それはスフェ……』

「……………！！」

スフェーンがと言いかけて止めたけど、言った瞬間シンナバーの表情が強張ったんだ。

しまった……適当に受け流しておくべきだったか。シンナバーは俯き、あたしのおなかの上に乗せていた両手をグッと握りしめた。

「……………くしょう……ちくしょうッ！」

ちくしょう！　ちくしょうッ！」

シンナバーは握り締めた拳に額を近づけて震えていた。シンナバーのストレートの髪がおなかの上にさらっと広がってこそばゆい。

『それね、クリーダが付けた印を見られた時にスフェーンが怒って噛み付いた痕なんだ』

あたしはスフェーンの気持ちは受け入れられないから』

『正直に話してくれてありがとう、でもあたしはやっぱり悔しいよ』
『ごめんね、あたしどうしたらいいか分かんなくて』

そう言うのと、シンナバーはゆっくりと首を振り、やがて顔を上げた。

「その様な迷える子羊に、今から神の制裁を下す事にします」

『ちょッ！　神の制裁って！？』

「罪には罰を、積み荷は馬車へ」

積み荷がサッパリわからんちんッ！

大体、神の制裁ってさっき神様を信用してないって言った者が使う言葉なんだろうか！？

「そして……、スフェーンが噛み付いたなら、あたしも噛み付くッ！」

シンナバーは標的をペろりと舐め、勢いよく噛み付いた。

二人しか居ない乗り物に、あたしの絶叫だけが響いた。

【28】神の制裁（後書き）

何となく一通りに絡ませてみたのですが、絡みの部分のさじ加減が自己判断なので消極的かやりすぎかがよく分かりません。

ちよつと少し足りてない程度が理想なのですが、どうにもこうにもわからんちんです、

マンガやアニメだと文字にしないで絵でさらっと表現出来る部分でも、文字だと書かざるおえない部分とかをどうやるもんか悩まれます。

m 正しい方法や参考などありましたら是非ともご教授下さりm（「」）

【29】脳内マップ

あたしは「スフエーンが興味を持ったものを知りたい」って言う、シンナバーのとぼっちりを受けていた。

「なるほど、こんな感じなのか」

『うう……なんでこんな目にばっか遭うんだ』

「多分ねー、素質かな？」

おチビは男の子には全然モテないけど、オンナには妙にモテる特殊体質なんだよ」

『さりげなく酷い事言われた気がする』

「えー？　じゃあおチビは男の子と付き合った事あるの？」

『えーと、えーと』

「あたしが知ってる情報にはないから、この3年間の間になるけどさ」

『フツ……』

どうせね、あたしは遠くを見る目をするしかなかったさ。

「なしつと……メモメモ」

『メモるなッ！』

「まあ、おチビって男の子の免疫が全然ないもんねー、ナボラの広場でドーナツ食べてた時もさ

まさかの興味0？」

『そんなの、興味なくはないけど』

「バイか、守備範囲広いなあ

なら相手が振り向いてくれないジレンマも多少は分かるよね？」

男の子かあ、そりゃー今まで好意を持った人なんていっぱいいた

さ。

だけど、みんなあたしなんかを見る事なんてなかったよ。

それが、半年位前にたった一人だけ仲良くしてくれた人が居てね、食事とか誘ってくれたり「もしかして」とか思ったんだ。

結構いい雰囲気になってデートの約束までしてくれたのに、直前で「ごめん」とか言われて……アレは呆然としたな。

理由聞いたけど「命に関わる事」とか意味分らない事言っ走ってっちゃった。

何かの組織に狙われててあたしに迷惑がかかるからとか、不死の伝染病とかアレコレ想像してたけど、たまに見かける限りはそんな感じはなかった。

でも、あたしを見つけると真っ青な顔して辺りをキョロキョロし出して、近付こうものなら凄い勢いでどっかに逃げて行くんだ。未だにその理由は謎。

「ねえ、あたしが噛み付いた痕どうする？ 消す？ 記念に残す？」

『消して下さい……』

スフェーンのはそのままでもいいよ、消したらまためんどうな事になるし』

「そうだよね、今度はあたしがクリーダと戦うはめになっちゃうし」

シンナバーが片手でスツと撫でると、ズキンズキンしていた痛みは一瞬で消えた。やれやれだ。

あの二人って今頃どうなってるのかな？ 無茶してないといいけど。

「じゃあ最後に、ちょっと仲良くしちゃおうか」
『うなッ!?!』

ビックリしたよ、何とシンナバーのやたら健康そうな体が目の前にッ！

スフエーンのトレースって言うても、そこまでする必要があるのかな？

「ギャハハ！ おチビたんッ！ ちゅきちゅきーッ！ ってこんな感じかぁ？」

シンナバーがあたしをギューっと抱きしめた。
やっぱギューっていいねえー。別に特別な気持ちがなくてもギューってするのって気持ちいいもんなんだ。

あ、麻痺の効果が切れてたみたいだ、それとも解除してくれたのかな？

シンナバーの指先はあたしをやさしく撫でてくれた。くれたって思うって事は実際嫌じゃないんだろうね。

どうやら別に好意を持ってなくても、あたしの体はそれなりに受け入れるものらしい。

そして、じきに体が反応し出すとあたしは声をもらし始めたんだ。気が付いた時にはシンナバーの背中に手を回してしっかりしがみ付いてたよ。

シンナバーの口元は少し甘い味がする、さっき食べてたドーナツの砂糖が付いてるみたい。あたしはそれらをペロペロと舐めてあげたんだ。

あたしの手が勝手にシンナバーの体をなぞって、色々な情報を得ようとしている。肌触りとか筋肉や骨、脂肪の付き具合、そしてどんな反応をするかとかまで。

その情報は少しずつ脳に蓄積されて行って、マップの様なものを

作って行くの。それはきつとシンナバーも同じだと思うんだ。

二人の弾む息や、時折かすかに漏らす声がお互いの気分を盛り上げて行き、徐々に行為そのものに集中して行ったよ。

暫くして、乗り物の中で息を整えてるあたし達は、仰向けに並んで手を繋いでた。

『シンナバーの味がする』

指を舐めて見せたあたしを見て、シンナバーが少し笑って言ったんだ

「えーっ！？ やっぱおチビって変態だよね」

ってね。

でも、シンナバーも舐めてくれたんだ。それを見て不思議と充実感が沸き起こったよ。

むくつと起き上がったあたしは、窓の外にとんでもない物を見つけた。

それはクリーダとスフェーンが歩いていった方向に出来た、得体の知れない真っ赤に光る大きな玉だ。

『な、何あれ……』

「さあ……、あたしは見たことないよ、あんなの」

スフェーンじゃないって事はクリーダがやったのかな？

赤い玉は中心にどんどん光が集まって行き、それはやがて強烈な閃光をほとぼらせ大爆発を起こした。

あたし達の乗り物を衝撃波らしきものが通り過ぎて行き、地の底から響くような振動と、雷の様なけたたましい音が鳴り響いたよ。

『これってちよつとヤバイんじゃない……』

「行かないきゃ」

シンナバーは血相を変えて服を中途半端に纏うと、空高く立ち上った巨大な炎の柱に向かって乗り物を走らせた。

【29】脳内マップ（後書き）

いつも見て下さり感謝の極みであります。

少し具体的に書いてみたつもりですが、うーん、どんなもんしょね。思った様には書けないのは確かなんですが。

それと、理性と欲望の優劣を織り込んでみたつもりですが、それも少々ままなりませんね。

【30】確信（前書き）

1 発ネタ的なものから始まったこのシリーズなのですが、まさか3
0 話まで続くとは思いませんでした。

相変わらず進歩しないヘツポコさ満点ですが、今後ともよろしくお
願いしますm（　　）m

【30】確信

平原に現れた巨大な火の玉は大爆発を起こした。

何だあの爆発は！？ あたしの思っていた魔法のスケールを遥かに超えているじゃないかッ！

まあ、あたしの想像していい攻撃魔法なんて「そりゃーっ！」って、火の玉とかを飛ばす程度だったんだけどさ。

それが、天変地異か！？ 隕石の衝突か！？ って位の、もはや現象と呼ぶスケールの事が起こった訳で、それに比べたらあたしの魔法って何てみみっちいんだとまた落ち込みそうだ。

平原の彼方に雲が空高く立ち昇っているのが見え、あたし達の乗った乗り物はそれに向かって走っている。

少し進んだところから地面は灰になった草が舞うだけになって来た。

爆発の熱が地面に残っているみたいで、乗り物の中にもその熱は伝わってきてかなり劣悪な環境の空間と化している。

「だめだ……これ以上は熱くて進めないよ」

遠くの地面が蜃気楼の様に歪んで見える、こんな状態であの二人は大丈夫なのだろうか。

あれをクリーダが使ったとしたら、きっとクリーダは無事なんだろう。

でも使われたスフェーンは？ しつこい様だけどあたしがスフェーンを嫌いとは言っても、彼女の命まで否定はしていない。

スフェーンが真剣だったのは分かるし、取った行動だって理解出来るから。

隣に居るシンナバーの顔は少しの余裕もなく、そして少し震えていた。

『あ、雨』

いつの間にか空に雨雲がかかり、爆発があった方向は白くぼやけ見える。

どうやら爆発のあった中心地で大雨が降っているみたいだ、でもあの水蒸気はきつと地面に落ちた雨が瞬間的に蒸発してるんだろう。あたしはある程度の覚悟はすべきだと思ったよ。

少しして、やっと水蒸気がおさまって来た。雨はどんどん地面を冷やしてくれてるからきつと先に進めるだろう。

『シンナバー、先に進もう』

そう言って、あたしは伏せていたシンナバーの頭をやさしく撫でてあげた。

そして、あたし達は二人を探しながら雨の中を乗り物で走ったんだ。そろそろ爆発のあった中心に近いのかな？ 地面が著しく溶解してまっ白になっている所に入ったよ。

「あッ！ あ、あれッ！」

シンナバーがいきなり大きな声を上げ指をさした。その指した方向に見えたもの。

それは、まさにあの二人が最後の衝突をした瞬間だったよ。

あたしとシンナバーは、乗り物から飛び出し地面に倒れた影に走

『クリーダ？』

「ここは……」

『気が付いた？　ここは乗り物の中だよ

大丈夫？　寒くない？』

雨に濡れて冷えたクリーダの体を、あたしはずっと温めてあげて
いたんだ。

「大丈夫です、とても温かいです」

ニッコリと微笑むクリーダを、あたしはしっかりと抱きしめた。

「へくちッ！」

「あッ！　こっちも起きたよッ！」

「ん……あらあ？　シンナバーじゃない？　久しぶりーッ！」

「コラーッ！　全然久しぶりなんかじゃないよッ！」

特にこれからは常に密着取材させてもらうから覚悟するんだよッ
！」

「アハハッ！　楽しみだー」

あの二人とても楽しそうだなあ、いつまでも幸せであります様に
ってお婆ちゃんに祈ったよ。

「ねー、シンナバー」

「なに？」

「あたしの足ってこんなだったっけー？」

「え？　紛れもなくそんなだったと思うけど？」

半身だけになったスフェーンは、あれからすぐにシンナバーによって再生が施されていたんだ。

再生は高位の聖職者が使える魔法で、一般に言うヒーリングとはまた別のものらしい。

本人の回復力を使う事が出来ない場合や、著しく欠損してしまった場合の処置で、細胞の設計図を使ってそれらを修復させるんだってさ。あたしにはよく分かんないけど。

再生する時間に耐える事が出来れば復活出来るらしいけど、多くのクラスがあれどそんな神がかり的な事が出来るのって聖職者位だろうね。

でもね、スフェーンは本当にギリギリだったのかもしれない。神様を信じてないって言ってたシンナバーが、ずっと神様に祈ってたのをあたしは見てしまったから。

ほら、シンナバーはにっこりしながら目から流れる涙をぬぐってるよ。

『あたしも確かそんなだったと思うな』

「わたしもそう思います」

「えーッ!? もっとこう何ていうかさ……」

どうやらスフェーンのケジメはちゃんと付けられたみたいだね、乗り物の屋根にくくりつけた洗濯物のバタバタと風に靡く音が妙に清々しかった。

もうみんな大丈夫、この時あたしはそう確信したんだ。

【31】記念

色々あったけど、あたし達は全員無事に街に戻って来た。

途中に寄り道したせいで空は大分暗くなっていたけど、その日のうちに帰ってくることが出来て良かったよ。

そういえば一番最初にすべきのはずな、住んでる街の紹介ってしてなかったよね。本当にごめん、すっかり忘れてたんだよ。

この街の名前は”ベイカ”って言うんだ。もちろんマトラ王国の領内にある街で、首都からの距離も乗り物を使えばそんなにはかからない。

何が盛んと言う事もないけれど、平和でそこそこ活気のあるけど賑わい過ぎず、不便過ぎずと絶妙なバランスの取れたナイスな街なんだ。

ふむ、街の名前が三文字の所ばかって事に気が付いたかな？

マトラ王国の街って全部共通して三文字なんだ。

何か決まりがあるって聞いた事があるけど、詳しくはわかんない。

さて、まずは魔戦士組合に直行だ、スフェーン達は明日には帰るらしいから報酬を分配しておかないとね。

組合の受付係に書類を提出して成功報酬を受け取る。手続きはたったこれだけで終わり、そして受け取った後で受けた人数で分配するんだ。

「さて分けるよーッ！ 4人だから1人25万丸ね」

うわぁ……流石は難易度Aの仕事だ。これだけあれば2ヶ月位は

何もしなくても暮らせる程だよ。

この次クリーダとやる仕事は難易度Aを狙おうっと。

「あ、わたしはこの仕事を受けてないので人数に入れないで下さい」
「遠慮なんかしないの」

それに4人が出会えた記念として、あたしとしても受け取って欲しいんだけどな」

「そうだよッ！？ 遠慮すると逆に失礼になる事もあるんだよッ！？ 逆にねッ！」

『クリーダもらって？ 服も作り直さないといけないし』

今クリーダが着ている氷女の服は、スフェーンの血で染まっている。

魔戦士組合に來ていた他の組合員ですら、それを見て一瞬固まる程にね。

きっと物凄い死闘を繰り広げたんだろうって思ったかも、実際は仕事とは別の事で付いた訳だけどさ。

「わたしの服、また作ってくださいですか？」

『うん、作らせてー』

「わかりました、では皆さんと出会うことが出来た記念に頂きます」

よかった、クリーダが報酬を受け取ってくれた。クリーダってちよっと頑固な所あるからもらってくれるか心配だったよ。

「そんじゃ、今日は疲れたし帰って寝るとしましょうか」

『二人とも明日は早いのか？』

「うん、夜までに着きたいから夜明けと共に出発するつもりでも見送りはいらないよお？ この仕事してればその内にまた会

えるものね」

『そか……』

「あらあ？　あたし達なら全然心配ないわよ」

「そうそう、常にあたしが付きまどってゐるから、おチビの入り込む隙なんてないよッ！」

『へえ、全然心配してないけどさ』

「アハハッ！　少しはしろよーッ！」

本当に驚きだよ、こんな和んだ会話が出来るとは、出発の時には思ひもよらなかったから。

「あ、そうだおチビ」

帰りがけにシンナバーがあたしを呼んだ。

『んにゃん？』

「これ渡しとくね」

シンナバーが小さい袋をあたしに差し出した、袋の中を見るとコロコロとした白い玉がいくつも入ってる。

『これって何？』

「あたしの再生魔法を閉じ込めたカプセルだよ
大好きな人はちゃんと守ってあげなきゃね」

『うん、ありがとうッ！』

「少なくなったら取りに来るんだよ

料金はいつも通り、おチビの体でいいからねッ！」

「アハッ！　あたしへのお土産も同じのでもいいよー」

『あは……は……』

本気なのか冗談なのか分かんないけど、そう言ってあの二人はまたいつもみたいに爆笑しながら帰って行ったんだ。

二人を見送った後、すっかり暗くなった星空の下、またあたしとクリーダだけになった。

「シンナバーさんともしましたね、顔が赤くなってたので分かりました」

『あ……え！？ ええッ！？』

「やっぱり……したんですか」

クリーダは両手を頭にあて、苦悩の表情をして身悶えた。

へー、クリーダってそんな動きもするんだ。あたしはそれがとてもかわいく見えたよ。

『だってね……スフェーンの興味ある事を知りたいからってあたしだって抵抗したけど麻痺の魔法かけられちゃって動けなかったんだもん……』

「正直に全部話して下さい」

クリーダは困った表情をして、あたしをじっと見つめた。

そんな顔されちゃ話すしか……。しょうがない、あたしは乗り物の中であつた事を全てクリーダに話してあげたよ。

「わかりました

シンナバーさんの想いはスフェーンさんに向けられたものですし許してあげます」

『ふうー……よかったあー』

「でも罰として……」

あたしはその罰として、クリーダと夜遅くまで仲良くする事にな

っ
た
ん
だ。
。

【31】記念（後書き）

たまに複線がつぶされているのは全て偶然だったりします。

みじん程には考えてますけど、ほぼ偶然でつぶれるのってどんな行き当たりばったりなんでしょうね＞＜

そして、小細工魔法士ルビー・サファイヤはいまだ完成しません。はたして完成するのかすら怪しくなって来ました。

と、いう事でもう少しお付き合い下さい m (| |) m

【32】お返し

ベイカの街に戻って来た次の日、目が覚めたのは既に太陽が真上に見える昼だった。

『め……めむい』

自然に目が覚めたものの、まだ物凄く眠かった……。それと言うのも全ては例の罰のせいなんだけど、最近よく罰を受けるのは何故だろう。

ここは見慣れない部屋、シンプルで必要なもの以外殆どない部屋。それがクリーダの部屋だ。

あたしは昨日クリーダの部屋に泊まったんだ、もちろん来るのは今回が初めて。

この部屋にはアーチ型の窓があって、その前に小さなテーブルと椅子が置いてある。そしてテーブルの上には布がかけられた何かに乗っていた。

あたしはその窓から外を眺めてみた、見える景色は真っ直ぐ前が丁度道になっているんだな。

クリーダはここに座って外の景色を眺めていたんだろうね、テーブルの上の何かの布をめくったら小さなスタンドに設置された遠眼鏡が出てきたよ。

遠眼鏡を覗いてみたら予想通りだけど、丁度あたしの家がターゲットになっていたよ。

気持ちよさそうに日向ぼっこしてる飼猫のダイヤまで見つけちゃった。

クリーダって一年もの間、ずっとここからあたしを見てたのかな？
あたしは遠眼鏡に布をかけ元通りに直した。

後ろを振り返るとベッドにまだ寝てるクリーダが見える。寝顔も
やっぱり美しい。

こんな美しい人が、遠眼鏡でわざわざあたしなんかを見てたのっ
て不思議だなあ。

クリーダは今までどんな人生を歩んできたのかな、昔の事を聞い
たら教えてくれるだろうか？

壁にクリーダの着てた服がかかっている、かなり血が付いてるけど
その部分を切り取れば何か作れそうな気がした。

シャツなら間違いなく作れそう、ちよっとおしゃれなブラウスを
作ってあげよう。

あたしは構想を練りつつ、服に小細工魔法をかけた。

首の周りは広めにカット、鎖骨を出してオトナの雰囲気を出しち
やおう。

次に甘くなりすぎない様に気をつけながら、首周りそして前と後
ろに2ラインづつエッジの効いたフリルを付ける。

袖口も広めにして甘さとシャープさのコラボレーションの味付け。
ウエストはキュツとしめて、そこから花の様に開く感じで裾を広
げ、蝶を思わせる様なフィニッシュで決める。

うん、我ながらいい出来の白いブラウスが作れたかも。これなら
ちよっとオシャレな普段着として着れるよ。

下は色つきのスカートで合わせてもいいし、アクティブにパンツ
をはいてもいいかも。

「あ、起きてたんですね、おはようございます」

後ろでクリーダの声がした、目が覚めたみたいだね。

『おはよークリーダ、あたしも少し前に起きたところもうすっかりお昼時だけだね』

あたしは早速、今リフォームしたてのブラウスをクリーダに当ててみた。

『よっしゃ、いい感じだ』

「これは？」

『氷女のローブを仕立て直したんだよ、上しかないから下は合わせないといけないけど』

合わせられそうな服って持ってる？』

「スカートとかでいいでしょうか？ 余りたくさんはないですけど」

クリーダが洋服ダンスを開けてくれたので、あたしはその中で合いそうなものを物色した。

パンツは持ってないらしい、クリーダならラフな格好でも似合いそうなものにな。

『これなんかどうかな？ 青のスカート』

あたしはシンプルな青いスカートを選びクリーダに手渡した。

「合わせてみますね」

思ったとおり、白のブラウスとシンプルな青いスカートはいい感

じだったよ。

後は、白いロングブーツの色を黒っぽくしてあげればコーディネート完成だ。

「どうでしょう？」

『すっごくいいよーッ！ 元がいいから尚更ね』

「ありがとうございます、とてもうれしいです」

クリーダは少し照れてた、タンスを見る限りいつもシンプルな服を着てみたい。

もったいないなあ、あたしがクリーダだったらあたしが着れない領域のものまでどんどんチャレンジしただろうに。

『さーて、遅い朝食でも食べに出かけよっか』

あたしが窓から外を眺めてたら、クリーダは机の上の布の被った遠眼鏡を少し慌てて片付けてるよ。

アハハ、やっぱ見られたくないものだったんだー！ よーし、少しいじわるしちゃおうかな。

『それは何？』

「えッ！？ た、ただのガラクタです

邪魔なので閉まって置きます」

『ほむう』

クリーダは近くの戸棚に遠眼鏡っぽいガラクタをしまった。

なるほど、ただのガラクタだったのか。あたしは決して相手を追い詰める事はしない主義だし、ただのガラクタって事にしておこうかな。

「それじゃ、食事に出ましようか」

『よしきた、何を食べようかー』

あたしが部屋のドアを開けようとしたら、クリーダはあたしの肩を掴んでそのまま引き寄せた。

両手であたしの体を包むようにしてギュッとすると、くるりと体を回転させてやさしくキスしてくれたんだ。

「今日はまだしてませんでしたから」

そのお返しに、あたしからもクリーダをギュッととしてあげてキスをしてあげた。

クリーダが目をつむるのを初めて見たよ、いつもあたしってされる側だったんだって事に初めて気が付いた。

【32】お返し（後書き）

ちよつと短めでした。

誰しも少なからず知られたくない隠し事って持つてるもんですよ
ね
ハハ

今更ですが、キャラの名前は宝石や鉱石の名前からとってます。

もしかすると、ルビー・サファイヤで分かったかもしれませんが、
クリーダ・ヴァナディンも同じく鉱石（2種類）の名称です。

多分、今ミネラルウォーターで流行ってるバナジウムとかそういう
類だと思います。

スフェーンやシンナバーも名前のあるキャラはみんな例外ではない
ですが、テン市長のテンの部分だけは違います。

察しの通りのただの駄洒落です（||天使長）

テンという鉱石が存在すればと思ってなりません（ノ、） 後付サ
クサクじゃー

【33】位置づけ

そう言えばスフェーンとシンナバーって今頃どの辺りだろう。
サヨナラすら言わなかったけどまあいいか、嫌でもその内また会
いそうな気もするし。

食事を済ました後、あたし達は魔戦士組合に来ていた。

『今度は絶対難易度Aの仕事を受けるんにゃん』

なになに悪魔祓い？　これはちよつと無理だんにゃん』

「また……んにゃん……ですか」

『へ？　あたしそんな事言ってた？』

「言っていましたよ」

『うー、次のキャラ考えないと……』

「今のままでいいんじゃないですか？　今のが素ですよね？」

『うーん、今はそうかもしれないし、本当は違うかもしれない……
かな』

そう言ったのはウソじゃないんだ、生まれてからこんな喋り方な
んかしてなかったし。

いつも目立たず隅っこの方にいて、喋らないといけない時だけ俯
いたまま気弱そうに小さい声で話してた。

だから誰にも期待されない子、あえて言うならそれがあたしの素
だったんだと思う。でもその素はあたしは好きじゃなかった。

この喋り方はあたしが理想を組み立てて使ってるに過ぎないけど、
今にこれが自分だと言える素を手に入れたと思うてる。

『じゃあさ、クリーダも考えてよ』

次のあたしの口調』

「そういうのは全く分からなくて」

『ねえ、クリーダのそのですます調、それってクリーダの素？
なんであたしに敬語で話すの？』

「わたしはこれがごく普通です、特に敬語という認識はありません
でしたが、

いけませんでしたか？」

『認識なかったんだ……』

まー、キャラに合ってるしいいんじゃない？』

ホントに驚いたよ、クリーダってあの喋り方が日常会話の口調だ
ったんだね。

周りの人は丁寧に喋られて恐縮したり、優越感感じたりしたんだ
ろうけど。

クリーダのご両親ってどんな人なんだろう。

今に会う事になるかもしれないし、気になるナア。

その時に「娘さんを下さい！」なんて言ったらどんな親でも普通
に卒倒するだろうなあ。

それでその先で子供が欲しくなったらどうしよう。この場合、ど
つかから種をもらうしかないか。

どうすればいいんだろう、「種くださーい！」とか街角で言うもん
じゃないしナア。言われた方もビックリだろうけど、花の種とかじ
やないんだし。

sonでもって、どっちが産むんだ？ あたし？ クリーダ？ そ
れとも二人で仲良く？

横道にそれでどんどん想像してたら楽しくなってきた。

「どうしました？」

『クリーダはさ、もしあかし達の子供が産まれたらうれしい？』

「……えッ!？」

クリーダが凄く驚いてあかしを見んだ。あれ？　もしかしてそういう事じゃないのかな？

一生共にするって誓わせたから、あかしはそういう事って思ってたんだけど。

「もしかして、またですか？」

『また？』

「えと、産まれる様な事をしたって事でしょいか

あッ！　まさかとは思いますがあの人ですか!？」

『えええッ!？　なにになに？』

産まれる様な事なんてしてないから……もし授かれたらうれしい？　って聞いただけで』

「そうですか、安心しました」

クリーダはフーっと思を吐いてた、そんなに驚く事に思えたとは。

それにしても「またですか」って、何か目を離すとそこらでしちやう人みたいな言われ方じゃないのさ。

『大体過去のは全部事故だし、

男の子はあたしに興味持ったりしないから安心していいと思うけど?』

「わかりました、万が一の時はわたしが駆逐するので呼んでください」

駆逐とか……！

あ、さっき言ってた「あの人ですか」ってまさかね。そんなはずないよね。うん、きつと気のせいだよ。

「それで、さっきの答えですけど」

『うん、子供が産まれたらうれしいかってのね』

「とてもうれしいです……」

そう言っって少し俯くクリーダは、顔を真っ赤にしていた。

『なッ！ 何故そこで真っ赤になるうーっ！』

「どちらが母役で、どちらが父役をするか考えてしまっ……」

『それは随分と未来に行っちゃってますねー』

と、言うか何でそこで赤くなるかが不思議なんだけど』

「わたしの希望としては、父役がいいですけど」

『そうなんだー、なんでなんで？』

「命にかけて家族を守るうれしさが得られるからですよ」

クリーダのその満足そうな顔を見ただけで、あたしは全てを納得出来た。

多分、クリーダはあたしなんかよりも、ずっと先まで考えてるんだろう。

『そしたら、男の子がいいかな？ 女の子がいいかな？』

「もちろん女の子ですよ」

『ふーん、クリーダはあくまで女の子スキーなんだね』

「いえ、二人目で男の子です」

『ふっ2人目！？』

「出来れば3人欲しいですね」

『産むのってあたしだよ？』

「あ、産むのはどちらでも大丈夫です
家族の位置づけとしてわたしが父親役って事で」

『そ、そかそか』

「がんばりましょう」

『お……、おおッ！』

あたし達は思いもよらず、将来のかなり先の事と思える事を語ってしまった。

【33】位置づけ（後書き）

ストーリーの進み具合は、まったりペースですが今回実は少し重要なお話だったりします。

具体的には別ストーリーの科学魔導士編（先に書きましたが小細工魔法士編よりも未来の話です）への繋がりの伏線を1本作れた感じがします、と言ってもただの偶然なのですが、結果オーライと思う事にしたいと思います（；´・ω・`）

今後の構想ですが、この小細工魔法士編が終わった後、やっと本編へと入って行きたいと思っています。

適当なシリーズ名（仮）を付けたのはそのせいですが、はたしてそんなうまく続くかは本人も想像出来ません・・・。

【34】難易度A

魔戦士組合の掲示板には、多種多様な依頼が寄せられていた。

依頼は難易度別に分かれていて、難易度Sを筆頭に、A～Dと言った感じで左から右へとずらりと並べられている。

あたしは何となく難易度Sの掲示板を見ていた。流石は最高峰だけに凄そうな依頼がいっぱいだ。

例えば、魔軍との抗争への参加ってのがあるけど、依頼してる地域と対立している魔物勢力との抗争と言うか戦争に、傭兵として期間を決めて参加するって事。

で、魔軍って言うのはあたしたち人間と常に対立してる別の種族。世界のあっちこっちでその対立は起こっていて、聞いた話によると国そのものが魔軍に滅ぼされたりと言う事も実際あるらしい。

マトラ周辺は人間の勢力が強いから魔軍は大して攻めてきてないけど、世界はマトラだけじゃないからね。

他にもちよっとスケールが大きそうな依頼が多い、近場だけど凄いのを見付けたよ。マトラ旧市街の開放って奴。

昔のマトラ王国の首都が化物に占拠されてるから全部倒してくれってさ。街全部とかスケールが大き過ぎるな！。

「いきなり難易度Sはちよっと危険じゃないですか？」

あたしの後ろにいたクリーダが声をかけてきた。

『だねえー、どんなのかと思って見てたけどやっぱ凄いや』

「もう少し経験を積んでからならやってもいいですよ」

『いんやあ……、クリーダならやれるだろうけど、あたしには無理だと思うよ』

「そんな事ないですよ、あなたは本当はとても強いです
今はまだそれに気がついてないだけだと思います」

クリーダはそう言ってくれたけど、あたしが強いなんて本当なのかな？

クリーダはあたしが好きだから気を使って言ってくれてるのかもしれないけど、あたしはもう腐る事は辞めて新しい自分に生まれ変わるつもりだから本当なら嬉しいな。

「これはお世辞でもなんでもない本当の事です

わたしがあなたを気に入った理由の1つ、小細工魔法を気に入った理由がその強さですから」

『あたしについてもっと強くなれるのかな？』

「きつとなれます

小細工魔法は精霊魔法などとは別の系列らしく、わたしにはその原理が全く分かりません

でも……」

『でも？』

「あなたはわたしよりも強い魔法使いです」

『ええーッ！ まさかーッ！』

「だからこそ、わたしはあなたを好きになったのですよ」

その目は冗談を言っている目ではなかったよ、あたしは自分の魔法にもっと自信を持っていたんだね。

思えばクリーダは初めてあたしを好きになった理由を話してくれ

たんだ、体から出てるっぽいナニカではなかったんだね。
クリーダが両肩の上からあたしを包み込む様にしている両手に、
あたしも手を重ねた。

『クリーダは難易度Aのってどう思う？』

「スフエーンさん達は難易度Aの仕事をしてましたね
内容を選べば出来るんじゃないでしょうか？ 見てみましょうか」

『うん、行ってみよう』

あたし達は難易度Aの掲示板の前に移動した。
いくつかの依頼書を見ていて、ある依頼に目を止めたんだ。

『突然変異の魔物の討伐？』

「何でしょう、突然変異って」

丁度クリーダも見てみたいだ、細かい字で補足が書いてある。

リドナの街の付近で突然変異と思われる魔物が現れて、付近の通行が困難になっている退治して欲しいらしい。

おかしいなあ……魔物の突然変異ってどういう事？ 大体魔物なんて仕様そのものが決まってるじゃない様なもんだから突然変異とかなんて分かる訳ないもんだけど。

『依頼主は……えッ!？』

「これは……」

依頼主に書かれていたのはマトラ王国、つまりこの国からの依頼だったんだ。

この国には軍隊が存在しているから、ある程度の規模のものは軍内部で処理されて外部に依頼する事などないはず。

戦争を除けば考えられる理由は通常2つしかない、軍の損失との

釣りあいが取れない場合か、雑用的な事に軍を使いたくないか。

そしてこの仕事の難易度はA、つまり雑用の線は消える事になる。

『軍の手には負えないから誰か助けてって事かなあ』

「そうみたいですな」

軍に関わるのは嫌だけど、前の事もあるし保険を作っておきたい気もする。

前の事ってのは、もちろん軍の最高機密のルクトイをクリアダが全滅させちゃった時の事ね。

何日も経って未だお咎めなしだから平気だろうけど、借りを作っておけば安泰だ。

それと少し興味もあるかな？ 何をもって突然変異の魔物と言えるのか。

『ねえ、クリアダこの依頼って、一人つつに100万丸だって』

「やってみましようか？」

その仕事をやり遂げれば今度こそランクアップするかもしれませ
ん」

あたし達はまだ魔戦士組合に入って日が浅く、最低ランクの1のままなんだよね。

一応前の仕事でランクアップ確定とか言われたけど、本当に上がるかなんて分からない。

ある程度仕事をこなして期待値が高くなれば、それに応じてランクが上がるんだろうけど、何を基準にして期待値って決められてるんだろうか？

ともかくあたし達はこの依頼を受ける事にしたんだ、でもね……
組合窓口で聞いてみたらさ。

「突然変異の魔物の討伐……ですか？」

難易度Aになりますけど、失礼ですがあなた達のランクって……」

窓口の係員は名簿を確認しながら少し困った様な声を出した。

「はい、二人ともランク1です」

「決まってはいませんけど、一応難易度Aは目安としてランク6以上の参加が一般的となっていますが……」

「難易度Aの仕事は二回目です、問題ありません」

「分かりました」

損害等は全てが自己責任となりますので気をつけて下さい

尚、成功報酬の100万丸は個々に対しての支払いになります、つまりお二人で終えた場合はそれぞれ100万丸、お1人だけで終えた場合は1人だけに100万丸の配当となります」

これは毎回説明される事なんですけど、成功報酬以外は何も出さないよって言ってるの。

たとえ死んでも自己責任、それがあたし達魔戦士組合員の一般常識なんだ。

「心配頂けなくても大丈夫です、ちゃんと二人分頂きます」

「あ、集合日は五日後となっていますのでお急ぎ下さい」

『集合日?』

「はい、作戦決行日です」

この依頼を請けたのはあなた達二人だけでなく、他にも参加メンバーが居て既に現地に向かっているのですよ

団体行動になりますので現地に着いたら指示に従ってください」

『そうだったんだ、何人位いるのかな?』

「ここからの参加者はあなた達他に二名ですが、その他からの参加者も多少は居ると思います」

『多少ね……』

ちよつとご大層な事になって来た、作戦の指示を出すのってやっぱり軍なのかな？

「えっと、こんな事言うのは良くないのですが
実はこの依頼は二回目なのです」

『二回目って……』

「一回目は一年前で失敗してます、前は大勢の参加があったのですが……」

もちろん前回の生還者も居ますが、皆さん今回の参加は見送られています」

『ぐふうー……ッ！』

「今からでも考え直せますけど……」

『うーん……』

唸りつつクリーダの表情を窺がってみたけど、クリーダは何も言わずあたしを見てるだけだったよ。

『よしッ！ 参加しよう』

どういう表情になるかクリーダの顔を見てたけど、その顔には全く変化がなかった。

クリーダは全然臆していないね、もし表情が曇ったら撤回するつもりだったけど……。

と、言う事であたし達の次の仕事が決まった。

突然変異の魔物の討伐、サブタイトルには<リベンジ>と書かれていそうなこの仕事に。

【34】難易度A（後書き）

たまにはこんな依頼もどんなものでしょう。
ルビーさんがうまく活躍出来るといいのですが、それは本人の運次第な予感。

【35】忠告

あたしとクリーダは「突然変異の魔物の討伐」という依頼を受けた。

詳しい事はリドナに居る軍に聞けてさー。

『じゃあ、次はクリーダの新しい服の素材を買いに行こっかーッ！』
「わたしはこれでも十分満足なのですが」

『いいのいいの、あたしがクリーダに作りたいんだ』

よかった、クリーダは凄く嬉しそうな顔してくれたよ。どんな感じのにしようかな？

いかにもクリーダらしくて、クリーダしか着こなせない様なのにしたいなあ。

今度はもう少し辛さを出してもいいかな、でも今回ののはビジュアルは程ほどにして動きやすさを優先しないとね。

「お前らあれに参加するのか？」

『うん？』

「久しぶりだなお嬢ちゃん、それと綺麗なお姉さん」

その声は魔戦士組合の入り口の柱に、無駄にカッコ付けて寄りかかってる男から発せられた。

高っかそうな剣を、鞘から出してはまた収める動作を繰り返すこの男、どっかで見たことある様なない様な。

『えーっと……誰？』

「……でしたっけ」

「ぐはうッ！」

その男は大きさにズッコケて、地面にお尻を打ち付けてた。なんだ！？ コイツのクラスはズッコケ芸人か？

「クッ、まあいいや

お前らそこそこは出来るみたいだけどな、正直あれに参加して帰って来れるとはオレは思えねえ

前回戻って来れたオレ様が言うんだから間違いない」

『前回失敗した理由が今分かったよ

あんたが戻って来れたんなら、あたし達なら確実に成功させて戻って来れるでしょ？』

「話を聞けバカッ！」

『いだッ！ 角！！』

何故かいきなり怒鳴って、その男が持っていた本の角で頭を叩かれた。

しかも言い方は余裕のかけらすらなかった、そんなに必死になってあたし達に何を伝えたいんだ！？

「戻って来れたのは参加を辞めた奴だけなんだよ

ここじゃ知らない者がいない位の、凄腕の連中が次々と消息を絶つを見て、オレ等は作戦に参加するのを辞めたのさ」

『凄腕？』

「ああ、一年前ここにはトップランクの奴が居てな……

オレたちはそいつの戦いを見てやろうって、お祭り気分で付いてった訳なんだが

奴は作戦に参加し、そして戻って来なかった」

『ふむ、トップランクっていくつよ8位？』

「ランク10のバーサーカーだ」

『へー、ここにランク10なんてのが居たんだ』

そう言ったけど、実際ここにどんなのが居るとか、ランク10がどれだけ凄いのかよく分かんないんだけどさ。

シンナバーがランク6で、スフェーンがランク8だから2人よりも凄いつて事なんだろうけど。

「まあ、お前らにはランク10がどれだけ凄いかなんて分からないだろうな

難易度Sって仕事があるだろ？」

『あるね、一番難易度が高い仕事でしょ？』

「ああ、一般向けのはSが最高だがな、実はその上があるんだ」

『へ？ そうなの？』

「チッ、しょうがねえ、かわいい後輩達に先輩のオレ様が教えてやるわ」

『とたんに偉そうな態度になったよ』

剣の出し入れをやめ、その男は腕を組んでまたカッコ付けてた。その佇まいからして弱そうにしか見えないけどね。

「難易度Sのその上にはな、特例ってのがあるんだよ

もちろん一般には想像も付かねえスペシャルな難易度だ

それはランク9以上じゃないと参加出来ないんだが、ランク10のバーサーカーはその仕事をただの一度も失敗した事がなかったんだよ」

『なにそれ！？　なのになんで難易度Aで失敗してんの！？』

「この仕事は絶対おかしい、一応忠告だけはしておく

……特にお前は泣き虫なんだから気をつけろよ」

ズッコケ芸人は目線をそっぽに向けてそう言ったんだ。

『はーん、もしかしてあたしに惚れたな？』

あたしは両手を小さく横に広げ、やれやれと言うポーズをして見せた。

「プライドが邪魔をして素直に言えないんですね」

「バツ！ バカツ！ 変なこと言ってんじゃねーよツ！」

『いだツ！ また角ツツ！！』

いきなり声が裏返ったと思ったら、またもや持っていた本の角で叩かれたよ。

と言うか、なんでこういう時っていつもあたしだけがぶたれるんだ！？

ズッコケ芸人めツ！ 一回位は反撃してやろうと思ったけど、もう豆粒程の大きさになってるよ。足だけは恐ろしく速い奴だ。

アイツが逃げる瞬間「戻って来いよ」って聞こえたな、もちろん戻って来るに決まってるさ。

でもあたし達はこの時、まだこの作戦の本当の意味を知らなかったんだ。

【35】忠告（後書き）

何とかリンクSの上をでっち上げられました。

他にもつじつまの合わない点がいっぱいありますが、何とかこじ付けられないといけません＞＜

誤字の指摘など頂けるとありがたいです m () m

【36】道の真ん中で

あたし達は胡散臭い作戦にあえて参加する事にしたんだ。

突然変異の魔物の討伐って言う依頼は一年前にもあって、ズッコケ芸人の話だとランク10のバーサーカーはそれで命を落としたらしい。

ランクって強さの目安もあるけど、魔戦士組合が設定した目的はどんだけ仕事が出来るかだから、単純にはランクと強さは比例しないんだ。

かといって、特例の仕事を100%こなせたって事からも、相当な実力を持つてる事は確かなんだろうけどさ。

『ねえねえ、クリーダ？』

「何ですか？」

『さっき言ってたバーサーカーってどんなクラス？』

「文献を読んだだけで、わたしも実際に見た訳ではありませんが、戦う事でトランス常態になり、自らをただ戦うだけの存在にする狂戦士だそうです」

『へー、戦うだけの存在ねえー』

で、トランスってなんなの？』

「そうですね、バーサーカーの場合だと人間の壁を超えるって事じゃないでしょうか？」

人間は絶えず色々な事を考えてますけど、戦う事だけに全てを集中するのでしょう」

『何か危ない人みたい』

「そうですね、パーティーは組んだりはしないみたいです

戦い出すと味方とか敵とか関係なくなってしまうから」

『うへー、あたしはランク10になれたとしてもバーサーカーには

なりたくないかな』

「ええ、一緒に冒険出来なくなりますからならないで下さいね」

そんな事を話しつつ、あたし達は服の素材を買いにヨザワ屋というお店にやって来た。

ヨザワ屋はかなり年季の入った落ち着いた佇まいの建物で、何代も続く老舗のお店だ。

お店の中にはクルクルと巻かれた布達や、素材達が所狭しと並べられている。あたしはそれらを見てるだけでウキウキしてたまらなくなるんだ。

「やあ、いらっしゃい

今日はどんなのを探してるんだい？」

早速ヨザワ屋の店主が声をかけてきた。今日はって言われてる通り、あたしはこのお店の常連なんだ。

『クリーダの服を作ろうと思ってるんだけど、

丈夫でかつ柔軟性があってオシャレなのないかな？』

「ふむ、丈夫で柔軟性があってオシャレなのね、クリーダさんってこの人かい？」

『うん』

「ちょっと待っててね」

そう言って店主は奥の棚からいくつかの布を持って戻って来た。

「こんな感じなのはどうだい？」

店主が選んだのは全て濃い色の布だった、クリーダって黒っぽい色の方が似合うのかな？

『クリーダはどんな色が好き?』

「そうですね、黒っぽい色はわりと好きですよ」

『ふむふむ? おじさん、ここで作っててもいい?』

「ああいいよ、いつもの部屋を使いなさい」

あたしはその中で少し光沢のある黒い布を選び、それとは別に白い布を持って来てもらった。

いつもの部屋があるっていかにも常連っぽいけど、お金の問題があるからそれ程頻繁には買えやしない。

ただ、あたしは素材をかうとその場で作りたくなっちゃうから、いつも無理言って部屋を借りて作らせてもらってたんだ。

いつもの部屋のドアをパタンと閉めた。窓のないこの部屋なら落ち着いて創作を練る事が出来るって訳。

『とりあえず……』

あたしはクリーダの服を脱がした。

「そんなに見ないで下さい……」

『だって、ちゃんと見ないと作れないじゃない』

完璧としか言いようのないスタイルにうっとりしつつ、その白い肌の上に少し光沢のある黒い布をあててみた。

やっぱり肌が白いと黒い布って映えるね。白い布も買ったのは、全身まっ黒くしちゃうと全体が棒の様に1つになっちゃうから。だからアクセントとして白も入れるんだ。

『よし、ツーピースっぽいワンピースにしよう』

小細工魔法でサクツとベースを作ってみた。

全体的にタイトで体のラインがよく出る様に、腕は二の腕から細くして袖口だけを広めに。

ウエストで二つに分けて、上を被せる感じで合わせてツーピースっぽく。

次に胸からウエストそしてヒップまではピッタリさせ、そこから下はゆるく広げる。

背中は大胆に開けて、その上から小さなコウモリの羽を思わせる様なマントを付けちゃって、両肩も立体的に見える様な感じに布をかぶせ、その先端は鋭利に尖らせる。

胸の間も鋭角に開けて、チョット大人らしさを演出しちゃうか。

「あ……」

『アウチッ！ 下着が白だった……ここは外してブラトップを作っちゃおう』

柔らかめの布を少しもらって来て、それと表生地を合わせて見せるカップを作ってみた。

『おおーッ！ いいねいいねーッ！』

「ちよつと派手すぎないですか？」

『うん派手だよ、でもすっごく似合ってるーッ！ いいなあー』

羨ましく思ったのは、あたしには着れない領域の服だからさ。こういうのはある程度の身長がないと決まらないんだ。

後は各所エンドに白地の布でフィニッシュを作ってやって、スカートの裾には長いラインで白を入れると足がもつと長く見えるかな？
うーん、ウエストは白のフリルを入れた方がいいなあー。

こんな感じで、いつもあたしは楽しみつつこの部屋で服を作ってるんだ。

「おじさーん！ 出来たよーッ！ 見てーッ！」

「どれどれ、ほはおーッ！ いい出来じゃないか」

「ちょっと恥ずかしいです」

クリーダは着慣れないからかなり照れくさそうにしてたよ。

うんうん、今回ののはかなり会心の出来だと思うよ、何しろいつもよりモデルがいいからねッ！

「うん？ その長い靴下はなんだい？」

店主はクリーダに履かせた膝上まである、長いソックスに目が止まったらしい。

『ニーハイの事？ かわいいでしょ？』

「ほー、今はそういうのが流行なのかい？」

『うん、でもケガしない様になってのが狙いなんだけね』

今回ちょっと大変そうだから』

「そうかい、あんまり無茶はしないでくれよ？ ケガでもしたら

おじさん悲しいからさ」

『うん、ありがとッ！ 気をつけるよ』

あたし達は余った布を抱えてヨザワ屋を後にした。

うはあー、しっかしこの服、クリーダによっく似合ってるなあー。

そう思っ見てたらクリーダがあたしの手を握ってにっこり微笑んでくれた。もうなんかドキドキが止まらないです。

『リドナまでってどの位かかるのかな?』

「歩きだと3〜4日かかりますけど、乗り物なら一日で到着出来るでしょうね

前の日には到着しないといけないので、明後日出発しようか?」

『じゃあ明後日……?』

そう言ったのは、あたしの家とクリーダの部屋を繋ぐ道に立っていたから。

「あ、あの……」

『うん?』

「もしも、もしもなのですけど……」

クリーダがもじもじするのなんて初めて見た。一体どうしたんだろ。

『なにになに?』

「これから一緒に住むとかって……ダメ……ですか?」

真っ赤な顔して俯いて口籠ってて、その衣装と相まってもうヤバイオーラが出まくりダァーッ!

そう言えば一緒に住むなんて今まで考えた事なかったな。何だかんだで色々目まぐるしかったし。

でも、考えてみたらそれってごく当たり前の事なんだよね。

『あー、そうだよねその方がいいかあ』

「えッ! 本当にいいのですかッ!?」

『うん、じゃウチ来る? ってうわぁッ!』

クリーダはあたしを抱えてそりやもう大喜びだったさ。
道の真ん中でクルクル回る陽気な二人を、街の人達はビツクリし
て見ていたよ。

【36】道の真ん中で（後書き）

どうしてもいい所に入れすぎてすみません、そこだけは押さえて
おきたかったです^^

今後ともヨロシクお願いイタチ（人、馬、〇）まつ

【37】鼓動

クリーダとあたしは今日から一緒に住む事になった。

あたしの住んでる家は中途半端に余ってて、誰も家を建てない様なちんまりした空き地を借りて、そこに色んな素材を寄せ集めて建てた一部屋しかない小さな家。

小さいけど色々と手はかけててね、外見はちよつとおいしそうなスイーツに見える。何度も作っては分解しを繰り返して作った自信作だよ。

でも、この家は一人用に作られてるから、クリーダの荷物を収納出来る余裕がないんだ。なので取り急ぎ収納スペースをこそつと増築してみた。こういう時って小細工魔法が使えて本当に良かったと思う。

片側の壁一面を全て収納にした事で、クリーダの荷物をキッチリ収める事が出来たよ。

もちろん、あの遠眼鏡っぽいガラクタもちゃんと引越しされて来たんだ、でももう使う事なんてあるのかな？

そしてクリーダの表札をくつつけてハイ出来上がり。

この家に入り口入ってすぐに小さなキッチンや洗い場などがあるて、そのまま奥に進むと1つしかない部屋になる。

部屋は片側が窓以外は全て収納で、反対側の壁にベッドが設置されてる。

ベッドが部屋の半分近くを占領してる所に、クリーダの椅子とテーブルを持ち込んだから通路程度しか隙間がなくなっではいるけどね。

片付けが一段落して部屋着に着替えたクリーダは、ベッドに腰掛けてるあたしの前に椅子を置いて座った。

「今日からお世話になります、よろしくお願いします」

『こちらこそよろしく、その……狭くてごめんね』

「いえ、この位の方がわたしは落ち着きます」

『ここは今日からクリーダの家だから全部好きにしてね』

そう言ったらクリーダがベッドを見つめたよ、これだけは2つも入らないからクリーダには置いて来てもらったけどちょっと考えないといけないな。

『ベッドは二段にしてみようか？』

「それもいいですが」

『わわっ』

クリーダはスックと立ち上がり、あたしをベッドの奥に倒すと手前に寝そべってあたしの手を取って自分のお腹の上に乗せた。

「これでどうですか？ わたしはいいアイデアだと思いますが」

『た、確かにいいアイデアだけど……』

あたしはクリーダの手を引いて、胸にあてがって胸の鼓動を伝えた。

今更こんなドキドキするのもおかしいけど、とにかく今すっごくドキドキしてるんだ。もしかして何かを期待してるのかな？

「凄い事になってますね、一体どうしたのでしょうか」

『わかんないけど、急になっちゃった……目が回りそう』
「それは困りましたね、いい治療法を知ってますが……」

クリーダはあたしを引き寄せて、心臓の鼓動をあたしに聞かせる様に抱え込んだ。トクトクと脈打ってる音と呼吸する音が聞こえる。その音はとても心地よくて安心出来る感じがしたんだ、暫く聞いてたら段々ドキドキが治まってきたみたい。

「赤ちゃんはお母さんの心臓の音を聞くと安心するそうですよ
きっと人間は根本的に心臓の音が好きなんですネ」

大きな声がクリーダの胸に付けている耳から直接聞こえて来た。

『へえー、クリーダはお父さん役なのにお母さんみたいな事知ってるんだね』

それから少ししてあたしは目が覚めた。いつの間にか眠ってしまっていたらしい。

クリーダを見ると彼女も眠ってたよ、ここにクリーダが居るってやっぱ新鮮な光景だな。あたしは触れるか触れないかの加減で、クリーダをゆっくりとなぞりながらその様子を楽しんだ。

「ハッ!？」

『おや、起きたッ! おはよーッ!』

「おはようございます……、夢まで見てしまいました」
『へえー、どんな夢だったの?』

「え……、それはちよつと……言えないです」

クリーダは俯いて少し赤くなっていた。ふふーん。

『ププッ』

「な、何ですか？」

『こんな夢だったりして』

あたしはさっきまでやってた様に、触れるか触れないかの加減でクリーダをなぞった。

「……あなたでしたか」

『楽しかった？』

「ええ、とっても」

薄暗くなった窓の外を見ると、飼い猫のダイヤがふて腐れた顔で顔を上げて見ていた。

『ダイヤー、居たんだごめーん』

窓を開けるとダイヤが跳ねて飛び込んできた。

「その猫、ダイヤって言うんですか、雪みたいに真っ白ですね」

『うん、白くて綺麗だったからそう名付けたんだ』

他に牛乳っていう候補もあって悩んだけど』

「ぎゅ、牛乳ですか」

ダイヤにして良かったと思います」

『そお？ 褒められてよかったねー、ダイヤ』

ダイヤは何日も家を空けたのに全く痩せてない所を見ると、どこかで何かしらは食べてるんだろうな。

餌をねだる様子もなくベッドの上に乗って、嬉しそうにゴロゴロ喉を鳴らして足踏み運動してる。

『あんたはいつでもどこで食べてるんだろうね』

「わたしが撫でも平気でしょいか？」

『うん、全然警戒してないし平気だと思うよ』

よかった、クリーダも猫が好きなんだーッ！』

「ええ、小さい頃に飼ってましたよ」

クリーダは猫慣れした手つきでダイヤを撫で、ダイヤも嬉しそうに擦り寄ってた。なるほど、猫好きな人は猫には分かるんだ。

それにしても、クリーダの小さい頃ってどんな子だったんだろう。

やっぱり丁寧な言葉を話す子だったんだろうか。

ちよっと興味あるな。

クリーダがやって来たおかげで、少し華やかになった様な気がした。

【37】鼓動（後書き）

今回の仕事でうまくまとめられるといいなと思っています。

現在、今後のストーリー展開をいくつかを考えてて、どれにしようかそれともこうしようか・・などと色々と楽しんでいます。

今更なのですが、小細工魔法って錬金術っぽいですよ。

全くそういう事は意識してなかったのですが、随分と似てる様な事をしています。

確か、錬金術師は科学者で、元素とか構造とかちゃんと理解してないと使えないとか難しい設定があった気がします、小細工魔法士はご都合主義な魔法使いです（ノω、＊）

その仕様について、今後の話で段々と触れて行きたいと思っています。

それでは、今少しg d g dな話にお付き合い下さい m (_ _) m

【38】怪力ファイター

クリーダとの共同生活で、あたしのこれからも大きく変わってゆく気がした。

一緒に暮らすという事は、いい面も悪い面も見ていく事になるんだ。

お互いガンバれる時もあるれば、ガンバれない時もあるって事を理解していないといけないんだ。

と、覚悟してたけどまだ二日しか経ってないからか、今は全く気になる事はない。これっていつも一緒に仕事をしてるからなのかな？
それともこれから見えてくるのかな？

~~~~~

さて、今日はいよいよリドナへと出発する日だよ、不思議な事に不安と言うよりワクワクする様な気持ちの方が強いんだよね。

こんな胡散臭い依頼なのに「やってやる」って気持ちしか起こらないし、不思議と失敗する気がしない。

どんな根拠かと言われるとすっごく困るんだけどね、何かピンと来た……ただそれだけなんだけどさ。

荷物を乗り物にささっと載せて出発だ。あたし達が乗る白い花の様な形をした乗り物は、朝もやが出ているベイカの街並みを走り出した。

今から行けば二日余裕あるから、今日の夜中に到着したら丸一日は準備が出来るね。

嬉しいことにリドナの場所は大体分かる上、マトラの首都の方向だから道がちゃんとしてるんだ。

つまり今回は地図と磁石で方向を確かめながら進む必要がないの、方向音痴のあたしには非情に助かるよ。

ついでに言うところりーダも方向に関してはさっぱりらしい、あたし達ってとても素敵なパーティーだ。

『クリーダは何読んでるの？』

あたしが乗り物を運転している横で、クリーダは熱心に書類を読んでいた。

「一年前の討伐記録の資料です、組合から参考資料として頂いて来ました

作戦参加人数は108人も居たそうです」

『えー！ー！？　なんて大人数なんだ』

「参加者のクラス一覧も書いてありますよ

ランク10のバーサーカーも載ってます」

『ふむ、それだけ居て失敗するって原因とか書いてないの？

反省会とかしなかったのかなあ』

「そういう事は書いてないですね、

この資料には参加した者のクラスとランクだけで名前もありません」

『随分といい加減だねー、到着してから聞くしかないのかー……  
注意点位は教えてくれるんだろうし』

予定通りあたし達はその日の夜にリドナに到着する事が出来た。

リドナの街は首都に近いだけあって街の建物が綺麗で大きい、首都との行き来の宿場なので宿泊所もきつと多いはずだ。



街に入ると思った通り軍の車両をあちらこちらで見かけた、まずは軍にどうすべきなのかを聞いてみるか。

『と、その前に……ッ!』

「どうしました?」

『今回のキャラを決定します!』

「やっぱり作るんですか:」

『前回かなり好評だったから、今回も”んにゃん”で行くですんにゃん!』

「まあ……一部には好評だったかもしれないですね……、小さい子には特に」

『名づけてミミとシッポの大冒険! リベンジ!』

「なるほど、今回の作戦もリベンジらしいですね」

『おおー! クリーダはうまい事言うんにゃん!』

あたしは又ミミとシッポを生やし、シッポをネジネジして見せた。前回と違うのは服の色を白くしたから、ミミとシッポの色も合わせて白くした事。

「今回は白ネコさんですか?」

『うん、クリーダの服装が黒だからあたしは真逆にした方がいいんにゃん』

「念のために聞きますが、わたしはこのままですよね、十分特徴は作れてると思いますし」

『うん、そのままではオプション付けるだけんにゃん』

あたしは両手を両手を頭の上に掲げ、マンガで魔法使いがする様なポーズと共にクリーダに小細工魔法をかけた。

「オプションって、あの……ただでさえ目立つ服装なのに、これは

かなり抵抗があるのですが」

クリーダにかけた魔法で作ったものがナニカって？ ミミとシッポの大冒険で、今のクリーダに足りないものと言ったら。

『ミミとシッポだんにゃん！

あたしが白にゃおん、クリーダが黒にゃおん、設定はやたら仲がいいネコ達なのだ！

注意点は本物の耳が出ない様に気をつけるべし！』

「シッポが勝手に動いてますけど、これってどういう仕組みですか？」

クリーダに付けたシッポは、パタパタと椅子の上でリズムを取っている。

『仕組み？ 動くように作ったから動くんだんにゃんだからそのおミミも動くのだ』

クリーダに付けたネコミミは、あたしの声の方向に向いている。手で確かめようとクリーダが耳を触ったら、丁度指が耳入ったせいでバサツとミミが動いてクリーダがビククリしてた。よし、本物そっくりだ。

軍が集まっている場所を探していたあたし達は、街のはずれに軍のものらしいテントが見付けた。そこには大きなテントが3つ、結構な人数が居そうだ。

テントの手前に乗り物を停めて、あたし達は見張りの兵に宿泊の状況など聞いてみた。

見張りの兵は白と黒のミミとシッポが近づくと、一瞬「正気か？」

って顔をしたら、全く反応ナシだったらその方が残念だからいい反応だ。

「泊まる場所ならば、組合員用のテントがあるからそれを使ってくれ  
街の宿屋は極力使わない様に、一般人の泊まれる場所がなくなる  
からな」

見張りの兵が指差したテントには、魔戦士組合の旗が付いていた。  
魔戦士組合用のテントなんてものが軍に存在するんだ。

せっかくだし用意してくれてるなら使わせてもらおう。快適さは  
期待出来ないけど、なければ乗り物で寝ようかと思ってた位だし、  
平らな所で足を伸ばせるだけマシだろう。

「お前達の格好」

『んにゃん?』

「……かわいいな……」

『ありがとんにゃん』

あたしは片足を下げスカートを軽くつまみ、少し腰を落とすと少  
し頭を下げながらお礼を言った。

この兵隊、ほにゃーって言う様な表情の顔したよ。兵隊にもこの  
センスが分かる奴はいるんだね。

あたし達は魔戦士組合用のテントに入って中を見渡してみた。

中には10人位の組合員が居て、あたし達が入っても全く気にせ  
ずそれぞれ自由にしていたよ。

「失礼します、ベイカの組合から来ました  
よろしく願います」

クリーダがペコリと挨拶したので、あたしもペコリと頭を下げた。

他の組合員達は片手を上げたり、一言「やあ」とか「よろしく」と言ってくれたりして返してくれたよ。

でも、この格好をスルー出来るなんて、組合員位しか居ないだろう。やっぱ失敬な連中だ。

『特に場所は決まってるのかんにゃん？』

『適当に陣取って寝るかー』

「そうですね、明日詳しく聞いてみましょう」

あたしは隅っこに山になっている、布団と毛布とマクラを取って敷いた。

「わたしはマクラだけあればいいんですけど」

小声でクリーダが言ったけど、人目のある所じやマズイでしょ。具体的に言うとな他の人が気まずいって意味だけど。

『クリーダもちゃんと自分の取って来なきゃダメだんにゃん』

そう言ったらクリーダは不満そうな顔をしながら布団を敷いてたよ、でも不自然な位あたしの布団にくっつけてますけどね。

「お前らベイカから来たんだ」

『うひゃ!?!』

突然真後ろから声がして驚いた、と言うか気配が全くなかったぞ!?!

「お? 驚かしてゴメンな」

『ビックリしたーッ! ベイカがどうかしたんにゃん?』

「いやなに、オレもベイカ出身だからさ、同じ出身同士仲良くしてくれよな」

ベイカ出身だというこの男、細身の長身の体格に動きやすそうな軽装備、そして巨大な両手剣を背負っていた。

こんな大きな剣を振り回せる程のマツチヨには見えないけど、もしかすると脱いだら凄いのもしれない。確かにボディーラインはとても美しい。

その美しいシルエットから想像してはみたけど、やっぱりそんなものを隠してそうは見えない。どうやってあの巨大な剣を振り回すのか見てみたいもんだ。

その男は、「ヘリオ・ブラッド」と言う名前らしい。クラスはごく無難なファイター。

ファイターって言うのは、魔法に頼らないその戦闘スタイルはシンプルだけど、強力な技を使う戦闘のスペシャリストだ。

きっと、この男も技の強力さを求めていったせいで剣があのサイズになったんだろうな。脳が筋肉じゃないといいけど。

「そんなにオレの体が気になるか？」

やば……つい気になってチラチラ見てしまっていた。しかも気づかれていたとは何たる不覚ッ！

『んと、その大きな剣を、その細身の体で振るえるのか気になったんにゃん』

「ああ、オレってちょっと人より筋肉の質がいいらしくてさ」

その男、人差し指と親指の二本の指だけで、その巨大な剣を軽々と持ち上げて見せたんだ。

『は？』

「驚きました」

どんだけ重いのか剣を置いて触らせてもらったけど、クリーダと二人でもビクとしなかったよ。

巨大な両手剣を背負った長身の男は、信じられない位の怪力ファイターだったんだ。

### 【38】怪力ファイター（後書き）

物理攻撃系のクラスも輝ける内容にしたいです、うまく書けるといいのですが。。

あれから考えてたのですが、これが終わった後もう1つ別の主人公の話を含みたくなりました。

2010.05.25 おかしい文を修正

### 【39】朝から大騒ぎさ

早朝あたしは騒音と共に目が覚めた。

あたしは眠い目を擦りながら一体何があったのか辺りを確認してみると、怪力ファイターのヘリオ・ブラッドが床に転がってるのが見え、その前に息を切らして立つクリーダの姿があった。

「いってえー、散々な起こし方してくれるなあ」

「あ、あなたはッ！ あなたと言う人はッ！」

あのクリーダが取り乱してる、一体何があったんだろ。

『朝から何やってるんにゃん？』

「これを見てください！」

クリーダが指差したあたしの布団の隣に何故か布団が敷いてあって、掛け布団がヘリオが転がったその先に吹っ飛んでいた。

『んむー？ 布団が吹っ飛んだって事かんにゃん？』

「いえ、わたしは駄洒落を言いたいのではなく、布団がそこにある事を問題にしてるのです」

「いや、だからオレは何もしてないって……」

やっと知り合いが出来て嬉しくて布団を移動して寝ただけで」

「だからって、していい事と悪い事があります」

参ったなって顔でクリーダを見ているヘリオ、そして他の組合員もなんだなんだと言う顔で布団から起き上がってその様子を見てい



た。

『まあまあ、ヘリオはただ寝てただけみたいだし、クリーダも少し落ち着くのだんにゃん』

「なあ？　ただ寝てただけなのにこれはないよなあ」

「そうですか、だとしたらずいぶんと寝相が悪いですね

この人はあなたの布団に潜り込んでいたのですよ」

『ほえ？　潜り込んだあ？』

手で探ると確かに布団の右側があったかい、あたしの布団とヘリオの布団の間が約50cm。その間も手で探ってみたけど冷たいままだった。はて？

「ヘリオさんの手がわたしの手に当たって気が付いたから良かったものの、もし気が付かなかったらどういう事になっていたかと思うと」

『クリーダの手に当たったんにゃん？』

あたしは布団の左側も探ってみた、こっちもあったかい。でもこれはいつも通りだ。

「お前もこの娘の布団に潜り込んでたんだから、寝相の悪さなら相当なもんだろ？」

「わたしの場合、寝相のせいではありま……」

途中で何を言っているか気が付いて口籠るクリーダ。そりゃー、いつもの様にあたしを抱き枕にしてたなんて言えないもんね。

「ん？　寝相じゃないって？」

「ええと、この子の護衛の為です」

「ほー奇遇だな、実はオレも寝相は仮の姿で、本当はその娘の護衛の為だったんだ、

お互い護衛仲間って事で仲良くしようぜ」

ヘリオがそう言い切ってニカッと笑った直後、魔戦士組合用のテント全体が揺れた。

~~~~~

その後、テントの外に設置されている水の入ったタンクに付いた蛇口をひねり、水を出して顔を洗って歯も磨いていた。

太陽の光が斜めにさして、あたし達の足元から長い影を作っている。

「ヘリオさんには気をつけて下さい、あの人あなたを狙ってますからね」

『はえ？ あたしを？』

男の人に狙われてるとか言われても、あたしには全くピンと来なかった。正直それがどういう事なのかよく分からないんだ。

『でもさあ、護衛って言ってたんにゃん』

「それはあの人の出まかせです、騙されないで下さい」

『わかった、気をつけるんにゃん』

と言ってる視線の先をヘリオが歩いて行った、大きな剣を背負ってどこへ行くつもりだろ。

「お腹が空きましたよね、食事に行きましょうか」

『うん、軍って寢床は用意してくれても、ご飯は出してくれないんだにゃん』

リドナの街には朝から多くのお店が開いていた、パン屋さんもあれば食堂も酒場も開いている。

『どこにしようかんにゃん』

「朝からずいぶんと開いてるお店が多いですね」

『やっぱり都会に近いとお店も賑わいつてるのかんにゃん』

キヨロキヨロお店を見ながら歩いていると、突然物凄くいい匂いがして来たよ。こ……これは……これはこれはッ！
その匂いのする方へあたしはフラフラと歩いていった。

「どうしました？」

『この匂いってもしかして』

タレの焦げる香ばしい匂い！　パタパタと炭火をあぶる団扇の音。これはまさしくあたしの大好物のウナじゃないか！

あ、ウナって言うのはウナギの事ね。あたしは愛しさ故にウナって呼んでるんだ。

「まさか朝からウナギですか？」

『ウナが食べたいんにゃん』

一生懸命目でも食べたい事を訴えた、暫く食べてなかったからとにかく今はウナを食べたくてしょうがない。

「……わかりました、少しヘヴィですけどウナギにしましょう」
『わあい！　ひっさしぶりのウナだんにゃん！』

注文して待ってる間、先に出された一品をちびちびと食べつつ、メインのウナが来るのをワクワクしながら待つ。

期待がどんどん膨らんで頂点に達した頃にやって来るウナの器の蓋を、開けた時に香って来るなんとも言えない素敵な香りに酔いつつ、山椒を少し多目にかけて香りを楽しみながらご飯とウナの黄金比を緻密に計算しつつ食べてゆくんだ。

『美味しかったんにゃん！ 幸せ〜』

食べ終わった時に思わず声に出しちゃった、ウナギを焼いてるおじさんがニコニコしてこっちを見てたよ。

「すっごく美味しそうに食べてましたね」

『うん、ウナは好きだけど、ここのはすっごく美味しかったんにゃん』

いいお店を見つけたな、朝からおいしいウナを食べてあたしはご満悦だ。

「お昼は何を食べましょうか？」

『そうだねー、その”あの肉亭”ってお店がすっごく気になるんにゃん』

あの肉亭と書かれた看板には丸々として美味しそうな骨付き肉の絵が描かれていた。よくマンガに出てくるお肉にそっくりだよ。

「あの肉……確かに気になりますが、あれも結構重そうですね」
『それじゃ、夜は控えめにするんにゃん……』

食後の運動を兼ねて街をぐるっと散歩してたら、通りの先にヘリオが歩いてるのを見付けた。ヘリオもどっか食事に行ってたのかな？

「今夜の宿、どっか取れないでしょうか」

『どうしてんにゃん？』

「お風呂にも入りたいですし……仲良くもしたいですし」

『うーん……、軍の人が使わない様になって言われた様な気がするんにゃん……』

「極力ですよ、絶対と言う訳じゃないですから」

クリーダの提案には賛成だ、あたしも風呂には入りたいし、人目を気にせず仲良くもしたい。

それからあたし達は宿屋の空きを探して回った、でも残念ながらどこも一杯だったんだ。ああ……夢い夢だったね、仲良くするのは終わるまでお預けだ。

それでも、お風呂屋さんは見つけられたんだ、大きなお風呂でまったりしようねってクリーダを何とか納得させたけど、かなりガツカリしてた。

クリーダもやっと少しわがままが出てきたかな？　あたしはもつと出してくれて構わないんだけど。

突然変異の魔物の討伐まで後一日、この後明日の準備とかもして行かなきゃ。

【39】朝から大騒ぎさ（後書き）

ルビーさんの好物のウナの話は、何度か登場してますが今回やつと食べれました。

おかげでうなぎが食べたくなりました、考えてみたら半年以上も食べてません。

後、お寿司も食べたいです。そういう事を考え出すとキリがないので余り考えない事にします。

【40】手合わせトライアングル

あたし達がテントに戻るとヘリオがテントの前に立っていた。

「よお」

それは朝の騒動を全く気にしない屈託のない笑顔だったよ。

『おんや？　ヘリオは何してるんにゃん？』

「剣の練習をしようって思ってた相手探してるんだけどさあ、お前達暇なら相手してくれないか？」

『剣の相手ってあたし達剣使わないんにゃん』

「ああ、それで構わない」

『でもさあ……そんな剣が当たったら死んじゃうんにゃん』

「ちゃんと止めるから心配するな」

『うーん、どうする？』

あたしは後ろに居るクリーダに回答を求めた。

「わたしならお相手します、

ただしわたしは止めませんがそれでもいいですか？」

「それでいい、じゃあ街の外まで乗っけてってくれるいか？　あの乗り物お前達のだろ？」

ヘリオとあたし達は、街の外の適当な広場になっている所を見つけると乗り物から降りた。

今思い出したんだけど、あたしって戦闘経験って殆どないんだっただけ。

小細工魔法を戦闘にどう使えばいいかは大体分かるけど、ファイ

ター相手にどんな風に戦えばいいのかはよく分からない。

『一人つつかんにゃん?』

「ん? 二人でかかって来ていいぞ」

「ずいぶんと自信があるんですね」

『なに、それだけ今回の仕事は生半可な気持ちじゃ出来ないって事だ
とりあえず順番に行こうか』

カッコ付けて置いて結局生半可な気持ちらしい。

ヘリオはスラリと両手剣を片手で抜き身構えた。彼が持つとあの
剣が凄く軽そうに見えるけど、あれってクリーダと二人がかりでも
ビクともしなかった剣なんだよね。

身構えたヘリオを見てクリーダも身構えたよ、あたしも今回は勉強
させてもらうつもりで頑張ろう。

「いつでもいいぞ」

「行きますッ!」

クリーダは手を前にかざし、ヘリオに向かってプラズマを放った。
紫色に煌く光の帯が凄く速さでヘリオへと向かって伸びる。

しかし、ヘリオはそれを素早く左に避け、体を目一杯下げた状態
から一気に前に飛び、クリーダとの間合いを詰めた。

すると、ヘリオの目の前に黒く透き通った大きな玉が現れた。す
かさず後ろに飛ぶヘリオ。その丸い玉は、耳元で思いきり手を叩い
た様な鋭い音を立ててはじけた。

あの魔法って初めて見たけど随分と凄い音がするなあ、耳が痛い
や。

「うほおー、今のはヤバかったな」

「超重力の魔法です」

触れると光速を超えたスピードで、あらゆるものを押し潰します
ので気をつけてください」

「上等！ ……む……なに！？」

ヘリオが声を上げて驚いた理由、それは彼の足はぬかるんだ沼に
はまっている様に動きを封じられているからなんだ。

さっき後ろに飛んだ時、あたしはヘリオの着地した地面の素材を
やわらかく変化させておいた。

『それなら飛べないんじゃない？』

「お前って面白い魔法を使うな」

「行きますよ」

その声と同時にクリーダがプラズマを放った、しかしヘリオは剣
を振り回した遠心力で沼を抜け出した。

凄く軽そうに持っているけど、その重さはヘリオの体重よりもず
っと重いのだ。

「そんじゃ今度はこっちから行かせてもらう」

ヘリオは低く構えた姿勢から一直線にあたしに向かって来た、あ
たしも負けてはいられない。だって全ての物質はあたしの味方なん
だから。

この広場には既に小細工魔法が広範囲にかかっている、つまりこ
の広場はあたしの意のままに操ることが出来るんだ。

更にそれらのおかれている情報も知ることが出来る。もしその範
囲にトラップが仕込まれていたならそれを知る事が出来るし、同時に
あたしのトラップに変わるって事にもなる。

今の状況を簡単に言えば、ヘリオはあたしの手のひらの上に立っ
てる状態。あたしは圧倒的に有利なんだ。

ヘリオが物凄い勢いで近づいている、その速さは目で追うことが難しいけど地面からの情報で補う事が出来そうだ。

『あれ!?!』

突然、ヘリオの反応が消えた……地面には居ない、と言う事はッ!

『上ッ!』

「バレたか」

上空から何故か両手を広げ、にこやかに落ちてくるヘリオから素早く避け、ついでにヘリオの着地点に細工をしてやった。

ニヤけるあたしを見てかヘリオは剣を振って着地点をずらした。ちえっ……せっかく底なし沼にしてやったのになあ。

ヘリオは近くの石を拾うと着地予定地点に向かってそれを投げ込んだ、石は「ボッチャン!」と言う音を立てて深く沈んでいった。

「しかし、お前の攻撃は優しすぎるな

もっと本気で攻めて行かないと相手にダメージを与えられないぞ」
『う……、わかったんにゃん』

ヘリオの言う通りだね、確かにあたしは相手を傷つける攻撃をしてなかった。そういう攻撃だって使えたのに何故か使わなかった。

「次わたしに向かって来てもらえますか?」
「いいぞお」

トン!　と言う音を残し、ヘリオがクリーダに向かって飛んできた。その様子を地面からの情報を加算して観察するあたし。

ヘリオはプラズマや複数の丸い玉を次々と避け、ついにはクリー

ダの間合いに入る事に成功したんだ。

「こうなったらもうオレの勝ちだな」

「どうでしょう」

そしたら、クリーダの周囲に光のもやがかかったよ。何だろうあの光は。

ヘリオの勢い余った両手剣がもやに軽く触れた瞬間、剣は眩い光を放ち先端から燃えてしまった。

「ウナアアアーッ!?」

『ウナ!? (ごくり)』

「よく踏みとどまりましたね、こう見えてもこのもやはプラズマ化して一億度以上あります」

鉄であれば問題なく蒸発してくれる温度です」

「してくれる……じゃねエエツ!

オレの大事な大剣がアアーッ!」

見るも無残にヘリオの両手剣は半分位になってしまったよ。

『むしろ丁度いい大きさになったんじゃないかんにゃん』

「お前、本気で思ってないだろ」

『うひ』

大切なヘリオの巨大な両手剣はハーフサイズになってしまったんだ。

【40】手合わせトライアングル（後書き）

複雑な動きの表現はとても無理なのでやめておきました。

せめてもつと分かりやすく書けるといいのですが、と言う事で練習みたいな感じになってしまいましたとさ。めでたしめでたし。

「めでたしめでたし」と最後に付けると、どんな話でも良い話に思えるのが不思議ですね。

【41】屈辱のんにゃん（前書き）

1話の量が短いですが、これはスピードが遅いので1日で書ける量に準じています（ゝ・エ・ゝ・ゝ）

それでも何とか41話目まで来れたのは皆様のお陰100%です
m
（
）

【41】屈辱のんにゃん

クリーダの光のもやに触れたヘリオの剣は無残に燃え、そしてハーフサイズになってしまった。

大事な武器をやられて流石に気落ちした感じがするヘリオ、それを見て少しかわいいと思ってしまった。

『剣は材料の鉄があればあたしが直せるんにゃん』

「マジかよ!？ スゲェなお前って鍛冶屋も出来るのか」

『あたしはベイカの何でも屋もやってるのだんにゃん』

「おーおー、その話聞いたことあるぞ!？」

アレってお前の事だったのか」

へえー、あたしの噂がヘリオの耳にまで届いてたんだ、何だかちよっと面白いね。

「まだ続けられますか？

剣でバランスを取っていた様なので、半分になれば多少なりとも影響があると思いますが」

「せっかく面白い戦いが出来てるんだ、続けさせてもらうさ次はお前でいいか？」

ヘリオは半分になった剣をあたしの方へ向けて言った。

『うん、今度はもっと気張るんにゃん』

ヘリオはあたしの真正面からゆっくりと腰を落とし、低い姿勢のまま静止した。

今度はあらゆる方法を使ってヘリオを迎え撃つつもりだ。

『行くんにゃん』

ヘリオの足に足かせをし、真下とそして左右から土で作ったタケノコのような形の鋭いトゲを生やす、更に走れない様に地面の摩擦をなくしてやる。あたしはそれらを同時に真正面にいるヘリオに発動させた。

『へ！？』

離れていたはずのヘリオに魔法を発動させたはずなのに、そのヘリオは今あたしの目の前まで来てるじゃないかー！

ヘリオが剣を振るうモーションに入ったところで、強制的にあたしは小細工魔法の力で右10メートル程へと移動した。

具体的に言うとな地面に足を掴んでもらって引っ張ってもらったんだ。

不自然にズザーッとコケながら滑るあたしを見て、ヘリオは剣を途中まで振った状態で啞然としていた。

『ペッペッ！ どうだ驚いたかんにゃん！』

「ああ、マジで驚いたわ……丸見えだぞ」

『んなッ……？ うげええー！ッ！？』

足を引っ張って滑ったせいで、あたしの服装が随分とオープンになってしまってるじゃないかッ！

いそいそと服を直すあたし、スゲエ恥ずかしいったらありやしない。

『何という屈辱ッ！ もう許さないんだんにゃんッ！』

「……オレのせいだよ」

あたしはヘリオの足元をスッと指さし、そして地面を爆発させてやった。

そうさ、全ての物質はあたしの味方なんだ。その物質を爆発させる事だって出来るんだ。

しかし、土煙りの中を高速で移動しているものがある、しかもこの感じだとさっきの爆発は全然効いてないな。

あたしは足元の土に乗り、コケない様にバランスを取りながら移動して間合いを保ちつつ、ヘリオの反応がある少し先の地面を予測して連続で爆発させて行った。

「よし、大分いい動きになって来たな、だが……」

あれ……？ ヘリオの反応が消えているぞ！？ 連続で地面を爆発させていたせいで見失ったんだ。地面レーダーには反応なし、という事はまた上か！？

急いで上を見てみたけど何も居ない、ヤバイ……一体どこに行っちゃったんだ！？

「つーかまえたッ！」

『うぎゃーッ！？』

いきなりあたしの真後ろに沸いたヘリオに羽交い絞めにされたんだ、そのまま持ち上げられてあたしは足を空中でバタバタさせていた。

「うっはぁー！ かぁーわいいなぁぁーッ！ よぉーしよしよしよしーッ！」

すごい勢いで頭をグリグリ撫でられた、何となくどつかのおじさ

んが動物に言う様な事言われた気がする。

確かに今はネコさんの格好をしてはいるけどやっぱり腹が立つ。

『ぎえーっ！ 離せエエエッ！』

その時頭上でボコツつと言う鈍い音がした。

「はぐあ！？」

そして、ヘリオは間抜けな声を上げて地面に倒れてしまったよ。

どうやらクリーダがヘリオに石を投げつけたらしい。今回の勝者はクリーダと言う事になるのかな？

「全く……油断も隙もないですね」

「ふうー、参った参った」

降参のポーズをしているヘリオの横で、クリーダが腰に手をあてて怒ってる。

『わからないんにゃん』

「ん？ なにが？」

あたしはヘリオが悉く地面の情報とは違う位置に居た事と、最後にヘリオを見失った事が不思議でならなかった。だからその理由をヘリオに聞いてみたんだ。

「あー、位置をずらしたのは目の錯覚を利用したんだ

まだ動いてないって錯覚をさせて、実は移動してたら当然位置がずれるだろ？」

『あたしは地面からの情報も使ってたんだ、

目の錯覚だけじゃあんなにはズレないと思うんにゃん』

「そんなの、地面の情報を使ってるって分かれば簡単に騙せるだろ？」

『知ってたのかんにゃん!?!』

「そりゃあ、お前の反応の仕方とか見てれば分かるさ、目や耳だけじゃなく何か他の情報も使ってるなってそれが地面という事ならお前の魔法の使い方バレバレだ」

『そうだったんだ……』

じゃあ、最後に見失ったのはなんでだんにゃん?』

「お前全然気が付いてないのか?」

ヘリオはビククリした様な顔であたしを見て言ったよ。

『ムカツ! わかんないから聞いてるんだんにゃんツ!』

「なら教えてやるさ、お前の地面レーダーなごく至近距離はすっぱり抜けてるんだよ」

『あ……』

言われてみてやっと分かった、地面レーダーはあたしの足周辺にはかかってないんだ。

だってあたしの足までがレーダーにひっかかってたら、瞬間的には分かりにくいから除外してあったんだ。

「爆発のドサクサに紛れてお前の真後ろに飛んでたんだ、そしたら全然気が付かないみたいで、後ろにいてそりゃあおかしかったぜ」

『またしても屈辱……』

あたしは地団駄を踏んで悔しかった。

こんな短時間で欠点がいくつも出てくるなんて、小細工魔法の使い方をもっと改良しないといけないな。

【41】屈辱のんにゃん（後書き）

こんな戦いの練習は作戦前日にする事じゃありませんね。

出来れば、もうちょつとルビーさんには戦闘や、その他の事諸々と経験を積ませたい所ですが、あんまりまったりしすぎてもなので、後少しだけまったり話を入れたら作戦へGOしたいと思います。

何かおかしい所がありましたら指摘等頂けるとありがたいです。

シリーズ的には大分続く予定ですが、それがちゃんと文字に表現して行けるかはかなり怪しい所があります（≡ω≡）

ともあれ今後ともよろしくお願いします！

【42】理性と体のせめぎあい

あたし達はヘリオの剣の練習を終え、魔戦士組合のテントに戻って来た。

太陽の角度からしてお昼にはまだ早い、今のうちにヘリオの剣の修理をしてあげないといけないな。

修理する為には結構な量の鉄が必要になる。どっかに要らないくず鉄があればいいけど、そんな都合よく鉄が落ちてるもんじゃないだろうな。

『ヘリオの剣を直すのには結構な量の鉄が必要だんにゃん』

「そか、オレはちよつと軍に材料がないか聞いてくるわ」

明日に向けてヘリオは早く剣を直したいんだろうな、一言言うとさっさと軍のテントの方に向かってったよ。

「わたしもちよつと街で探して来ます」

『それなら、あたしも行くんにゃん』

「いえ、あなたはテントで休んでいて下さい
お昼までには戻りますから」

クリーダも責任を感じてるのかな？　ずいぶんと早歩きで歩いてったよ。

この状況であたしだけテントで休む訳にもいかないんだけど、今日は何だかとっても眠いんだ……朝早くに起きたからなのかな？　止まってるフラっとする位に眠い、少しだけ休んでから探しに行こう。

テントに入ると、あたしは硬い床に殆ど倒れるように横になりす

ぐに眠り込んだ。

~~~~~

それ程長くは寝てなかったと思うけど、誰かがあたしに声をかけてゆさゆさゆすってるのをまどろみの中で聞いていた。

『うーん……後少し』

声が止んで髪を優しく撫でられてる、声の主はきつとクリーダだろう。素材探しから戻って来たんだね。

髪を撫でられるのは大好きだ。まどろみの状態で髪を撫でられ、何とも言えない至福の幸せを感じていた。

少しずつ意識がはっきりして来た所で、あたしは髪を撫でてくれたお礼に横に寝そべってるクリーダをぎゅーっとしてあげた。

あれ？ クリーダってこんなに体が硬かったっけ？ それにやたら大きいぞ！？

『はてな？』

想定外の感触にあたしが目を開けると、目の前に居たのはまさかのヘリオだったんだ。

何でヘリオが横に居てあたしの髪を撫でてたんだ？ あたしは目が覚めた直後で事の状況を把握出来ずにいた。

「お前って意外に積極的なんだな」

若干ニヤた顔でヘリオが言う。ああ、多分あたしがギューっとした事について言ってるんだな。半分夢うつつだったから現実なのか

夢なのかがハッキリしなかった。

『はれ？』

「オレもお返しをのぎゅーをしてやろう」

『わあッ！？　へリオみたいなのがいる！』

「みたいなのって何だよ、本物だっつーの！

ほらぎゅーってしてやる、遠慮しなくていいぞ」

『ぎゅー要りません！　ぎゅー要りません！　さっきのは間違えたんです！』

「んあ？　間違えたって一体何を間違ったんだろうな」

『だ、誰って……そんなのへリオには関係ないんにゃんッ！』

「いや、関係あるね

だってオレお前気に入っちゃったし」

気に入ったという曖昧な言葉は困るんだ。クリーダも最初に使ってたけど、どっかの粋なおじさんが「ヨシッ！　お前さん気に入ったからオマケしといてやるよ！」って、みんなに言ってる社交辞令トークが先行してしまう。

『あ、急にめまいが……おやすみなさい』

「コラ寝るなッ！

見つけたんだよ、鉄のある場所をさ」

あたしは鉄を見つけたと言う言葉に反応して目を見開いた。

『ホントに！？』

そしてあたしはピヨンと飛び起きた。

「ああ、前に軍の車両がスクラップになったのがあるらしくてさ

軍の車両も同じ鉄だから大丈夫だよな？」

『うん、鉄なら大丈夫だんにゃん』

「んじゃ、今から案内するから付いてきてくれ」

クリーダがまだ戻って来てないし、又心配するといけなから書置きを残しておいた。

そして、ヘリオの案内であたし達は街の繁華街とは逆方向へと歩いた。やがて街の外に出ると、辺りは大きな木々が立ち並ぶ林になっていた。

たまに足元に落ちている小枝を踏むと、小枝が折れる軽い音を足に感じる。

「ここってデートとかにもいい感じの雰囲気してるよなあ」

『そかー？ 確かに静かだけど景色が単調でイマ一つだんにゃん』

そんで、スクラップはどこらにあるんだにゃん？」

「あう……もうすぐだ」

デートでこんな見所のないただの道に来るカップルなんてフツー居ないだろ、ヘリオっていつもどんなデートしてるんだ。

暫く歩いて行くと所々天井が破れて少し朽ちかけているテントが見えた。テントに軍のマークが入ってるって事は、もしかしてこれって一年前に使われたテントなのかな？

「ここならいいか」

ここなら？ くず鉄のある場所へ行くって目的でここに来たのに随分とおかしな事を言うなあ。

『んむ？ くず鉄車両はどこにあるのかんにゃん？』



あたしはテントの周辺をキョロキョロして軍の車両を探してみたが、それらしいものは全く見当たらなかった。

「すまん……車両があるって言ったのはお前を呼び出す為の口実で、本当はこのテントがあるだけなんだ」

『呼び出す口実って？』

何だかよくわかんないけど、この骨組みも鉄みたいだから素材の足しにはなると思っうんにゃん』

そう言いながらヘリオの顔を見てたんだけど、何かヘリオの表情がおかしい。何か素材探しよりも大切な事がある様な感じに見えるぞ？

「剣の事なんだが、実は最初から軍の試作品を使う事になっててな」  
『軍の試作品？　って事は？』

「すまない、剣の事はいいんだ

お前を人目のない所に誘いたくて嘘言ってたんだ」

『でも、ヘリオはその剣を大事にしてるみたいだし、そのままにするのはやっぱりもったいないんにゃん』

あたしはヘリオを気にせず、小細工魔法をテントの骨組みにかけてスルスルと抜き始めた。思ったより骨組みの本数が多い、これならヘリオの剣を直せるかもしれないな。

「ちゃんと聞いてくれ」

ヘリオはあたし前に回ると、あたしの両肩を掴んで真顔でそう言っただ。

『ちゃんと聞いてるよ、車両の話はウソでも鉄があった事は本当だったんにゃん』

「いや、そうじゃなくて、ここにお前を誘った理由をだな……」

『ふむ、じゃあその理由を言ってみるんにゃん』

「もう分かってるかもしれないが、

オレはお前を昨日見た瞬間に一目惚れしてしまったんだ、それをちゃんと伝えたかった」

それから、あたしとヘリオは黙ったまま少し時間が過ぎていった。静かな林の中から聞こえる鳥の囀りだけが音を発していると言う不思議な時間だ。

一目惚れって多分好きって事で間違いないんだろうけど、何かあたしにはピンと来ないものなんだ。

過去にこういう事がありましたって報告された様で、へえーとは思うけどさ。多分あたしの経験不足が原因だろうけど、現在進行形どうなのかが釈然としない。

『そうか』

「そうだ」

『じゃあ、その剣を下に置くんになん』

「ダアアアアーカラッ！ この剣はもういいんだよ

オレのカミングアウトを聞いてなかったのか！」

『それはそれ、これはこれ

あたしは一度受けた事は放り出したくないんだ

だから先にその剣を直したいんにゃん』

ヘリオは暫くあたしの目を見ていたけど、やがて黙って剣を地面に差し出した。

剣が置かれた後、あたしは骨組みをつかんで投げる動きと共に小細工魔法を使った。あたしの横に寄せ集められたテントの骨組み

が剣に吸収されて行くと、半分になった剣の先が少しづつ生えて行き、骨組みを使い切る直前に剣は元通りの長さになった。

その後で、硬度を出す為テントの布を燃やして炭を作って、それを剣に吸収させてやる。

ヘリオの両手剣の表面は黒光りし、剣独特の緊張した美しい光の反射を見せていた。

これで元通り以上の剣の完成だ。飾りっ気1つもないシンプルな両手剣だったので、サービスとして装飾の模様を剣に刻んでやった。若干は殺伐度が下がったんじゃないだろうか。

黒い刀身にキラリと輝くこの刃は、その自重と相まって相当な切れ味がある事だろう。

『はい、直ったんにゃん』

「あ、ああ……試し斬りしてみる」

ヘリオは地面から生えた大きな腕に剣を手渡され、少し戸惑いを表情に浮かべ少し仕方なさそうに言った。

ヘリオは片手で持っていた剣を両手で持ち直し近くの木を斬り付けると、幹は小気味良い軽い音を発して寸断された。

更にヘリオはその木が倒れる前に幹を高速で斬り続け、遂には木1本をたくさんの輪切りに変えてしてしまった。

「すげえ……メチャクチャ斬れるな」

『うまく行ったんにゃん、それじゃあ帰ろっかんにゃん』

あたしは目的を果たした事で安心して、すっかりさっきの事を忘れていたのだった。

「ちょッ！ さっきのオレの告白の返事はナシかよ」

『んー、何か全くピンと来ないんだんにゃん』  
「なら、ピンと来る様にしてやるさ」

ヘリオはどう近づいたのかわからない程、スムーズにあたしの前に立つと、かがんであたしを抱きしめたんだ。

それに対して、あたしは何が起こったのか少しの間理解が出来なかったよ。

ヘリオの力強い腕と大きな胸板があたしに触れ、その体温が徐々に伝わって来た。

どうしてだろう、あたしの意思と関係なく体から徐々に力が抜けてゆくんだ。

一体あたしの体はどうなってるんだ、ここでこの流れのままにヘリオを受け入れる訳には行かないのに。

そう思ってるのに、あたしの手が勝手にヘリオの背中に手を回してるんだ。ヘリオとは昨日会ったばかりで別に好きでもないのに、どうしてなんだか全然分かんないよ。あたし、どっかおかしいのかな？

あたしがヘリオの背中に手を回した事で、彼はあたしが受け入れたと思った様だ。さっきより強くひしっと抱きしめて来たよ。

ああ、違うんだ……でも何て心地が良いんだろう……もおどろきたら……誰か助けてよ……。

精神と体が何かを引っ張り合って戦っている、頭では受け入れてないのに体が勝手に求めているんだ。

既にあたしは自力で立つ事が出来なくなって、ヘリオに支えられている状態になっていた。

——その時

あたしの口からあの誓いの言葉が突然発せられたんだ。

『あたしは今後、クリーダ・ヴァナデインと、一生の人生全てを共有する事を誓います

身も心も魂までの全てを共有する事を誓います』

すると、ヘリオはその誓いの言葉に驚いた様に、あたしを抱きしめるのを突然やめたんだ。

あたしはヘリオの両手から滑り落ち、そのまま地面にペタンと座った。

誓いの言葉……それはあたしとクリーダにとって、とても大事な言葉のはずなんだ。

## 【42】理性と体のせめぎあい（後書き）

ルビーさんの数少ない異性からの告白の巻。

主人公ですが、格好付けずに精神的に弱い所などを書いて行ければと思います。

### 【43】種ゲッツの予感

まさかあの誓いの言葉が今ここで出て来るとは思わなかった。

あたしはヘリオの腕からずり落ちへたり込んだまま俯いていたんだ。

でもそれは、誓いの言葉をヘリオに言ってしまったショックからじゃなくて、本当に体に力が入らなくなってしまっただけなんだ。頭と体が食い違ってるのって気持ち悪い、頭では立ち上がろうと思ってるのに何故体が言う事を聞いてくれない。

「お前達って……そういう関係だったのか」

ずっとそのままで立ち尽くしていたヘリオが遂に口を開いた。

『うん……ごめんなのだんにゃん』

座り込んで俯いたまま返事をするあたし。

「謝る必要なんてないさ、多分そういう場合もあるんだろうしオレにはちよつとよく分かんない世界だけだな」

その言葉に対してあたしは黙っていた、こういう事はきつと言葉にしてしまうと多くの情報を失って正確に伝えられないから。

暫く経ってもまだ立ち上がれないあたしを見かね、ヘリオはお姫様抱っこしてくれた。

抱っこしたまま来た道を引き返して進むあたし達。

『いつもすまないねえー』

「今回が初めてだろ……、

だけどお前大丈夫なのか？ 立ち上がれないなんて、ちょっと体も熱いみたいだし熱が出るんじゃないか？」

『いんや、大丈夫だんにゃん』

これは多分生理が近いせいだと思う……やたら眠いし』

「ふーん、女って大変なんだな」

『この所忙しかったからすっかり忘れてたんにゃん』

ヘリオは少しの間、何か考えてる様な顔をしていた。

「なあ、明日の作戦参加するのやめとけよ

そんな体で無理出来ないだろ？ 報酬ならオレのを分けてやるからさ

って言っても……成功したらだけだな」

『大丈夫、明日になれば治ってると思うんにゃん、まだ2〜3日はあるはずだから』

「そっか……だが無茶だけはするなよ」

『言われなくてもわかってるんにゃん』

いつも眠くなるのは最初だけだから、きっと今回も大丈夫のはずだ。

この仕事が終わったら少しの間は休ませてもらおうとは思っているけど、今回の仕事はピンと来た仕事だから絶対に参加しておきたかったんだよ。

「だけどいいのか？」

『何がだんにゃん？』

「女同士じゃ子孫残せないだろ？ この事、お前の両親は知ってる



のか？」

『そう、それが唯一の課題だけど、その時は誰かから提供してもらう予定なのだんにゃん』

「誰からかって……そんな……」

ヘリオの表情が少し曇った、だからと言って誰でもいいって訳じゃないんだけどさ。

『それでね、クリーダがお父さん役で、あたしがお母さん役をするって事はもう決まってるんにゃん』

あたしは頭の上のつけ耳をくりんと回して見せると、ヘリオは動かしした耳を見て目をパシパシしていたさ。

『それからねえ、あたしの両親はもう居ないんだ、でもお婆ちゃんならすごく元気だんにゃん』

「そうだったか、ならお婆ちゃんは知ってるんか？」

『もちろん知る訳ないだんにゃん』

手紙のやり取りはしてるけど、もう三年位会ってない』

「辛い人生だな……」

何故かしみじみと言うヘリオ。

『そうだね、でも楽しいんだんにゃん』

「ならば、お前はお前の信じるものを貫け、オレもそうする」

何か吹っ切れたかの様な言い方をするな、あたしの事を諦めてくれたのかな？

『んむ？　ヘリオは何を貫くつもりだんにゃん？』

「それはだな……オレの最初の直感を信じて貫く」  
『ふむー、よく分からないけどガンバレんにゃん』  
「おう！ ガンバるぜ」

ヘリオの直感って、イマイチどんなのか分からないけど、まあ適当に応援しておくか。

「さっき言ってた誰かから提供してもらうって話だが」  
『あうん？』

「それさ、オレが提供してやってもいい、と言うか提供したいんだが」

「おや？ 思わぬ所で種ゲッツの予感！？ うーむ話してみるもんだよね。」

『へえー、随分と奇特な人がいるもんだんにゃん  
街角で箱持って募集でもしようかって思ってたのに』

「それはやめとけ……みつともない」

『半分は冗談だんにゃん、でもなんでまた？』

「そりゃー、男は好きな女に自分の子を産ませたいものだからな」

『そう言う事なら、ヘリオもきつと辛い人生だんにゃん』

あたしもしみじみと言ってみた。

「そうだな、でもそれも楽しそうだ」

もしヘリオからの提供を受けたとしても、ヘリオが望んでいるあたしは手に入る事はないだろう。それでもいいのだろうか。

もし本当にあたしがヘリオを愛していたならきつと断るんだろうか。それとも……あたしは彼にそこまで甘えているのだろうか？

魔戦士組合のテントに戻ると、クリーダがあたしの書置きを手に持って待っていたよ。

あたしがヘリオに抱っこされているのを見て、一瞬凄く驚いた顔をしたかと思ったら、すぐにキツとヘリオを睨みつけたんだ。

『違うんだんにゃん』

ヘリオの剣を修理したら何故か立ち上がれなくなっちゃって、仕方ないからヘリオが抱っこしてくれたんだんにゃん』

「そうですか……ヘリオさん、この子に何もしてないですよね？」

もし何かあった時は、わたしの命に変えてでもあなたを滅ぼします」

少しの余裕も感じられない真顔で言ったよ、クリーダはきつと本気だな。

「ああ分かってるさ、オレもお前らの将来を壊したくはないからな」

そう言われて、クリーダは不思議そうな顔でヘリオを見ていたよ。

あたしの為にクリーダが布団を敷いてくれて、ヘリオがその布団に寝かせてくれた。みんな優しいなあ、凄く嬉しかったよ。

横になってすぐにあたしは眠ってしまったらしい、目が覚めて横を見るとクリーダと一緒に寝ててくれた。

あたしがクリーダのつけ耳を指でツンツンしてバサバサさせて遊んでたら、少ししてクリーダが目を覚ました。クリーダはあたしを見るときに微笑んでくれたんだ。

『あれ、ヘリオは？』

「軍に用事があると言ってあれからすぐに出て行きましたけど……」

「どうやらまだ戻っていないみたいですわね」

『ヘリオは明日、軍の試作品を使うらしいんだんにゃん』

「試作品？ それは武器ですか？」

『剣らしいんだんにゃん』

「剣を半分にされたせいで、軍の試作品を使う事になったのでしうか

だとすると、使い慣れた剣が直った事で、断りに行ったのかも知れませんか」

『それがねえ、ヘリオは最初から軍の試作品を使う事になっていたらしいんにゃん』

「最初からですか……気になりますねその試作品」

『ね、後で見せてもらうんにゃん』

「あ……それはそうと、体の調子はどうですか？」

もし、体調がおかしかったら今回の作戦には参加しない方がいいと思うのですが

別にこの作戦に拘らなくても、他にいい仕事を探せばいい訳ですし」

『ありがと、でももう大丈夫だんにゃん』

「因みに、原因は生理ですか？」

『うん？ よくわかったんにゃん』

「計算上はそろそろのはずですからね

後何日かはあると思って今回の仕事は受けたのですが、次回からは直前から少しの間は仕事を入れない様にしましょう

前後する場合もある事ですから」

『ゴメンだんにゃん』

「いえ、これはわたしのミスです

もつとよく調べておくべきでした」

調べておくべきでした……か。クリアダッてあたしの生理の予定なんてどうやって知ったんだろ？ これは聞くべきなのか聞かない

でおくべきなのか。

『クリーダ先生、素朴な疑問！』

あたしは生徒の様に手を上げた。

「はい、なんでしょう？」

『クリーダってどうやってあたしの予定を調べたのかんにゃん？』

気になったら聞いてみるべきだね、何しろ思い立ったら即行動する主義なのだ。

「そ、それは……前に話した様にわたしはずっと……」

『そうだった、見てたんだったんにゃん』

そんな事まで見られてたんだ。と、言う事は……もっと他にあんな事とかこんな事とかも見られてたって事なんだろうね。もう今更隠す必要なんてないけどさ。けどさ。

こんな感じであたしは生理前の一時的な不調の為、すっかり二人には迷惑をかけてしまったんだ。

### 【43】種ゲッツの予感（後書き）

嫌でもやって来るアレの為に、スケジュールを組まないといけない計画性のある冒険者ってストーリー上はそうそう居ないと思います。と言いつつもやっぱり行き当たりばったりです。

はしるべき所とはしらない所を明確にすべきなんでしょうね、周囲の状況は十分はしってるんですが、携帯向けという前提なので会話多目にして、その他の説明を少なくはしてるつもりですが、たまにくどい程解説を入れてしまう癖が困ったものであります。

これからよろしくお願いいたします m ( \_ \_ ) m

#### 【44】露天風呂でなかよしにゃん

あたし達は予定より少し遅めの昼食をとっていた。

『こ……コレが＜あの肉＞かんにゃん』

「見事なまでの骨付き肉ですね」

その骨付き肉はその骨を手を持ち、豪快にかぶりつくのが正式な食べ方らしい。かぶりついてワイルドに引きちぎる。

他のお客の食べ方を見ていたら、男も女もみんなそんな感じで食べていた。

『おじさん！　＜あの肉＞って何の肉なんだんにゃん？』

すると、＜あの肉＞を焼いているおじさんはニヤリとして

「そりゃもちろん＜あの肉＞だよ」

と言ったんだ。

ああ、やっぱり＜あの肉＞ね……結局何だか分からない肉な訳だ。見た目通りにメチャクチャ美味しいんだけどね。何なんだろうね。何の肉かが分かったら＜あの肉＞じゃなくなっちゃうから、あえて言わないサービスなんだろうけど。

『テントに戻ったら軍に明日の事聞いてみなきやだんにゃん』

「そうですね、戻ったら聞いてみましょう」

お風呂の予定もありますし」

クリーダにとって一番のお楽しみがお風呂になった、大きなお風

呂でゆっくり温まって明日に備えよう。

『そう言えばさ、組合の窓口の人はベイカから2人参加してるって言ってたんにゃん』

「一人はヘリオさんみたいですけど、もう一人は誰なのでしょうね」  
『あの中にいるのかもんにゃん』

あたし達以外に10人位あのテントに居た、3〜4人のパーティー組が3つ位かな？

殆どの人が朝どっかに出かけちゃったけど、どこかで明日に向けて特訓とかしてるのかもしれないな。

あたし達も朝に少しだけしたけど、あれだけじゃ足りる気がしない。特にあたしには何とかしないといけない問題がいくつもある訳だし。

食事の後、あたし達はスケジュールを確認する為に、軍のテントの前へとやって来た。

「明日の作戦までのスケジュールを確認したいのですが」

「今夜、2000に組合員のテントに集合がかかる予定だ」

『ニイマルマルマル？ それは何なのだんにゃん？』

「時計の20時の事だ、その時間にテントに居てくれればいい」

『わかったんにゃん』

「質問させて頂きたいのですが、いくつかいいですか？」

「ふむ、何だ？」

「魔戦士組合員のヘリオさんが、明日の作戦でそちらの試作品を使うそうなのですが」

「試作品とはどう言ったものなのでしょう？」

「試作品？ 私はそういった話は聞いてないので答える事が出来ないしかし、例えば軍の試作品があったとして、完成品ではないものが一般に貸し出される事は考えられんな」



「そうですか……」

もう一つ、明日の作戦のターゲットである突然変異の魔物と言うのは、こうしている間にどこかに移動してしまったりしないのでしょうか？」

「それに関しては問題ないと聞いている

確実にその魔物はそこにいると言う事なのだろう

私は一年前の作戦に立ち会っていないので、魔物がどういう種のものかもわからんし、私の様な一般兵には詳細は伝えられておらんのだ」

『ふーん、つまりあんたは新米の兵隊さんって事かんにゃん？』

「まあ、そういう事だ」

「よくわかりました、ありがとうございました」

クリーダはそう言って、軍の見張りにペコリと頭を下げた。

「さっきの話、どう思いますか？」

食後の歯磨きをしながら、クリーダがさっきの兵隊が言ってた事について聞いてきたよ。

『どうもこうもないんにゃん』

一般兵に話さない秘密の武器って事は確定的明らかなのだ

それか単なる国が作ってる武器のテストで、実は軍とは別の機関みたいなのがあって、そこ経由だから兵隊は知らないって線も考えられなくもないんにゃん』

「兵器の開発は確かに軍とは別みたいですけど、真相はどうなのでしょうね」

『それにしても、何でヘリオなのかんにゃん』

「さあ、もしかしたらわたし達が知らないだけで、他の組合員にも渡される予定なのかもしれませんよ？」

『だしたら悔しいんにゃん、軍め……あたし達をナメやがってッ！』

「ふふ、さて……」

『うん？』

「お風呂でゆっくりしてきましようか」

『まだ大分早いけど行くのかんにゃん』

「早い時間だからいいですよ、今なら貸切りだと思いますから」

『おーッ！ それはいい案だんにゃん！』

と言う事で、あたし達は少し早めのお風呂に向かったんだ。

お風呂屋さんはさっき行った繁華街のすぐ近くにある、大きな煙突があるからすぐ分かったんだ。

いやあ、まだ日が沈んでいない時間からお風呂って何か贅沢でいいねえー。

クリーダの言うとおり、まだ他のお客は来てなかったよ。予定通りにあたし達の貸切り状態だ。

「あ、待ってください」

脱衣所であたしがズバーっと服を脱ごうとしたら待ったがかかった。

『わたしがやります』

クリーダは丁寧にやさしく一枚つつ脱いではカゴに畳んで入れてくれたんだ。

そうしてもらったら、もちろんあたしもお返しをしてあげなきゃね。

番台にはおじいさんが居るけど、こういうやり取りをしても全く気にしないのは流石だ。

お風呂屋さんの大きな湯船の奥の壁には、見たことのない美しい大きな山の絵が描いてあった。山の裾が左右に美しく広がり、その山の中腹から上に雪が積もっている。

そして、この湯船に浸かって出た言葉はどういう訳か

『ふうー、極楽極楽う』

だった。

目を閉じてお湯に浸っていると、クリーダはあたしを自分の膝に誘導して座らせた。

クリーダはあたしの体をゆっくりとなぞっている、ズルいなあ……この体制だとあたしはクリーダの足にしか届かないじゃないか。

あたしはすつくと立ち上がり、くるりと180度回転してクリーダと向かい合った。

『こうしないとあたしが届かないんにゃん、んむ？』

振り返った先に気になる扉を見つけた。その扉には屋外の湯って書かれているじゃないか。

これってもしかして露天風呂？ あたしはピヨコンと湯船から上がり、気になる扉を開けてみたよ。

そこには岩で作られた特別大きな露天風呂に、壁に大きな岩を積んで作った山奥の秘湯を思わせる雰囲気、素晴らしいフィールドが作られていたんだ。

『ほらーッ！ 外にもお風呂があるんにゃん！』

あたしは大はしゃぎでそのお風呂に飛び込んだ、外の湯船は浅い

からあたしが普通に座っても溺れなさそうだ。

外はほんのり風が吹いていて、お湯で火照ったらこの風で冷やす事が出来そうだな。

クリーダがあたしの前に回って座ると、またあたしを誘導して向き合う様に座らせた。

そして、向き合ったあたし達は口づけを交わすと、お互いの体を手を思うままにすべらせはじめたんだ。

#### 【44】露天風呂でなかよしにゃん（後書き）

ご存知の通りあの肉とは、別名マンガ肉とも言われるアレです。大きな骨の真ん中に不自然な程に丸い肉が付いている、マンガで食べている様子はとてもおいしそうに見えますね。

ところで、ルビー・サファイアのサファイアが、サファイアではなくサファイヤなのかなのですが。

これは最初にどっちにするか悩んで決めたのですが、言葉の響きの印象によるものです。

勝手なイメージ的なのですが

「サファイア←」（最後に何かが下がる気がする）と「サファイヤ→」（最後に何かが上がる気がする）という、間違いなく気のせいだと思いますが：結果としてサファイヤになりました。手塚先生勝手なイメージですのでごめんなさい。

## 【45】のぼせた2人とあと1人

お楽しみが過ぎてすっかりのぼせてしまったあたし達は縁台でへばっていた。

あたしは縁台に仰向けに寝て、クリーダの膝枕に頭を乗せ白い雲がいくつか浮かぶ青い空と、クリーダの美しいボディーのシルエツトを同時に眺めて堪能していた。

『ふー、涼しいんにゃん』

「一緒に大きなお風呂に来たのは初めてですね」

『うん、いつも小さなお風呂だんにゃん』

ベイカにあるあたし達の家には小さいけどお風呂があるんだ。

二人でゆっくり入れる様にもっと少し広げたくても、敷地面積の制限を受けてどうしようもない状況なんだけどね。

なら一人つつ入ればいいのと思うかもしれないけど、そこで身を清めてから神聖な儀式の場へと行く重要な役割を果たしている、時間差を作らない為二人同時に清めるんだ。

「わたしはあの小さなお風呂も好きですよ、お互いの距離がとても近くなりますから」

『それはあたしも思うんにゃん』

そう言うのと、あたしの頭に軽く手を添え嬉しそうな顔で見つめた。

『ねえ、クリーダ』

「何ですか？」

『あたし達が子供を産むのにさ、ヘリオが提供してもいいって言っ

てるんにゃん』

「……もうそんな事話したんですか……」

『うん、ヘリオはあたしに好意を持ってたみたいだったからハッキリさせなきゃって思ったんにゃん』

「でも……ヘリオさんは少し難しいかと思います」

『うむ？ なして？』

「こういう場合、強い感情を持っていたりすると後で気が変わって色々問題が起こるかもしれません

あくまで提供のみで、出来れば二度と会わないのが理想なのです」

『うーん、そっかあ』

「もし、ヘリオさんから提供を受けるとしたら、産むのはわたしの方がいいでしょう

あなたに強い好意を寄せているヘリオさんは、その気持ちを抑えられるかわかりませんし……それに」

『それに？』

「提供を受けると言う事は、か……関係を持つ必要もありますからわたしにはそれをとて容認出来る気がしません……」

『わかった、あたしもつとよく考えるべきだったんにゃん』

「でも、ちゃんと考えてくれていて凄く嬉しいです」

そして、クリーダはまたキスをしてくれた。

のぼせたのが大分おさまってきた頃、あたしの足元の方からドアが開く音がした。

「あ……！」

あれ？ クリーダの顔を見上げていたら何だか驚いた表情をしているぞ？ 誰か入って来たみたいだけど、誰を見て驚いてるんだろ？ あたしはヒョッコリと起き上がってドアの開く音のした方向を見てみた、そこに見たものは見たことある顔だったよ。

『なんだ、ヘリオかんにゃん』

そして、あたしはまたクリーダの膝枕の状態に戻った。でも、すぐにヘリオがここに居る不自然さに気が付いてもう一度起き上がって確認したんだ。

間違いなくそこに居たのはヘリオだった、あたしが想像した通り細身で整った筋肉の付いた体をしていたよ。

だけどそこに居るヘリオは何も言わず、そして微動だもせずまるで石になったかの様にあたしをじっと見つめていたんだ。

「いけませんッ！」

クリーダがあたしの前に立ちはだかってヘリオの視線を遮断した。その様子を見てあたし達の今の状況を把握したんだ。

でも、あたしは裸を見られても別に何とも思わなかった。

やっぱりあたしは男性への恋愛観念がないのだろうか、服がめくられるのはみっともないとは思っても、裸を見られるのは何とも思わないや。

その代わり男性の体の造形には非常に興味がわいていた、ヘリオがあたしを見つめたのと同じ位、あたしもヘリオを見つめ返していたよ。

『いいよ、クリーダ』

ヘリオも固まってないでお風呂に入るんにゃん』

「あ……ああ……」

「普通は遠慮して戻るものです」

少し遠慮しがちに入って来たヘリオに、尚もあたしの目は釘付けになっていた。



『ふうん、ここって混浴だったんだんにゃん』

辺りを見渡してみるあたし、見たからと言って何がわかるもんでもないんだけどさ。

「お前知らなかったのか？ 男湯と女湯のドアの外は繋がってるんだぞ？」

『知らなかったんにゃん』

「見るなよ……」

だがその様子じゃ知っても居たんだろうけどな  
そんなに男の裸が珍しいのかねえ？」

『だって初めて見たんだんにゃん』

だから珍しいのだ』

「は？ お前……そうだったのか」

「この子の体はとても神聖なのです、なのであなたのけがれた目で汚さないで下さい」

クリーダが不満げに口を尖らして言った。

「けがれた目とか……オレってすげえ言われようだよな」

そのやり取りに思わずあたしは噴出してしまった、クリーダもいつもと違って冗談を言う様な口調だったからだ。

クリーダって冗談を言う時は、目をつむるとか口を尖らすか何かしら癖が出るんだよね。

一見するとクールそうに見えるけど、実は物凄く直情的で物事を包み隠さない性格なんだよね。あたしはそれが分かって急にクリーダが大好きになったんだ。

『ヘリオもずいぶんお風呂早いけど、もう用事は済んだのかんにゃん?』

「ん? ああ、後は明日を待つだけだからゆっくりと汗を流そうと思っただけな」

『軍の試作品はもらって来たのかんにゃん?』

「いや、それは明日の作戦前って話だ」

『残念だんにゃん、どんなのか見たかったのに』

「まー、そんな時になったら見せてやるさ」

ヘリオがお湯に浸かったせいで、よく見えなくなった事にあたしは残念さを覚えた。

仕方ないので湯船のへりに座り、それとなく続きを見る事にした。

「お前なあ……神聖って言うなら……そんなジロジロ見るなよ」

そして、それとなく作戦がまるで通用していなかったと言う。

『うん? 珍しいから見たいだけだんにゃん、そんな事男がイチイチ気にするな』

「そんなもの見ても目の毒ですよ」

「お前もそんなものとか言うな」

つーか、二人とも少しは隠すとかしたらどうなんだろうね」

あたしはともかく、クリーダも全然気にしてないみたいだ。

クリーダも服の露出は恥ずかしいみたいだけど、フルオープンだと気にならないんだな。ヘリオだけが恥ずかしがってるこの状況ってちょっと面白いかもしれない。

「ヘリオさん聞きましたよ、提供者になってもいいそうですね」  
「お? もう話したんか?」

『あうん』

「ただ……、ヘリオさんはこの子に強い感情を抱いてますので、提供してもらおうとしたらわたしと言う事になりますが、それでも提供して頂けますか？」

「えッ!？」

ヘリオはビックリしてクリーダの顔を見つめ、次にあたしの顔を見た。その顔にあたしは困った顔でかすかに頷くしか出来なかったよ。

「……何だよ」

「提供して頂く以上の事は何1つして頂く訳にはいかないからです  
この子に提供して頂くとしても、その後二度と会わず全ての事を  
口外しないでいられますか？」

「そ……それは……」

「わたしはそうする事はあなたを不幸にするだけだと思うのです  
なので、この子に提供して頂く訳にはいかないのです」

ヘリオは俯いたままじっと何かを考えている様だった。

「今すぐ提供して欲しいと言う話ではありません

後何年か経って……その時にまだその気があるならばですので、  
今回答を急ぐ必要はありません」

少しの間が開いた後、ヘリオが俯いたまま口を開いたよ。

「オレは……そいつにしか提供する気はない

例えば二度と会うことが出来ないとしても、誰にも言う事が出来ないとしてもそれは絶対に変わらないだろう」

あたしには理解出来る様な出来ない様な、少しぼんやりとした話  
だったんだ。

【45】のぼせた2人とあと1人（後書き）

いつもこんな駄文にお付き合い頂きありがとうございます m  
し m

この小細工魔法士って話が少し重いでしょうか？

次を書くとしたら、重さは少な目で行きたいと思います。

まだ冒頭しか考えられてませんが、短めにまとめたいです。

今後ともよろしくお願いいたします。

## 【46】調子に乗って食べ過ぎて

あたし達はお風呂から出て少し街をぶらりとしていた。

夕方に近づいた街は活気にあふれている、夕食の買出しの客が多いせいだろう。

目的もなくぶらりとしてるあたし達は、そんな人々がハチの様に店から店へと行き交う様子を眺めながら歩いている。

夕食は6時ちょっと過ぎ位の予定だから、少し腹ごなしをするつもりなんだ。

『あたし……、ヘリオに悪いことしちゃったんにゃん』

やっぱりクリーダの言う通りだ、ヘリオに提供してもらう事は多分彼の未来を不幸にしてしまうだろう。

それにあたしも二度と会わないと言うのは少し気分的にひっかかるんだ。

恋愛対象じゃなくてもせっかく知り合った人と二度と会ってはいけないって言われると流石に気になるもんだよ。

そう、これはそういう類のひっかかりなんだよ。

「ヘリオさんも子供じゃないんです、自分の考えに責任を持って生きていくはずなのですから、あなたは全く気に悩む必要はないですよ」

『んー……そりゃそうだろうけど』

「それより、随分と男性の体に興味がある様でしたけど、わたしはその事の方が心配です」

『へ？』

「あなたが男性に目覚めてしまうのではないかとハラハラしています」

した」

『いんやあ、あれはただの興味本位というもので

ヘリオは恋愛対象とは違うんだんにゃん』

「では、あなたにとってヘリオさんはどういう存在ですか？」

『存在？　なんだろー？　何か面白い友達？　かんにゃん？』

「（ほっ……）お友達なら、なお更ジロジロ見るのはどうかと思えますよ」

『ううむ、言われてみればそうだんにゃん』

あたし達は散歩を終えて魔戦士組合のテントに戻って来た。ヘリオも既に帰ってのんびりと横になっていた。

他の組合員も本を読んだり、道具の手入れをしたり好きにしているで緊張感を感じられなかった。

「お？　随分と遅かったな」

あたし達が戻ると起き上がって、陽気な口調でそう言ったんだ。

『うん、街を散歩して来たんにゃん』

よかった、ヘリオの様子はまた元に戻っている。あれから気まずいままだったらどうしようかと思っていたから安心したよ。

『ベイカであたし達がこの作戦に参加する時、

もう2人ここに向かってるって聞いてたんだけど、ヘリオの他のもう1人って誰だろうんにゃん？』

「ん？　まだ他にも居たのか？」

オレはここに来てる連中とは一通り話をしたが、そんな奴は居なかったぞ？」

『んー？　そんじゃ遅刻でもしてるのかんにゃん？』

「まあ、明日の朝に間に合えば問題ないんだ  
その時に来るのかもしれないぞ？」

『そだった、

ところでヘリオは明日の作戦、どう戦うつもりなんだんにゃん？』

「どうって、オレは目の前に現れた敵をただ倒す事しか考えてない  
が」

『そか、そんなもんでいいのか』

「んあ？ 他に何か必要な事なんてあるのか？  
いつもオレはそのやり方でやってるんだが」

ヘリオって極めて単純でとても作戦とは言えないやり方がよく似  
合いそうだ。

もし、事前説明で「目の前に敵が現れたら倒せ、以上」だけだっ  
たら、今日の夜8時にある事前説明も1分もかからないだろうな。

「ファイターというクラスは真正面から戦うのが一番得意らしいで  
す」

「お？ クリーダお前よく分かってるな」

「それ故に、それ以外の戦い方をする器用さはないそうです」

目をつむってそう言うクリーダのこの言葉はもちろん冗談半分だ。

「ワハハ！ まあ実際そうなんだがな」

もちろん、ヘリオの戦闘中の解析力が相当なものなのはクリーダ  
もよく分かっている。

戦いの中で相手を瞬時に見切り、どう対処すればいいかの答えを  
導き出す事が出来るんだろう。

クリーダの丸い玉の魔法も一瞬で見抜いてたし、あたしが地面セ  
ンサーを使ってる事もバレてた、更にそのセンサーに死角が存在す



る事までも分かってしまう程なのだから。

~~~~~

少し休んだ後、あたし達は夜の食事へと出かけた。そしたら、ヘリオも一緒に行くって付いてきたよ。

でも、夜は軽めにしないといけないからどうしようかって思ってたけど、ヘリオがヘルシーな上に凄くおいしい食べ物があるって案内してくれたんだ。

その食べ物って言うのはオスシって言って、あたしは初めて見る食べ物だったさ。

そのオスシと言う謎の食べ物は、ご飯を小さく丸めた様なご飯にワサビとかいうツーンとするハーブが塗ってあって、その上に生のお魚の切り身が乗ったものだった。

それをショウユっていうソースに付けて食べるんだけど、ご飯のすっぱさとワサビの辛さ、そしてショウユとお魚の切り身が織り成す絶妙なハーモニーにカルチャーショックを覚えてしまった。

『な……ッ!? なんてうまさなんだーッ!?』

オスシ考えた人ってきつと天才なんだんにゃん!』

「これ、すごいおいしいです……驚きました」

「だろー? これで寿司の虜がまた二人増えたな」

余りの美味しさに軽めを一瞬で通り越して、お腹イッパイに食べちゃった。

こんなおいしいお店がたくさんあるなんて、リドナの街に住んだらきつと危険だろうね。

「お前らなあ……案内はするって言ったけど、食事代まで出すとは

「言わなかったぞ？」

『ふう……しこたま稼いでるんだからケチ臭い事言うな』

「ごちそうさまです、とても美味しかったですよ」

「その稼いだ金が今なくなつたんだが……」

「宵越しの金は持たない主義ならば問題ないですね、また誘ってください」

「はあ、やれやれだぜ」

クリーダににこやかな笑顔でそう言われて、ヘリオはやれやれと言う様なポーズをしていた。

『うー、調子に乗って食べ過ぎたんにゃん』

あたしはお腹をさすりながら食べ過ぎた事を少し後悔していた。

「どれどれ？」

そう言って、ヘリオがあたしのお腹をさすった。

「ふむ、もう何ヶ月目かって感じだな」

『ウアアアアアアアアアー！ツ！！』

「うわっ！？」
「どうしたんだ！？」

『なーんて事してくれるんだにゃん!』

「何だあ!？」
もしかして恥ずかしがってるのか？」

『あつたり前だアツ！』

「裸は見られても平気なのに不思議な奴だな」

この時、てつきりまたクリーダの制裁が入るかと思ったけど、何故か黙ってあたし達の様子を眺めているだけだったよ。

「しかし、お前の食べた量にオレは衝撃を覚えたね」

『なんの！　もしあれがドーナツだったら倍は食べれるんにゃん』

「はぁー、その小さな体のどこに入るんだかね」

『小さい言うの禁止だんにゃん』

それにしても、クリーダは何故いつもの様に割って入らなかったんだろう？　ヘリオはもう危険じゃないって思ったのかな？

それはきつとあたしがヘリオに取られる危険性はないって安心してくれてるんだろう。

信頼してくれてるなら凄く嬉しいな。ちょっとあたし達の関係も進歩した気がする。

作戦前夜の最後の晚餐、あたし達は明日起こる驚愕の出来事をまだこの時は微塵にも予測出来なかったんだ。

【46】調子に乗って食べ過ぎて（後書き）

何を隠そう、お寿司が大好物です。

お寿司をお腹いっぱい食べるととても幸せになれます^^
くれぐれも食べすぎに注意しないといけません。

作戦まであと少しになりました、最初はさっさと作戦へGO!と思
ってたのですが、お寿司やうなぎの素晴らしさを世間に広めたい
一心で、大分時間がかかってしまいました（ノー、；）

そろそろ先の話を決めていかないといけませんね。前も書きました
が、候補がいくつもあってどれにしようか悩んだり、別の候補を考
えたりしています、

でわでわ、今後ともよろしくお願いいたします（@^▽^@）？

【47】魔物討伐の作戦前夜（前書き）

大変お待たせしました。やっと、戦い間近まで進みました。

【47】魔物討伐の作戦前夜

その夜の8時、予定通りに魔戦士組合のテントに軍から集合がかり明日の説明会が執り行われた。

組合員達は事前にテント内に並んで座らせられていた、その人数はやっぱり少ない。あたし達を入れて15人しかいなかったよ。

アンハイド將軍と言うのが今回の作戦の責任者らしい。

そのアンハイド將軍は、軍服を着ているのだけどその顔立ちはまるで、本屋のおじさんみたいだった。体格も随分と小柄だ。

「あー、キミ達が明日の作戦に協力してもらえる魔戦士組合員達かね？

しかし今回は随分と少ない様だな」

一年前は100名を超えていた参加者だったからね、肩透かしがあっても不思議はない。

「人数も少ないし、一人つつ自己紹介でもしてもらうか
そっちの端から名前とクラス、そしてランクを言ってくれ」

アンハイド將軍はテントの右端を指差した、あたし達の反対側だから、あたし達の紹介は最後になるな。

組合員達は順々に自己紹介をして行った、そのクラスはやはり低くてもランク5だ。あたし達みたいな新米はこの作戦に参加してないんだな。

そしていよいよヘリオの番になった。ヘリオはその場で立ち上がり、自己紹介を始めた。

「ヘリオ・ブラッド、クラスはファイター、ランクは」

「ああ、ヘリオ

キミの事は分かっているからいいよ……次」

おんやあ？ やっぱりヘリオだけが特別なのか？ もしかしてヘリオって軍に認められた実力の持ち主だったりするのかな？

次はクリーダか、そうなるにあたしが最後になるね。

「クリーダ・ヴァナディンです、クラスは科学魔導士、ランクは1です」

するとアンハイド将軍が不満そうな顔をして、周りに居る軍の間と顔を見合わせた。

他の魔戦士組合員達も他のメンバーと何か話している。ランク1って言った事にひっかかってるな？

「なに？ ランク1だと？」

「はい、わたしと隣のこの子も組合に入ったばかりなのでランク1です」

「キミ達はランク1なのに難易度Aの作戦に参加するのかね？」

「わたし達が前回参加した依頼の難易度はAでクリアもしています、従ってわたし達的能力で難易度Aを遂行する事には問題ありません」

アンハイド将軍はため息をついて、片手でクリーダに座る様に合図した。

それで、あたしが立とうとすると、手で静止されたよ。ランク1の自己紹介なんて不要って事だろね、何だか失礼な奴だな。

「するとどうなるのかね？」

アンハイド將軍が後ろに居る、几帳面そうな男に声をかけた。

「銃士のエルバがランク9、召喚士のミメットがランク8です」

几帳面そうな男はメモを見ながら、几帳面な声でアンハイド將軍に報告してた。

「ふむ、そうか

ではエルバを組合員の隊長、ミメットを副隊長にそれぞれ任命するが二人ともよいか？」

「はい」

任命された二人が答えた。

エルバって言う銃士は常にゴーグルを携帯している男、何気に少しイケメンだ。ほら、そんなだから奴の横に居る女がうっとりした眼差しで見てるよ。

それでもってその女にエルバが親指を立ててオレに任せろって感じのポーズしてら。ああいうタイプって過去のストーリーとか分かっちゃいそうで嫌なんだよな。

副隊長になったミメットは、メガネかけててテントでずっと本読んでいた。一見して女の子って感じのタイプの女だ。

何の本かわかんないけど、今もその手には本らしきものが握られてる。

「明日の討伐は街の外、北側で行う事になる

組合員の指揮に関してはエルバに任せるので皆従ってくれ」

どうやら軍の説明はたったこれだけらしい、解散の合図があり軍

の連中が引き上げていくよ。

「ヘリオ」

「ああ」

引き上げる途中、アンハイド將軍がヘリオに声をかけた。ヘリオは分かっていたかの様に返事をする、アンハイド將軍に付いていたんだ。明日使う試作品の打ち合わせでもするんだろうか？

「みんな集まってくれ、明日の作戦についてミーティングを行う」

早速イケメンエルバが組合員を集めたよ、リーダー氣質があるみたいだから適任だったな。

それから綿密な作戦が練られたんだけど、敵がどんなかも知らせてないのにこういう作戦も何もないだろうとあたしは少し思った。

「じゃあ前衛は決まったな、次後衛だけど火力はどの位いるんだ？
精霊魔法使いは手を上げてくれ」

精霊魔法使いは2人居るらしい、ランクはそんな高くないらしいけど実力はどうなんだろ？ とかランク1のあたしが言うのもおかしいか。

「わたしも火力と言う事になりますでしょうか？ 純粋な精霊魔法
使いではないですけど」

「ん？ ああ、ランク1の人か、何て言ったっけ？」

「クリーダ・ヴァナディンです」

「ほお、美しい容姿に似合う美しい名前だな」

それじゃ、そこで精霊チームにまとまってくれ」

エルバの横のあの女が、ライバル意識丸出しの目でクリーダを睨
んでたのがおかしかった。安心しなよクリーダは彼には関心はない
と思うからさ。

クリーダは2人の精霊魔法使いの近くに座った。

「次に要のヒーラー、手を上げてくれ」

「はいーッ！ クレリックのオブシディアンでいすッ！」

エルバの横の女が陽気に手を上げた。クレリックってシンナバー
のプリーストと具体的にどう違うのかわかんないけど、ああ見えて
も何かの神様とかを崇拜してたりするんだろうね。

他に二人のヒーラーが手を上げて、三人のヒーラーチームが作ら
れた。

「後、残りだがミメット副隊長が召喚士で、キミは？」

エルバがあたしを見て言った。残りってあたしとミメットだけだ
つたんだね。

「小細工魔法士だんにゃん」

「小細工？ なんだそりゃ……」

その言葉に場の連中が一斉に笑った。ペッペッペッ！ いつもの
事さ。

「小細工じゃない、小細工魔法士だんにゃん！」

あらゆる物質はあたしの味方！ 味方に付けると頼もしく、敵に
付けるとガツカリな万能魔法使いなのだんにゃんッ！」

「うーむ、だがその説明だと何が出来るかよくわかんないな

何でも出来る事って実は何にも出来なかったりするんだぜ？ 例

えば回復魔法って使えるか？」

「使えなくもないけど得意でもないんだんにゃん」

彼の言う事はごもつともだ、あたしって特に抜きん出た能力ってあったんだろうか。

「攻撃魔法は？ パーティの火力になれるのか？」

「うーん、うーん、使えるけど火力と言われると」

「召喚魔法はどう？」

ミメットが横から口を挟んだ。

「むッ！？ それなら得意だんにゃん！ 呼ぶんじゃなくて作り出すんだけど」

「よし、じゃあキミ達二人で召喚士チーム作ってくれ
位置的には中衛だな、前衛のサポートだ」

結果的にチームは4つに分けられた、前衛チームが6人、あたし達召喚チームが2人、そしてリーダーの居る精霊チームが3人、オブリディアンに居るヒーラーチームが3人。

「分かれたチームで、得意不得意など話し合ってくれ
オレは精霊チームの位置に入る」

銃士は後方支援タイプのアタッカーだからそうなるだろうね、オブリディアンがかなり不満そうな顔してる、間違いない彼女はリーダーに敵意を感じてるだろう。ホント、女ってめんどくさいよ。

「改めまして、召喚士のミメットよ
300種以上の召喚が出来ます」

得意な召喚はエキドナ」

ミメツト副隊長が挨拶してくれたので、あたしも慌ててお返しの挨拶をした。

「ほえー……300種って凄いいんにゃん、そこでそのドナドナって何なんだんにゃん」

「エキドナよ、魔力の続く限りけして傷付ける事の出来ないわたしの使える中では最強の召喚獣なの」

「そうなんだ、ミメツトは強いんだんにゃん」

「あ、ごめんね……自慢したみたいになってるよね
あなたはどんな召喚をするの？」

「頭の中で考えたものをいろんな素材を使って作り出す感じかんにゃん？」

元に命が存在してないから死なないと言う点では一緒かな、
他に乗り物を作ったり、家をリフォームしたりもするんにゃん」

「へー、小細工魔法って凄く便利なのね」

「うむ、一言で表すなら便利が適切だんにゃん

クリーダーやあたしが今着てる服もあたしの魔法で作ったんにゃん」
「そうなんだ！

で、さっきから気になってたんだけど、そのミミとシッポってホンモノ？ 凄く動いてるけど……」

「これも小細工魔法で作ったんだんにゃん」

「うそーッ！ かわいいーッ！」

「ミメツトも欲しかったら作ってあげるんにゃん」

「本当に！？ 作ってえーッッ！」

あたしはミメツトにミミとシッポを付けてあげた。ミメツトは大喜びだけど、まさかミミとシッポが増えるとは思わなかったよ。

あたし達はこんな感じで、殆ど雑談だけでこのミーティングを終

えてしまった。今に至って緊張感のかけらすらないのはどうなんだろうとも思うけど。

結局、その夜ヘリオは帰ってこなかった。

朝になり、テントの隅にはあたしが直したヘリオの剣が置かれたままになっていた。

【47】魔物討伐の作戦前夜（後書き）

クレリックと、プリーストは宗派で使い分けてさせて頂きました。

（実際は同意とされる事が普通みたいです）

このストーリー上限定ですが、神に仕える人をプリースト。仏に仕える人をクレリックとしています。また、神様仏様と言っても、この世界のわたし達の世界のものは別の物と思って下さい。

わたしはハッピーエンド至上主義なのですが、色々ある全ての問題を解決して行けるかが今一番悩みどころです。

技量は全然足りてませんが、なるべくいい方向に向けて行きたいと思っ
てますへへ；

今後ともヨロシクです（≡ω≡）

【48】討伐作戦開始

作戦当日、朝になってもヘリオは魔戦士組合のテントには戻って来てはいなかった。

『ヘリオは結局戻ってこなかったんにゃん』

「そうですね、どうしたのでしょうか？」

出発の準備を終えてクリーダと話していると、軍の兵隊がテントにやって来た。

「魔戦士組合員は全員速やかに外に集まるように」

とうとう軍の集合がかかった、あたし達組合員は小走りでまだ明けたばかりの少し薄暗い空の下へと出て行ったんだ。

外に出ると軍のテントの前に軍の兵隊達がずらっと並んでいた、人数で言えば軍の方がずっと多かった。

って事は組合員としては軍の補佐をすればいいのかな？ 軍なんだから立派な兵器もあるんだろうし。

「組合員各自、適当に並んで聞け」

昨日の几帳面そうな軍人が声を上げ、あたし達はそれとなくチーム毎に固まって聞いていた。

軍の群れの中にアンハイド將軍の姿が見えないなあ。そうになると、この几帳面な軍人が今回の指揮を取るって事だろうか。

「私が今回の作戦の指揮を行うアンモチン大佐である
これより魔物討伐を行うが、我々軍の後に続いて現地へと向かう事

また、我々とのやり取りが必要な場合はキミ達の隊長であるエルバ、又は副隊長のミメットを必ず通すこと、以上だ」

以上だってえ！？　ここに来てても魔物の説明はナシなのか！？

『(ねね、ミメット)』

「(なに?)」

『(未だに敵がどんな魔物かって説明もないってどうなんだんにゃん)』

「(うーん……そう言えはないね、エルバに聞いてもらおうか)」

ミメットはそそくさとエルバの所へ行くと、彼の耳に手をあてて何かを伝えていた。別にミメットが直接聞いてもいいらしいのに……。

「アンモチン大佐、質問があります！」

よし、エルバが手を上げたぞー。これでやっと魔物の説明が聞けそうだ。

「なんだ？　エルバ」

「我々は討伐予定の魔物の情報を未だ頂いておりませんが」

「それについては依頼書に突然変異の魔物と書いてあったと思うが？」

「もう少し具体的な詳細を頂きたいのですが、我々の作戦に大きく影響しますので」

「残念だが我々にもそれ以上の情報がない為、詳細については伝える事が出来ない」

「そうでしたか……了解しました」

「他にはないか？　ないな？　では現地へ出発だ」

チチチィーッ！ なんなんだこの作戦はッ！？ 敵の正体が分からない癖に、敵の居る場所が分かるってどういう事なんだーッ！

「作戦頑張りましたよね」

エルバを先頭に横を通り過ぎてゆく精霊チームのクリーダが声をかけてくれた。

「うん、頑張るんにゃんッ！」

納得出来ない表情をしていたあたしは、急いで表情を笑顔に切り替えてクリーダに返した。

精霊チームに混ざって前衛チームが進み、その後ろにヒーラーチーム、最後にあたしとミメットの召喚チームが続いた。

いよいよかぁー、オラ何だかワクワクして来たぞオーッ！ 今日
は体調も元に戻ってるし、あたしの欠点の対策もちゃんと考えておいたし全てが万全だ。

軍の後にゾロゾロと続いて歩いてるこの道、昨日ヘリオと通った道だな。

そう言えばどこにもヘリオを見かけないぞ、まさか先に行っちゃってるなんて事もないだろうけど、一体どうしたんだろう？

暫く歩いて行くと、次第に辺りの緊張感が増してきた。さっきまで聞こえていた鳥の囀る声や、小動物の気配がまるでなくなったよ。これって魔物に近付いたからだろうか？

『鳥が全然鳴いてないんにゃん』

「うん、わたし何だか緊張してきちゃった……」

ミメットが緊張した様子で腕組みをして歩いていたのを見て、あたしは彼女の背中にそっと手をあててあげた。

『おや？』

「え？」

あたしが声を出したのはミメットの背中の手触りがすごく良かったからなんだ。何ていうか触ると何故か癒される場所。ミメットの背中ってまさにそんな感じだったんだ。占いをしたら今日のベストスポットはきつとミメットの背中だろうね。

「ちょっと……何してんの……」

『ごめ……でもミメットの背中の手触りがメチャクチャいいんだんにゃん』

スベスベして得られるこの癒しは何だろう、あたしの顔は今とても緩んでいるに違いない。

「うえええーッッ！ ダメだよーッ！」

『ウヘヘヘヘ、よいではないかーッ！ よいではないかーッ！』

「コラッ！ 静かに歩け！」

ミメットが嫌がってるのをしつこく続けていたら、後ろにいた軍人に怒られちった。ちえっ……。

でもミメットの緊張は解れたみたいだ、もう腕を組む事はなかったよ。

街を出発してから20分程歩くと列の先頭が停止した、ここらが現地って事なのだろうか。

辺りは生き物の気配が全くなく、木々が風に揺れる葉の音だけがたまに聞こえてるだけだった。

それらを鬱蒼とした木々が更に増幅させて妙な雰囲気醸し出している。

『もしかして着いたのかんにゃん?』

「かな?」

アンモチン大佐は、あたし達組合員をその前に集めた。

「ここから先、この方向が作戦エリアだ」

アンモチン大佐は、進行方向から見て右の方向を指差し、組合員もその方向を一斉に見た。

場所が決まっているのって魔物の巣か何かがあるからなのかな? そう考えればつじつまは合うんだけど。

「それではエルバよ、組合員の指揮を執って速やかに作戦を開始してくれたまえ」

「はい」

着いた早々始めるのか、遠足じゃないしここでお弁当食べようとかって事もないけど、随分と唐突なんだな。

「これより討伐を開始するが、行動はチーム毎固まり各自単独にならない様に注意する様に」

隊形は前衛、召喚、ヒーラー、精霊の順とするが、中衛は前衛が

撃ちもらったものがあれば召喚獣でそれをブロックし、前衛が崩れた場合もフォローを行う事

またヒーラーは何があっても死守する必要がある為、精霊チームも含めて皆そのつもりでいてくれ」

流石エルバはランク9だね、きっと彼のパーティーは今まで不安に思った事なんてなかったろうな。

それに対してミメットって……全く隊長のサポートをしてないよ。召喚術の能力は相当なもんっぽいけど、現状召喚チームってあたしが主導権握っちゃった様な感じもするし大丈夫なのかな？

「一応念のため、最悪のパターンも考えておく事にする」

最悪のパターンか、前回を考えればほぼそのパターンになるんじゃないかって思うもんだろぅしね。

「もし前衛が破られた場合、召喚がその代わりを担え

召喚が破られた場合、精霊が盾となり時間を稼げ、その間にヒーラーは迅速に作戦地域から撤退しろ

ヒーラーは絶対に逃げ遅れる様な事があってはならない、自分が最後まで生き延びる事を最優先と思え」

それを聞いて、オブシディアンがほっぺに手を当てて体をくねくねさせていたよ。横に居た別のヒーラーに腰がドンと当たる程にね。

「大丈夫です、あなたは絶対に死なせませんから」

いつの間にかクリーダがあたしの後ろに居てそう言ったんだ。でもね、あたしもクリーダを絶対に死なせはしないよ。命まで張る必要のないこの仕事は、二人とも生き残るって選択肢しか選ぶ気はな

いからね。

「では作戦を開始する！ 前衛は周囲に注意を払いつつ前進を開始しろ」

前衛チームを先頭に、あたし達15名は大きな木々が立ち並ぶ森へと入っていった。

少し歩いた所で後ろを振り返ると、軍の連中はそのままの場所はこちらを見ていたんだ。

『なんだあ！？ 軍は討伐に参加しないのかんにゃん？』

「だって、軍の手には負えないからわたし達が呼ばれたんでしょ？」

ミメットはつけミミをピコピコさせながらそう言ったけど本当にそうなんだろうか？ 軍には強力な武器だってきつとあるはずなのに。

あたしは釈然としないまま前に続いて歩いて行っただ。

突然変異の魔物の討伐<リベンジ>は、こうして幕が開かれたんだ。

【48】討伐作戦開始（後書き）

やっと討伐開始です。

補足ですが、この世界には「蘇生」と言う魔法が存在しません、それが無いのは苦しい所ですが、それがあると後で生き返らせればいいみたいになってしまう為、あえてなくす事にしました。

これからストーリー的には最終段階へ入って行きます。

ちゃんとイメージ出来る文章になるといいのですが、。

今後のシリーズ全般で軍や国家とは関わって行く予定です、小細工魔法士以外でも世界観は共有して行こうと思いますので、気長にお付き合い頂けると幸いですm（――）m

【49】戦場

あたし達魔戦士組合員15人の小規模討伐隊は、作戦エリアへと向かって歩いて行った。

前衛達は辺りの気配を探りつつ気を張って歩いている、歩く速度も移動時とはうって変わってスローペースになった。

そこで、あたしはミメットにある事を提案してみようと思った。

『ねえ、ミメット』

『なに？』

『実はあたし、魔法レーダー使えるんだんにゃん』

『魔法レーダー？』

『地面とか物の表面に薄い魔法をかけて、それに触れているものが何かとか距離とかがわかる魔法だんにゃん』

『へえー、そうなんだ』

『もしかしてこの状況に使えるそう？』

『浮いてたりするとわかんないけど、少しは役に立てると思うんにゃん』

あたしのこの提案は受け入れられ、先頭で魔法レーダーを使う事になった。

エルバは進んだ道筋が分かる様、木の横を通り過ぎる時にその幹にナイフで目印を刻む事も忘れてないみたいだ。その様子を見た他のメンバーも、剣で幹に目印を刻んでくれている。

『どうだ？』

早速エルバが今の状況を聞いて来た。

『見える範囲は全部魔法かけてるけど、虫がいるだけで小動物の反応すらないにゃん』

「そうか、何か気が付いたらすぐに教えてくれ」

『了解だんにゃん』

そのまま何の反応も検知される事がないままに森を進んで行った。更に歩いていくと魔法リーダーで前方の木々が突然なくなり、広場の様に開けている場所がある事がわかったんだ。

『まだ何も反応ないけど、この先に大きな広場があるんにゃん』

あたしは広場がある方向を指差して言った。

「よし、その広場に向かって進もう」

あたしが言った通り、やがて2〜3数百メートル四方もありそうな大きな広場に出た。

その広場は小さくてかわいい花がたくさん咲いていてとってもきれいだ。見た目だけなら楽園の様だったよ。

でも、この広場にもやはり何の反応もなかったんだ。

「おお……これは素晴らしい」

「森の奥にこんなきれいなお花畑があったんだー！」

「ここに寝転んだら気持ちいいだろうなあ」

森を抜けて広場に出た事で緊張が解けたのか、後ろからそんな会話が聞こえて来たよ。それも当然だろうね、見た目は本当に美しい花の咲く野原なんだから。

だけどさ、あたしはこの広場にとんでもないものを見つけちゃっ

たんだ。この樂園の様なお花畑に点々と埋もれているあるものをさ。

「顔色が悪いぞ？　何かあったのか？」

あたしの様子の變化にエルバが気が付き声をかけて来た。

『この広場は……一年前の戦場だんにゃん』

「なんだって？　こんな所がか？」

『そこ、よく見てみるんにゃん』

あたしはエルバの足元のすぐ近くを指差した。

「うん？　ここか？」

エルバはあたしが指差した先を靴の先で探っていた。すると丈の短い草の下からコロンと言う音を立て白いものが転がった。

「うッ……？　こ……これは！」

転がった白いものはまさしく人間の頭蓋骨の一部だ。それも無残に破壊されて砕けた様な破片だったんだ。

『この広場にはこういうのがいっぱい転がってるんだんにゃん』

あたしの言葉にみんなの表情が一斉に強張った。一年前の同じ作戦では、参加を棄権した者を含まない108人全員が戻れなかった。その壮絶であろう戦場がここなのだと分かったからだ。

「ここが一年前の戦場なのか……」

エルバはそうつぶやきつつ、何かを考え込んでいる様な表情をし、少ししてまた口を開いた。

「ここが最後だ、もし迷いを感じた者はここから先に進まず引き返せ
それ以外の者だけオレの後について来い」

エルバはみんなの方へ振り返って、一言そう言うともたたくりと向きを変えて先へ進んだ。

あたしはもちろんエルバの後に続いて行った。そこで引き返して行った者が何人いて、それが誰かも全て分かっていたけどね。

「何人になったのかな？」

少しして、エルバはあたしだけに聞こえる小さな声で聞いてきたんだ。

『前衛2人と、精霊1人、後ヒールが1人抜けたんにゃん』

「そうか……仲間で決めたんだな」

これであたしたち討伐隊は11人になってしまった。4人も抜けたのは流石に痛いけど、任意参加である以上は彼らを責める事は出来ないね。

今のあたしたちの編成は、前衛4、召喚2、精霊2、ヒール2と大分寂しくなった訳だ。

「既に戦場に入っている、気を引き締めて進め！」

士気を維持する為だろう、エルバは頻繁に仲間へ声をかける様になった。

そしてあたしはここで地面の異変に気が付いた。遂に地面レーダ

ーに反応があつたんだ。

『来たッ！ あっちの方向から凄い速度でここに近づいてくるんにやん！』

魔物は二足歩行だーッ！』

あたしは近づいてくるものの方向を指を差して示した。

「来るぞ！ 隊形を整えろ！ 前衛は前へッ！ 急げッ！」

エルバのその声に前衛達は前に出ると剣を抜いて構えた。

ミメツもいつの間にもの凄い化け物呼び出している、下半身が巨大な蛇で上半身が美しい女性の怪物だ！

これが彼女の言ったエキドナなのか！？ 想像してた以上のスケールじゃないか！

エキドナの周囲にはゆらゆらとその周りの光を歪める程のもやの様なものが出ていた。魔物が迫るこの状況ですら圧倒させる程の化け物だ、本当にこれが味方でよかったって思う位に今は頼もしいよ。あたしもすぐにどこにでも小細工魔法で作り出せる体制に入った。しかし近づいてくる魔物はなんて速さなんだ！ やはり魔物は人間の速度とは全然違うんだな。

『敵はもうすぐそこだんにやん！』

「何だって！？ 何も見えんぞ！？」

『地面すれすれに走ってるんにやん！ あッ！ 上に飛んだ！』

その魔物は前衛の頭上を軽く跳び越して、あたしの後ろに居るエルバへ向かって一直線に向かったんだ。

この魔物は遠くから近づいて来たのに、もう誰がリーダーかが分かっているのか！？

『エルバ避けてッ!』

「なにッ!？」

予想外のスピードにエルバは敵の位置を把握出来ていないのだから、キョロキョロするだけで動くことが出来ずに居る。

そして、魔物はエルバに向かって無数のムチの様なものを伸ばした。

あたしはエルバの前の地面から巨人の手を生やし、魔物から伸びるムチからエルバを保護しようとした。

しかし、魔物のムチは巨人の手を貫通し始めた為、急いで巨人の手を構成する物質の結合を固めて硬度を上げた。

徐々に貫通が止まった……何とかエルバを守る事が出来たな。

ホッとしたのもつかの間、魔物はまだエルバに向かって降下して来ていた。

「コンプレッション・エクスプロージョンッ!」

後方から声がした。なッ……!？ 誰だぁ! この状況でそんな

魔法を唱えた奴は……ッ!

巨人の手の真上の空間が収縮を始めると、急激に小さな光の点とまでなり大爆発を起こした。

それに巻き込まれて周囲に集まって来ていた前衛達が吹き飛んだ、あたしはギリギリ目前に壁を作り出して爆風を凌げたけど、せっかく魔物の一部を捕獲している巨人の手も崩壊してしまったよ……何て事だ。

爆風が収まった直後、グサリと鈍い音がしてエルバの体は魔物から伸びる無数のムチの餌食となってしまうたんだ。

【49】戦場（後書き）

遂に魔戦士組合員達が魔物と接触しました。

ホントにちゃんと続くと思いませんでした・・・とても驚きなのですが、これは毎回見て下さる方達のお陰なんだと思ってなりません。

分かりにくい所があるかと思いますが、最後の追い込みまでもう少しだけお付き合い下さい。

【50】突然変異の魔物との遭遇

魔物から伸びる無数のムチがエルバの体を貫いた。

「うがあああーっ！」

苦痛の叫を上げるエルバの声が響き、その直後にオブシディアンともう一人のヒーラーが悲鳴を上げていた。

その横で精霊魔法使いが頭を抱えて苦悩していた、さっきコンプレッション・エクスプロージョンを撃ったのはこの魔導士か。

あたしはすぐに魔法発動の準備に入っただけで恐らく間に合わない……今からあたしが魔法を出すまでの間にエルバは八つ裂きにされてしまうだろう。

崩れ落ちようとしているエルバに魔物はトドメをさそうとしている。

ダメだ……、この状況で近くでそれを止められる者はいない。さっきの魔法の爆発で前衛達は皆吹き飛ばされ、ミメットのエキドナもそこへ向かってはいるけど「一瞬で」とは行かない距離がある。

その時、紫に煌く見覚えのある光が魔物目がけて放たれたんだ。フォンと言う音と共にその魔物は一瞬で飛び上がって回避した、そのお陰でエルバの体を貫通していたムチも抜かれたよ。

その光が放たれた方向は見るまでもなく、誰のものかは分かる。

『クリーダ！』

「やっとわたしの出番が回ってきましたね」

人が密集してはなかなか魔法が使えない、丁度エルバが地面

に倒れかけたお陰で指向性の魔法だけは使える様になったって訳だ。
魔物が回避した先へミメットのエキドナが突進し、巨大な尻尾で魔物を遠くへと弾き飛ばすとエキドナは尚も猛進撃を続けた。

全長30メートル程はあろうかと言うスケールのエキドナは、人より少し大きい程度のその魔物を軽く圧倒している様に見える。

「今のうちに負傷者を後方へ運べ！　ヒーラーは重傷者から回復をかける！」

あたしはその適切な指示を聞き、今何をすべきなのかが明確となった為、速やかに小細工魔法で負傷者達を後方のヒーラー達の前へ運ぶ事が出来た。

ヒーラー達は即座に回復魔法をかけ始めた、その周囲に優しい緑の光を発するヒーリングフィールドが形成されている。

ともかく今の状況は、前衛達はほぼ戦闘不能に近く、リーダーであるエルバは重傷、となれば最悪なケースの召喚チームが盾とならなければならない。

あたしも魔物をそこに留める為、小細工魔法を発動させて魔物の動作を鈍らせるべく、地面の素材をツタの様に細く伸ばしたものを多数発生させ魔物にからめた。

……ん？

今って誰が指示をしたんだ！？

「精霊チーム準備！　カウント5の後にエキドナを退く！　強力な一撃を撃ち込め！」

それと足かせはもっと強化しろ！」

その声の主はあの気弱そうなメガネの本大好き少女のミメットだ

った。驚いたよ……人ってこんなにも変わるものなんだね。

「カウント開始！ 5、4、3、2、1！」

そして0になる直前、ミメットはエキドナを後退させた。

そのタイミングで精霊魔法

「ゼロッ！ 撃てエエッ！」

「エレクトリック・バースト！」

「を完全電離プラズマ化します！」

目の前に紫色に煌く巨大な光の柱が天空から落ちて来た、その直後に天井が破れたかの様なけたたましい音が轟いた。

この魔法……前に見たことあるぞ！？ 前にナボラ湖でスフェーンが使った魔法だ。それを今二人がかりで出してるって事だね。

それでも光の柱の太さはスフェーンが使った時の方がずっと太い、やっぱスフェーンって凄い魔法使いだったのかも……。

やがて光の柱が消滅し、そこには決定的なダメージを受けた魔物が灰にでもなっているかと思われた。

だけど、そこに横たわっていたのは何故か後退したはずのエキドナだったんだ。

「な……！？」

『何で……！？』

あれだけの魔法を受けてエキドナが無傷だったのは確かに凄いんだけど、一体何があったと言うんだ！？

よく見ると、エキドナの首にあのムチの様なものが絡まって締め上げられ、その下にあの魔物が居るのが見えた。

そうか、あの魔物は魔法発動の瞬間エキドナを引き寄せ、盾にする事で魔法を凌いだんだ。

のた打ち回るエキドナの巨体で辺りの地面が激しく揺れていた。その暴れる巨体に魔物のムチがどんどん絡まってゆき、やがてエキドナの体が赤く変色した。

赤く変色したエキドナは、徐々にそのスケールを縮めて行き最後には消滅してしまったんだ。

「まさか……エキドナが食われた!？」

『食われたって……魔力の続く限りやられないんじゃないんだんにゃん!？』

「わからない……そのはずなのに」

ミメットは愕然とした表情をしていた。

今魔物を捕らえているものは、あたしが仕掛けた足かせのみになっている。今これを外される訳には行かない、あたしは足かせの強化に専念した。

今日の前にいる魔物の姿がよく見える、人よりも一回り大きな人形の魔物だった。

それは右手から生える無数のムチを持ち、全体的にイカツい鎧を着た様な容姿をしていた。

「少し堪えてて！ 次を呼ぶ！」

そう言うと、ミメットは即座に詠唱に入りその目の前に巨大な魔方阵がぼんやりとした光として現れ始めた。

それを見て魔物は足かせを外そうともがき始めたけど、あたしは次々と新しく素材を固めて補強してやった。

やがて魔方阵が強く光り、今まさに新しい獣が召喚されると思われた時、魔物の右手のムチが激しく動きあたしたち目がけてそのムチを飛ばして来た。

そのムチの1つはあたしに向かって飛んで来ている、あたしはとっさに足元の土を移動させてそれを避けた。

避けつつも他のムチのターゲットが気になりムチを元から辿ると、その殆どはミメットに向けられていたんだ。

目前に迫るムチに気が付いたミメットが詠唱を中断して回避しようとしていたけど、もはや間に合いそうもなかった。

またやられてしまうと思った直後、ミメットの目の前に黒く透き通った丸い玉が現れた。

その丸い玉にムチが突入した瞬間、黒く透き通っていた玉の色が真っ黒に変色し、次の瞬間消滅した。消滅の直後、あの耳元で大きく手を叩いた様な痛々しい音が響いた。

これは超重力で光の速度を超えるって言っていた魔法だ。

黒い玉に突入したムチはきれいな切り口で寸断され、残りの部分は魔物の元に戻っていった。

「わたしも援護します、今のうちに召喚を！」

クリーダがそう言ってミメットに微笑んだ。

「ふう……ありがとう」

そしてミメットは再び閉じかけの魔方阵に光を与え始めたんだ。

【50】突然変異の魔物との遭遇（後書き）

今回は特に分かりにくい内容になってしまったかもしれませんが、量少ないのにすごく難しい・・・もともと勉強しなくては。

本文が少なめなので、今回出てきた魔法について説明を入れさせて頂きます。

この世界の詠唱とは、魔法を発動する為のきっかけ（手がかりとして魔法を思い出す様な感じ）を言います。手馴れていれば詠唱は不要なのですが、魔法学校の授業で教わった事を忠実に守っている魔法使いは魔法の名前を口に出す事をきっかけにしています。

コンプレッション・エクスプロージョン・・・空間を圧縮した後で大爆発を起こす精霊魔法。精霊魔法使いの使うメジャーな魔法。

エレクトリック・バースト・・・雷属性でピンポイントに大ダメージを与える精霊魔法でも非常に威力のある魔法。

エクスプロージョンは、火の玉を出す魔法のファイアボール並に色々な作品に出てくるメジャーな魔法や技になってますよね。

エレクトリック・バーストは、天空高くから真っ直ぐビームが落ちてくるイメージです。

その名前は某有名ゲームの古代魔法から頂きました、もちろんその属性も雷ですw^^w

6つの根本属性とその法則も同ゲーム＋科学（についてはWikipedia）です。

アインシュタインの相対性理論や余剰次元理論なども何度も出てき

て、一通り読んだのですがやっぱり全く分かりませんでした^^；と、言う事で都合の良さそうな箇所をかいをつまんで取り入れたご都合主義の内容となっております。

クリーダさんの使った魔法や、スフェーンさんが核融合の爆発を避けるのに使っていた魔法も元はちゃんとした文献からヒントを得ています。

ちゃんと理解していないので多少違ったりもしそうですが。

他にもたくさんヒントがあるので、今後ともエセ化学魔法を開発して行きたいと思っています（え

今回はこんなところで、長々とすみません（><）

【51】突然変異の意味

リーダーは瀕死の重傷、前衛達は戦闘不能、そして無敵のはずのエキドナが消滅してしまった。

それでも魔物は足かせにより拘束している、ならばあたし達が優勢な事には変わりないだろう。

「もう魔物の盾となるものもありませんね」

『うむ、このまま仕留めるんにゃん』

「《ククク……》」

『ちょ……変な声で笑うなんにゃん』

「わたしは笑っていません」

あたしとクリーダは精霊チームのもう一人を見た。

「あ……あたしも笑ってないから」

「《ククク……それはよくあるお約束と言うものか?》」

まさかと思ってたけど、笑っていたのは目の前にいる魔物だったんだ。

魔物はニヤリとした表情であたし達を見ている。

『げげーッ！ 魔物が喋ったんにゃん！』

「喋りました！」

「魔物って喋るんだ……」

「《喋るのは人間だけだとも思ったのか?》」

いや、そんな事知らなかったけどさ。何たってあたしは魔物に会うのなんて初めてだし。

『笑っても離してあげないんにゃん』

「《これで捕獲しているつもりとはな》」

『つもりもなにもあんたは抜け出せないんだんにゃん!』

「《次は後ろのヒーラー2人だ》」

『は?』

「《本当に抜け出せないかどうか見ているんだな》」

「お待たせ!」

その時、眩い光と共にミメットが召喚を終了した。やっとか……召喚ってずいぶん時間がかかるんだね。

ミメットの横に巨大な獣が立っていた、それは獰猛な肉食獣の様な鬼の形相に似合わず、スレンダーな手足と体、更に蛇の尻尾が付いている何なのか分からない謎の怪物だ。

体の大きさも15メートルはありそうな巨体ぶりだった。

そしてエキドナと同じ様に、周囲の光をゆらゆらと歪ませている。

景気付けかその怪物は凄い声で吼えた。全くもってそれは肉食獣そのものの咆哮だよ。

「ヒッ! また凄いのが現れたね」

『更に酷いのが現れたんにゃん』

「本人目の前にして酷いとか言わないでよ……」

はじめまして、娘のキマイラです」

「「『え……』」」

あたし達はショックを受け言葉を失ってしまったんだ。

まさかこの怪物がミメットの娘だなんて……召喚士の末路を垣間見た様な気がして、何て言っていないか浮かばない。

『うんと……流石親子だけあってそっくりだよ……ね』

「う……ん、目の辺りにちょっと面影があるね」

「ええ、佇まいがよく似てますね」

「目？ 佇まい？」

「……ちよつとあなた達勘違いしてない？ 娘ってエキドナの娘だよ？」

「なあんだ……意外性ないなあ。親子って言う割に尻尾が蛇っぽい所以外は全然似てないって事は、他の部分はお父さん似とかなのかな？」

「そ、そっか……尻尾は似てるね蛇っぽいし」

「そうですね、蛇ですね」

『うん、蛇だんにゃん』

「いいよいいよ……今更フォローしなくても」

そう言うミメットは明らかに凹んでいる様に見えた。

「さて、喋る魔物さん」

ミメットは魔物に向かってビシッと指を差した。

「《ククク……待ちくたびれたぞ》」

「待ってくれてありがとう」

「今度はこのキマイラで相手をしてやるから覚悟しなッ！」

「《それは楽しみだな》」

「チィ……」

「キマイラ！ あのお喋りな魔物を全力でやっておしまい！」

ミメットは魔物に指を差したまま、横に居るキマイラに命令した。
「が……、キマイラは微動だにしない。」

『うむう？』

「言う事聞きませんね」

「だね……反抗期かな」

あたしとクリーダと精霊魔法使いは、常に鬼の様な形相のキマイラに期待してただけに肩透かしを食らった気がした。

「さあ！ 行け！ どうしたッ！？」

GO！！ さっさと行けって！」

キマイラは「グウウ」と言う低い声を出して戸惑っている様に見えた。

「《ククク……何故か分からぬのか？》」

「あー？」

ミメットはその顔に似合わない言葉で魔物に返した。

「《お前はエキドナがどこに行ったと思ってるのだ》」

「……！」

その言葉にミメットが理解したかの様な反応を示した。

「そうか……それで呼べなかったって訳ね」

『へ？ なになに？ どういう事だんにゃん？』

もちろんあたし達は分からない訳なので、ミメットに説明を求めた。

「さっきね……、エキドナをまた呼び出そうとしたんだけど呼べなかったの

まさかとは思ったけど……」

「つまり、エキドナさんはあの魔物と同化していると言う事ですね」「そうみたい」

クリーダがその先をズバリ言ってくれた。

そうだったのか、と言うかクリーダって召喚獣にまで「さん」付けするんだね。

「《ククク……では続きを始めようか》」

事もあるうかエキドナはあの魔物に吸収されて存在していた、つまり戦況は最初よりももっと悪化していたんだ。

【51】突然変異の意味（後書き）

最近する事が増えて（自分で増やして）しまつて時間が足りません
><

前回は厳しかったので、今回は少し気を抜いてやわらかくしてみました。

ちゃんと収集を付けないと…。

では次回もよろしくお願いしますm（　　）m

【52】悪魔の様な2人再び

突然変異の魔物はミメットが召喚したエキドナと同化していたんだ。

「《ククク……作戦を考える時間を少しだけくれてやる、せっかくの楽しみがすぐ終わってしまっってはつまらないからな》」

悔しい事に大きな力を手に入れた魔物はその余裕からか、あたし達に考える時間をくれるらしい。

「まずった……エキドナが食われるなんて」

ミメットは最強の手駒を失った事を悔やんでいる。

『あのさ、エキドナを食べちゃったって事は、エキドナの能力もあるって事かんにゃん?』

「多分ね、通常の攻撃はもう通用しないかも……」

キマイラは母親とは戦おうとしないみたいだし……どうしたら
『別のはいないのかんにゃん? 動けないキマイラじゃようがないでしょ?』

「んー……、でもエキドナを止められる程のとなると」

「わたしから提案があります」

作戦を決めかねているのを見かねてか、クリーダは一步踏み出してあたしの肩に手を置いて言ったんだ。

『提案って?』

「あの魔物は恐らく4億度の熱をもってしてもダメージを与えられ

ないでしょう」

「よ……4億！？　ってどんだけって温度よ！」

「恐らく熱などによる魔法攻撃は通用しないと思われますが、有効な手段は存在しています」

「え？　どんなの？」

「いたって簡単です、物理的な抵抗は有効手段である事が分かっています」

「その根拠は？」

「まず、エキドナさんがあの魔物に引き寄せられていた事、次に超重力の魔法で魔物を切断出来た事」

「そういえば……さっきの魔法で千切れてたっけ」

「物理的って事はつまり殴れて事？」

「そうなりますね」

物理的な効果のある魔法でも問題はない様です」

「わかった……、すぐ召喚獣呼びなおすね」

ミメットはずっとその場で佇んでいるキマイラを魔方陣に沈めると、次の召喚獣を呼び出す詠唱に入った。

『でも、爆裂魔法は場所を考えて使って欲しいんにゃん』

「う……気を付けるよ……」

あたしはとばかりで吹き飛ばされたくない為、精霊魔法使いに一応注意しておいた。

「《ククク……作戦は決まったのか？》」

魔物が痺れを切らした様だ、あたし達は魔物の方に振り返った。

「ちょっと！　足かせが外されてるよ！」

『え！？ ああッ！』

「《ククク……捕獲してるつもりかと言ったはずだ
それよりお前たちはエキドナだけが全てだと思ってはいないだろ
うな》」

考えてみればそうだ、魔物はエキドナを吸収してその能力を手に入れたのだから、その他にも能力があっても不思議じゃない。

「《面白いものを見せてやろう、この本体の能力だ
見た瞬間に命を失う事になるかもしれないが》」

魔物は低く前傾姿勢をとったまま何かをしようとしている、何か技でも仕掛けてくるのだろうか？

警戒して見ていると、ムチの様だった右手の先から出ていたものが巨大な赤い剣へと変化して行った。

そして、突如魔物の形相が一変したんだ。

その顔は相手を威嚇する様なものじゃなく、これから起こる事を全力で楽しもうとしてる狂人の目。そんな表情だった。

「あの目はまさか……バーサーカー！？」

『え！？』

「《ククク……終わったな》」

魔物が剣を一振りすると、なんとそこから衝撃波の様なもの発生したんだ。

それを身を踏ん張って何とか耐えるあたし達。

「《お前……通行の邪魔だなあ》」

「ぐひッ！？」

声のする方向を見ると、魔物がミメットの頭を掴んで持ち上げていた。

頭を掴まれたミメットは余りの恐怖に硬直して、その目には涙を浮かべていた。

手も足もだらんとたらしして完全に戦意喪失してる。まだ召喚を終えてないミメットには、その身を守る手段すらなかった。

魔物は狂気の目をニヤリとさせて、一層目を見開いた

『やめろおおおーっ！』

あたしが叫んだ瞬間、魔物の掴んだ手の先が激しく爆発した様に見える、ミメットはまるで作り物の人形を思いきり地面に叩きつけた様な音を立てて地面に激突し、そして空中に弾んだ。

慣性のままミメットが何度も転がり、彼女にかけていたメガネがバラバラの破片となって周辺に散らばった。

あたしは不自然な体勢で横たわるミメットを見た瞬間、もう助からないかもしれないと思った……それはそんな状態だったんだ。

浮き上がっていた魔方阵がうっすらと消えて行く、それはミメットの命の火が消えて行くかの様にも見えた。

「《ククク……お前も同じようになるがいい》」

そう言って魔物があたしの頭を鷲づかみにしようとした所で、何故かその手が止まったんだ。

「《チッ……》」

魔物は舌打ちをしてクルリと方向を変えると、一直線にある方向へと向かって行った。今のは一体何だったんだろう……。

でも、魔物が向かった方向はヒーラー達の居る所に間違いない。エルバが何が何でもヒーラーを守れて言ったのに、あたし達は守れなかったな。それどころか結局何も出来なかったじゃないか。そう考えつつ、目の前に無残に転がって死に掛けているミメットを見ながら、あたしはその場に挫けてしまった。

――あ……

その時、ポケットから何かがコロリと転げ落ちて目の前に転がった。

『これは……』

それはあの白い玉だった。あたしは急いでその玉を拾うと、ミメットの側に駆け寄ったんだ。

痙攣を起こしているミメットの上で白い玉を両手で叩くと、玉はパンと言う音を立ててはじけ聖なる光りをミメットに注いだ。

『よかった……、ちゃんと発動されたじゃないか』

その白い玉はシンナバーの再生魔法が封じ込められたカプセルだった。ミメットの全身はシンナバーの再生魔法の光に包まれ光り輝いている。

あたしは小細工魔法でミメットの下の地面から小さい乗り物を作り、それに軍の待機する場所へ移動する様に命令すると、ミメットを乗せた小さい乗り物はすぐに森の方向へと向かって走っていった。

少し気分が落ち着いたら、魔物とクリーダ達が交戦している事に

気がついたんだ。

クリーダの透き通った玉のはじける痛々しい音と、爆裂魔法の音がする。あの二人はあたしが挫けていた時にも諦めずに戦っている。

——まだみんな諦めていない

音のする方向を確認すると、ヒーリングフィールドはまだ健在で、その前に4人の人影が魔物に立ちはだかつて戦っているのが見えた。回復を受けた誰かが復帰したかな？

あたしは急いでその場に駆けつけて驚いた。

「あらあ？ おチビたんだあーッ！」

そして、聞き覚えのあるその声に元気が沸いて来た。

『え！？ スフェーン！？ 何で！？』

「さあさあ、おチビだからって、そんな所でぼんやりしてるんじゃないよ！？」

『シンナバーも！？』

「ごめんねえ、遅刻しちゃったあ」

「だから言ったじゃない！ イチャ付いてる暇なんてないよって！」

「アハハッ！ それで辞めようとしたら離そうとなかったのは誰だったっけねー？」

ベイカからの参加者二人って、まさかのスフェーンとシンナバーだったのか！ ってこんな時に何の話してるんだあーッ！

スフェーンが凜々しい顔つきでビシッと二本の指を揃えて手を翳すと、魔物の周囲全方向に無数の超高速の渦巻きが発生した。

その渦の方向は魔物に追従して動いて狙いを定め、魔物に突き刺さり発動したんだ。

「《又ガアアア！！》」

「ありとあらゆるソニック・トルネード！　いつもより多目に回しておりまーすッ！」

魔物の体は無数の渦巻きに削られてボロボロになっていった。

「《おのれええ！》」

声を張り上げてスフェーンに飛び掛る魔物。

「ヨッと！」

スフェーンが手で軽くドアを開く様な仕草を見ると、魔物が左へとしかも直角に飛ばされていった。

でも、その飛ばされていった先は、シンナバーが居る方向だ。

「《ウハハハッ！　ならばこのヒーラーを先に片付けてやる》」

シンナバーはニヤリとすると、後ろ手に回し両手に棍棒を持って戻して構えた。

しかし、それを魔物の巨大な剣が高速で切り裂いてしまった。真つ二つに切り裂かれるシンナバー！

『あれ……？』

「《ククク……手応えすらなかったか》」

「残念だったねッ！　ハズレクジだよッ！　アタリは最初からないんだけどねッ！」

真っ二つにされたシンナバーが残像の様に消え、魔物の真横に突如彼女が現れそう言うのと、目に見えない程激しく両手に持った棍棒で魔物をけたたましく連打した。

魔物は地面に激しく叩きつけられ更に10メートル程の距離を転がりながら滑って行った。

「アハハ！　シンナバーって殴るヒーラーだからホントたち悪いよなッ！」

「えー！？　回復だって一応出来るんだよ！？　知らなかったの！？」

「ぶっ！　一応かいッ！」

何なんだこの二人の余裕は……、明らかに戦闘慣れしすぎてる。一体今までどんな戦況を潜り抜けて来たと言うんだ。

「この人……スフェーンって……最強のソーサラーのスフェーン・アウインだ……あたし初めて見たよ」

精霊魔法使いがスフェーンを見てそう言っていた。え？　スフェーンってそんな有名だったの！？　しかも最強とか言われてるぞ！？

合流したスフェーンとシンナバーの戦力は、あたし達の戦況を180度も変えてしまう程のものだったんだ。

【52】悪魔の様な2人再び（後書き）

（忘れそうになりつつも）何とか忘れずに線を結び続けられています
が、やっぱり難しい＞＜

結は全ての集大成となるはずなので、なるべく痛快さを得られる様に頑張っ
て見たいと思います。まだすぐは終わりません。

後一週間位でなんとかまとめられるといいのですが。

【53】心を一つにしたその時に（前書き）

練りこむタイミングを無くした話も多少はありますが、大体は入れる事が出来たと思います。もっとうまく練り込められればいいんですけど。。

【53】心を一つにしたその時に

スフェーンとシンナバーが戦闘に加わり、それまでの流れが一変した。

「ミメットさんは大丈夫でしょうか？」

クリーダは心配そうな顔であたしに言った。クリーダはヒーラーが危険に晒されようとしていたからすぐに魔物を追いかけて行ったけど、やっぱり心配だったんだね。

『シンナバーのくれた再生魔法の玉使って、今乗り物で軍の待機してる所に魔法で運んでる途中だけど……わかんないんにゃん』

「他にも重傷者がいるの？」

『うん……副隊長のミメットがやられた』

シンナバーが来てるの知ってたら送るんじゃないかだったんにゃん』

「いやあー、あの玉使ったなら助かるか助からないかのどっちかだから同じだよ」

再生魔法って本人のしぶとさ次第だからねッ！」

そりゃ、100%助かるか助からないかのどっちかだろうけどさ……。それでもシンナバーはあたしの判断を気づかって言ってくれたんだろう。

「あたしは半身になっても復活したぜえ！
だからきつと大丈夫でしょ」

スフェーンはグーにした手の親指だけをビツと立てると、ウィン

クして自慢げに言った。

「とりあえず、さっさとコイツを退治しちやおうよ」

ヨロヨロと立ち上がる魔物をスフェーンが指差した。

魔物の体はボロボロの状態から徐々に回復している、これもエキドナの能力だろうか？ かなりの再生能力があるらしい。

この再生能力はかなりやっかいなんだ、火力が弱いと再生のスピードに負けてしまう場合があつて戦闘が長引くからね。

それでも永久に再生し続ける事は絶対にならない、どんな化け物であってもその能力には底があるんだ。

「《何故だ……？》」

魔物が口を開いて言ったこの言葉は意外だった。

「うん？」

「《何故このバーサーカーのスピードを捉えられるのだ》」

「バーサーカー？ ってあんたが？」

「《この能力は最強の能力だと聞いている……》」

「アハッ！ 聞いているって……情報が間違つてたんじゃない？」

そんな話誰に聞いて来たのお？」

「《間違いだと……？ それはありえぬ》」

納得が行かない様子の魔物にクリーダが答えた。

「バーサーカーの能力が最強だという話は間違っていないですよ？」

「《ならば何故だと言うのだ……何故我を捉えられる》」

「それはごく単純な話です、それはあなたがバーサーカーではない

からです」

「《そんなはずはない……この本体は確実にバーサーカーの能力を持っている》」

「言葉が的確に伝わっていない様ですね、あなた自身がバーサーカーの能力を持っていないからと言ったつもりなのですが」

この魔物は本体がバーサーカーだと言った。

それはつまり、魔物とは別にバーサーカーの能力を持つ本体があって、魔物はその能力を支配していると言う意味なのだろう。

あたしは小細工魔法を使って魔物の体を慎重に探っていた、魔物を構成している物質やその質量を探る。そして遂にはその内深くに封印されているものへとたどり着いたんだ。

『へリオ!?!』

「え!?!」

『この魔物……へリオだ!』

「そのへリオって誰?」

へリオと会っていないスフェーンが説明を求めた。

「へリオさんは魔戦士組合員の1人で、この作戦に参加していたはずなのですが」

どという訳か今は魔物に体を奪われてしまっている様です」

あたしは魔物の体の本体の奥底に封印されている、本体の記憶にアクセスする事に成功したんだ。あたしが見たその記憶の持ち主、それは紛れもなくへリオの記憶だったよ。

こんな事は普通に意識を持っている人間とはする事は出来ない、魔物に意識を封じ込まれて思考が停止している状態だからこそ出来

たのだろう。

「ふーん、つまりこの魔物はヘリオって組合員の体に乗っ取ってるって訳ね

だとするとも魔物を倒すには、ヘリオも殺さないといけなくなっちゃうか……ちよつとやっかいねー」

「《ククク……そういう事だ

そして我の次のターゲットはコイツらしい》」
『うなッ!?!』

魔物はあたしを指差した。しかも「らしい」ってどういう事だ!?!

「《これはこの本体が望んでいる事だ、本体はお前と一つになりたいたいと思っているぞ

お前を吸収してしまえばコイツ等も手を出せなくなり、我にとっても好都合だ》」

魔物がまた低い姿勢になった、また戦闘態勢に入ったのだ。

「そんな事はさせません!」

そう言っであたしの前に立ち上がるクリーダ。でもその時魔物は既にあたしの目の前に居た。

『は……え!?!』

そして魔物はあたしを両手でギュッと抱きしめたんだ。

さっきも思ったんだけど、この魔物があたしの目の前に立っても全く恐怖心を感じなかった。それは直感的に魔物がヘリオだと感じ

ていたのかもしれない。

「今の動き……さっきまでと全然違う！」

「クッ……その子を離しなさい！」

クリーダが反転して魔物の肩を掴もうとした瞬間、魔物は一瞬であたしと一緒に10メートル程も移動していた。誰も居なくなった空中をクリーダの手が空振りしているのが見えたよ。

「《ククク……もう遅い、そこで黙って見ていろ》」

魔物の右手が赤く光ると、あたしの意識が薄れて魔物に引き込まれて行った。

そしたら色々と分かったんだ、魔物が吸収した人達の色んな事や、ヘリオの考えていた事も。

ヘリオは本当にあたしと一緒にになりたいって思っていた。そういう気持ちを持ってくれている人が居る事は確かに嬉しい事でもあるんだけど。

あたしは引き込まれて行く意識の中、不意にクリーダの顔が浮かびあの誓いの言葉を思い出したんだ。

＜あたしは今後、クリーダ・ヴァナデインと、一生の人生全てを共有する事を誓います

身も心も魂までの全てを共有する事を誓います＞

そしたらヘリオがある事を教えてくれたよ。

「《ぬ！？》」

それは奇跡だったかどうかも分かんない、あたしの意識が突然元

に戻り、その時あたしの左手は魔物の右手に触れていたんだ。

そして、あたしが魔物の右手を掴んだまま発した言葉は

『解体！』

だった。

「《な……に……！？》」

あたしは小細工魔法の一つである物質の解体を発動した、その瞬間に魔物の体は光に包まれて行ったんだ。

【53】心を一つにしたその時に（後書き）

ご都合主義に小細工魔法っていい魔法だと思います。

先が見え見えになってしまっていたのを反省したりしなかったりしつつ、後は何とかうまくまとめられます様に。

これからシリーズ全体に関わる伏線を仕込んでみます。

【54】真紅の大剣（前書き）

次に書く話ばっか考えてしまっで、ずいぶん投稿に時間がかかってしまいました。

【54】真紅の大剣

あたしは魔物に小細工魔法の一つである物質の「解体」を発動した。

魔物の体が光に包まれ、取り込んでいた者達が開放されていく。ぱあっと光の瞬きが辺りに散り、やがてそれらは空高く上って消えて行った。この光りは一年前の作戦に参加した組合員の魂だ。あたしはその光を見てやすらかにと祈った。

その後で、エキドナの巨体が魔物から飛び出し大地を揺るがすと、地面に大きな魔方阵の光が現れてその中へと沈んでいった。

後はヘリオと魔物が分離するだけだな、魔物はその見た目を殆どヘリオへと変えていた。その右腕と融合している巨大な赤い剣……これが魔物の正体だったんだ。

赤い大剣はドスンと言う重い音を立て、ヘリオの右手から離れて地面に突き刺さった。

そして、魔物と分離したヘリオが地面に倒れ込もうとした所で、あたしは巨人の腕でヘリオを受け止めた。

すぐさまあたしはヘリオの胸に耳を当ててみた。しっかりとした鼓動が脈打っている。よかった……ヘリオはちゃんと生きてるよ。

「どうですか？」

その声で周りを見渡すと、周囲にみんなが集まって来ていたんだ。ヒーリングフィールドも消えている、エルバや前衛達も治療を終えたんだな。エルバ達が起き上がりぐーっと伸びをしたり、屈伸運動をしているのが見えた。

『大丈夫……ヘリオは生きてるんにゃん』

そう言いつつ、これで今回の作戦はこれで終わったんだって思えたんだけど……、

「《我を手にとれ、その者に思いのまま力を授けよう……》」

と言ったのは地面に突き刺さっている赤い剣だった。

『まだやる気かんにゃん？』

「また誰か捕り込まれたら厄介です、すぐに破壊してしまった方がいいでしょうね」

クリーダがそう提案した時、その後ろで声がした。

「その役目、オレにさせてくれないか？」

その声の主は隊長のエルバだった。

「真っ先にやられちゃったオレが最後においしい所をもらおうってのは虫が良すぎると思うが、それでもしないと気が治まらない」
「そうですね、エルバさんに破壊して頂きましょうか？」

あたし達に異論はなかった、全くいい所ナシでやられた隊長つてのもかわいそうだからね。

「悪い……、じゃあ終わらせてみんな帰るか」

エルバは片手で斜めに銃を構え、赤い大剣に埋め込まれた赤い玉を狙い放った。

辺りに炸裂音が響き、剣に埋め込まれていた赤い玉は粉々になって飛び散り、燃えるかように煙を上げて消えて行った。

その魔物が最後に発した言葉は、《我を手……》だった。

忌々しい魔物の声が途絶え、そこには丸い玉の抜けた真っ赤な大剣だけが残されていたよ。

「ねえ、隊長

この赤い剣は壊さないの？」

スフエーンがエルバに問いかけたのを聞いて、あたしは剣を慎重に探ってみた。もう、この剣には邪気のかけらすら存在していなかった。不思議な素材で出来ているけれど、もうただの剣になっている。

『大丈夫、もう魔物は消えたみたいだんにゃん』

「しかし、真っ赤な剣なんて珍しいねえ、何で出来ているんだろ」

『それがねえ、よく分からない素材なんだんにゃん』

「これを使いこなせるとしたら、ヘリオさんしか居なそうですね」

「だがオレにはその剣は必要ない、破壊しよう……」

ヘリオが気が付いた様だ、巨人の手に支えられながらそう呟いた。

『あのさ、その剣……あたしがもらったらダメかんにゃん？』

その時、何故かあたしの口が開いたんだ。

「ええ！？ その剣はおチビよりずっと大きいんだよ！？ 大人用なんだよ！？」

シンナバーがすかさず突っ込んでくれた。久々に聞いた様な気がする。

「あなたって剣を使えたのですか？」

「魔法使いが大剣を使うなんて聞いたことないぞ」

その問いに対して、あたしはこう答えたんだ。

『今さっき使える様になったんだんにゃん』

あたしは魔物と意識を一時的に融合した事によって、ヘリオの剣術を少しばかり会得してしまっていたのだ。

「だけどさー、おチビたんそんな怪力があると思えないんだけど
おー

どうやって持ち歩くのお？」

スフェーンの疑問ももつとも、あたしの力は見た目通りにとっても弱い。こんな剣を持ち上げる事なんて絶対無理だ。だけどね。

『イイーヒッヒッヒ！ ビビデバビデブー！』

あたしは童話の魔法使いが言いそうなセリフを言い、更にそれらしいポーズを取ると、赤い大剣に小細工魔法をかけた。

みるみるうちに大剣はそのサイズを縮め、あたしの背丈に丁度いい大きさになって行ったんだ。実は質量は変わってないから重さは同じなだけどさ。

「すげえ……小さくなったぞ！？」

あたしは丁度いいサイズになったその剣を、背中に背負ってキメのポーズをした。

『シャキーン！　どうかんにゃん？』

「その剣……不自然に背中に張り付いてますね」

『うん、背中に張り付くように魔法かけてあるんにゃん』

「ギャハハハー……ッ！」

大剣が普通の剣のサイズになったねッ！　おチビは何でも子供用だからねッ！」

突然シンナバーがあたしを指を差して爆笑した。

「ブッ！　シンナバーあんた今日も冴えてるねッ！」

『ぐぬう……言われてみれば……』

そう言われて見て気が付いた、普通の剣のサイズまでじゃないけど、ほんの少しだけ長い片手の剣って感じのサイズだよ。

みんながあたしを見て笑ってやがる、いいんだいいんだ。あたしはこの赤い剣が気に入ったんだからさ。

爆笑の中、あたしはみんなに赤い剣を振って見せた。ついさっきまで剣の「ケ」の字も知らなかったあたしが剣を自由に振り回せている。これにはあたしもすっごく驚いてる。

ただ、剣を振り回してるのはあたしの筋肉じゃなくて魔法でなんだけどね。

「おおー……それなりに見えるぞ」

『ヘリオ、どんなもんかんにゃん？』

「驚いたな……その型ってオレのそっくりじゃん」

『ねえ、ヘリオも魔法使える様になってるんじゃないかんにゃん？』
「ああ、オレの剣をお前が会得した様に、オレが魔法使える様になつたんじゃないかって事か？」

『そうそう、どうかんにゃん？』

「いや……、残念ながら魔法の魔の字すら会得出来ない様だ
その代わりお前の事なら殆ど理解出来たみたいだがな」

ヘリオが満足そうな顔をして言った。

「この子は先にわたしのものになってるのですから、後から来たヘリオさんは遠慮して下さい」

それを聞いてあたしも周りのみんなも一斉に言葉を失った。クリーダもとんだタイミングでカミングアウトしてくれたもんだ。

「コラ！ クリーダはケケケチするんじゃないよッ！

そう言う事ならおチビは前からあたし達のものだったんだからッ！
おチビの独り占めは禁止なんだよッ！ おチビはみんなのものなんだからねッ！」

そしてまた爆笑が起こった。これこそいつものやれやれな展開さ。
と言うか、みんなして「もの」扱いかいッ！ その期待通り、あたしはやれやれと言うポーズをしてあげたよ。

その後、あたし達は軍が待つ場所へと戻って行った。
アンモチン大佐達は何故か驚いた顔をしてたけどさ、まさか戻って来ると思ってなかったんだろうけど、どっこいあたし達は戻って来たんだよ。「ざまあみやがれッ！」とか言いたかった、絶対に言えないけどね。

そこには無事に回復したミメットも居たんだ。あたしはちゃんと

元通りになったかどうかミメットの背中で早速確かめて見たさ。

「うえええーっ！」

周囲の山に響くほどの大きな悲鳴を上げるミメットに、あたしはヨシヨシと頷いた。

その後、エルバがアンモチン大佐へ作戦の一部始終を報告をしてくれたんだけど、大変な事になってしまったんだ。

なんとね……

あたし達はこの後、マトラ王国の首都であるマトラへ行くことになったらしい。らしいとか他人事で言っちゃったけど、ちよつと信じがたい事なんだ。

でもこれは確定なんだ。それにちゃんと依頼を終えたサインを貰わないといけないからね。

ともかく無事に家に着くまでがお仕事です。成功報酬一人100万丸の大仕事だし、この際「えーっ！？」とか文句は言うまい。

そんな思いもよらない展開に、あたしはちよつとワクワクしてしまっただ。

【54】真紅の大剣（後書き）

もう1回戦闘を入れても良かったのですが、ストーリー上影響を与えない展開だったので切り上げました。

ルビーさんはたなぼた方法で剣技を入れてしまいましたが、もっと他にも手に入れたものがあります（と言う予定です）。

それらについても今後書いていこうと思います。

もう少し続きます^^

ヨロシクお願いします。

【55】楽しい打ち上げの巻

突然変異の魔物の討伐は終わり、あたし達は首都マトラに行くことになったんだ。

思えばマトラ王国に生まれていながら、マトラには一度も行った事がなかったな。

リドナですら凄い大きな街なんだから、マトラはもっと栄えてるに違いない。おいしいお店だってイッパイあるだろう。既にあたしは観光モードになっていた。

リドナに戻ったあたし達に、アンモチン大佐からすぐにその説明があった。

でも、今回マトラに行く事になるのは、後で軍から指名があるんだとか。あれ？ 話が違うじゃないか。

じゃあ、それに漏れたら成功報酬はどうなるんだ！？ って思ってたたら、書類へのサインはちゃんとここでしてくれるんだってさ。ホッ。

って事で、組合提出用の書類へのサインと、軍が発行した業務をしつかり遂行しましたって証明書ももらっちゃった。

うむー、だけどこの証明書って何だ？ 賞状みたいなもん？ 額縁に入れて飾るもんなのかな？ 多分飾らないと思うけどさ。

その後、みんなで打ち上げの食事会に出かけた。

「みんな、今日は本当によくやってくれた
軍から指名があるのは今日の夜8時だそうだ

それまでは各自自由にしててくれ」

エルバは軍が指名を行う時間を皆に知らせてくれた。

「全員かと思ったらそうじゃないんだね、どうしてなのかな？」

と、ミメットがオレンジジュースの入ったコップを両手で持って不思議そうな顔で言った。

「詳しい事はわからんが、どっちにしろ報酬は出るんだしめでたし
って事だな」

エルバはうまくまとめてくれた。彼って思ってたよりいい人なの
かもしれないな。オレにまかせろな奴だとか思ってたごめんよ。

「しかし……、今回本当に面目なかった、申し訳ない……」

エルバがテーブルに頭をぶつける程下げて謝ったら、

「あ……あたしも魔法で皆さんを巻き込んですみませんでした」

それを見てあの爆裂魔導士が慌てた様に立ち上がるとエルバと同
じように、でも勢い余ってゴツンとテーブルに頭をぶつけて謝って
いたよ。

それに対しては吹き飛ばされた当の前衛達も、ちょっと恥ずかし
そうにしていた。

「オレが思うに今回の功劳賞はキミ達二人だな」

ってエルバが言った二人って、てっきりあたしとクリーダの事か

と思ってたら、遅刻して来たスフェーンとシンナバーの事だった。確かに二人が来なかったらどうなったか分からない雲行きだった。エルバは重傷だったのによく見てたんだな。

「あらあ？ あんなんで良かったのお？」

「やっぱ遅刻しないで来るべきだったね、何だか全然戦い足りないや……このストレスは後でスフェーンに向けるとしよう」

「アハ！ お手柔らかにい」

場の雰囲気がちよつと変になったのを察してか、エルバは慌てて話を続けた。

「いやあ、キミ達の事は噂には聞いていたよ」

「ええッ！？ もう噂になっちゃってんのッ！？ 誰だッ！ スフェーンとあたしがラブラブだってバラしまくってるのはッ！ そこのおチビか！？」

『それはあんたら二人だんにゃん』

「えーと……、そうじゃなくて……マトラ最強のってペアの噂さ」

少し挫けそうになっているエルバ。ガンバレ今挫けたら全てが変な雰囲気になり込まれるぞ。

「ああーッ！ そっちかーッ！ ビックリしたあ」

そっちってどっちだ。

「最強のソーサレスと最凶の武闘派プリーストだよな」

二人がそう呼ばれていたってのは初耳だ、エルバってどこからそんな噂を仕入れて来たんだ。

「むっ！ あたしの紹介に邪気を感じる……ッ！」

みんなは常にシンナバーの邪気を感じてる訳なんです。

「そりゃねえ、シンナバーはヒーラーなのにすぐ前に出たがるから前衛の募集にのっかっちゃって普通にこなしちゃうし、そう言われるのも当然かもねえ」

「何言ってるのーッ！？ 責任持ってちゃんとヒーラーも別に募集かけたじゃない！」

別に募集かけたって……、そりゃ紛れもない最凶な武闘派プリーストだよ。

「まあ、それはただの噂ねえ、大体あたしまだランク8だよ？ それにそこに居るクリーダとこないだ戦ったけどお睨まれた時なんて体がブルブル震えて怖かったんだから最後なんか半身になって死にかけちゃったわあ」

その、スフェーンの言葉にみんな「えッ！？」と驚き一斉にクリーダを注目した。その目はまさかって顔だったよ、冗談じゃない！ そんな大物だったのか！？ 大物気取りすらした事ないスフェーンが！？

「スフェーンが噂だけって事は絶対ないです……ソーサラーとして最強なのは間違いないです……あたしずっと研究してたからそれなのに……クリーダって……一体何者なの……？」

研究ねえ……、どんな研究してたんだろ。爆裂魔導士とスフェーンは同じクラスだしきつとスフェーンを目標としてるんだろうなあ。

「わたしはただの科学魔導士です
あの時はわたしが魔法キャンセルを使える事を知らなかったから
です

次やったら絶対敵わないでしょう、魔法の展開速度は圧倒的にス
フェーンさんの方が上ですから」

この二人……ニコニコしながら見つめあってるけどすごい殺気を
放っている……。きっと次は完封だって思ってるよ本気で。

『で、爆裂魔導士はさあ、一体どんな研究してたのかんにゃん?』

「爆裂魔導士……オプテーズです……」

研究はもちろんスフェーンの使った魔法の研究よ」

『ふーん、だから光の柱みたいな魔法使ってたんだ』

「エレクトリック・バーストの事? そう……能力が足りなくて不
完全だけどね」

それにしても、スフェーンファンみたいなのが居たなんて知ら
なかったなあ。当のスフェーンは特に気にする様子もないって事は
案外珍しくないんだろうか。ソーサラー達の頂点に在るって言うの
も本当なのかも。

「科学魔導士とか小細工魔法……だっけ? って聞いたことないク
ラスだよな」

「よく言われますが、精霊魔法に科学を組み合わせた魔法を使うク
ラスです」

「カガク? それも初めて聞く言葉だな、でもまあ精霊魔法の一種
って訳か」

「はい、根本にあるのは精霊魔法です」

カガク……それはあたしも未だに全くわからない謎のキーワードだった。魔法を料理と考えてそれにカガクで一味足してるって言うってたけど、あの大爆発は一味どころじゃないと思うんだけどなあ。

「それで、キミの小細工魔法って言うのはどこで習ったんだ？」

物珍しそうなものを見る顔でエルバがあたしに聞いてきた。

『んー……これは習ったのかんにゃん？』

「それがねー、おチビたんとあたしとシンナバーって魔法学校の同級生なんだけど

驚く事におチビたんは最初から魔法使えたのよ

何故か学校で習う魔法はイマイチな感じだったけど」

スフエーンがすかさず解説してくれたけど、魔法学校では一通り簡易魔法を教えてくれるんだ。

習うのは実戦では殆ど役に立たない程の原始的な魔法だけど、それをきっかけにして上位の魔法を覚えて行ける訳。

だから、あたしも一応原始的な精霊魔法や回復魔法を使えたりするんだ、原始的な魔法だから効果はかなり残念な感じだけどね。

『うん、この魔法はね

あたしのお婆ちゃんも使えるんだけど、特に習った訳じゃないんだんにゃん』

「へえ、生まれつきって訳か

そういう事もなくはないけど、かなり希だよな」

「わたしは小細工魔法の素晴らしさをよく理解しています

本当にいい魔法を持って生まれましたね」

さすがクリーダはいい事言ってくれるね。

でも実はさ、今になってこの魔法は好きだけど、魔法学校の頃は嫌いだったんだ。

その理由は、みんなが将来どんな魔法使いになろうか話してる時、既にあたしは小細工魔法士だったから。将来何になろうかって選択する自由すらなかったのさ。

それでもあたしは一応他の可能性を試してはみたんだ、でも原始的な魔法以上は使える様にはならなかったよ。

学校も辞めちゃおうかとも何度も思ったよ。本当にバカだったなあ。こんな素敵な魔法を使えるって言うのに。

楽しい打ち上げは、その後出てきたおいしい料理やお酒によって更に盛り上がったんだ。

【55】楽しい打ち上げの巻（後書き）

ここで、すこしまったりしてみました。もう1つまったりしてみたい様な。

マトラにすぐ行ってしまいたいけど、今のうちに仲間と交流して（色んな解説して）おかないと^^;

今回は説明で、次回はバカンスの予定です。そこでルビーさんがもらったもう1つのものが分かるかもしれません（と言うあくまでな予定…）。

本当はこんなにモタモタせず、もっとサクサク進めていかないといけないですよね；

【56】もう1つの手に入れたもの

打ち上げを終えた後、あたしとクリーダはまたあの風呂屋さんに来ていた。

『あづう……』

「毎回懲りませんよね、わたし達って」

つい仲良くし過ぎた為、既にあたし達はのぼせていた。

この間と同じように縁台に座ったクリーダに膝枕をしてもらってあたしは寝転んでいた。

『ミメットめ……せっかく誘ったのにまだ来ないのかんにゃん』

「どうでしょう、ミメットさんはすっかりあなたを警戒していますから」

『ちよっと挨拶代わりに背中を撫でただけなのにー』

「でもそれ……わたしは余り面白くないです」

そう言ってクリーダは少し悲しそうな顔をして目を逸らしたんだ。

『ご、ごめッ！ 本当にただの挨拶ってだけだんにゃん』

あたしが本当に好きなのはクリーダだけだよ』

「もちろんわかってます、あの位は普通に流せる様にならなきゃいけませんよね」

『うむうむ、もっと親密な関係を築く為なら、あたしも協力は惜しまないつもりだんにゃん』

「でも……出来れば程ほどにして下さい」

『わかってるんにゃん！』

ヨッシャアーツ！ これでミメットの背中に触る口実……じゃなくて正当な理由が出来た訳だ。

その時ドアの開く音がして誰かが入って来た、ミメットがやっと来たかと思つて起き上がつてみると、入って来たのはスフェーンとシンナバー、そして爆裂魔導士のオプテーゼだった。

「やあ、おチビたんとかリーダたん！」

「ほほおー、まさかこんな場所が隠されていたとはーッ！」

この大きなお風呂の大きさはおチビ単位じゃ表せないねーッ！」

少年の様に無駄のない体型のシンナバーが、両手を斜め上に上げて言った。

「へー、いいお風呂だねー」

そう言つて二人の後から続いて入つて来たオプテーゼに、あたしはミメットの事を聞いてみる事にした。

『おんやあ？ ミメットはまだ来てないのかんにゃん？』

「うんー？ ミメットなら来てるけど？ ほら、そのドアのトコに」

ドアを見るとその言葉通り、ミメットが物凄く警戒しながらこちらの様子を伺っていた。

「みんなよく青空の下でそんなにオープンで居られるよね……」

ミメットはタオルを巻いたままヒョコヒョコした足取りで湯船に近づくと、日の光で水面が光っている湯に一気に浸かった。明らかに警戒してるね。

「で？ おチビたん達は何してんの？」

『あうん……のぼせ……』

「のぼせちゃいました」

「のぼせるなんて……きつと変な事してたんだねッ！？ 汚らわしいッ！ ドロドロだねッ！」

あたし達は聖なる光の祝福を受けてるからのぼせるなんて事ないけどさ」

シンナバーはスフェーンの膝の上に座ったままツッコんでくれとばかりに毒を吐いた。

「みんな……みんな不潔だあ！」

それに対して、ミメットが純心な乙女のような反応でツツコミを入れた。それが狙った訳じゃないのは分かってるけどいいタイミングだ。

ミメットみたいなタイプってどっかしら腐ってると思ってたんだけど思い過ぎだったのかな？ 美少年スキーは基本アビリティーだと思ってたんだけどどうなんだろう。

ミメットはオペレーゼの近くに移動して、コソコソと噂話をする様な格好をしていた。

『クリーダも寝転んでみるんにゃん？』

あたしばかりが膝枕してるのも悪いのでクリーダに聞いてみた。クリーダは一見クールに見えるけど、実は結構甘えるタイプだって事が分かってきたしね。

「ええ、してみたいです」

ほらね、すっごく嬉しそうな顔をしてあたしの膝枕に応じたよ。
うーん、のぼせた体にたまにそよそよと吹く風、そしてどこからか聞こえてくる風鈴の音が心地いいな。

そういえばヘリオって打ち上げの時居なかったけど、どこに行っ
たんだろ？

あたしはヘリオに魔物の事や他に色々と聞きたい事があった。何
で魔物と同化していたのかって事とか、バーサーカーだったって事
を言わなかった事とか。誰も言わないけど、みんなも聞きたいだろ
う。

その時またドアの開く音がして誰かが入って来た。

「おお！？ 今日随分大勢で来てるんだな」

このシチュエーション、そして聞き覚えのある声がした。予想通
りそこにはヘリオが立っていたよ。

『なんだ、ヘリオ……』

あたしは反射的にいつもの台詞が出たけど、唐突にある感情が沸
き起こってきたんだ。

「まったく、なんだはないだろ……ん？ どした？」

あたしが前回と違って硬直した様にぎこちない動きだったのを見
て、ヘリオは不思議そうな顔をした。

『ギエエエエエエー……ッ！』

あたしは自分でも信じられない程の声を上げて、一目散に湯船に飛び込んだんだ。

クリーダの頭はと言うと、膝枕を失った為に縁台に頭が当たってゴツンと言う音をさせていた。

その後で、ミメツトとオプティーゼも当然の様に叫んでたよ。

「おや、おチビもついに羞恥心と言うものを覚えたかーッ！ 成長したねえ」

「アハッ！ 次は反抗期が来るかもねえ」

ポカーンとしてるヘリオ。

『なッ！ なんでヘリオが入ってくるんだアアーッ！』

「何でって……、何で今回に限ってそんな声出すのか逆にオレが聞きたいわ」

そう言えば……何であたしは叫んだんだ？ 今までなら全然何とも思わなかったのに、今は裸を見られるのが凄く恥ずかしいんだ。

「ほら、ヘリオもボーっとしてないでお湯に浸かりなよ」

「近こうよれ、苦しゅうないぞよ」

スフェーンとシンナバーには羞恥心と言うものは一生縁がなさそうだ。

『こっち見るな！』

「お前は思いつき見てるってのにそう言うか」

『わわわッ！ こっちに近づくなッ！』

ヘリオは一直線にこっちに来やがった。近くにいたミメットなんて気を失いそうになってるよ。

「プッ、おチビたん顔真っ赤だあ！　かわいいーッ！」
「恥らう割に見るべきものはしっかり見ちゃうんだねッ！　わかります」

スフエーンとシンナバーがあたしを茶化した。

『これはッ！　さっきのぼせたからだんにゃん！』
「オレに興味があるならそう言えよなー」

そう言っってヘリオはあたしの目の前で筋肉を誇示する様なポーズを取った。

その直後、あたしは目の前が真っ暗になったかと思うと記憶が途絶えた。後で聞いた話ではぷかりとお湯に浮かんだらしい。

それは二度目ののぼせが理由じゃない事は確かだったんだ。

【56】もう1つの手に入れたもの（後書き）

いっその事全員で二次会のお風呂って思ったんですけど、大変そうなのでかいつまみました。

いじりキャラ達を今後どうするかは、ゆっくり考えて行きたいと思っています。

【57】悔やまれし過去

お風呂屋さんでぷかりと浮かんでしまったあたしが気が付いたのは魔戦士組合のテントの中だった。

『ブハー……ッ！ あ、あれ……？』

「気が付きましたね」

『ここは……？』

目を開けたあたしが最初に見たのはどっかで見た事のあるテントの天井だった。それが魔戦士組合のテントと分かるまで数秒を要した。

あたしはテントの中に布団を敷いて寝かされていたんだ。

「魔戦士組合のテントの中ですよ」

お風呂の中であなは気を失ってしまった様です」

ああ……そうだった。露天風呂の中であたしは気を失ったんだっ
たよ。

「気が付いたな、大丈夫か？」

そう言ったのは、いつもと違って少し心配そうな顔をしたヘリオ
だった。

「ここまでヘリオさんが運んでくれたのです」

『そかー、ごめんだんにゃん』

「いや、まさか気を失うとは思わなかったわ……すまん……」

あたしが気を失った事に責任を感じたのかへリオが謝ったよ。あたしもまさかあんな事で気を失うなんて思わなかったけど。

『む……?』

「どうしました?」

『あたし、服着てる』

「ええ、わたしが着せました

つけシッポが暴れるのでちょっと苦労しましたけど……」

もはや付けてる事すら忘れる程、付けシッポはあたしに馴染んでいるな。もうトレードマークにしてしまうのもいいかもしれないって位にね。

『クリーダありがとんにゃん』

「当然の事をしただけです、大切な人をそのまま外になんて出せませんから」

ここであたしは他の人達がテントに居ない事に気が付いた。

『ところでみんなは?』

「今さっき夕食に出かけましたよ」

『そかー、あたし達も食事に行かないとだんにゃん』

「そんじゃ、食事に出かけるか?」

「何か食べたいものってありますか?」

『えとね、とても気になる食べ物があるんだんにゃん』

「何ですか?」

『前に本で読んだカレーって食べ物を食べてみたい』

「カレー? 何だそりゃ?」

『ゴハンにスープみたいなのをかけて食べるものらしいんにゃん
スパイスが香ってすごくおいしいって書いてあったんだ』

「カレーですか……そんなお店ありましたっけ？」

『プププ……、実はもう見つけてしまっているのだんにゃん』

あたしは二人をカレーのお店に案内した。お店に入るとスパイスの香りが店の隅々まで香っていたよ。その香りを嗅いだとたん物凄くお腹が減ってきた。

『うわぁー、いい感じだんにゃん』

「独特な香りがしますね」

「だなぁ……、何か腹減って来た」

あたし達が店の入り口で話していると店員さんがやって来た。その店員さんは今まで見た事のない珍しい服を着ている。

スタイル的にはローブっぽいけど服の装飾が凄い、これはかなり手が込んだ布だ。どうやって作ったんだろう。

「いらしゃいませー！ 三名様でーすね？」

「んあ？ そうでーすね？」

「こちらへどーぞでーすね」

そしてあたし達はちょっと面白い言葉を話す店員さんにテーブルに案内された。

テーブルにかかっているクロスも随分と凝ってる、これは研究のしがいがありそうだ。

「なぁ」

あたしがテーブルクロスをじっと眺めていたらヘリオが声をかけてきた。

『なんだんにゃん？』

「これってどれがどいういう料理なんだ？」

「よくわかりませんね」

『チキンカレーとか言うのとか、キーマカレーとか言うのがカレーの定番らしいんにゃん』

「チキン？ ニワトリの肉って事か？ お、あったあった」

『ディナーのコースは好きなカレーを3つ選べるって書いてあるんにゃん』

「3つですか、それにしましょう」

『ここはナンもやってるみたいだんにゃん、ゴハンかナンならナンにするでーすね』

結局三人ともディナーコースで、カレーはチキンとキーマとベジタブルの三種類を頼んだ。しかし一人位別の頼んで冒険しようって奴は居ないのか！？

まあ、あたしは辛いのが苦手だから甘口にしたけどね。二人の辛さはあたしが勝手にクリーダは中辛で、ヘリオは辛口を頼んじゃった。

前菜を食べながら、ヘリオに聞こうと思ってた事を思い出した。

『ヘリオってランク10なんですよ？ 何でバーサーカーって事隠してたんだんにゃん？』

すると、あぁって顔をしてヘリオが答えたよ。

「だってなあ……ランク10なんて言ったらめんどくせーしそれにバーサーカーってあんまり人に言いたくなかったんだよ……怖がられるだろ？」

『そういうもんかねー？』

『言わないのもめんどくせー奴だんにゃん』

「そういえばあなたも、ランク10になってもバーサーカーにはな
りたくないって言っていましたね」

『うぐう……バラしたぁーッ!』

「ほらみろ、バーサーカーって世間のイメージ悪いんだよ」

まあ確かにバーサーカーってイメージ良くないかもしれない。人
間の壁を越えてただ戦うだけの存在になるって言うし、敵も味方も
関係なくなるって言うし。その時の顔もアレだし。

「ところで、ヘリオさんは一年前の作戦にも参加したのですよね？」

「あ、ああ……」

それに少し曇った表情でヘリオが答えた。それは一年前、参加し
た108名の魔戦士組合員の内、自分を除く107名を手にかけて
と思ったからだろうか？

「その時もヘリオさんは魔物と融合していたのですか？」

「多分な……」

『多分？　ってどういう事かんにゃん?』

「オレ……その時の記憶が全くないんだ、今回だって気が付いたの
はお前の出した岩の上だった

一年前のあの時も、気が付いたのは軍のテントの中だったよ」

「それはあの剣に触れた時からですか？」

「そうだ、軍が用意した試作品の剣を使えって言われてな……」

『もし一年前の事とか気にしてるなら気に病むはないと思うんにゃん
あれはヘリオがやったんじゃないかって魔物がやったんだからさ』

「そうなんだけどな、簡単に忘れたくない事だってあるさ」

『ふむー?　何か訳アリな雰囲気だんにゃん』

「あいや、個人的な話だ詮索するな」

きっと一年前に何か重大な事が起こったんだろう。あたしの憶測だとヘリオにとってとても大切な人が居て、その人を結果的に殺めてしまった……とか。

今回参加したのは魔物に復習をする為だったのだけど、まさか自分が関係していたなんて……ショッキング。と、こんな所だろうか？

「お前なあ……詮索するなって言ったのに」

『んにゃん？』

「勝手に想像するのはいいけど、それを声に出して言うか」

『えう？ あたし……今声に出してた！？』

「ええ、たまにそういう事ありますよ？

もしかして気付いてなかったのですか？ わたしはわざとだと思ってたんですけど」

『うげえーッ！ あたしって今までどんな事言ってたんだろ……』

声に出して言う癖があったなんて知らなかった。どうりでたまに凄い顔で見られる時があるって思ってた……。

ともかくヘリオの秘密は後でゆっくり吐かせるとして、初めて食べたカレーはとてもおいしかったよ。って事でめでたしめでたしだ。

「簡単には吐かないけどな……」

『うぎゃ……！！？』

【57】悔やまれし過去（後書き）

カレーっておいしいですね^^

カレーを発明した人ってとても偉大だと思います。

次回こそ軍の指名をする予定です。

【58】首都マトラへの選考会

その夜、マトラへ行くこととなる魔戦士組合員の発表を行う為、組合員達に集合がかけられた。

組合員のテントにアンモチン大佐と軍の兵隊達がやって来た。

「では、これからマトラ王国の首都、マトラ新市街に行ってもらふ事になる組合員の発表を行う

この選出は本国マトラによって決定されたものであり、出頭要請と同等の強制力を持つものである

無論タダでと言う訳ではない、選ばれた者には更に後ほど100万丸を与える」

ほほお、追加で100万丸出すなんて軍って随分太っ腹だなあ。

まあ逆に考えれば、選ばれた者が行くことにそれだけの価値があるって事なんだろうけどさ。

色々と憶測が浮かぶけど、それは行けば分かるだろう。あたしが選ばれるとは思えないけど行った者に後で聞けばいい事だ。

「スフエーン・アウインとシンナバー・アメシス、前に出なさい」

「はい」

おっと、やっぱあの二人だ、戦況を大きく変化させられる程の二人だから当然か。

スフエーンとシンナバーはアンモチン大佐の前に並んだ。

「ふむ、キミ達の噂は本国にも届いていたらしい、参加者名簿から無選考で指名されたそうだぞ」

うわぁーッ！ あの二人国家にまで認められてるよ。一瞬、後でクラスメートだったんだってみんなに自慢しちゃおうかって思う位にビックリしたよ。

「それとは別枠で軍からも無選考の指名が出ている、クリーダ・ヴァナディン前へ」

「……はい……」

まあ、クリーダが指名されるのも当然だろうね。スフエーンとシンナバーは国家からの指名で、クリーダは軍からの指名か。何だかわかんないけど、一大プロジェクトの匂いがするぞ。

「無選考枠はここまでだ、次に選考枠を発表する」

さあて、選ばれるのは一体誰なんだあ？ あたしはすっかり他人事モードになってたんだ。

「……大……ですか？」

あたしは誰かに体を揺さぶられてハッと我に返った。

『はれ？』

「もう終わってますよ？」

周りを見ると、アンモチン大佐や軍の兵隊の姿は既になく、組合員達もそれぞれ自由にしていた。

『ふう……何かすっごく疲れた……』

「二人とも凄いじゃない！ 指名されるなんて！」

ミメットは代えのメガネを掛けていつものお返しか、固まったあたしの背中をさすりながら言ったんだ。

『あ……え？ 夢じゃなかったのかんにゃん？』

「ちゃんと名前呼ばれてたでしょ？」

それまで夢か幻かって思っていた内容はこうだ。

選考枠で呼ばれたのはあたし一人だけだった、魔物の融合体を解体した事が評価されたとか言っていた気がする。

「いや、実際よくやったと思う

キミが居なかったらヘリオを殺す事になっていたかもしれないし、ミメットも実際危ない状態だったらしいから当然の結果だろう」

エルバはそう言ってくれたけど、あたしが認められた事がちょっと信じられなかったんだ。

「んと、改めてお礼を言わせてね、助けてくれてありがとう」

ミメットがペコリと頭を下げてあたしにお礼を言った。

『気にする事ないんにゃん

お礼ならお背中スペース無期限フリーパスでもらってあげる』

と言って、あたしはキュピーンと目を光らせた。

「それは……あの……」

ミメットはちよつと顔を赤くして困った様でいて、実はまんざら

でもない様な表情で言った。しめしめ、順調に……。

『いッッ！』

あたしは突然チクつとした痛みがして瞬間的に声を出した。背中をクリーダにツネられたんだ。

「あら？ どうしました？」

澄ました顔で言うクリーダ。

『あ……、フリーパスってのは冗談ね』

「そ、そうだよー！ ビックリさせないでえ」

「余り人をからかうものじゃありませんよ」

クリーダがあたしにニッコリ微笑むのを見て、あたしも頬を引きつかせながら微笑んで返した。あんまり遊びが過ぎると今に大変な目に合いそうな予感がする……肝に銘じておこう。

『そんじゃ、おやすみの準備でもしようかんにゃん』

「そうですね、今日は色々ありましたし」

ちよつと早いけど明日に備えて布団を敷いてたらスフエーンがやって来た。

「ねえ、おチビたん達って乗り物でしょお？

あたし達もマトラまで乗っけてってえー」

「もちろん帰りも送ってってくれるよねッ！？」 当然タダでだけどねッ！？」

『あうん、それはいいけど

まさかあたしが指名されるなんて思わなかったんにゃん』

「あなたはもつと自信を持っていきたいと思いますよ」

「アハハッ！ おチビたんはやれば出来る子なのよお？ あたしには分かってたわぁー」

「うんだ、あたしにも分かってたんだからッ！ いつかは何かやらかす子だってッ！」

うれしいなあー！ クリィダはもちろん、スフエーンやシンナバ
ーも珍しく褒めてくれた……うん？ やらかす子？

『んなー！ッ！？ やらかすって犯罪者かッ！ 犯罪者扱いなの
かーッ！』

「でたぁー！ッ！ おチビ節！ 超久々だねー！ッ！ なっつか
しい！」

「アハハハハッ！

さあて、久々におチビたん節も聞けた事だし、今日は姉妹で仲良
く寝ちゃってみるう？」

『姉妹って……だれが！？』

「だってあたし達ってみんな、おチビたん姉妹じゃない」

『うげえー！ッ！ スフエーンが凄い事を言いやがったッ！』

しまった……心に思ふべき事がまた声に出たじゃないか。大声出
したせいでみんなが一斉にこっちを見ていた。

「あ？ なんだ楽しそうだな？ オレも仲間に入れてくれよ」

いつの間にかヘリオが近くにやって来ていた。軍の指名の時また
どっかに行っちゃって居なかったのに、いつの間にか戻って来てい
たらしい。

「あらあ？　ヘリオも仲間に入りたいのかしらあ？

残念だけど今回は姉妹限定なのよお？」

「姉妹い？　お前達って姉妹だったのか？」

「ふふーん、だからって血縁での意味じゃあないよッ！　大人の事情って事だよッ！　後はわかるな？」

シンナバーがエッヘン！　と言う感じのポーズで胸を張って言い切った。あちゃあ……この二人と来たら……。クリーダがすっごい不満そうな顔をしていた。

「ダメですッ！　この子はもうわたしに誓ったのですから！」

ってとうとうクリーダが言ったらスフェーンとシンナバーが爆笑してた。クリーダまであの二人におちよくられてるよ。

「何か言葉が出んわ……」

そりゃそうだ、ヘリオの反応はごく普通だよ。ついでに言えば周りで見てて固まっちゃってるみんなもごく普通の反応だ。

『そう言えば、ヘリオってマトラには行くのかんにゃん？』

「んあ？　ああ一応行く事になってるけど」

『じゃあ、一緒に乗ってく？　乗り物には6人位は乗れると思うんにゃん』

「お、そりゃ助かる、頼むわ」

ヘリオの剣は少し長いけど、後ろのドアを開けてちゃんと固定しておけば大丈夫だろう。

「運転はわたしがしますね、あなたはそろそろ……」

「ああ、そうだったな、何ならオレがしてもいいぞ」
『う……、お願いするんにゃん』

何か少し恥ずかしかった。前は何とも思わなかった生理の事だけど、何故か今は言う事にも抵抗を感じていた。因みに予想では明日か明後日位にはいらっしやるだろう。

「そろそろって生理い？　お大事にねえ」

「うむ、おチビにもちゃんと来るんだねッ！　あたし達にとっては全く無意味な事だけだねッ！」

ふうー……、しかし今のタイミングで来るとはめんどいなあ。明日帰ればギリギリって思ってたんだけど、お国の要請じゃ断れないからしょうがないや。

ヘリオを含め、あたし達5人が首都マトラへと行くことになったんだ。

【58】首都マトラへの選考会（後書き）

一週間位でまとめる予定でしたが、まだ大分かかるかもしれません。

今後、王国の人間が出てくる予定です。

魔戦士組合員が王国にとってどういうものなのかがぼんやり見えて来るかも、来ないかも。

もう少しばかりお付き合い下さい^^こればっかですみません

【59】トリックスターズ・スプレnden

翌早朝、まだ空が暗いうちにあたし達はリドナを出発しようとしていた。

出発の前にみんなに挨拶しておこう……って思ったけどミメットは寝たままか。

あたしはミメットの枕元へ、戦いで碎け散ったメガネを密かに修復しておいたものを置いた。

それから他の起き上がって手を振る組合員達に軽く挨拶すると、あたし達5人は乗り物に荷物を載せ乗り込んだ。

因みにヘリオの剣は想像以上に長く、乗り物の後ろのドアからドーンと飛び出しちゃってる。

ま、しょうがないね。いっそのこと途中で折り曲げてやろうかとも思ったけど、ヘリオの大切な剣だからやめといた。

ヘリオの剣の横には、あたしの赤い剣も並んでる。魔法を使う時の新しいアクションのバリエーションも増えそうだ。

「忘れ物はないな？」

「んじゃ、出発するぞ」

『よろり』

結局、乗り物はヘリオが運転する事になった。この乗り物を軍にもらってから、あたしは乗り物を用意しなくて済んでる。

あたしが魔法で作り出す乗り物って、他の人には運転出来ないから重宝するな。

まだ夜が明けない薄暗い中、白い花の様な乗り物は照明で辺りを

照らしながらゴトゴトと動き始めた。

「ヘリオさん運転お願いしてすみません」

クリーダがヘリオにさりげなく労いの言葉をかけた。

「いやあ、近いしどうって事ないさ」

スフエーンとシンナバーは何度起こしてもちつとも起きなかったから、荷物と一緒に詰め込んでおいた。寝てくれてるお陰で乗り物は静かだけどね。

『ところでさ、何でこんなに早く出るんだんにゃん？』

「軍の話ではマトラへは2〜3日中にとって事だったのですが、時間は午前中を指定されてますからね

今出れば今日の午前中には着けるのですよ」

『そか、まーさっさと100万丸貰って帰りたいんにゃん』

ただ行くだけで100万丸貰えるなんて思っちゃいけないけど、もし条件があるならそこで考えればいい事だ。

「よし街道に出た、少しだけスピード出すぞ」

マトラに続く街道は道がまっ平らで速度が出せる、その距離はリドナから近いと言っても宿場町だから歩きで丸一日とかかかるんだろう。それが乗り物なら朝の早いうちに到着する事も出来ちゃう訳だ。

マトラの街の関所の高い塀を通り抜けると、目の前に超巨大な街

が現れた。

城下町の建物は全てが統一された雰囲気をかもし出していてリドナよりもずっと規模が大きく、はるか彼方にお城の建物が少し霞んで見えた。

マトラは早朝から人々で活気あふれていた。

「さすが王国の首都だけあってすげえな」

『うむ、まるで未来の世界に来たみたいだんにゃん』

なんと道は石畳ではなく、濃い灰色をした不思議なもので覆われていた。触ってみたら石みたいには硬いけどちよっと違っていて、あたし達の他にも乗り物がいくつも動いていた。

中央に向かって伸びている大通りの左右には、お洒落な街灯が並んでいた。人々の格好も何だか垢抜けて見える。

「街の見物をしたい所ですけど、それは後にしましょう」

「そうだな、まずは城に行ってからがいい」

中央の大通りの行き止まりには大きな広場があり、中央に銅像があった。すごく威厳がありそうな人の銅像なんだけど、これがマトラ王だったりするのだろうか？

そして、その広場から先がお城へ続く入り口らしく、上に跳ね上がりそうな橋がかかっていた。その橋の幅は人が二人が並んで通れる程度に狭くなっている。多分、一気に攻め込まれない為の工夫なのだろう。

あたし達はここで乗り物から降りて歩く事にした。スフエーンとシンナバーはやっとここでお目覚めだ。

「うーん……もう着いたのお？　んー……よく寝た」

「あつりゃー、いきなりお城のまん前って言うのも感動がないもんだッ！」

いきなり到着しててさぞ驚くかと思ったらずいぶん地味な反応だな。

ともかく中に入らなきゃ、衛兵に軍からもらった礼状を見せると案内人が来るまで少し待つ様に言われ、やがてその案内人らしき人物がやって来た。

その人物はお城の文官っぽい身なりをした女性だったよ。

「皆さん随分とお早い到着でしたね、では控えの間へ案内しますの
で後に付いて来てください」

あたし達は少し緊張しながらその女性の後ろについて歩いた。おそらく時間外は畳まれると思われる橋の上を通り、お城の中へと続く石で出来た立派な通路を歩いた。

『案内してもらうのはいいんだけどさ、この後何するのかんにゃん？』

「さあ……、そこまでは聞いてないのでわかりません」

「んー……、勲章とかもらえたりしてねえ」

勲章ねえ……、確かに遠からずの様な気はするけどさ。こういう展開な場合、もらった後に何かありそうな気がする。騎士として迎える代わりに国の飼犬になれとかさ。

「なら、おチビの勲章はきつとおチビで賞だねッ！」

『そだね、シンナバーのは存在が毒で賞かもしれないにゃん』

「わぁー、いいねソレッ！ 楽しみいッ！」

くううコイツ……かなり出来るな！　いつか必ずギャフンとか言わせてやる！

「お城の中ですよ、静かにしましょう」
『うはい』

ちッ、変な振りされたせいでクリーダに注意されちゃったじゃないか。変な振りをしたシンナバーはクスクス笑ってる。

それから更になんか歩いてやっそこ控えの間に到着だ。いやあ……お城って思った以上に広いんだね。お城だけでベイカの街より確実にでかいと思う。

「すぐにお茶の用意をいたしますので、くつろいでお待ちください」

通された控えの間には長く立派なテーブルがあり、その左右にくつもの椅子が並べられている。

部屋にあるものはどれも気品漂う立派な作りだ。これは一般市民への待遇とは思えないな。かなり期待してる反面不安にもなってきたよ。

「さて、オレは時間まで寝るわ」

ブッ、ヘリオはこんな所でも寝られるのかッ！　クリーダは礼儀正しく椅子に座っているってのに。

スフエーンとシンナバーは相変わらず楽しそうにお喋りしてクスクス笑ってる。全くもって学校の休み時間のノリですよ。そうじゃなくてもあたし達って完全に場違いな感じなのに。

その後、さっきの案内人の女性が言っていた通りお茶が配られた。そのお茶は初めて嗅ぐとてもいい香りのするお茶だった。

『これはッ……きつとすつごく高いお茶だんにゃん』

「んーいい香りねえ、どこで売ってるのかしら？」

シンナバー、後で街のお店を探してみなーい？」

「うんうん、街を探検だッ！」

スフエーンが隊長であたしが副隊長、後のみんなはただの隊員だよッ！？

あたし達の言う事には絶対服従だからねッ！？」

『あー、はいはい』

あんたらの能天気さが今は頼もしく思えてならないんにゃん』

一息ついた頃、案内人の女性が説明を始めた。

「では、改めまして

マトラ城の武官の一人を務めるアルミナです

今回あなた達がこのマトラ城に招待された理由を説明させて頂きます」

このアルミナって人、服装や体格から見て文官にしか見えなかったけど武官だったのか。って事は魔法使いなのかもしれない。アルミナは説明を続けている。

「ご存知とは思いますが、このマトラ王国は魔法や兵器を開発していて、それを他国へと輸出しています

周辺の国々ではまだ魔物との緊張が現在も続いている国もありますので、その需要も高い訳です」

それはみんな知ってる事だね、魔物と人間との戦いはずっと続いているんだ。一体何を争っているかってのは簡単な事で、どちらがこの世界に君臨するかって事らしいよ。

魔物達は人と共存しようなどとは思っていない、人間を滅ぼして

魔物達がこの世界を治めようとしてるってみんな学校で教わっている。

「もちろんこのマトラ王国も諸国の例外ではなく、魔物とは常に対立しています

現在、我が軍は南方の守りを強化している状態です」

何かアルミナの話は切羽詰った感を感じるな。悪い予感が当たらなければいいけど。

「単刀直入に申しますと、南方に人材を集中しなければならない事によって、国内は深刻な人手不足が起こっています
特に優秀な人材、つまり強力な力を多く必要としています」

アルミナは両手を机に手を付いて力説した。

「魔戦士組合を王国が設立したのはその様な状況の為、一般国民からも人材を発掘しようと言う試みによるものです
組合員へ支払われる報酬の半分をも王国が負担しているのは、その様な理由があつてなのです」

報酬の半分を国が負担してるなんて知らなかったよ。恩着せがましくこう言った後には何かしら取引とがありそうだけども。

「そこで今回計画を一步進め、魔戦士組合員の選りすぐりの人材に、トリックスターズ・スプレンドェンスという称号を与える事になりました」

計画？ トリックスターズ・スプレンドェンス？ なんじゃらほい？

称号長いな……、それって騎士みたいなもんだろうか。

「ご心配なさらずとも王国からの束縛等がある訳ではありません
他の組合員の方々の指標と言うわけです」

うーん……ランク一でもそのトリック何とかになれちゃう訳？
何だかなあ……、あたしとか目指したいなんて誰か思ったりするん
だろうか？ 少し無駄な心配が増えたぞお。

トリックススターズ・スプレデンス、明日になったら忘れてし
まいそんな称号をあたし達は王国からもらえる事になったんだ。

【59】トリックスターズ・スプレデンス（後書き）

トリックスターズ・スプレデンス、無理やり単語を今出した感もする様な。ない様な。

トリックスターズはありがち単語なので置いといて、スプレデンスは美しい容姿とは似つかない好戦的なあの熱帯魚から頂きました。

前に飼った事があるのですが、エサをあげるとすっごいかわいかったです。

Twitterやってます（無駄なつぶやきと変な毒）

<https://twitter.com/erimakinew>

Mixiも同じ名前で登録してますのでよろしかったら盗み見としてみてくださいださり^^

でわなたです〜！

【60】あたし達の未来に向かって

あたし達は王国からトリックススターズ・スプレンドENSという称号をもらえる事になった。

王国の武官アルミナの説明だと、これから王様と謁見するんだそう。その時の挨拶の仕方とか教わったけど、王様が魔戦士組合員に会ってくれるってちょっと驚いた。

「王の間へは武器は兵士以外は持ち込めませんので、ここに置いて行って下さい」

それではこちらへどうぞ」

あたし達は少し緊張しながらアルミナの後を追って歩いた。

途中何十人も兵士が警備している通路を通り、一段と華々しい扉を通して王の間へ入った。

煌びやかな王の間には騎士らしき者や、軍の将校の制服を着た者が左右に分かれ、あたし達に注目していた。

軍服の中にはリドナのテントに居たアンハイド将軍や、ドラド村の近くで演習をしていたサルファー将軍も居た。サルファー将軍の部下のあの岩二人がここに居ないのがせめてもの救いだね。

あれから特に言わなかったけど、あたしとクリーダは常に付けミミと付けシッポを付けたままになっていて、それらは今もマイペースに動いているよ。

まあ、身なりについて特に何も言われなかったし大丈夫じゃないかな？

あたし達は階段の上に座る王様の玉座の前に横に並び、アルミナ

に言われた通りに跪いた。

あたし達を案内して来たアルミナはと言うと、なんと王様の玉座の右横に立っている。その玉座の左側にもアルミナと同じ格好をした別の武官が立っていた。

玉座の横に立っているって事は王様の警護なのか、もしかしてアルミナって兵達の中でもかなり偉い人なんじゃないか？ ただの案内人だとばかり思ってたんだけど。

「私がこの国を治めるマトラである、本日は皆よく来てくれた」

玉座に座るマトラ王が最初に挨拶した、広場の銅像はもっと若かったからあれは昔の姿とかなのだろうか？ このマトラ王はそこそこ高齢に見えるな。

「では、これより称号の授与を行います
名前を呼ばれた者は立ち上がって下さい」

アルミナが進行役をするのか、偉い人も色々大変なんだね。

「王国指名、ソーサラー、スフェーン・アウイン
王国指名、プリースト、シンナバー・アメシス」

スフェーンとシンナバーは「はい」と返事をしてその場に立ち上がった。

「王国ラボラトリー指名、バーサーカー、ヘリオ・ブラッド」

「はい」

ヘリオが名前を呼ばれて立ち上がった。

へえー、ヘリオは王国ラボラトリー指名なのか。ラボって事は魔法とか武器とか作ってる所かな？ 横文字って辺りがちょっと胡散臭い感じがするけど。

「王国軍指名、科学魔導士、クリーダ・ヴァナデイン」

「はい」

クリーダはサルファー将軍に指名されたんだろうか、ルクトイ30体を壊されて立場なかっただろうから、クリーダが特別だって事に出来れば丸く収まりそうだし。

「そして、今回の選考からの選出ですが」

……っと、最後はあたしか。

「小細工魔法士、ルビー・サファイヤ」

『んなッ!?!』

その名前を呼ばれた事にあたしは驚いてしまったんだ。何故なら、その名前はあたしが組合に登録していた名前ではなかったからだ。そればかりか……。

「ルビー・サファイヤ、どうしました？ 起立してください」

アルミナは不思議そうな顔をして、あたしに規律を促した。

『は、はい』

ふと隣にいるクリーダを見ると、目を丸くしてあたしを見ている。そりゃそうだ、今まで違う名前をあたしの名前だとずっと思ってたんだからショックだろう。あたしはクリーダに苦笑いして見せた。

どうやって王国がこの名前を知ったかは分からないけど、これがあたしの本当の名前なんだ。

スフェーンとシンナバーはニヤニヤしてあたし達の様子を楽しんでいた。

「ルビー・サファイヤ、気分でも悪いのか？」

なんと、王様直々にあたしの名前を呼んだ、驚いて王様を見上げたら……。

「ププウーッ！ うわぁーはっはっはっ！ こりゃ愉快だ！」

いきなり王様が吹き出して大笑いし始めたよ。なんだなんだ！？

『んにゃん？』

何が何だか分からずこう言ったら。

「ブッ！ ぶわーーッハッハッハッ！」

更に大爆笑到来！ 一体何だってんだ。あたしはポカーンとした顔でマトラ王を見ていたよ。

「つけミミやつけシッポ……それに喋り方まで、
何から何までコランド・サファイヤにそっくりだな」
『えッ!?!』

王様が言った「コランド・サファイヤ」はあたしのお婆ちゃんの名前だ。でも何で王様がお婆ちゃんの名前を知ってるんだ!?!

「コランドは私の古い友人でな、サファイヤは私が与えた姓なのだ
ルビー、お前の事はコランドから聞いていたぞ?
余り身内の者を心配させるのは感心せんな」

『うう……はい……』

お婆ちゃんが王様の友人で、サファイヤが王様のだって!?!
ど
ういう事かさっぱりわからない。あたしは王様に叱られて軽いパニ
ック状態に陥っていた。

「王様、進行してもよろしいでしょうか？」

進行を止められたアルミナが困った様子で言った。

「ああ、止めて悪かった、続けてくれ」

そう詫びる王様はまるで叱られた子供の様だったよ。

「以上の者に、トリックススターズ・スプレンドエンスの称号を与え

ます

この称号の効力により特例任務の参加、軍を含む国家の戦略への参加の制限も解除される事になります

この称号に恥じない行動を行う事、それだけは王国からの命令とさせて頂きます」

なにこの称号の威力！？ 特例任務だけでなく軍や国家の作戦にも参加出来るんだってさ。重要な 戦略に参加させるってならきつとそれなりの調査はされたのだろう、そりゃ名前が割れちゃう訳だ。

そして、あたし達はこの称号と100万丸の他に、新しい組合員のバッヂをもらった。デザインは全く同じだけど、ゴールドのふちがされてて少し立派なバッヂだったんだ。

「ルビーさん、今回は少しお仕置きをしなければならぬみたいですね」

ふてくされた顔のクリーダが、横に座っているあたしの腕をギュッと掴んで言った。

『うう……ごめんなさい……』

あたし達5人は、あたしやスフェーンやシンナバーの生まれ故郷の「カイナの村」に向かって走っている乗り物の中に居た。

運転はまたヘリオに任せている、今後はずっとヘリオに任せられそうな気がするけどね。

その横にスフェーンとシンナバーが座り、そこには二人で楽しそうに話をしてクスクス笑ういつもの様子があった。

あたしはと言うと、後ろの席でクリーダのお仕置きを受けていた。具体的にはぬいぐるみの様に抱きかかえられると言う罰なんだけどさ。

「何故わたしにちゃんと名前を覚えてくれなかったのですか？」
『だって、全てを生まれ変わるつもりだったんだんにゃん』

そうなんだ、新しい自分に生まれ変わるつもりで新しい名前を名乗ったんだよ。確かに最初はね。

「本人にはちゃんとした理由と覚悟があったのよ、だからいいんじゃないーい？」

おチビたんもこの短期間にずい分成長したよねえー」
「ええ！？ ヤバイじゃない！ おチビに抜かれる！ って思ったけど奇跡が起こらない限りないか
クイーンオブおチビの称号は伊達じゃないねッ！」

大部分はあんたらのお陰だけだな。

『シンナバーも成長すべき箇所はあるんじゃないのかんにゃん？
例えばその、少年的ナイスバディとか』

負けじとシンナバーに反撃を仕掛けるあたし。さあどう出るんだ？
カチンとか来るのか？

「えーッ！？ これはあたしのチャームポイントなんだよッ！ 例えおチビのお願いでもこれだけは譲れないねッ！」
「プッ、シンナバーはそのままでもいいのよおー？ チャームポイン

トなんだからあ」

「でしよでしよー!? 流石あたしのスフエーン様は分かってるねーッ!」

この二人……ホント大嫌いだよ。いい意味でだけどね。

「そういう事なら、ルビーさんもこのままでもいいですよでも、帰ったら登録書類は正しく修正して下さいね」

クリーダはそう言うと、あたしをぎゅっと抱きしめた。あたしの頭の上にある付けミミがバサバサっと音を立てて動いていた。

「……なあ、ところでオレってカイナの村の方向わからないんだけど?」

カイナへの道筋を案内されず一人置いてかれているヘリオがぼやいた。

「ベイカと反対の東の方向に向かうんにゃん」

あたしはヘリオの背後からアバウトに東の方向を指差してあげると、ヘリオは仕方なさそうにその方向へ乗り物の行き先を変えた。

草原を走る白い花の形をした乗り物は、デコボコした道をカイナの村に向かって走って行く。

その走りはまるで、あたし達が今後経験して行く未来の様にも思えた。

あたしの名前は「ルビー・サファイヤ」、小細工魔法を使う万能魔法使いだ。

【60】あたし達の未来に向かって（後書き）

小細工魔法士は今回で最終回とさせて頂きます。

途中ネガな部分が多く、鬱な気分になった人も居るんじゃないかとも思いましたが、どうしても入れたかった設定でした。

ルビーさんはちょっと個人的な事情による所の特別なキャラなので許してください。

シリーズはまだまだ続けて行きたいと思っていますので、次回作もぜひご覧頂ければ幸いです。

次回はとにかく笑える内容にして行きたいなと思います^^。

最後まで読んで頂きありがとうございましたm（　　）m

～～設定資料～～

＊トリックスターズ

クリーダ・ヴァナディン…科学魔導士、魔法と科学を合わせた魔法使い、ルビー大好き

ルビー・サファイヤ…小細工魔法士、お婆ちゃんがいる、両親はもう居ない、飼猫の名前はダイヤ、ヘリオの剣術を会得、真つ赤な両手剣を手に入れた

シンナバー・アメシス…プリースト、ランク6、家が教会、父はフエルドスパ―・アメシス司祭、スフェーン大好き、片手棍二刀流を使いすぐ前へ出て行く最凶のプリーストとして悪名高い

スフェーン・アウイン…最強のソーサラー、ランク8、ルビーとは昔色々あったらしい

ラピス・ラズリ…（科学魔導士に登場）伝説の勇者クラス、ナイト、体内から常に発生する聖なる光はあらゆる攻撃を無効にする。魔戦

士組合には入っていない、大男

ヘリオ・ブラッド…最強クラス、バーサーカー（本人はファイターと言いたい）、ランク10、ルビーに一目惚れ、巨大な両手剣を使う、細身、長身

＊その他の戦士

エルバ・パイロモル…銃士、ランク9

ミメット・アズ…召喚士、ランク8、300種類の召喚が可能、得意な召喚はエキドナ（魔力の続く限り傷付けられないと言うが）

オプテーズ…ソーサレス、通称爆裂魔導士、スフェーンに憧れて魔法の研究をしている

＊その他

・ナボラの町

オーピメント・テン…町なのに市長、司祭（後に国際親善の責任者として司祭長に）、通称テン市長

・ドラド村

ベニト…いたずらっ子の少年

アンドラ…ベニトの母、父親については事情あり

・カイナ

フェルドスパー・アメシス…シンナバー・アメシスの父、教会の司祭
コランド・サファイヤ…ルビーのお婆ちゃん、小細工魔法士

・リドナの街

突然変異の魔物の討伐作戦の地、マトラの首都に近く、建物も大きく栄えている

・マトラ王国

アルミナ…武官

マトラ王…コランド・サファイヤの古い友人、サファイヤと言う姓はマトラ王がコランドに与えたと言う

＊名称・お店

ダック・ドナルド…ハンバーガー屋

センタッキー…フライドチキン

シスタードーナツ…ナボラの町に本店のあるドーナツのチェーン店、ヴェーロンのパン、ジョーボレー・ヌボー（ワイン）を販売

＊兵器

ルクトイ…10メートルを超える生物兵器、大きな目が主砲、小さな目多数は謎

＊軍

サルファー將軍…階級は准将、ドラドの近くの演習場の軍の代表、ルクトイ30体をクリーダに消滅させられた

岩2人…（中佐とか少佐あたりでいいや）たまに2人ともオカマ言葉になる、常に2人はシンクロしている

アンハイド將軍…階級は少将、突然変異の魔物討伐の時の將軍、本屋の店主が似合いそうな顔、小柄

アンモチン大佐…アンハイド將軍の部下

＊精霊魔法

コンプレッション・エクスプロージョン…爆裂魔法、半径10数メートルが吹き飛ぶ

ソニック・トルネード…通常巨大なトルネードを小さく凝縮して超高速回転で破壊力抜群

エレクトリック・バースト…雷魔法、超高温の光の柱、スフェーンが使うと完全電離プラズマ化が可能

次元の膜…土と水と氷の魔法を組み合わせ、いくつもの工程を得て引き起こせる重力波を更に加速させ、11次元中のどれかの次元の膜を開く手間のかかる魔法

*科学魔法

プラズマ…二億度の紫に煌くプラズマを放出

黒っぽい丸い玉（名前がない）…数メートルの薄暗く透き通った玉、触れると真っ黒に変色し光の速度を超えた超重力で潰れる

核融合に至る光の玉…膨張の後、核分裂を起こし、そのまま4億度を発する核融合に至るクリーダの切り札（放射能はナシと言う方向で…）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5300k/>

小細工魔法士 ～ トリックス☆スターズ

2010年10月20日17時57分発行